長塚節全集

第貳卷

長塚節著

短篇小說・紀行文

東京
春陽堂版

目次

芋掘り

一

小春の日光は岡の畑一杯に射しかけて居る。岡は田と櫟林と鬼怒川の土手とで圍まれて、他の一方は村から村へ通ふ街道へおりる。田は岡に添うて狹く連つて居る。田甫を越して竹藪交りの村の林が田に添うて延びて居る。竹藪の間から草家がぽつぽつと隱見する。箒草を中途から伐り放したやうに枝を擴げた欅の木がそこにもこゝにもすくすくと突つ立つて居る。田にはもう掛稻は稀で稻を掛けた竹の「オダ」がまだ外(はつ)されずに立つて居る。「オダ」には黄昏に鴫でも來て止る位の事であるだらう、見るから寂しげである。鬼怒川の土手には篠が一杯に繁つて居

るので近くの水は其蔭に隱れて見えぬ。のぼる白帆は篠の梢に半分だけ見えて然かも大きい。土手の篠を越えて水がしらじらと見えるあたりはもう遙の上流である。だから篠の梢を離れて高瀨船の全形が見える頃は白帆は遙かに小さく蹙まつて居る。土手の篠の上には對岸の松林が連つて見える。更に其上には筑波山が一脚を張つて他の一脚を上流まで延ばして聳えて居る。小春の筑波山は常磐木の部分を除いては赭く焦げたやうである。其赭い頂上に點を打つたやうに觀測所の建物がぽつちりと白く見える。稍不透明な空氣は倘針の尖でつゝくやうに其白い一點を際立つて眼に映ぜしめる。櫟の林は此の狹く連つて居る田と鬼怒川との間をつないで横につゞいて居る。田も遙かのさきは櫟林に隱れて、鬼怒川も上流はいつか櫟林に見えなくなる。櫟の木はびつしりと赭い葉がくつゝいて居る。岡の畑は向うへいくらか傾斜をなして居るので中央に立つて見ると櫟の林は半隱れて低い土手のやうに連つて見える。林の上には兩毛の山々が雪を戴いてそれがぼんやりと

白い。此の如き周圍を有して岡の畑は朗かに晴れて居るのである。土は乾き切つて既に二三寸に延びた麥は岡一杯に薄く綠青を塗つたやうである。そこにもこゝにも百姓が小さく動いて居る。麥をうなつて居るものもあるが大抵は芋掘りの人人である。四五人の手で芋を掘つて居る畑の緣には馬が茶の木に繫いであつて俵が轉がつて居る。此俵があれば遠くからも芋掘りの人々であることが解る。馬は退屈まぎれに茶の木をむしることがある。其時一人が駈けて來て轡をがちんと一つ極めつけて叱り飛ばせば復たおとなしくなつてぱさりぱさりと尾を動かして居るのである。各自の手もとは忙しい。然し岡は唯長閑なさまである。日は稍傾いた。忽然筑波山の絶頂から眩い光がきらきらと射して來た。每日同一の時刻に此の光は此岡へ强く射しかけて來る。百姓の或者は筑波山で火を燃やすのだらうなどといつて居る。然しそれは觀測所のガラス窓が日光を反射するのである。岡の畑に變化が起つたとすれば數時間に唯是丈である。ガラス窓の反射はやがて消えてし

まつた。芋掘りの人々は勿論此の光は知らなかつた。兩毛の山々がぼんやりした日は西風が吹かないので隨て暖かい。暖かい日は土いぢりの芋掘りには此の上もない日和である。兼次とおすがも街道へおり口の小さな畑で芋を掘つて居る。鄰づかりの桑畑は葉が大凡落ちて兼次の芋畑へも散らばつて居る。青いよわよわした小麥が生え出して居る。小麥は芋の間に二畝(ふたうね)づつ蒔かれてある。芋の莖はぐつたりと茹でたやうである。考へて見ると芋は恐ろしい强情なものであつた。秋の風が日となく夜となく根氣よくいひ寄つてもどうしても厭だ厭だといひ通して首を横にばかり振つて居た。秋風が腹を立てゝ其廣い葉を吹つ裂いてもたうとういふことは聽かなかつた。それが秋の末に一夜そつと眞白な霜が天からおりたら、理窟はなしにぐつたりと靡いてしまつたのである。おすがは芋の莖を菜刀でもとから切つて先へ出る。菜刀といふのは庖丁のことである。後から兼次が鍬のさきで芋の株を掘り起す。ぴかぴかと光る鍬の先をざくつと芋の株へ斜に突き立てゝぐつと

鍬を持ちあげると大きな土の塊がふわりと浮きる。鍬をそつと拔いて先の株へ移る。小麥へ障らぬやうに極めて丁寧に掘つては先きへ先きへ行く。おすがは莖を切り畢ると後へもどつて掘つてある大きな土の塊を兩手で二尺計り揚げてどさりと打ちつける。こまかな土がほぐれてこゞつた子芋の塊から白い毛のやうな根がぞろつとあらはれる。それから芋と芋とを兩手の平でぶりぶりとはがしてやがて俵を立てゝ入れる。さうして穴の土を手のさきでならして先の塊をほぐす。乾いた畑に濕つた丸い穴のあとが一つづつ殖えて行く。日光が其土をあとからあとからとこまかに乾かして行く。芋の株を掘り畢つた時に兼次は鍬へついた土を草鞋の底でこき落して茶の木の株へ腰をおろした。鉢卷をとつて額を拭つて居る。小春の暖かさはちくちくと痛いやうに痒いやうに毛穴から汗がにじみ出すのである。おすがも兼次の側へ來た。うつぶしに成つて居た爲かおすがの顏もほてつて居る。村の若者が一人馬へ大根を積んで來た。若者はぱかぱかと四つ脚の拍子よく走せ

て行く馬の後から手綱を延ばして附いて行く。

「どうした、奴等がつかりしたか」

兼次を見て若者はいひ捨てゝ去らうとした。兼次はそれには頓着なしに

「大根一本おいてけ」

立ちあがりながら叫んだ。若者は

「どうどうよ」

馬の口もとを止めて、ぎつしり括つた荷繩から一本引つこ抜いて

「そら二人で喰ふんだぞ」

と兼次を目掛けて抛つた。大根は茶の木へがさりと止つた。兼次は菜刀で大根をむいて噛りはじめた。大根には幾らかの辛味がある。兼次の乾いた喉にはそれでも佳味かつた。其所へ又一人鍬を擔いで田甫からあがつて來たものがある。

彼は兼次を見ると

「なんのざまだ奴等アハヽヽ」

唐突に悪口をいひ出した。

「いゝから羨むなえ」

兼次はすぐにやり返す。

「篦棒いつまでたつても夫婦にも成れねえやうな奴等なんでやつかむかえ。親爺奴きかなけりや喉ッ首でも押してやれ。やくざな野郎だあ」

平生悪口をいひ合うてる間柄だけに思ひ切つた憎まれ口を叩いて去つた。おすがは彼等が來た時すぐに立つてうつぶした儘さつきのやうに土の塊をほぐして芋をぼりぼりとはがして居た。兼次も別に氣にするやうでもなくおすがと別のうねの芋をはがして俵へ入れはじめた。

二

兼次とおすがの間柄は久しいものである。それで今では拾ひ手のない日陰物といふ形に成つて居る。

百姓の間に生れた子は隨分粗末な扱ひである。お袋が畑で仕事をして居れば笊の中へ入れて畑境の卯つ木のもとへ捨てゝおく。泣いて泣いて火のついたやうに泣いても滅多に構へつけることもない位だから隨て營養も不足なのか六つ七つまでは發育の惡い子も數々あるが、手足がついたとなると容赦もなくこき使はれるので其故か十七八に成ると驚く程立派な體格を持つやうになる。それと同時に女の一人位は拵へるのである。假令そんなことが無いにしても同年輩の誰彼と屹度夜遊に出掛ける。それがだんだん募つて來ると村の隅から隅までふらふらと押し歩いて小娘でもある家の風呂を覗くといふやうになる。兼次も年頃來た時には自然夜遊に屈託した。さういふ場合に兩親はどうするかといふと、自分が以前に其覺えがあつて格別惡いこととも思はないし一向平氣といふのではないが仕方がない

といふ位なものだ。それだから繩の一房も綯ひ出すとか朝草の一籠も餘計に刈るとか仕事に差支がなければ怪我に一言もしみじみした小言などはいはぬが普通である。兼次が夜遊に屈託した頃兼次の家からでは離れて居るが同じ村のうちで幾らか暮しの樂な因業者の夫婦があつた。代々其家は仙右衞門といつたので其が訛つて「センネモドン」と呼ばれて居た。何時の間に誰が教唆したか所謂小若い衆と稱する兼次等の仲間が其家に惡戯をはじめた。丁度霜が二三度おりた頃で宅地へなつた柿で串柿を拵へて日南の壁へ吊したのがあつた。串柿は下で胡麻の殼を焚けばいつの間にか落ちて了ふといふので或夜そつと其串柿を外して散々いぶして復たそつと掛けて置いた。案の如く柿はそれから一つ落ち二つ落ちて今年の柿はどうかしたといふうちに滿足に乾上つたものはなくなつた。固より惡戯されたといふことは知らう筈がない。惡戯としては極めて成功したのである。惡戯者はつけあがつた。或晩薪や鹿朶や日頃汗水垂らして掘つた木の根などが壁に堆く積んで

あつたのを大勢で持ち運び運び入口の戸を壓して一杯に積んでおいた。翌朝水汲みに出ようとした女房が見付けて騷ぎになつた。夫婦は火のやうになつた。口もきかずに半日かゝつてもとの壁際へ積み直した。若い衆の惡戲であることは分明であるが扨て手の出しやうがない。深く遺恨に思ひながら我慢をしてしまつた。おすがの家は此の仙右衞門の家のうしろで屋敷つゞきである。其近邊では一番物持で土藏も一つは立てゝある。近所鄰のものは皆おすがの家の風呂を貰ひに來る。仙右衞門の女房が或晩風呂を貰ひに行くと若い衆がそこらに出沒して居るのを見た。そこで早速おすがの兄貴に告口をした。兄貴が誰だ誰だといひながら裏戸へ出るとばたばたと五六人で遁げ出す足おとがした。然し此風呂場で追はれるのは始終あることで追ふ者も長追はしない。それは自分の家の娘に間違があつてはならぬといふのだから娘が湯上りの赤い顏をして綻びでも縫つて居ればそれで安心が出來るからである。遁げた若者は欅の蔭にでも隱れて居ては又のこのこと出て

來る。仙右衞門の女房は此晩茶うけの菜漬が甘いといふのでむしやむしや噛つて饒舌つたので一番あとではひることになつた。裸になつたまゝがらつと裏戸を開けて風呂場へ駈けて行つた。おゝ寒いといひ乍ら風呂の蓋をとつて手拭持つた手を突込んだ。さうしてアレと驚いた聲で怒鳴つた。風呂の湯がちつともなくなつてるといふ騷ぎである。寒さが急に身にしみて慄へて居る所へ厩の蔭から一人飛び出して土だらけの大根を後から肩へぶつ掛けて遁出した。女房は激怒したはづみに裸のまゝ闇の中を追ひかけた。さうして何かへ蹶いてどうんと酷い勢で轉がつた。忽ち三四人の聲でわあと怒鳴つて遁げてしまつた。さつきおすがの兄貴へ告口をしたのは仙右衞門の女房であるといふことを傭人から聞いたので若い者は風呂の栓を拔いてそれから大根を背負はして、豫め二人で繩を持つて居て追つて來る所をぐつと繩を引つ張つたから足を拯はれたのである。女房は口惜しくて翌日は起きなかつた。然し此の事があつてから惡戲はすつかり止んだ。それは間へ人

が立つて兎に角若い衆へ謝罪つてどうか惡戯はしないでくれと年嵩の二三人に頼んだからである。兼次も此の惡戯の仲間であつたがいつかおすがの家の傭人と別懇になつた。時には傭人の懷へもぐり込んで泊つて行くこともあつた。以前は大勢で押し歩いたが屹度一人でおすがの家のあたりへ行つて縕袍(どてら)を被つて立つて居るのが常のやうになつた。おすがゞ風呂へはひると其側へ行つては只立つて居る。おすがは默つてぼちりぼちりと手拭の音をさせながら成丈長湯をするやうになつた。時にはおすがが流し元で洗ひ物をして居ると窓から篠棒を出して知らせをすることもあつた。二人は遂に扱帶(しごき)と兵兒帶とをとりやりして型の如き關係が結ばれてしまつた。若い女の多くは男に執念くつけまはされゝばそこは落花流水の深い仲に陷るのである。互に決して離れまいといふ約束のもとに體につけた一品が交換される。孰れが厭になつても此一品が相手にあるうちは事件はこゞらける。女が親族などに強ひられて嫁にでも行かうとなつた時には男は女をおびき出すこ

とがある。其所には双方から人が掛つてごつたすつたの縺れになつて結局は平氣で女が嫁に行く。そこは財産のある方から幾らかの手切が出るといふ捌きになる。手切の多少で二晩や三晩はごたごたで過る。それでも古來の習慣で此變則な黃金の威力は、大抵の紛擾を解決せしめることが出來る。それが兼次とおすがの間はこんな庖丁で南瓜を割る位な手ごたへでは濟まぬ強い關係が結ばれたのである。然し此の時はまだおすがの家の傭人より外には二人の間を知るものがなかつた。暫時にして若い衆の間にそれが響いておすがを狙ふ者はなくなつた。やがて波動の如く其が村一杯に擴がつた。それでもこんなことは特別の事件が惹き起されなければ人の注意に値せぬのが一般の狀態である。此の如くにして幾日は過ぎた。

　或早朝のことである。時候はまだ寒さがぬけぬ頃だ。兼次は深い心配な顏で綽名が四つ又で通つて居る男の所へ來た。四つ又は豚の仲買をして小才が利くので

豚での儲は隨分大きい。あれで博奕が好きでなければ身上が延びるのだと評判されて居る。兼次の親爺と殊の外別懇である。

「兼ら何だえこんなに早く」

と四つ又は聞いた。

「おらちつと頼みたくつて來たんだ。おら「ツアヽ」は短氣だから打つ殺されつかも知んねえ」

「なにして又打つ殺されるやうなことに成つたんだ」

「ゆんべ遊びに出て縕袍なくしつちやたんだ。おすがら內の土藏ん所け置いたの今朝盜まつたんだか何んだかねえんだ。それからおらうちへ歸れねえ」

「なんだそんなことかおれが謝罪つてやつから待つてろ」

四つ又は兼次の家へ行つた。お袋は竈に木の葉を焚いて居る。釜が今ふうふうと吹いて居る。四つ又はすぐに廐へ行つた。さうして

「ツア丶」おら何でもえゝからおれがいふことを聽いて貰れてえんだ。
突然にかういひ出した。「ツア丶」といふのは子が其父に對する稱呼であるが四つ又は格別の惡意である上に年齡が違ふから時としてはかういふこともあるのである。一つは戲談をいふのが好きな性質から四つ又は何時もこんな調子で兼次の親爺に對する。
「なんでえ朝ツぱらから」
とおやぢは不審相にして半はいつもの戲談でもいはれるやうに微笑しながらいつた。
「ツア丶に打つ殺されつかも知んねえて心配してんだから謝罪りに來たんだ。なんでもかんでも聽いてもらあなくつちやなんねえんだよ。」
「解らねえなひどく」
「いやわかつてもわからねえでも世間態もよくねえんだ。實は兼次がことだがお

らぢへ來て：：」

「あの野郎奴ほんとに夜遊ばかりしてけつかつて」

「さう「ツアヽ」等怒つからしやうがねえ。ゆんべ褞袍盜られつちやつたといふんだがな。人のうちへ忍び込んでどうしたのかうしたのつて人聞きもよくねえ噺だからまあ餘り騷がねえ方がえゝんだ。褞袍の一枚位仕方あんめえ。此れまでそんなことあつたんぢやなし、いふこと聽いたらよかんべえ」

「それぢや任せべえ。兼こと連れて來てくろ」

此れで褞袍の一件は濟んだ。其褞袍は其後盜んだ奴が元の所へ捨てゝ置いたので再び兼次の手にもどつた。兼次はそれを引被つて依然としておすがの許へ通つて居た。

三

暑さが漸く催して此から百姓の書入時といふ茶摘の頃までは何の噂もなかつた。春も八十八夜となつて草木のやはらかな綠が四方を飾るやうになるとみじめな姿で顧みられなかつた畑のへりの茶の木のめぐりも赤い襷の女共が笑ひ興じて俄かに賑かになる。さあ焙爐の糊をかくのだといふうちに茶の葉が延び過ぎるといふ騷ぎである。兼次の家でも茶の葉が強くなつて、もう一日捨てゝおいたらとてもよりつからぬといふので鄰近所と「イヒドリ」をして兎にも角にも一日に摘みあげる手筈をした。親爺は朝から焙爐へかゝつて居る。「イヒドリ」といふのは手間の交換でそつちからこつちへ一日仕事に來ればこつちからも一日仕事に行くことである。其頃兼次の家では婆さんが長らく老病に罹つて居た。丁度其日は藥がなくなつたといふので忙しい仲ではあるが鬼怒川を越えて一里ばかりさきの醫者の所まで行かねばならぬことになつた。親爺は毎日蒸し暑い焙爐の前で働いたので幾分ならずもう體が疲れて居る。焙爐を兼次に任せて骨休めながら一寸行つて

來ようと思つたのであつたが兼次がいきなり
「ツア、おれ藥買ひに行つて來べえ」
とやつたのでそれでも自分が行くとはいはれぬので澁々と兼次を出してやつた。
街道は岡を越えて行く。畑には麥の穗が一杯に出揃つて快げに戰いて居る。菜の花がところどころに麥畑から拔け出してさいて居る。畑の境の茶のうねうねには白い菅笠がならんで麥の穗の上にふわふわと動いて居る。そこからは幽かな唄の聲が麥の穗末のやはらかな毛から毛を傳はつて來る。空からも土からもむづむづと暖いさうして暑い氣が蒸し蒸しして遠きあたりはぼんやりと霞んでゐる。若い者の心はもうそわそわして落ちつかない。兼次は急いで行つて來た。然し歸りには此岡の畑は空しく通過することが出來なかつた。おすがゞ五六人連で茶摘をして居る所へ引つ掛つしまつたからである。女達は一畝の茶の木を向合ひになつて手先せはしく摘んで居る。爪先の音がぷりぷりと小刻に刻んで聞える。兼次は揶揄は

れながら自分も茶を摘んで乘氣になつて騷いで居る。

「兼ッつあんはおすがさんげばかし最屓しねえでおら方へも來たらよかつぺなア」

といつたのはおすがの向うに居た女である。

「ほんとだおいとさん、可笑しかつぺなア。」

少し離れた方からも聲がした。

「そんぢや行くべえ」

と兼次はおいとの方へ茶の木を押し分けて行つた。

「やだよう、兼ッつあん、構アねえこんなに土だらけにして」

と泣聲を出したのはおいとの側に下枝を摘んで居た一番小さな子であつた。兼次が其子の籠へ土足を蹈込んだのである。

「駄目だよ、陽氣のせゐだよ、誰だかはどうかしてんだからなア、おいとさん」

又さつきの少し離れた方から聲がした。此は稍年增なお安であつた。

「おらげもすけたらよかつぺなア兼ッあん、摘んですけなけりや話してやつからえゝよ」

とお安は又からかふ。兼次はお安の方へ行く。

「あらまあ、兼ッつあんはこんなに小麥踏ンぢやして怒られべえな」

おいとがこんどは苦情を持ち出す。茶の木に添うては小麥の畑がある。小麥と交ざし作りの豌豆が小麥の莖にからみながら立ちあがつてしほらしい花をぴつしりとつけて居る。

「そんなに摘みえゝとこばかし摘んで兼ッつあんはやだよおら、賴まねえよ」

お安がつゞいて苦情を持ち出す。兼次はお安の肩を叩く。

「おゝひでえまあ、おれことぶつ飛ばしたんだよ、誰さんことかはぶたねえんだんべえな」

「さうだんべえなアアハ……」

みんなが一度に笑出す。おすが許りは默つて居る。こんなことで兼次は散々に暇どつた。空には雲雀が交るがはる鳴いて居る。おやぢが叱る急げ急げといふやうに喉が裂ける程鳴いて居る。それでも兼次は頓着なしに指の先の靑くなるまで茶を摘んで居た。漸く氣がついた時に一散走りに走りつづけて家に歸つた。幾ら駈けても後れた時間の取り返しはつかぬ。兼次の姿が見えると親爺は

「何してけつかつた、ぶつ殺されんな」

と怒鳴つて棒を持つて飛び出した。兼次は靑くなつて逃げた。若いだけに足が達者である。親爺が門へ出た時にはもう前の櫟林へ姿は隱れてしまつた。親爺は焙爐の茶が焦げつくので何處までも追ひつめる譯には行かなかつた。兼次が藥貰ひに出た跡で手に餘る茶の葉をいぢつて居たのであるが強くなつた葉はいくら荒筵の上で押し揉んでも容易によりつからぬ。焙爐の火力を強くして只がさがさな茶

を乾かした。疲勞は其癇癪を促した上に焙爐の蒸し暑さは一層親爺の腹をむかむかさせたのである。鄰近所の二三人が出て漸く兼次を見つけた。さうして例のやうに四つ又へ詑を賴んだ。四つ又はぶらりとやつて來た。

「ツア、獨で太儀かつぺ」

「こはえな」

「うんこはえ筈だ、つまんねえ料簡出すから」

「何よ又そんなことゆつて」

「なにつて兼ことぶつころすなんて騷いてんちやねえか」

「此忙しいのにあんまりのさくさして居やがつて小世話燒けたからよ」

「のさくさしたつて「ツア、」がにや分んめえ。先生がほかさ行つて居なかつたんで待つてたんだつて云ふんだぞ「ツア、」行つたつて先生が居なくつちや駄目だんべ。それも聞きもしねえでぶち殺すなんてそんな短氣出すもんぢやねえよ」

お袋は晝餐の菜の油味噌の豆を熬つて居たが皿へ其豆を入れて四つ叉へ出した。さうして

「本當におらぢの「ツア、」は短氣なんだから」

と獨言のやうにいつた。

「えゝからわッら知りもしねえ癖に」

とおやぢは叉かアつとしてお袋を叱りつけた。

「それさうだからえかねえ。婆さまこと見ろまアおれが鹽梅惡いから當てつけに兼こと怒んだ。一層おら死んだ方がえゝなんて云つてら。そんだからおれげ任せろよ。鄰近所の暇つぶした丈でもつまんめえぢやねえか」

四つ叉は殼竹割である。短氣なおやぢを威したり賺したりいひくるめるのは村でも此の四つ叉一人なのである。

「うんそれぢや任せべえ」

といふことに成つた。
「そんだから愚圖々々しねえで何時でもおれが云ふことア聽くもんだよ」
「おめえぢや仕やうがねえへゝゝ」
此が笑つて收ると四つ叉は兼次を連れて來た。さうするとおやぢは
「此葉揉んでくろ、兼」
といつたやうな譯でさつきの顏とは別のやうである。

四

其後いさくさはなかつたが兼次は依然としておすがのもとへ忍んだ。それではおすがの家で捨て置くまいと思ふ筈だがおすがのお袋は少し愚圖な氣のいゝ女で唯娘が可愛くて兼次との間を裂かうなどゝいふ料簡は微塵もない。寧ろ村の評判の通り却て兼次の手引をしてやる位なものである。おすがの親爺は夜になればい

つでもぐでんぐでんに酔拂つて前後も知らずに轉がつてしまふ。兄貴は若い嫁と裏の中二階へ昇つて寢てしまふ。それに傭人が兼次の邪魔抔はしないといふことに極つてるのだから攫まつた追はれたといふ騷ぎも聞かなかつたのである。然し村の噂が高くなると共に親類縁者の少しは小口の聞けるといふ手合が捨ておけないといふことで相談をした結果、それぢや兼次の家は財産は足らぬが貰ふといふなら一層の事おすがをやつたらよからう。嫁にとらぬといふならすつぱり手を切つて兼次をよこさぬやうに掛合はなければならぬと決した。おすがの叔父に伊作といふ博勞がある。此が又兼次の親爺と別懇だ。親爺は恐ろしい馬好で春も暖かになつて毛が拔け代つて古い毛が浮いたやうに幾らか殘つて居るのを見ると堪らなくなつて往來へ引き出しては撫でさすつて居るといふ程なのだから自然博勞の伊作が別懇になつた譯である。だから村では四つ又を除いては立入つた噺の出來るのは此の伊作である。伊作は一晩親族の惣代といふ名目で前條の掛合をした。然

しそれは無效であつた。伊作は四つ又程には呑んでかゝることが出來ないのと、事件が改まつて甚だ重大であつたのとで親爺の返辭はきつぱりしたものであつた。嫁に貰ふことは首を切られても出來ないといふのである。いひ出したらもう後へは引かぬのが此の人間の性癖である。否此の家には屹度かういふ性癖の人間が生れるので此は血統である。伊作は古革の大胴亂で幾ら煙草を吸つて見ても名案は出ない。器量をさげた譯だが喧嘩にもならぬから引つ込んでしまつた。親族等は其頑固なのに激昂した。小波瀾が起らねば濟まぬやうな狀態になつた。斯の如き時に好いた同士の執るべき唯一の名案は爾來幾多の男女の間に實行されて且つ廢らない。一先づ手に手をとつて出奔するといふのがそれである。少し愚闇なお袋はどうかして兼次とおすがを一緖にしたいといふ心から自分の入智惠で逝がすことにした。兼次は或晩こつそり風呂敷包を抱へ出した。それから二三日たつて兼次が見えなくなつたといふ噂が立つた。其時兼次はおすがの家の土藏の二階

に隱れて居てお袋の運ぶ握飯で凌いで居たといふのである。三日たつてから日の暮れるのを待つて二人はお袋の生家の鬼怒川の向うの或村へ行つた。表向から駈落となると双方の仲へ人が立つて纒りがつくといふのが一般の順序であるが、例の如く四つ叉が其役目に賴まれた。其頃は梅雨に入つて百姓の體が二つあつても足らぬといふ時であつた。豚の仲買で百姓は餘りせぬ四つ叉はこんな時の仲裁の役目には屈强だ。梅雨に入つてから珍らしく朝からきらきらと晴れて心持のよい日であつた。四つ叉はぶらりやつて來た。親爺は丁度田の代掻きから上つて來た處だ。四つ脚から腹一杯泥だらけになつた馬は廐の柱に繫がれた儘さすがに欝陶しいと見えて時々ぶるぶると泥を振ひながら與へられた一抱の靑草を鼻の先で押しやり押しやり嚙んで居る。口から靑い汁がはみ出して居る。廐の柱には天秤にする杉の棒が撓めてぎつしりと縛りつけてある。親爺は藁で括つた股引が股から下は泥だらけになつて顏にも衣服にもはねた泥が乾いて居る。家のうらで廐の側には

葵の花が五六本立ちあがつてさいて居る。此葵は夏になれば屹度こゝに咲くので裏戸が開け放してあれば往來からでもすぐ目につく卯屋の葵がさいたと人々は見て通る。葵は此の家の四季を通じて第一の飾りである。葵の側には此の稀な晴天を幸にお袋が一寸の暇を偸んで洗つた仕事衣が干竿に掛けてある。卯屋といふのは此の家の綽名幾代か前に卯の商ひをしたものがあつたとかで今に至るまで村では卯屋と呼んで居る。

「代搔いたのか」

四つ叉は厩の所へ行つて問ひかけた。親爺は暇があればかうして厩へ行つて馬の食ひ振を見て居るのである。

「やつと今をへた處だ」

親爺は簡單にかういつて井戸端へ行つた。股引の泥をざつと洗つて家にはひる。四つ叉と共に上り框へ腰をかける。

「どうした兼が居なくちや仕事が巾ッたかんべ」
「そんでもどうやらかうやら代だけは出來た」
「忙しい所で濟まねえが今日はおれも賴まれたから來たんだ。惡く思つちや仕やうねえぞ、斷つて置くからな。どうしたもんだいまあ、おすがこと貰あも出來ねえ、兼次が足も自分の持物ぢやねえから止める譯にや行かねえつて伊作男げ斷つたつちいんだがそれも隨分酷え噺ぢやえねか。それに二人はどうしたつて切れねえ緣だ。困つたものだぞありやあ。遁げたものはそれや手分けして捜せばどこに隱れたつて分るにや極つて居るやうなもの〻連れて來た所でおめえら方がちやんと極つてなくつちや女の方の身分になつても餘り慰みものにされたやうで世間へ顏向も出來ねえな。何もそんなに頑張らねえで一層のことおすがこと貰つちやつたらどうだ」
「此めえ親類うちから世話されたこともあんだが檢査めえだからつて斷つたんだ

から其方へ對したつて貰ぁ所の騷ぎぢやねえ」

「徵兵檢査ッてゆつてもあと三十日が四十日で大概どうか極らな、そんで兵隊に出たにした所で兩方で極めてだけ置く分にや差支あんめえ。そんなことゆふな理窟つちいものぢやねえか」

「おらどうせ馬鹿だから構はねえが、どうしたつてうんたぁ云はれねえ」

「酷くをかしなこといふんだな、そんぢや外に氣にらねえことでもあんのか」

「氣にらねえたつて餘まり人を馬鹿にしべえと思ふんだ。おらぢの野郎が甘口だつて何もお袋まで一緒になつて人の相續人に障るやうなことして吳れねえてもよかんべと思ふんだ。おらどうせ馬鹿だから理窟なんざあ解らねえがさうぢやあんめえか。此間だつて兼が出だす晩にも後で氣がついて見りや裏の垣根のあたりに二人ばかりうろうろして居たんだがおらちやんと見當がついてんだ。それぢやおれだつていめえましかんべえ。なあにあんな野郞うちに居なけりや居ねえたつて

困らねえから、云ふこと聽かなけりやぶち出すだけだ。おれ幾ら體が弱つたつてあら位な小わつぱにやまあだ自由にされねえ積だから」

「そんなに怒つて騷がねえたつておすがことせえ貰へば怨みもつらみもあんめえ。あつちのお袋だつておすがも可愛いし兼次も可愛いしなんだからこつちせえ譯がわかれば仲よく暮せるつちいもんぢやねえか」

「檢査濟まねえうちはどうしたつて貰あねえから駄目だよ」

四つ又もどうせ駄目とは思つてもいふだけのことは云つて見ようといふ譯なんだが然しかう出ては槍が降つても迚ても駄目だ。四つ又もそれは知つて居る。

兼次の家の庭には垣根についいて栗の大木がある。松と松との間にあるので枝が一方庭の方へばかり延び出して垂れ下つて居る。房の如く長い花が一杯に白く咲いて居る。白い毛の生えた大きな毛蟲が葉をくつて枝の先にくつゝいて居る。栗毛蟲は構はずに置けばみんな葉を骨ばかりにしてしまふ。兼次の兄の太一が毎日

長い竹竿で其栗毛蟲を落して居る。栗毛蟲は強くしがみついて容易に離れないのを太一は氣長に叩いて落ちたのを足で踏み潰す。太一は此を近來の役目のやうにして飽きもせずにやつて居る。兼次には男の兄弟が三人もあつたのだ。一人は十になるかならぬで鬼怒川で溺死をした。其次は此の太一である。此も十位の頃から癲癇になつた。病氣が屢起つてから彼は只ぼんやりとしてしまつた。病氣の起る間が遠ざかれば時としては木の根を掘りに行くこともあつたり一日かゝつて米の一臼位は舂くこともあるが、何處でぶつ倒れるか分らないので殊にお袋の心配は止む時がない。彼は人さへ見ればにやにやと笑つて居る。彼は不具な體でありながら年頃來てからは草刈の娘などに戲談をいふこともあるやうに成つた。娘等は往復共にいい慰み物にして太一にからかふ。此を見てつらいといつて涙をながすのはお袋である。こんな不幸な出來事から家の相續をする者は兼次より外には無くなつたのである。其大切な兼次が浮かれ出したのだから非常な打擊であると

いはねばならぬ。それがおすがのお袋が指金で此間の晩も垣根の所にうろついて居たのはお袋がお安といふ女を連れて來て居たのだと思つて居るので親爺はもう心外で堪らぬのである。太一は五六日前に鄰の五右衛門風呂で病氣が起つて踏板を踏み外して足のうらへ五十錢銀貨位の火膨れが出來たとかで變な歩きやうをしながら今日も落花と毛蟲の糞との散らばつた庭に立つて栗毛蟲を叩いて居る。彼はやがて其竹竿を入口の廂へ立て掛けてぼんやりと立つて此の掛合の後半を聞いた。さうして四つ叉が持て餘して双方とも暫く無言であつた時に

「ヱヘヽヽ、嫁さま貰つてやれ」

といつて脇を向きながらにやにやと笑つた。竈の前に心配相な顔をして茶を沸して居たお袋はたぎつた湯を急須にさして上り框へ持つて來た。さうして四つ叉の前へ對して極り惡相にして

「太一、わりや默つてろ」

と叱りつけた。

「へゝ、おつかあ」

と太一は又にやにやと笑つた。親爺は噺の途中から顔がほとつて來て目の玉まで赤くなつて居る。四つ又は暫くたつて又

「そんぢやどうしても今は貰あねえんだな」

といつた。

「どうしてもおら駄目だよ」

返辭は淀みがない。

「檢査せえ濟めば嫁の世話しても怒るめえな」

念を押す。

「怒らねえとも」

簡單だ。

「ようし齒を揃つて云つたな。そん時はおすがこと世話すつかも知んねえかんな」

四つ又はこんなことで此場は手を引いた。此の表沙汰の掛合があつてから十日ばかり經つて兼次は親爺と一所に自分の家で働いて居た。卯屋は他人へ對しては恐ろしい意地も張りも強い人間であるが兼次がことゝなると大抵のことは忘れてしまふのである。四つ又は其所の呼吸を知つて居るので元の鞘へ收める役目は彼に丈は容易なことであつた。

五

おすがの家では又村の親族が聚つて智恵を絞つた。どうしても此は二人の間を離れさせるのが專一である。それにはおすがを隱すことだと博勞の伊作の考で村の親族の一人が引きとつた。唯の夜遊びでさへ村中押し歩くのだから兼次がおす

がを嗅き出すのは牡犬が牝犬を捜すよりも速かであつた。おすがはそれから見習奉公といふ名義で鄰村の大盡へ預けられた。然し兼次が其大盡の邸内へ忍び込んだのはおすがが行つた其日の晩であつた。其晩兼次はひどい目に逢つた。傭人等が豫め兼次の來ることを知つて主人へ窃に告げたのである。嚴重な主人は傭人に命じて庭の隅へ追ひつめさして捉へた。兼次は地べたへ手をついて謝罪つた。門の外へつき出されてほうほうの態で歸つて來た。娘と前栽物は其村の若い衆のものだといふ諺が古くから村には傳つて居る。維新の頃までは若しも他村の男が通つてゞも來れば其村の若い衆の繩張を冒したことに成るので散々に叩きのめして其上に和談の酒を買はせたものだといふ。それ程のことはもうないが今でも一つは嫉妬心から一つは惡戯半分から追ひまはすことは往々である。兼次が酷い目に逢つたのも傭人にこんな心持があつたからである。おすがも翌日暇が出た。直にしほしほとして風呂敷包を抱へて歸つて來た。二人の間に就いては百方策が盡き

た。遂に村の旦那へ持つて行くことに成つた。旦那といふのは祖先の餘慶によつて村の百姓をば呼び捨てにするだけの家柄である。大抵の出來事が愈埒明かなくなると屹度旦那の許で裁判を乞ふのが例になつて居る。兼次のことでは旦那も髯をこきおろしながら考へたがやつぱり困つた。卵屋の頑固は叩いて見なくても分つて居る。一先づ本人共の意見を聞かうと最初におすがを呼んだ。おすがはもう埒もない。離れたくないのは山々だけれど離れろといへばそれも素直にいふことを聽くのである。尤も旦那の家へ呼ばれて噺をされるといふことは生來嘗てないことで唯恐れてどうもかうもいふことは出來ないのだが眞實死ぬの生きるのといふ程の決心はないのである。おすがはまだ十七にしか成らぬ。次には兼次を呼んだ。卵屋が又變な料簡を起しても困るからとお内儀さんの機轉でお安を使つて或日の晝餉の仕事休みに裏庭へ連れ込んだ。お安はおすがと茶摘をして兼次を騒がしたことのある女である。お内儀さんは篤と譯を說いて、此所ですつぱり手を切

つてしまふ決心はないかといふと

「わしやどうしても思ひ切れましねえ」

と彼は斷乎としていひ放つのである。お內儀さんも成程と困つた。

「それ程ならさうとして私も心配してやらうがお前の親爺もあの通りで兵隊前は駄目だといふのだが、幸ひ檢査も濟んでお前も輜重輸卒と極つたのだからもう先が見えてるんだ。其時に成つてからなら嫁の相談も出來るしそれまでの所の辛抱だからどうしたものだ。長いやうでも一年足らずだ。さうしてどこにも障りのないやうにしたらどうだ。」

兼次も此には少し我を折つた。

「それぢやわしも其積りで辛抱して働きませう」

「さうかさうして呉れゝば仲裁人の顏も立つし、親爺の心も解けるといふものだ。愈それと極まれば双方へ兼次が思ひ切つたと表面噺をして一先づ安心をさせるの

だが、それには私が一應お前とおすがを逢はしてやるからそこで內實は決して心變りはしないといふ約束をしておくがいゝ。少し辛抱するうちには兵隊も濟むし其上でなら私らも共々心配をして屹度一緒にしてやるが、おすがが其間に辛抱が出來なけりやそれこそ夫婦になつても賴みに成らない女だから其時は未練はない筈だがどうだ兼次さうではないかい」

「さうでがす。なあに辛抱しらんねえやうな女ならわしうつちやつちめえまさあ」

「それでは私がお安を使つておすがを呼び出すやうにしてやるから其の時今いつたやうな手筈にしたがいゝ。其代り屹度辛抱をしなくつちや駄目だよ」

「辛抱するつて云つた日にやわしも屹度辛抱して見せますから」

兼次は元氣よく家の仕事をして居た。其頃は土用に入つて間もないのであつたが畑の大豆は莢が急に膨れる。青々とした稻草の根元まで暑さがしみ透つて鮒が死ぬといふ位で。百姓は晝は裸に絲楯を着て仕事をする。夜は裸で蚊帳の中に轉

がる頃であつた。其日は丁度祇園祭の日であつた。地上には到る所に強い日光を遮る爲に重く深い綠が其手を擴げられるだけ擴げて繁茂して居る。其でも幾日雨の涸れた畑の陸穗は日中は怺へ切れずに葉先が萎れてしまふ。面倒な日が西の林に落ちた時にやつと日光を遮る一日の役目を果した草木は快げに颯々と戰ぎはじめる。それから幾十分の後に漸く百姓の暇な時間が來るのである。然し今日は祭の日であるだけに前日に仕事の一區畫をつけて遊ぶものは朝から遊んで居る。十五夜の月が强く青い滑かな夜の空を昇つて欅の木の梢からおすがの庭を照して居る。庭の柿の木は葉がきらきらと濡れたやうに月光を浴びて居る。空は見るから涼しげであるが一日照りつけた太陽のほとぼりはまだ蒸してどこの陰へ行つても怺へられぬ程である。かういふ時はどこの家も開け放しである。おすがの家には煙がこもつて其煙が廂を傳はつて靜かな夜の中へ彷徨つて行く。晝間から呼ばれて來て居る村の親族が四五人で此の喉のつまるやうな煙の中に坐つて酒を飮んで居

る。家のものは忙しく動いて居る。今祭の饂飩を打つて居る所なのだ。男は裸である。女も襦袢一つである。竈の前ではおすがが饂飩を茹でゝ居る。釜がぶうつと泡立つてこぼれ出すと大急ぎに手桶の水を一杯注ぐ。泡は忽ちに引込む。茹だつた饂飩は叉手で揚げて手桶へ入れて井戸端へ行つて冷たい水で曝して「しようぎ」へあげる。「しようぎ」といふのは極めて淺く作つた大きな籠である。籠といふよりは笊の大にして淺きものである。井戸端で少し暇どると饂飩を裁つて居る男があとが出來たと怒鳴る。こんなことでおすがには少しの隙もない。其竈の煙が家一杯にこもつて居るのである。お安が兼次を連れておすがを誘ひ出しに來たのは此時である。兼次は竹藪の蔭へ潜ませてお安は用のある振で行つて見たが全く隙がない。兼次は我慢をして居ればよいものを蚊には螫される。足には痺れがきれる。もどかしく成つて遂そこらをうろついた。其姿をちらりと家のものが見た。兼次ならどうも飛んでもねえことだと、熬豆をかじりながら饂飩をすゝつ

て居た親族のものはさつきの酒がまはつて居るので下駄を穿いて出だすのもあつた。お安が折角やきもきしても此夜は目的を遂することが出來ずにしまつた。内儀さんはそれでは自分のうちへ呼んで逢はせるやうにでもしてやらうといつて居ると二三日たつて兼次はおすがの家で捉まつたといふ噂がはやくも聞えた。内儀さんの苦心もなにも滅茶々々に成つてしまつて事件は又もとへもどして了つた。

「なんちい馬鹿だんべえなあ」

とお安はいまいましがる。外の人々は腹が立つといふよりは呆れて物がいへなくなつた。

其うちに笑止しな出來事が起つた。祇園が過ぎてから十日ばかりたつてからである。或朝親爺は

「兼、今から仕度しろ、われ見てえなものはおらぢへは置けねえからどこへでもうつちやらなくつちやなんねえ、一緒に行け」

と親爺は兼次を連れて出た。お袋は餘りの突然なことにあとで獨りで泣いた。晝近くなつて兼次はひよつこり歸つて來た。どうしたのだと聞くと境街道へ連れられて二三里も行くと

「われがことはこゝでうつちやんだ。境へ行くなら此れ眞直だ」

といつて小遣錢をくれて放されたのだといふ。それで親爺の姿が林の角に隱れた時に自分は林傳ひに先廻りをして來たのだといつた。

お袋は仕方がないから暫く親類にでも厄介に成つて居ろといつて自分の巾着をはたいて兼次を出してやつた。親爺は晝過になつて歸つて來た。お袋は

「おら兼こと可愛いからあとで泣いたよ」

とつくづくいつた。此のお袋が今日まで家内に風波を起さないのはおとなしく我慢をして居るからなので、嘗ては怨みがましいことをいつたことは無かつたのである。

六

此の事のあつてから幾らもたゝぬ内におすがの姿も村には見えなくなつた。兼次が連れ出してしまつたのである。能く能く聞いて見ると此もおすがのお袋が一つで旅費までやつたのだといふことだ。彼等は兼次の叔父が聟に行つて居る栃木の在へ辿りついた。叔父は國元へ手紙を出した。返事は至極簡單で唯捨てゝ置いてくれとあつた。さうかといつて其儘にはおかれぬわけで叔父は遙々相談に來た。然し卵屋は前段の始末で手のつけやうがない。それから村に居た時分に懇意にした博勞の伊作の處へ行つたがおすがの家でも親族や兄が不服なので駈落するやうな不埒なものはもどすことは出來ないといふことであつた。叔父もそれでは自分が暫く預つて置くことにする外はないと兼次のことに就いては深い骨折をしてくれた四つ又にも逢つて此後とも一切の心配を賴むといふやうに云ひ置いて三日ば

かり暇どつて歸つた。叔父のもとでは二人は甚だ愉快な月日を送つた。雑木林を借りて木の根を掘り起してそこへ作つた陸稲をたべた口には栃木在の米は實にうまい。おすがの家には土藏まであるがそれでも日常は石臼で挽いた麥を交ぜた飯をたべて居る。百姓の生涯の希望は大抵鹽鮭を菜にして米の飯をくふやうに成つて見たいといふ以上はないといつてもいゝ位である。叔父の家は暮しがゆるやかであつたので彼等が口腹の慾を滿足させるには十分であつた。少くとも兼次には叔父が肉身であることゝおすがゝ一緒であることゝで薩張もう苦勞はなかつた。おすがは兼次について居るので幾らか肩身の狹い心持はするが辛いことはちつともなかつた。彼等は精一杯働いた。叔父も忙しい時に思ひ掛けぬ手が殖えたので窃かに悦んで止めておいた。秋がふけた。さうして稲刈の時節になつた。故郷では俎板へ鼻緒をすげたやうな「ナンバ」といふものを穿かなければ刈れないやうな深田もあるが、こゝでは草履穿きで稲刈が出來る。田の中で稲扱をする。仕事

がどれでも愉快である。赤城の山に雪が積んで冬が來た。其時彼等二人の間にはぢつとして居られぬ心配が湧いた。其心配といふのは改まつてのことではないが此頃に成つてどうにもしやうがなくなつたのである。駈落する以前からおすがは身持に成つて居た。おすがも初は我慢をして居たが此頃では體が兎角太儀になつた。叔父も疾からそれは知つて居るが百姓をするものは明日分娩する其晩まで跳足で仕事をする位のことは普通であるのだからそこは少しも苦勞はないのと一つは愈々腹がかうだからといふ時に返してやらなければ彼等雙方の家で仲々引きとるのに故障をいふだらうといふことでおすがには成るたけ樂な仕事をさせて止めて置いた。冬も寒が來て田甫の榛の木には春の用意に蕾がふらふらと垂れはじめた時にもうこゝらでいゝと思案をして叔父は二人を返してよこした。博勞の伊作へも手紙をつけ父四つ又へもこまごまと自分の筆の立つだけは書いた。其は自分が行かねば濟まぬわけだが、かういふ日蔭ものを連れてのこのこ村へはひること

も極りの惡いことだによつて二人だけ返すのだがどうか惡く思はないでどんなにでもいゝから心配をして貰ひたい。後で卯屋が愚圖々々いふ時にはわしがそこは引きうける。若し只今にも自分が行かねば駄目といふなら葉書を、れれば直にも飛んで行くからといふのであつた。二人はどこへも手頼る所がないので四つ叉の家へ轉がり込んだ。四つ叉も困却したが乘つた船で止むを得ない。先づ伊作へ談じて見たがどうも唯ではおすがも戾れない。思案の末におすがの家の前の仙右衞門へ少しの間といつておすがを賴んだ。一つは仙右衞門の家は廣い割合に少勢であるのと一つはすぐ前のうちへ置いたならば朝夕おすがの姿を見るうちには兄貴もさう六ケ敷ことばかりもいはれなくなるだらうしお袋が愚圖だから誰も因業いつては居られまいといふ見込をつけたのである。おすがの身の處置をつけて四つ叉は卯屋の方へ手を出した。四つ叉は隨分此の事件では厄介な役目であるが、四つ叉でなければ出來ないと村からいはれて居るのが心中窃に自慢なのである。

或晩遲く彼は卯屋へ行つた。此頃は毎日村のどこからかとんとんと箱篩の音が竹藪を洩れて聞える。田舍の正月が近づいたので其用意に蕎麥や小麥や蜀黍の粉を挽くのである。卯屋でも此晩蕎麥粉を挽いてゐる所であつた。お袋は顔から衣物から埃のやうに粉を浴びて筵の上で箱篩の手を動かして居る。親爺は癲癇持の太一と二番挽の糟を挽いて居る。四つ又はくゞり戸開けてはひるとすぐに石臼へ手を貸した。石臼はぐるぐると輕くめぐる。

「寒い思ひして態々節挽の備に來たやうなもんだな」

と四つ又は笑ひながらいふ。

「當てにもしねえ備が出來ておれは此れだからうめえな」

と卯屋も相槌打つて勢よく然かもそろそろと石臼をめぐす。暫くで蕎麥の糟は全く穴へ掻き込み畢つた。石臼は其儘幾つかごろごろとめぐして此れで蕎麥挽はやめた。お袋は箱篩の手を止めて上り框の冷え切つた火鉢へ粗朶をぼちぼちと

折り燻べた。煙が狭い家に薄く滿ちた時に火鉢へは燠が出來て煤けた鐵瓶がちうちう鳴り出した。

「構はねえで篩つておくんなせえ」

と又四つ又はお袋へ挨拶する。

「篩ふなあしたでもえゝんでがすから」

とお袋は石臼臺の粉を桶へ移して筵を掛ける。親爺は裏戸口の風呂で暖まる。

「篦棒に寒い晩だなどうも」

と又四つ又は火鉢へ手を翳す。

「雪がちらちらして來たから寒い筈だ」

と卯平は湯から出て土間で褌をしめながらいつた。さうして

「茶よりや蕎麥掻でも拵えろな腹あつためるにや蕎麥掻の方がえゝや」

といふと

「蕎麥掻にえゝな、そんだが鰹節はなにか土佐節か」と四つ又は喙を容れた。

「へゝたえしたことをいふな、何處で聞いて來た」

「どこつておら土佐節でなくつちや喰つたことあねえんだ」

百姓の家に松魚節のあらう筈はないのである。四つ又はこんなことでそろそろ戲談から口火を切る。鐵瓶の湯が沸つたのでお袋は二つの茶碗へ箱篩から附木で蕎麥粉をしやくつて移す。鐵瓶の湯を注いで箸で掻き交ぜる。お袋は小皿へ醤油を垂らして出す。

「こら饂飩粉ぢやあねえかあんまり白えな」

「四つ又もちつと眼がチクになつたな。そりや一番粉で糟がへえらねえだ。甘かんべえ」

「うん、ずうつとかう喉からほかほかして來たな」

蕎麥掻の茶碗へ湯を注いで四つ又はふうふう吹きながら飮んで愈々噺を持ち出

した。

「おれが云ふことはもう聞き飽きたんべ、おれも呆きれた。そんでも此んでも聞いてもらあなければあなんねえだ」

「又爺が嘶か、その嘶ならしねえでもれえてえ」

「それだからおれが聞いてくろうつていふんだよ。おすがの腹がえかくなつて今落ち相になつて歸つて來たんだが、どうも此までとは違つてこんだあ捨てゝ置けねえこつたから向の親類でも困つてんだ。おすがも五六日こつち小便も近くなつたといふんだから今夜にもあぶねえんだ。それがうちへ寄せられねえんだから今出來る子供の產す場所がねえ譯なんだ。此所のところはまあどうしたもんだな」

「どうするつておら駄目だよ」

「まあようく考えて見てくんねえか、自分の息子が人の大事の娘を引張り出して隨分世間へも外聞を曝して揚句の果が孕ませてそれでこつちゃや嫁に貰ふことも

出來ねえが、趣意もつけられねえ、腹の子供がどうなつてもえゝつて云ふんぢや向の身に成つても隨分酷かんべと思ふんだな」

「趣意なんざあ文久錢一文でもおら出せねえよ。向で欲しけりやおら兼の野郎呉れつちやつて構あねえ。おら相續人なんざあ外から養子したつてえゝと思つてんだ。おら旦那にいはれたつて聽かねえから駄目だ。旦那に怒られて村に居られなくなりや居られねえたつて構はねえんだから」

「酷くわからねえんだな」

道の四つ叉も遂にむつとしてかういつた。卵屋はもう目の玉まで火のやうに赤く成つて居る。

「そりやおれ惡るかんべえ。惡くつたつておらさうかたあ云はねえんだから、どうぞおれげは其の噺はしねえでくろ」

といひながら火鉢の向うへごろりと轉がつて何とも返辭をしない。胸には激しい

動悸が打つて居る。豆ランプの薄闇い光が其燃えるやうな顔をてらして居る。四つ叉は手持不沙汰にして居たがやがて裏戸口から小便に出る。雪はいつの間にか地上一杯に白くなつて外は薄明くなつて居る。厩の側には落葉が堆く積んであつて其上には雪がさらさらと微かな音をさせて白く積りつゝある。馬は人の近づいたのを見てがさがさと敷き込んである落葉を踏みつけながらフヽフヽと懐しげに鼻を鳴らして馬塞棒から首を出して吊つてある飼料桶を鼻づらでがたがたと動かして居る。お袋は四つ叉の後から出て

「どうぞ惡く思はねえでおくんなせえ。本當にいつでもあゝだから困んだよ」

「思はねえにもなんにもゝ、あゝりや癖だから」

「そんぢやえゝがなあ」

といつてお袋は少し躊躇して

「さうとあの兼は煩ひでもした樣子はあんめえかねえ」

「なあに眞ッ膨れに肥えて來たからなんにも苦勞することはねえよ」

「おらあまあ獨りで心配なんだよ。眠つても眠れねえことがとろつび!!だよ」

「困つたもんだよ本當に」

四つ又は火鉢の前へもどる。さうして

「ツア、」

と一聲大きくいつて

「おれも三春へ行つて見てえ積だが、こんだ行く時にや一緒にすべえぢやねえか。豚も醬油粕が高くつて困つてる所へ四掛や五掛の相場ぢや割に合はなえからな」

かういふと卵屋はむつくり起き上つた。

「本當に行くんぢやあんめえ」

「本當だともよ、駒なら草だの藁だのばかし喰はせてみつしら使つて二三年もたてばたえしたもんだな」

「四つ又でも三春へ行つちや目うつりして買ひめえと思ふんだ」
「戯談いつてらそんなことにやおくせは取らねえんだぞおらなんざあ」
「あぶねえな、豚の手にやいかねえから見ろよ」
嘶はいつか賑かになつてさつきの不機嫌もどこへか行つてしまつた。
「それぢやどうしても兼こたあうつちやんだな。おら今夜はどうでもかうでもうんと云はせべえと思つたんだが當が外れた。雪で歩けなくなつちやつまんねえからおら歸るぞ、そんぢや、兼次はうつちやるんだな」
「兼が一人で歸るならおら今が今でももどすよ」
「うんさうかわかつた」
こんなことで此場は濁したが四つ又もおすがの身の振方には困つた。博勞の伊作とも相談をする。兎に角急場凌ぎの策をとらなくては成らぬことに差迫つた。
其頃仙右衛門とは道一重向鄰の綽名を松山といはれて居た家があつた。何か事情

があつて家族を連れて他へ移住をすることに成つて家から持地からおすがの兄貴に賣つて立ち退いた。その空家で產をさせるのが妙案だといふので兄貴へ渡りをつける。ところがなかなか承知しない。ごつたすつたやつてたうとうそれおやじ分等へ少しのうち其家を貸してくれろといふのでやつとのこと納得をさせておすがを松山の家へ入れた。佳右衞門も近所の義理で澁々おすがを厄介して居たのだから重荷を卸したやうな心持がした。四つ叉もあとではどうでも先づ目先の才覺が首尾よく運んだのでほつと息をついた。

七

おすがは女の子を產んだ。他には介抱の仕手もないので、お袋が公然朝から晚までつめ切つて世話をする。嫂も行つて粥でも煮てやるといふわけで、有繫に兄貴も見て居られぬといふことになつた。四つ叉の策略はすつかり其圖に當つた。

おすがのもとへは兼次もいつか入りこんだ。さうして松山から買つた畑を讓つてもらつて自分の喰ふだけの働きをすることにまでなつた。赤子は笑ふやうになつた。只さへ少し愚鬪なお袋は、もう可愛くて迚ても手放すことが出來なくなつて、二人が仕事に畑へ出れば自分は子守をして居る。赤子が泣けば畑へ抱いて行つて乳を飲せる。おすがの兄貴も忙しい仕事の時には兼次を連れて來て働かせるといふやうに成つた。雙方の間は理窟なしに睦ましいのである。斯くして時日は經過した。然し時としては村で口の惡いものは

「兄貴も餘まり構はねえから仕やうがねえ。どうも兼次をあすこへ入れて置くといふのは卵屋の顏を踏みつぶすやうなものだ。あれぢや仲人が幾ら立つても噺の屆かねえな無理もねえ筈だ」

と噂さをすることはある。旦那のお內儀さんも或時四つ又に向つて

「あの兼次が一件だがね。お前方の指圖で松山のうちへ入れたんだ相だがどうも

あれが卵屋では心外に思つてるらしいんだがね。此はお前方にも不似合な計らひだと思ふやうだがまあ一體どうした譯なんだね」

「どうもさういはれるとわし等は誠に惡い者に成る譯なんですが、あの時は全く今夜にもあぶねえといふ腹なんですから始末に困つて一先づまあさうしたんです。卵屋が兼次がことは全くの處呑んででもしまひてえ程可愛いんですがわし等がいふことを聽くとおすが等が方に負けたことになるといふ意地づくなんですから仕やうがねえんです。意地づくでは死んでも負けられねえといふんですからね。それ程可愛い息子のことなら諦めがつき相なものですが息子は可愛いし先は憎いしで理窟をいはれゝばごろつと寢てしまあんですからわしも手古摺つたんですよ。初めは兵隊が濟めば嫁を世話しても苦情はねえことに念はついたんでしたが今ぢや餘ンまりこじらけたんで云ひ出すことも出來ねえんです」

四つ又は頭を掻きながらからういふのである。此も無理のない理窟だ。おすがの

お袋の料簡を聞いて見ると此は單純なものだ。

「四つ叉へ頼んでおくんですから何とかして吳れんでせうが本當に困つたもんでさどうも」

こんなことに過ぎない。

「赤んぼはそれでも丈夫かい」

といふと

「へえ爺によく似てきさ」

平氣でいつて居る。おすがの親爺に此ことを話すと

「世間は角を立てゝはうまく行きませんよどうも。お互に丸く行くことでなくちや困りますよ」

こんなことで濟んでるなら人が共々心配をする必要はないのである。

それから兄貴へ

「あの一件も困つたものだな」

といふと

「困つたものですよ」

といふから

「お前もあゝして二人を引きつけて置くのでは迚ても埒明きやうはないからお前もおすがを捨てることにしてそれで他から拾ふといふことにしたらどうにか示談が出來相なものだと思ふがどう考へて居る」

斯ういふと

「わしは決してうちへは寄せねえといつたんでがす。實は松山のうちへわしが夜は泊りに行き行きしたんですが、毎晩も行つてらんねえから時々お袋等が泊りに行くこともあつたんでがす。さうするとお袋なもんですからおすがも孤鼠々々はひり込むやうに成つたんでさ。それでもはじめはわしこと見ると遁げたんですか

ら。兼次もわしに捉まつた時二度と決して足踏はしませんて證文張つたんでがす。わし今でもちやんと持つてまさあ。そんだからわしはうつちやつた譯なんでがす」

「いやうつちやつた譯でも二人のことをお前の家へ仕事に使つたりして居るのでは駄目ぢやないか」といふと

「忙しい時はほかゝら手もねえもんでがすからねえ」

どれを叩いてもちつとも要領を得ない。

おすがは自分の思つた男とお袋の膝もとに居るのだからちつとも心に苦勞がない。兼次も好いた女と世帶を持つて女の家の貢ぎをうけて居るのだからこれも苦勞はない筈だが唯親爺が出逢がしらに短氣を起しはせないかといふ懸念があるばかりであつた。それも今では安心が出來た。或日のことである。田甫でばつたり親爺にでつかはした。親爺は手織木綿の小ざつぱりした絆纏を着て首へ風呂敷包

を括つて居た。兼次はぎよつとした。それでもこちらから

「ツア、何處へ行く」

と言葉を掛けたら親爺は微笑しながら

「うん、絲染めによ」

といつてすたすた行つてしまつた。かういふ間に始終ひとりで氣を揉んで居るのは兼次のお袋である。親爺が短氣を出すから少しも喙を容れずに我慢して居る。相手になるのは癲癇持の不具者ばかりである。一目見たい孫も表向き抱いて見ることも出來ない。人に賴んで兼次へ衣物をやつたり汁の身の葱や大根をやる位に過ぎぬ。

「おら一日でも思ひ晴々としたことはねえんだよ」

と十九夜講で女房達の落合つた時には遂ひ洩れることがあるのである。

「おらまあほんにあれがこつちや「ツア、」に隱してなんぼ足袋刺してやつたか

知んねえんだよ。氷つた所をちよりちより押し歩いちやあ足袋も草履も一晩しか持たねえんだよ」

聽き手があればしみじみとこぼした。村の同情は此のお袋の一身に集つた。事件の推移はこんな風で卵屋が業を煮やすことのある外表面甚だ平靜のうちに時日が經過して行く。

世間は復た春が蘇生つた。鬼怒川の土手の篠の上には白帆を一杯に孕んで高瀨船が頻りにのぼる。船頭は胡座をかいた儘時々舵へ手を掛けただけで船は舳がちやぶちやぶと水に逆つてのぼつて行く。冬の辛さがこゝで一度に取り返されるので此の南風の味を占めては迚ても職業がやめられぬといふ時節である。篠の中には鳥馬がそつちへこつちへ移りながら下手な鳴きやうをして菜の花から麥畑へ遊びに出る。兼次は此時輪卒として召集された。本來ならば自分の家からほろ醉になつた人々に送られて鬼怒川の渡しへかゝる筈であるのだが彼は變則にも其假住居

から立つて行かなければならぬことに成つた。其朝彼は自分の家の近所だけは暇乞に出た。其態度は狼狽して居た。鄰の家では土間へ置いた汁鍋がひつくりかへつて居たので不審に思つて居たが、あとで兼次が鄰のうちの「バケツ」を引つくりかへして來たといつたのを聞いたのでそれが兼次の仕業であつたといふことが知れた。有繫は勘當を受けて居る身であるだけに落つかれぬのだらうと人々は噂をした。此の外には一つも話頭に上ることはない。麥が刈られてさうして椋鳥が群をなして空を渡る頃兼次は歸つて來た。村の内には毎日麥搗く杵の響が大地をゆすつてどこかに聞える。兼次は其麥搗の一人に成つた。麥は夜中から搗きはじめて朝になれば各八斗の量を搗きあげる。椋鳥はしらしら明に西から疾風の響をなして空を覆うて渡る。さうして夕陽の沒する頃西へかへる。空を遙かに飛ぶ時に麥搗は杵持つ手の右と左を持ち換へながら今日も日和だと叫ぶ。椋鳥が少くなつて稻刈になつた。刈田の跡の水のやうな冷たい秋が暮れて又冬が來た。鵯がよわよ

わした羽をひろげて切ない鳴きやうをして林から刈田を飛びめぐる。さうして寒さは又小春にかへつて人々は岡の畑に芋を掘つて居るのである。

短い日は村の林の梢に棚引いた土手のやうな夕雲に眞倒に落ちつゝある。横にさす光は麥の葉をかすつて赭い櫟の林が一しきり輝いた。林のへりの茶の木の花は白々と光を帶びて居る。筑波山は見る見る濃い紫に染まつて來た。秋の末の晩稻を刈る頃から夕日のさし加減で筑波山は形容し難い美しい紫を染め出す。百姓に聞いて見れば嘗てそんな筑波山は知らぬといふ。知らぬといふのは尤ものことである。日が落ちて殘曛がなほ明かな數十分間は彼等の仕事が尤も捗どる時である。晩餐の仕度をするために女等は今どこの畑からも一人づゝ立つて行く。女等が去つてから百姓の手もとが漸く薄闇きを感じた。頰白が寂し相に桑の枝を飛びめぐる。百姓は自己以外には頓着なしにせつせと芋を俵へつめて居る。兼次はおすがゝ歸つてから車へ俵を積んで引き出した。田甫を越えて坂へ掛つた時には少

し積み過ぎた芋俵は彼の力には餘つた。ほつと腰を延して居ると突然後から

「それそれうんと力(りき)んで見ろ」

といふ聲がして車が急に輕くなつた。坂の上で振り返つて見たら芋俵を馬に積んで來た兼次の親爺が持つて居た手綱を放して後押してくれたのである。

「誰だと思つたら「ツア丶」か」

と兼次は心の底から嬉し相にいつた。馬は獨りで勢よく右の方へぱかぱかと走つて行く。親爺は馬のあとから駈けて行く。兼次は腰をくの字に屈めながら足に力を入れて左へ曳いて行く。村の竹藪から昇つた青い煙は畑の百姓を迎ひにでゝ出たやうに幾筋も棚引いて田甫から岡まで屆かうとして居る。其時黄昏の中を百姓は田甫から相前後して歸つて來る。何處ともなく鴫がきゝと鳴いて去つた。百姓の後姿を村の中へ押し込んでやがて夜の手は田甫から畑からさうして天地の間を掩うた。

（明治四十一年三月）

開業醫

一

或田舍の町である。裏通の或一部を覗くと洗張屋が一軒庭へ布を張つてあつて其庭先からは青菜の畑があるといふので、そこらをうろつく雞の群が青菜の畑へ出るとほうほうと雞を追ふ百姓の叱り聲が聞かれる。春になると其の畑からさうしてそこらあたりに隱れて居た青菜が一時に黄色な頭を擡げてすつと爪立てをしてそれから白桃の花が垣根に咲いて、洗張屋は庭の短い青草に水を滾しながら引つ張つた布を刷毛でこすつて居る、とかういふ町の或横町である。其角に破れた酒藏が悲しげに立つて居る。此藏を建てた老人が太い木の杖を突いて乞食のやう

な姿で歩いて居たのはまだ近い過去のことである。酒の仕込時といふと勿論冬の季節であるが、大竈の前へ筵を敷いてそこへごろりと成つた儘蒲團を一枚かぶつて夜を明すといふ位であつた。それが一旦眼を瞑つたら非道な金貸に其藏はそつくり奪はれてしまつた。其後金貸は自分が招いた或事件の爲めに苦役に服して長い間入牢して居るので酒藏へは手のつけるものも無い。草が蓬々と生える。瓦はこける。壁は崩壊する。大桶が幾つとなく壁の崩壊した所からありありと見える。丁度腐骨瘡といふ病に罹つたらこんな姿であらうかと思ふ程凄じい形である。横町の長い板塀は柱が朽ちてるのでふわふわとして時々其一部が倒れる。それを誰かゞ起しては繩で縛つて置くので繩の新しい結び目がそこにもこゝにも作られてある。此の板塀を前にした一構、それはさつきの洗張屋の庭先の靑菜の畑から雞を追ふ叱り聲も時々は微かに聞かれるあたりであるが、そこに近頃開業した醫者がある。表の格子戸から患者は出入する。夜になると患者の控室になつて居る表

の座敷の釣りランプの下で箱火鉢に倚り掛りながら藥局生が中央から分けた髮を光らせてパックを披いて見て居る。其側に火鉢を少し離れて醫服を著けた儘の若い主人が新聞を大きくあけて見て居ることがある。凍てがひどい冬の或晩のことである。同年輩の三十恰好の男の客があつた。控室の次の六疊の間で二人は炬燵をかけて居る。主人の醫者はまだ冷たい櫓の下で新聞紙の小さく折つたので頻りに炭を煽いで居る。藁屑の交つた粉炭の燻りは蒲團の裾から少し煙を立てる。炬燵の火がばちばちと起り掛けた時に醫者は醫服をとつて客の後ろの折釘へ掛ける。客と相對して居る欄間にはガラス張りの額が二つ懸けてある。一つは主人の醫者が出征の際に撮つた中隊の寫眞で一つは千葉の醫學校の卒業證書である。炬燵の側のランプの光が一方の額のガラス板から客の目へきらきらと反射する。頭を横へやるとランプの光は又一方のガラス板から反射する。そつちを見こつちを見して居ると醫者は和服に著換へてぐるぐると無造作に兵兒帶を締めながら

「君何だい」

と炬燵へはひる。衣物は唐棧の洗曝しでメリヤスのシャツは目に立つ程垢づいて居る。シャツは二枚も襲ねて居るので手首の所が思ひ切つて不恰好に太く成つて居る。藥局生は擬ひの相馬燒の茶器に茶を入れて來る。盆を下に置いて立ちながらだらりと下つた羽織の紐が茶碗を引きずつて行つた。茶を一杯啜つて

「こりや冷たい、どうも書生と二人切りだから不自由で仕やうがないよ」

と主人の醫者は苦笑した。さうして

「松田、おい松田」

と喚んでついと表の座敷へ行つて

「しる粉を一つとつて來てくれないか、おいひよつと立つてランプへぶつつかつちやいけないぞ」

といつた。藥局生はがらりと格子を開けて出て行く。主客の間には炬燵の火力が

増すに連れて雑談が始まる。時々其癖の髭の先を撚りながら主人の醫者がいふ。髭の先をちよりちよりと撚る時は若い者に普通なすぐに得意になる時である。客は平打の白い羽織の紐を手の平でふわふわと動かしながら嫣然として居る。炬燵の側に引きつけられた臺ランプの光がぼんやりと丸く大きく天井へ映つて居る。其丸い光が靜かに人を見おろして居る。格子戸ががらりと開いて汁粉が來た。亂暴な運びやうをしたと見えて碗の蓋は傾いて汁が碗を傳ひてこぼれて居る。

「よけりや君みんなやつてくれ給へ」

主人がいふと

「大抵あるのぢや困らないぞ」

と客はふうふうと汁を吹きながらたべる。若い主人は箸も持たずに一寸一口やつて髭を左右へ拭ひながら先刻からの雑談をつゞける。

『寄宿舍を出て素人下宿に居た時だ。其下宿といふのは表は穀屋で隱居夫婦が内

職にやつて居るのであつた。生徒といふと大抵は放蕩して居るといつていゝ位であるのに僕はまだ其頃は模範にされて居たのだから特別に待遇されて居たのであつた。其時分僕の二階に先生が暫く下宿をして居た。先生はヂストマの研究で學位を授かる筈になつて居たのだけれど自分の家から出ると方位が惡いとかいつてお母さんが心配するので孝行な人だからお母さんのいふ儘に別居して居たらしいのだ。何でも一の酉の晩であつたらしい。僕の部屋へ多勢集まつて互に肉とか酒とかを買つて來て牛飲馬食會をやつた。初めは遠慮して居たがたうとう詩吟もやれば劍舞もやる大騷ぎをしてしまつた。先生は二階に勉强をして居たのだ。他の生徒は歸つてしまふのだから平氣だが僕はみんな散會してぽつゝり獨りで殘つて見ると先生が非常に迷惑であつたらうとも思ふし一寸濟まない心持にも成つたから火鉢を持つて二階へあがつて行つた。火鉢に火が熾に起つて居たからである。さうすると先生は僕の顏を見ると突然

「君は成績の惡い生徒だらう」

といふ。僕は一寸癪に障つたから

「如何にも成績の惡い生徒でありませう、然しながら今日まで席順は八番九番を下つたことは唯一回もありません」

とかう昂然としていつた。先生も少し當てが外れた。

「それでも生徒の身で酒を飮んで騷ぐ抔といふのは宜しく無い。そんなことでは腦を惡くして將來到底いかんだらう」

といふので平凡な講釋である。それから僕は他の生徒の如く蔭に隱れてはしない。公然として愉快をとるべき時にはとるといふので批難すべき處はあるまいといふと

「だがそれはそれとして君は僕と約束をしないか」

といふ。何だか分らなかつたが大にしませうといつたのである。

「それぢや僕の指揮に從つて勉强しないか」

といふので他に返辭もないから又大に仕ませうといつたのだ。先生は殊の外滿足である。其の頃ペストの流行があつたので先生は興に乘つてペストの噺を一時間もつゞけた。酒で頭は痛むしちやんとして聽いて居なくちや成らないだりひどい辛抱をさせられた。先生の噺が途切れた所で僕はランプの始末を忘れて居たと急に氣が付いたやうなことをいつて二階を降りた。それからといふもの夜は十時となると必ずランプを消さなくちやいかんといふことで少しでも遲くなると

「おい君、こくふ田君まだ起きてるのか」

と二階梯子段から呶鳴る。初めは先生は國府田をこくふ田といつて居た。朝は五時といふと先生が呶鳴る。

「こくふ田君まだ眠いか」

といつてどんどんと戶を叩く。二階の窓の戶である。忽ち響くから起きずには居

られない。規律の立つた人だから一遍でも捨てゝは置かぬ。先づさうされたから自然勉强も出來るし先生も隨つて非常に身を入れてくれる。卒業の後には助手にしてやらうとまでいつて居たものだ。それが先生がまだ下宿に居るうちにたうとう墮落してしまつたのだからいひやうは無いのである。遊びに行くのが面白く成つたのだから駄目なのである。それでも先生の目につく處では勉强しなくちや成らなかつたから先生の下宿に居るうちはまだよかつた。夜は十時にならぬうちにランプを消して置く。それには豫め戸を少し開けて置いて蒲團にくるまつて居る。梯子段からのぞいて先生のランプが消えると其時すつと拔けて塀を乘り越えて出て行く。さうして夜の明けぬうちに歸つて冷たい蒲團へもぐり込んで居る。先生はちつとも知らないから五時になると戸を叩く。まだ眠いかといつてはどんどんと叩く。實際眠いのだから隨分苦しかつた。或晩のこと例の如く塀を越えて遊びに行つて居るとヂャン、ヂャンと半鐘が鳴る。何處だといふとどうも僕の下宿の

近くらしい。しまつたと思つてせつせと駈けて來た。見ると近くは近くだが僕の下宿ではない。藝者町だといふので飛んで行つて見たくて堪らない。所が下宿の婆さんに捉まつた。まあよく戻つてくれました。内では書生さんがみんな出てしまつたので私一人ではらはらして居たんです。なんぼあなたが心强いか知れません。どうぞ私を助けると思つて居て下さい。先生もお宅が心配になるからつてお出掛になつた處です。どうぞ後生ですからと袂をぎつしり捉へて離さない。空は一杯に赤く焦げて火の子がもろもろと吹き上つて居る。ごうごうといふ騷ぎが聞える。醫學校の生徒が飛び込んで藝者の三味線を擔ぎ出した抔といふことであつたさうだが僕は其の時氣が氣でない。だが仕方がないから婆さんと表に立つて居ると先生も其内に歸つて來て僕の居たことを非常に悅んだ。先生は僕をすつかり信じて居たのだから慌てゝ駈けて來て婆さんにつかまつたのだとは思はない。外の書生は飛び出すのに僕一人が守つて居たのは感心だと思つたらしかつた。そこに

なると先生は疎いのである。其後先生は方位の何かゞ解けたのだらう自宅へ引き移つた。荷物を運ぶ手傳ひをして日曜一日を潰した。先生が居なくなつてからはもう僕は自由自在である。然し報いは覿面で俄然三十六番に落ちてしまつた。先生は驚いた。だが其時は病氣であつたからといふので一時先生を瞞着して居た。それでも何時までも欺きおほせることは出來なかつた。或時先生の試驗があつた。口頭で應答するのだからどうにか先の奴の眞似をして饒舌つたが遂うつかり捉つてしまつた。發疹窒扶斯と腸窒扶斯との鑑別診斷でぐつと行詰つてしまつた。ほんの少しの處であつたが分らなかつた。先生は疎い人だが學問の方になると非常に鋭敏だから到底欺くことは不可能であつた。君は墮落したなと先生は唯一言いつた。僕は冷水を浴せられたやうに感じた。さうしてちらりと先生の顏を見上げると先生は姿勢正しく直立した儘ぢつと僕を睨んで居た。先生はそれつきり云はなかつた。僕は身體がひどく小さく蹙められたやうで氣が疎くなつたやうで他の

生徒の竊かに冷笑するのをやつと聞いたのであつた。

千葉も最初は愉快であつた。學校の庭から遠く海を隔てた相州あたりの山々を得意になつて望んだものだが卒業の時にはたうとう六十八番に下落してしまつたのである。どうかすると大に發奮することがあつたが一旦墮落してはもう再び舊位置にかへることは出來ないものである。借財を背負つた身體を兄に曳かれて千葉を出たといふ姿で父兄への信用は其時失墜してしまつたのだ。迂濶なことであるが父でも兄でも僕が机一つなくなつて埃だらけな酒樽の轉がつて居る所にぽつさりと居ようとは思はなかつたのである。料理屋でも無闇に貸すのですつかり重荷を背負つたのであつた。今日こんなに鄕里へ燻ぶつて束縛されて居るのも其時の祟りがあるのである』

若い醫者は一寸口を噤んで碗の底に吸ひ殘した汁粉の汁を右の手から啜つて妙な手つきで左の手で箸を持つて冷たくなつた餅を嚙つた。さうして汲んであつた

冷たい茶を啜つた。此時まで臺ランプの下で右の肘を突いて身體を横にして聞いて居た客は徐ろに起きて一つ殘つて居た汁粉の碗へ手を懸ける。碗のいとじりが小さな輪を膳の上に描いた。客は醬油の浸みた茶漬を旨さうに嚙んでやがて冷えた鐵瓶から急須へ注いで其鐵瓶を炬燵の火へ懸けた。さうして

「君足を出して引つくりかへしちやいけないぜ」

といつた。

「僕もなこんな所で開業する料簡はなかつたんだがな」

と若い醫者はハンケチで髭を扱きながらいつた。

「然し事情といふものはすつかり自分を弱くしてしまふもんだからな」

若い醫者の顏には此時僅かながら苦痛が浮んだ。

天井の丸い明りはほつと息をついたやうな形で、さつきの位置から依然として二人を見おろして居る。

二

若い醫者はその先を續ける。

『一年志願もらちもないものであつた。學校ではうつかり落第すると醫者に成り損ねる心配もあるが志願兵では三等軍醫に成れなかつた處でどうといふこともなし百姓等と一所になつて上等兵位にこびかれてゐるのだから本氣にも成れないのだ。先づ謹愼して居るのは二週間位なものだ。そんな覺悟だから到頭隊の見習士官に憎まれてしまつた。軍隊といふ處は上官に一旦睨まれるとそれが始終附き纏つて仕やうのないものだ。何かといふと僕をがみがみいふ。器械體操の鐵棒でも隊の中では僕がうまい。敎育係の軍曹も要領は僕にならへといふ位であつたが見習士官は譽める所ではない。そんなことぢやいかん、眼付がいかんといふ。僕は脊が低いのだから鐵棒へ飛びつくにも上目を使はなければならない。銃を立てゝ

も銃口が耳のあたりまで來る。練兵の時でも低い奴は態度がまづい。僕が短い足で歩く工合はあぶなさうな容子だといふのでミスター薄氷と綽名された位だからどうしても上目使ひになる。それを眼付がいかん臆病だからいかんといふ。或時は梁木を渡れといふ渡らぬといふ。梁木といふとあの高い橋のやうなのがさうだ。僕は決して渡らぬといつてひねくれてやつた。すると一同を整列させて置いて見習士官がいふには國府田志願兵は臆病である。恐らく學校に居た時は外科と解剖は落第點であつたらうとかうだ。それからいやそれは大に違ふ。私は外科と解剖は必ず滿點であつたのでそれが不審であるならば私の學校へ照會して貰ひたいと喧嘩を買つたら大に閉口した。或時は又かうである。整列した前に立つて「汝の劒を以て罐詰を切れといはれたらどうするか」といふ問を其見習士官が發した。劒は軍人の精神であるといふ事を注入されて居るので皆切らんといふ方へ手を擧げる。僕は擧げない。なぜ擧げないと詰問する。それから若し狂人でもあつて汝

の劍を以て罐詰を切れ、然らざれば直ちに汝を殺さんと迫られた時に其狂人が自分より遙かに力強いものであつた時には徒らに生命を損するよりも寧ろ我が帶劍を以て容易な罐詰を切らむと欲するものでありますとやつた。衝突といつたら何時でもこんな愚にもつかぬものであつた。僕の居た室は以前は倉庫であつたらしかつた。或晩酒保から源氏豆を一袋買つて來ておいて消燈後に二三人で噛つた。同室の一等卒にやればよかつたが遣らなかつたので其奴が密告をした。軍曹がやつて來て誰か豆を噛つたものはないかといふ。ないといふとそれでもぽりぽり音がしたさうだ怪しからんといふのでランプを點けると寢臺の下に生憎二つ三つ落ちて居たので散々こづかれた。こんなことを眞面目に繰り返し繰り返し六ヶ月經過した。然し階級制度だけに六ヶ月を經過した時には僕等は一躍して軍醫生といふので曹長の資格を保つやうになつた。もう自由に診察も出來る少し羽が擴がつた。丁度實彈演習で習志野へ行軍があつた時だ。結婚したばかりの中尉であつた

が病氣屆を出して行かない工夫をした奴があつた。僕が診察の番に當つて居た。軍醫仲間の相談の結果何でも屹度彼奴は假病に相違ない。本官の奴等平生餘り威張り散らすから少し懲らしてやれといふので僕が行つて見ると大層裝つて居るが假病である。それでも其一日だけは見遁して次の日から練兵に出してやることにした。僕は竊に冷笑しながら營舍の側をぶらぶら歸つて來ると

「おいこら軍醫生一寸待たんか」

といふ。後を向くと大隊長が窓から首を出して居るのであつた。此の大隊長は特務曹長あがりでいゝ加減の老人である。赤銅のやうな顏で目玉がぐりぐりして居る。眉が毛蟲のやうで白かつた。中尉の病氣はどんなのかと聞くのであつた。いい加減いふうちに段々ばれさうになつた。大隊長なかなか旨いことを聞く。

「熱はどうした」

とさういふ意外なことをきく。

「左程ありません」

といふと

「どの位か」

と突つこむので僕はうつかり

「當り前でございます」

とやつてしまつた。大隊長非常に怒つてしまつた。

「何を云ふかッ」

と今にも攫みかゝりさうな劍幕だ。失策つたと思つたが據ないから暫く立つて居た。すると

「何を愚圖々々しちよるか、行けッ」

と叱るのである。

「えゝ一寸申上げます」

それから斯ういつて見たが聞かない
「そんなこと要らん、何故行かんか」
と呶鳴る。
「あゝたとへば咽喉加答兒といふ病氣がこゝにあるとしますれば此にも熱はあるのであります。さういふ熱に對しては唯今のやうな言葉が私共醫學社會には普通に用ゐられて居るのでありますが……」
と出任せを饒舌つた。軍人といふものはそこに到ると淡泊である。騙されたとは知らない
「やさうか、それは俺が惡かつた。醫學社會の通用語といふことは知らなかつた。今のは氣の毒なことであつた」
といつて六ヶ敷い顏が急に解けてしまつた。それからといふもの大隊長は僕を信用して時々診察させる。喘息持で惱むのであつた。

「どうも熱があつていかん」

といつてはいつもそれを苦にして居る。熱も無いやうなのを、唯苦にして居るのだから、初めは不審に思つて居ると、自分で計つては苦にするので、よく驗溫器を檢べて見ると、よくよく古い狂つたので平熱でも八度近くまで騰る。七度から以上は熱だと聞かされて居たので頻りに苦にして居たのであつた。

軍隊ではこんなことで日を暮して一年は過ぎてしまつた。茶化して通つたといつてもいいので、それでもどうにか終末試驗に及第もするし心に苦痛といふことは感じないでしまつた。然し此期間に只一つ非常に困つたことがあつた。僕が少し罪を作つたやうなことがあつたので、それも罪といふ程のことではないが、其起りといへば千葉に居た時のことであつた。自分の不成績を少しく恥ぢて一奮發して見る氣に成つた時のことだが、惡友を避ける爲めに在の百姓家の一間を借りて居た。海岸であつた。暑中休暇の後であつたといふのは庭に射干(ひあふぎ)の草叢(くさむら)があつた

ので記憶して居る。子供の時分垣根に簇生して居た射干の花を母が切つて佛壇へ供へるので射干の花が僕の腦髓に深く印象され且つ之を好むやうに成つたのであつた。其射干の花が皆莢に成つて居た頃に其百姓家へ移つたのであつた。蜀黍の穗が高く延びて海が靑く光つて鰯の捕れる頃まで居た。船橋鰯といつて尾のあたりの太いのは大抵あの入海でとれる。朝よりも學校の歸りに見ると海は餘計靑く光つてそこには白帆が散らばつて居るのであつた。其時分僕は分家といふことは決してすべきものでないといふ觀念を持つた。それは僕の居た鄰に本家と分家とがあつた。さうしてそれが互に仇敵の如く相反目して居た。本家が衰運に傾いて居るのを分家が快げに見て居る。本家へは執達吏が來ることがある。さうすると女房や娘が僕の處へ泣いて來る。それを見て僕は只理窟はなしに分家といふことは絕對に惡いものだと感じたのであつた。だから今自分が斯うして父の家の近くに分家するやうに成らうとは寸毫も思ひ懸けぬことであつたのだ。其時分はいゝ口

があつたら養子に出てもいゝといふやうなことを心では思つて居た。僕の小學時代からの友人で、君も知つてるだらうあの館野である。其親戚で八王子に開業して居た醫者で近頃郷里の川越在へ戻つて居るのがある。隨分資産もあるしそれに一人子の娘が非常にいゝのだが行く氣はないかと其館野から勸められた。嘶に興が乘つて遂行つて探偵して見ようといふことに運んだ。暑中休暇を利用して富士登山といふ扮装で行つた。先方が何も知らぬうちならば探偵の積りもいゝが其娘が館野の從妹位に成つて居る家へ二人で行つて探偵の料簡であつたといふのは當時若かつたからとはいひながら滑稽至極なことであつた。途中は川越まで汽車であつたから實は草鞋の底も汚れないので少し極りが惡い位であつた。有繋に躊躇して日沒近くなつて其家へ行つた。館野は僕の平生に似合はぬといつて笑つた。醫者の家は相應な構へであつた。二階へ案内されてさうしてすぐに行水を使つた。糊のきいた肌ざはりのいゝ浴衣に換へさせられた。どうも館野が前に手紙で知ら

して置いたらしいので後で考へて見ると餘り何事も行き屆いて居た。家の屋根は草葺で厚い廂が二階の窓へ覗き込んで居た。窓から近所の家の棟が見えて棟には青い草が一杯茂つて居る。赤い百合の花が其青草に交つて咲いて居る。どの家を見ても皆さうである。唯赤い百合の花はないのもあつた。下女が茶を出してくれる。茶菓子を撮み乍ら窓外を見て居ると夕日が横に遠くから其青草へ射し掛けて赤い百合の花が光つた。さうして居ると左方の梯子段を靜に登つて來る足音がして何だか知らぬがかちんかちんといふ微かな響が此も梯子段から聞える。横を向くと室内はもう薄闇くて外の光を見て居た眼には俄にぼんやりとした。梯子段から若い女がランプを持つて上つて來た。ランプを右の手に臺を左の手にして居る。ランプの丸いガラスの笠とほやとが觸れるのでかちんかちんと微かに鳴つたのである。ランプを持つた手は肩のあたりで握つて居る。僕の處からでは女の顏は丸いガラスの笠で稍隱された。それでもランプの光を強く受けた頰の一部は際立

つて白く見えた。化粧をして居るのであつた。館野はこつそり僕の臀をつついた。家の娘であつたのだ。化粧榮えがしたのか美しかつた。館野のいふのは嘘ではなかつた。やがて酒が出る。主人も娘のお母さんといふ人も出て非常に款待した。時々お母さんが蚊を追うてくれる。娘はお酌をしてくれる。僕は却て包圍されて居るやうに感じた。然し存分に飲んだ。館野は後に家のものは此の遠慮なしの態度が大に氣に入つたのだといつた。其晩はそこへ泊つた。すると館野はどうだと聞く。それは娘はいゝ憐に氣に入つたのである。其前髪のあたりに挿した短冊のやうなのが幾つもひらひらと垂れた古風な簪がランプの光にぎらぎらと光つて一層しとやかに見えた。二十位ではあつたかも知れぬ。白地の浴衣に赤い帶を締めて一つ二つは若く見えたやうであつた。僕はどうして連れて來られたか不思議に思ふ程であつた。然し熟考して見ると養子に出ていゝも惡いも一向まだ父へ打ち明けて意見を聞いたのではない。假令自分がよからうといつて見ても父が許さね

ば無効である。さうなると慥な諾否はいへなくなる。何故それでは川越あたりまで行つたかといふと斯の如き待遇を受けようとは思はず一つには唯娘が見たい位に過ぎなかつた。餘りに單純であつた。大に困却したから其翌日は遁げようと決心した。所が雨である。一日是非延ばしてくれといつて朝から酒を出す。娘が三味線を彈く。尤もそれは落付いた彈き方であつた。娘は紺飛白の單衣であつた。白粉を落した處は却て肌の光が見えて服裝のためか夜見たよりも一つ二つはませて居た。館野が一つに成つて僕を止める積りであつたから到頭立つことは出來なかつた。僕はいゝ加減惘れられるやうにと思つて有りたけの襤褸をまけ出してしまつた。其次の朝はどうしても遁げようと思ふと僕の着物が汗に成つて居るから洗濯してあげるためさつき盥へつけた所である乾くまで待つてくれといふのである。すると又雨、又雨といふので六日も居てしまつた。六日の間は氣盡しであつたがそれでも娘に待遇されるのは嬉しかつた。僕は直ちに歸省した。館野と別れ

る時に假令養子に行くにしても此から先き二年間の學資を出すことゝそれから放蕩して拵へた借財を返却してくれることでなくちや厭だといつた。大抵それ程のことをいへば呆れてしまふことゝ思つたからである。所が館野の手紙ではどうもあゝ腹を割つていふ人でなくては賴もしくないから要求の金は幾らでも出す。それから是非骨を折つてくれといはれるし、それに娘が大に君に傾倒して居るのだがどうだいといつて來た。僕も案外だ。それを二日措き三日措きにはいつて來る。どうも挨拶に困るから返辭をよこせといつて迫る。遂には君は娘を可哀想だと思はないかと露骨に攻め掛ける、其の手紙をうつかり父か母かに見られたら大變だから配達の來る度に注意して居た。さうして歸省して見たら一家の事情が到底許さないことに成つたから惡しからず思つてくれ、僕は凡そ何日頃千葉へ立つ、それにしても僕の立つた後へ手紙が來ると非常に困るから手紙はよこしてくれるなと書いてやつた。其事柄はそれつきりに成つてしまつた。忘れたやうに成つて居

たのだ。それが驚いたことに二年經つて志願兵で赤坂の聯隊に居る處へ其醫者の弟だといふのが突然尋ねて來た。まあ極つた挨拶をしてもぢもぢしながら其人がいふのには其後醫者の家ではまだ養子が定まらぬ。娘はあなたの方がどうか慥に極りのつかぬうちは他の緣談は聞かさないでくれといふ次第だといつて

「枉げてもどうか兄の一家のものを安心させて戴くことは出來ますまいか」

といふ至極穩かな申出である。僕は今までそんなに心掛けて居られたかと思ふと喫驚もするし氣の毒でもありどうといつてうまい挨拶も出來兼ねるので

「一家の事情が當時許しませんものでしたから……いやどうもこんな所で何も差上げるものも御座いませんがどうか」

といつて酒保へ連れて行つた。外に方法も無かつたからである。

「それでは只今に成つては事情お運び下さる譯にまゐりますまいか、私が斯うして參りますのはよくよくのことでございますが」

と哀訴するやうな仕方である。僕は此の期間を過せば獨逸へ留學したい心算であるし、千葉での不勉强をどうにか償ひたいと思ふのだから五六年は暇どれることと思ふといふやうな苦しい嘘を吐いて其場は紛らしてしまつた。それが二度も尋ねて來られたのだから僕も要らざる罪を作つたものだと思つて當時は非常に神經を惱した。其娘はどうしたか懸念に思ふのはそれ許りだがどうにか養子も極まつたのだらう。館野には其後聞いたことがない。尤も彼とは逢ふ機會もなくて過ぎてしまつたのである』

夜はふけた。夜番の鳴子の響が遠くから段々近くなつてさうして格子戸を開けてはひつて來るかと思ふ程八釜しく響いてやがて又遠くなつた。夜番の鳴子は板へ鐵の短い棒をつけたのでそれを紐で臂のあたりへ背負つて居る。歩くに連れて臂が動く其度にがらりがらりと鳴るのである。藥局生はもう眠つた。微かに鼾の聲が聞かれる。若い醫者はランプへ眼を注いで居たが

「酷く明るくないな、僕の書生は少し事情があつて世話して居るんだが然し怠けていかん」

かう呟いてランプのほやを拔かうとする。熱いので一寸手を引つこます。

「そりやかうすれば熱くないんだ」

と客は下の膨れた處を持つてついとほやを拔いた。火はゆらゆらと搖れながら油煙を立てる。天井の丸い光は同時に消えて無くなる。心の燃え粕の炭のやうになつて口金へひつゝいてるのを客は炬燵から火箸を出してごりごりと擦つてほやを刺す。ランプの光は一際明るくなつて天井には再び丸い光が映つた。

三

嘶は連續する

『開戰は志願が濟んで幾干も經たぬうちであつた。召集されて行つたのは橫須賀

の衞戍病院であつた。横須賀には二ヶ月程居た。横須賀の北の山の手で坂を上つて行つた處に海軍の兵曹長の留守宅があつた。そこに暫く厄介に成つた。其頃はもう三等軍醫になつて居た。そこらは別莊か料理屋位がある處であつたが、兵曹長が或小金持の隱居と懇意をして居たので此の住ひは其隱居の別莊であつたのを借りたのであつたさうだ。兵曹長は佐世保勤務であつた。兵曹長といふと陸軍の少尉位の格だから餘りいゝ生活ではなかつた。家は八疊の間を僕が占めて次の間が六疊それから茶の間といふ小さな作りであつたが、金持の新築だけに小ざつぱりとして心持のいゝ建築であつた。家族は細君と娘きりである。細君は四十一二にも成つたらうか娘は十九とかいつた。二人では寂しいといふので僕を置いたのであつた。二人共非常に親切であつた。僕も遠慮なしにして居ると細君は宅の者のやうな心持がする、どうぞ何でも柳子にやらしてくれといふのであつた。柳子といふのは娘である。當時は戰爭で人氣が湧き立つて居る上に、自分等が軍人の

家族ではあるしそれに兎に角僕が軍醫であつたりしたものだから、自然普通の人に對するとは感情が違つて居たかも知れぬ。其頃は蚊帳を吊つて居た。茶の間には細君次の間には娘が寢た。葭戸を立てる程の贅澤はなかつた。障子の儘で暑い時だからそれを引いた事はない。僕は出勤が早かつたからよく眼が覺めた。娘が起きて雨戸を二三枚開けてそれから蚊帳の釣手を外す。僕の枕元が戸袋であつたから假令まだ眠つて居た時でもがらがらと戸があくと屹度眼があいた。娘は寢間着で蚊帳を疊んで蒲團をあげて着物を著換へる。それからそつちこつちの戸をあける。隔ての障子があいてるので毎朝それがはつきり見られるのであつた。かうして居るうちに僕は其娘を惡く思はぬやうになつてしまつた。然し以前放蕩をして居た時でも只の女に關係することは罪惡であると深く觀念して居た程であつたから實際此の娘に對しても非常に自ら抑制して顏にも出さなかつた。時時は以前の癖の藝者を買つたりして欝を晴らすこともあつた。一時二時と夜更しをして

歸ることがあつたがそれを娘は何時でも起きて待つて居て世話をしてくれる。尤も兵曹長も酒を飲んでは夜深に歸ることが度々でそれを娘がいつも介抱してやつたのだと細君はいつた。或晩僕は酒をしたゝかやつて料理屋から車に乘せられてもどつた。坂の下で車をおりて一人で庭の木戸を明けて戸袋の所へ行つて雨戸を開けようとした。爪先でがりがりと音をさせた。

「國府田さんでございますか」

と娘の聲がする

「どうも遲くなりました」

と僕がいふとぱたぱたと急いで足音をさせてかちりと掛金を外してがらりと雨戸を開けてくれた。月は短い廂から少し緣側へかけて白い光を投げた。此の夜は非常によく月が冴えて居た。腰をおろして靴を脱いで居ると

「おゝまあ涼しさうな」

といふ聲が頭の上でした。仰いで見ると娘は雨戸の緣へ手を掛けて抄ひあげるやうな體つきをして月を見て居た。僕は腰を懸けて居たから月が廂から二尺ばかり離れて居たが娘は立つて居るので月は廂へ隱れて見えなかつたのであらう。僕は上らうとして身體をひねると娘の足へ觸れた。娘は氣がついたやうに

「あれ私がしまひませう」

と靴をとつて戸袋の側の下駄箱へ入れた。ふと見ると障子の所に何か草花を挿して花瓶が置いてある。どうも射干（ひあふぎ）らしいので何だときくと

「あゝ左樣でございました、一寸ランプを拜借致します」

と障子の內側の机に載せてあつた僕のランプを點けて立つた儘引つ込ませてあつた心を出してそこへ差しつけた。射干の花であつた。此は大好きの花であるといふと

「あの先刻用事があつて町へ參りましたらこんな花がありましたので買つて參つ

たのでございます。さうしますと母が其では國府田さんに挿してあげたらよからうと申しますので挿して見ましたのでございますがお氣に召しますかどうかお尋ねしてからと思ひまして此所へ出して置きましたのでございます」
といつてランプを机へもどして蚊帳の釣手を一隅外してその射干の花を掛物の側へ置いた。僕は射干の花を見ながら正服をとる。娘は側に居て一々それを折釘へ掛ける。シャツをとると
「少し汗に成りましたから明日洗濯致しませう」
と丸めて障子の外へ出した。さうして
「一寸お待ち下さいまし。只今お冷を持つて……」
言ひ捨てゝ急いで臺所に行つて金盥へ水を一杯汲んで來た。
「どうぞお拭きなすつて」
手拭が浸してある。其時机の上のランプは障子へくつゝけて閾の上へおろして

あつた。僕は雨戸の間から外の月夜を見つゝ手拭で汗を拭く。汗の身體を拭き畢つたら急に心持がせいせいとした。金盥の水を庭へ捨てようとすると娘は

「それは私が」

といつて下駄箱から下駄を出して庭へおりた。低い四つ目垣には白い草夾竹桃の花の一簇がさいて居る。娘は金盥の水を手の先で草夾竹桃の根へ掛けた。更に葉から花へ掛ける。水の掛つた葉はきらきらと月の光を宿す。垣根の先には横須賀の市街が只一目で其先には海が一杯に月光を反射して銀の板の如く見える。走水から掛けて盃石の如き猿島が攫めさうである。娘は白地の浴衣に一杯に月光を浴びて金盥を手に提げた儘

「おゝいゝ月だこと」

と獨言をいひ乍らきらきらと光る白い花簇の側に佇んだ。手に提げた金盥もきらきらと光を放つて居る。僕は恍惚として此の冴えた外の月夜を見た。さうして白

分でランプを机の上へもどして蚊帳の一隅を釣つてもぐり込んだ。娘は再び雑巾で縁側を拭いて雨戸をそつと立てゝかちんと掛金をかける。蚊帳へはひると有繋に暑苦しいので

「うゝん」

と唸るやうな聲を出してごろごろして居ると娘は又臺所へ行つて何かことこと音を立てゝ居る。

「柳や國府田さんはお歸りなすつたのかい」

此時細君の聲がした。

「大層召して入らつしやるやうでございますからさつきの氷がまだ解けますまいと思つて……」

娘の聲が微かに聞かれた。さうしたら氷袋へ氷を入れて折つた手拭と一つに盆へ乘せて持つて來て僕の枕元からそつと蚊帳へ入れてくれた。かういふことをし

て貰ふことは心の底から僕は嬉しかつたが然し一方に甚だ氣の毒に感じたから

「どうぞ休んでくれませんか」

といつた。娘は

「消しませうか」

と机の上のランプの心を引つこませて立つた。次の間は障子が開けた儘であるから娘の蚊帳がはつきり見える。さつきまで蚊帳へはひつて居たと見えて蒲團はまくつて後にあつて二分心のランプが其の蚊帳の中にあつて其側に雜誌のやうなものが開けてある。こちらのランプが消えたので次の間は餘計に明かになつた。娘は向うの裾をぱさぱさとあふつてついと蚊帳へはひる。まだ帶をしめた儘である。蒲團をのべて蚊帳の外へ出る。蚊帳の向うはランプを手前に置いてあるから只青く見えて居る。さらさらと帶を解く音のみが聞える。軈て白い手を裾から差し込んでランプを外へ出した。それと共にぼんやりと娘の屈んだ姿が表はれた。

ランプが消えて家のうちが全く闇くなつた時ぱさぱさと復た蚊帳の裾をあふる音がしてさうして箱枕がぎりぎりと微かに鳴つた。其夜は酷く寢苦しくて神經が興奮して居た。娘もどうしたのか時々寢返りするのを聞いた。僕は此夜からひどく煩惱した。それでも其時は出征したいのが山々で衞戍病院長と喧嘩した位であつたし其家に居たのも其後久しくなかつたから到頭踏み外す心配もなくて濟んだ。全く機會を與へられずにしまつたのが幸ひであつた。それから幾らも經たぬうちに僕は出征したのである。横須賀の停車場へ見送りに出てくれた人の中には聯隊長もあつたが日記に堀江令孃とあるのが此の娘のことである。それからはもう四年にも成るが其月夜のことは思ひ出すとすぐに眼の前に浮ぶ。或は生涯僕の記憶を離るゝことがないだらうと思ふのである。懷かしいのは其月夜である。

出征の途中內地は唯がやがやと過ぎた。玄海灘へかゝる。天氣晴朗で波は靜かであつた。沖に泛んで居る漁師が運送船の通過するのを見て板子の下から魚を出

しては海へはらりはらりと投げて大手を擴げる。甲板では此を見て一齊に喝采する。水は空と相接して二つながら青い。兵卒の中には船が構はず進行して行くとあの空と水との間に挾まつてしまはないだらうかと懸念して居る奴があつた。七日目で青泥窪へついた。負傷兵の後送されて來るのに遭ふ。其中に一人知つてる奴があつた。穢い服の胴一杯に血が凝結して居る。數分間彼の噺を聞いた。或晩夜襲の命が下つた。砲臺からは機關砲を熾に浴せかける。土地へぴつたり伏しても自然の傾斜は頭が斜に上を向いて居る。其うち左の足がどさりと地べたへ叩きつけられたやうに感じた。そつと身體を振つて手を觸れて見るとぬるぬるとする。覺えずやられたといつた。尤も傷はどう成つて居るのか自分には分らない。繃帶を出して縛らうとすると後に居た戰友が俺がやつてやらうといふので足を投げ出して居ると其奴が急にぐつと酷い重みで自分の痛い足へのし掛つた。何をするのだといつても返辭がない。右の足でつゝついて見ても動かない。怪んで頭へ

手を掛けて見るとぬるぬると血が流れ出して居る。驚いて能く探つて見ると腦天をやられて居た。それから酷く恐ろしくなつて疼痛も忘れて漸くのことで左の足を拔いてそれでも銃だけは放さずに匍ひながら下りて來た。ごろごろして動かないのは味方の死骸である。それからどこを匍ひめぐつたか平らな處で穴があつたから轉げこむやうにして夜の明けるのを待つて居た。機關砲が時々桝から豆を戸板へまけるやうに遠く聞える。生きた思ひはなかつた。夜が明けて見ると砲臺に近い瓜畑で穴は砲彈の爆發した迹であつた。支那人が一人倒れて居る。死骸の懷を探しに來て逸れ彈を食つたのであつたかも知れぬ。瓜の花が血で赤くなつて居たといふ。自分の身體も一杯血に染んで居る。自分の上へ乘り掛つた戰友の血である。自分のは踵へ貫通銃創を負うて居たのであつた、とかういふ噺であつた。後では何でも平氣であつたが其時はそんな噺でも身體が引き締るやうに感じた。旅順へつくと間もなく横須賀から手紙が來た。僕等の衞生隊で內地の手紙を受取

つたのは僕が一番早かつた。急に軟風が吹いて來たやうな感じであつた。僕も早速手紙を書いた。大小の事件は力めて報道した。陣中は暇な時は非常に暇なので出來るだけ精細に書いてやつた。それに對して一々義理をいうて來るのが待ち遠であつた。吸付烟草の評判は僕は得意になつて報道した。それはかうである。旅順の滯陣中に近傍の百姓等が病氣を診て貰ひに來た。他の軍醫等は五月蠅がつて碌々取り合はぬので遂僕の處へばかり來るやうになつた。隨つて土民の間に信用を博して其地に唯一の藪醫者とも懇意になつた。朝鮮髷の老人であつた。滑稽なことには其息子が花林糖賣であつた。少女に至るまで僕には心を置かなくなつた。少女は皆辮髮で赤い切を飾つて居る。容易に人には逢ふこともない。後家婆さんが少女と二人で住んで居る家があつた。ペラペラした唐紙刷のよく支那から持つて來る繪紙の美人があるが額がくるりと丸くなつて居るあんな形の少女であつた。時々は裁縫までしてくれるやうになつた。脈搏を見てやらうと手をとつて

見ても遁げぬ。僕はよく其婆さんの家へ行つた。それだけなら何もないのだが或時其婆さんが一口吸ひ付けて煙管を出した。雁首の開いた煙管で烟草は恐ろしく辛いのである。此は誰も知つたものはあるまいと思つて居ると隊中の評判になつてしまつた。馬丁が見て居て吹聽したのであつたのかも知れぬ。兎に角かういふ事件はもうすぐに手紙になつて横須賀へ行つた。こちらから餘計やれば先からも餘計よこす。此が陣中唯一の慰藉であつた。奉天の戰後には何と思つてか横須賀からは一々僕の手紙を淨寫して一冊の本に綴つたのをよこしてくれた。自分でも其手紙の數には驚いた位であつた。月夜といへば旅順でも月夜はあつた。禿山の所にひよろひよろと立つて居る芒をとつてビール罎に挿して月見の筵を張つた。然し其時は遼東の冷氣が漸く肌に浸み透る頃であつた。其月見の四五日前に某砲臺の攻擊があつた。非常な負傷兵は皆機關砲でやられて居た。負傷兵を收容するのは夜間のことであるから夜になつて運ばれて來るものは想像の外であつた。僕

等の衞生隊に第一線の繃帶所であつたので應急手當をしてそれから野戰病院へ後送する役目であるが僕は其輕傷部の主任であつた。テントの內へは勿論はひり切れないのでごろごろと外へ轉がして置く。應急手當といつても石鹼で一々傷を洗つてから繃帶をするのだからさうは間に合はぬ。テントの外にある負傷兵は毛布も無ければ外套もない。

「水が欲しい」

「繃帶がきつい」

「血が出てしやうがない」

「どうするんだあ」

「擔架ア」

と口々に訴へて叫ぶ。それで繃帶をするには何處でもぐるつと刀で服を切り拔いでそこを石鹼で洗ふのであるからシャツへは冷たい水が浸みる。冴えた月の下に

轉がつて寒さは怺へられぬ道理である。それで唸つたり泣たり慘澹たるものであつた。然し此の月夜も亦既に四年の前に成つてしまつた。講和になつた時は一日も早く横須賀へ行つて吸付烟草の噺もして見たかつたが内地へ凱旋の間際にはそのどさくさ騷ぎに紛れて遂機會を失し其内に病院へ奉職はする、それから開業して一身は束縛される。赤の他人に成つて其後はふつゝり消息もない。僕の一身は心と共に變化した。女の一身も變化したであらう。若し再び相逢ふ機會があつたとしても相互に戰爭の熱に浮されて居た時の心持になれるだらうか。それ處ではない、或は僕のことは思ひ出さないかも知れぬ。然し月夜のことは女の記憶をも去らないであらうと思はれる。一體此所へ開業するといふことが僕の本意ではなかつたのだ。だが七十になる父と喧嘩をすることも出來ず、自分の從來の失策も段々と自分の我を鈍らして到頭僕を下落さしてしまつたのだ。何だか急に藪醫者になつた心持がする。それに鄰づかりが皆子供の時分からの知合ひだからどうも白

分から大人らしく感ぜられぬ。先生といはれるのもいふのも調和が惡いといつたやうなものである。かういふことがある。此のすぐ裏の竹藪の先は寺の境内で大きな榎の木が一本ある。枝が横に出て居て登りいいので其の實が黑くなると小學校の生徒がつけこんだ。榎の實は旨いので砂糖の實といつて居た。學校の歸りには乾度荷物を脊負つた儘登つては枝と枝とを渡つて歩いた。砂糖の實には椋鳥が群集して騷ぐのであつた。然し學校の放課後といふと何時も椋鳥は遠い空へ遁げて移るのであつた。僕も毎日行つた。然しこつそりと行つた。落ちたら危險だからといふので母が叱るからであつた。桑の實であると口が染つてなかなか落ちないが砂糖の實では其時捉まらなければ分らぬので腹一杯たべては平氣な顏で家へ歸るのであつた。さうすると何時か母が寺男へ賴んで置いたと見えて寺男が庭でも掃いて居るとすぐに追出される。居なければ登つてたべた。それを或時荷物は背負つて居たから取られなかつたがうつかり下駄を持つて行かれた。非常に驚い

て謝罪つたが聽かない。僕は到頭泣き出してしまつた。さうしたら寺男は笑ひながら下駄を出して僕の身體を左の手で抱いて僕の足を盥へ入れて洗つてくれた。此の男が今でも白髮になつて生きて居る。此間指を腫らして診てくれといつて來た。さうして砂糖の實の噺をして何時の間にこんな先生さんに成つたかといつて淚を落した。かうしたことで郷里には懷かしいこともあるが又幅の利かぬことも多いのである……若いうちは要するに駄目だ』

かういつて主人は息をつく。

四

『病院へ奉職したのは二月である。宇都宮は日光颪が吹きつゝあつたけれど滿洲の冬を凌いで來た爲めか寒いとは思はなかつた。僕は外科の主任を托せられた。其時僕と相前後して看護婦長が來た。此は博愛丸に乘つて出征した女で年輩も二

十五六の體格もがつしりした中々私立病院などへ燻らせるのは惜しい位な女であつたが、以前病院に居たこともあるし其郷里が近いといふので院長の懇請を容れたのだといつた。看護婦長の連れて來たのだといつて一ヶ月許りして僕の外科室附に山田といふ看護婦が來た。其前にも外科室附が一人あつたが僕が奉職して間もなく赤十字社の病院へ行く積りで試驗を受けたが落第したとかでそれで外聞が惡いとかいつて病院を出てしまつた。然し此の女は感服しない女であつた。後から來たのは性質が柔順でそれに十日でも二十日でも後れて來るとそこに多少の遠慮もあるからして勤め方が非常にいゝ。患者でも譽めないものはない。僕が夜外出して遲くなると火鉢へ火を起し灰を掛けて置く。それで患者からの遣ひ物でもあると屹度僕の處へ持つて來る。其位だから外科室内に必要なものはちつとも滯りなく整理して置く。僕はいゝ看護婦が來てくれたものだと思つた。性質許りでなく其容貌が丸ぽちやの色白な愛嬌のある女であつた。僕は仕事が總て愉快であ

つた。戰地での經驗を應用して驚かしてくれようといふ樣な功名心もあつたが女を相手にして居るのは其頃はまだ愉快であつたのだ。戰地に足掛け二年も居て殺風景な境涯に餘儀なく働いて居たものはたまたま女を見るとどれを見ても好く見えた。丁度凱旋の途中汽車が遼陽の停車場へつくともう日本の女が居た其時には滿載された兵卒が一時に勇み出して汽車がひつくりかへる樣な勢ひであつた。白い服を着て立ち働く看護婦も其當座僕の目には大抵よく見えたのである、手術の暇に僕が椅子に凭れて居ると看護婦は一々叮嚀に器械をガラス戸へ入れる、汚れ目のない服をきりつと腰で締めて居る。僕はそれを餘念もなく見て居るのであつた。バケツを提げて出て行く時に看護婦は扉をそつとしめながらちらと僕を見て行くことがある。さういふ時には空のバケツを提げて戾つて來て扉を開けてはひつて來る時には何となく一寸赤い顏をするのであつた。さういふ女であつたから僕は心から敎へもした。兎に角外科室はいきいきして居るやうに感じた。だが世

間といふものは迂潤に行かないもので尤もそれはずつと後になつて知つたのだが其の時分藥局生や其他の奴がどうも僕と其看護婦との間が變だといふ疑惑を抱いて蔭では騷いで居たさうだ。僕等は實際に於て疚しい所のあつたのではなしそんなことゝはちつとも知らずに居たのである。固よりそれだから遠慮をしてどうといふことはなかつた。それを尙更ら不埒だといふので蔭では頻りに業を煮やして居たさうだ。或時妙なことから僕はそれを知つた。其頃病院はまだ新築してなかつたから宿直の醫員も藥局生も寢室は一つであつた。或晩僕が宿直であつた。うとうとして居ると藥局生の一人が騷ぎ出した。それは彼の蒲團が一枚どうかして無くなつたといふのである。さうして其蒲團が僕の上に掛けてあつたことが發見された。僕の夜具は何時も僕の看護婦がとつてくれる。其晩はどうしたことか故意にやつたのではなかつたのであらうがうつかりした間違ひをでかしたのである。一室のものは騷ぎ出した明白地にはいはぬが當てつけらしく變だ怪しいと吸

鳴る。喚鳴つては僕に見られると蒲團をかぶる。ランプが消えると足でどたどたと蒲團を叩く奴がある。僕は變な奴等だと思つたが然し默つてしまつた。其翌日看護婦は僕に何ともいはなかつたが非常に氣の毒さうにして小さくなつて居るのが著しく分つた。彼は其騷ぎを松田から聞いて知つたのださうだ。突然松田といつても分るまいが今僕の使つて居る松田であるが其時分は病院に居たのである。氏家の生れで山田と同鄕であつたから外の奴より懇意にして何事も打ち明けて居たらしい。山田は鹿沼へ養女に行つて居たので以前は知らぬ同士であつたが同鄕といふ觀念は互に懷かしがらせたと見えるのである。僕は山田の容子を見ていぢらしい女だと思つた。其後又こんな事があつた。宿直部屋で骨牌をやるとかで皆集つた。看護婦も集つた、其時僕はランプで書物を見て居る。騷がれるのが迷惑であつたからふとそんなことは詰らないぢやないかといつた。すると藥局生等はふいと立つて行つてしまつた。他の看護婦も立つてしまふ。山田が獨り殘つた。

酷く心配さうな顏をして暫く坐つて居た。白い服をとつた彼は其服裝が富裕の身でないことを證據立てゝた。彼は僕の夜具をのべて去つた。それから蒲團の中で書物を讀み續けて居ると藥局の奴等が酒を飲んで來た容子でどたどたと踏ん込んで來た。突然ランプを吹つ消した。さうして亂暴をはじめる。僕は激怒したから何をするんだと立ち上つて呶鳴りつけた。さうすると先生は病院の風紀を害するからだといふ奴がある。何を害して居るのだと詰問すると看護婦と變ぢやないかと無作法にもいふのである。僕は山田が置いて行つてくれた枕元の燐寸を探つてすりつけた。さうすると有繫に極りが惡くなつたと見えて一時に逃げて行つてしまつた。鄰室へ行つて狡猾い奴だといつて松田を起して居る。松田は看護婦との關係から自然彼等の仲間入をしなかつたのである。僕が今あれを世話して居るのも其時分の緣故があるからである。僕は其晩はじめて彼等が此程猜忌の眼を以て見て居たのであつたかと驚いたのである。然し此事から其後までもどう云ふものか

彼等に對しては自分から身を引いて避けて居た。軍隊に居た時分の心持にはなれなかつた。さうして何となくさういふことのある度に一層小さくなつて心配さうな顏をして働いて居る山田のことがいぢらしくて堪らなかつたのである。其後僕が宿直の晩であつた。酒を飲んで來て遂に松田へうつかりしたことをいつてしまつた。それは自分は山田を欲しいと思ふのだが一つ聞いて見てくれないかと露骨なことをいつたのである。然し酒が醒めてからは自然忘れたやうに成つて居ると或晩松田が相談したいことがあるからと誘ふので蕎麥屋へ行つた。松田は例の件ですがといひ出す。あれから早速本人に打ち明けると身分が違ふのであるから到底駄目だこととゝ私は思ふけれど先生のたつての望みとあれば私の一身はお任せ申します。然し私には關係のある人もあるから其方へ手紙を出して見なければならぬと初めはかういふ挨拶であつた。一週間たつたら手紙が來た。もう私の身は私の自由に成つたどうか先生へ挨拶をしてくれと女はかういふのである。先生も其

積りで居てくれと松田は述べるのであつた。僕はどうして松田抔へそんなことを打ち明けていつてしまつたのであつたかと彼の挨拶を聞かされては驚かざるを得なかつた。能く聞いて見ると女は氏家から養女に遣られたのださうだ。其成長するに隨つて不幸な一家は沒落した。主人が死ぬ時に鹿沼に病院を開いて居た人が緣戚の關係でもあつたか死後の一家を托した。それで彼は其病院の養子であつた一少年と一つに成るとか成らぬとか兎に角一生のことに就いて助言を得るだけの契約があつたのである。それで今東京に出て大學の助手をして居る其の養子に手紙を出したのである。其醫者といふのは本來必ず彼を迎へようといふ意志もなかつたらしいので、良緣があるならば其方へ身を任せたがよからう自分は生涯の相談相手たることに變りはないからといふ返事であつた。然しかういふ相談を掛けた以上もう彼は其の養子に身を任せるといふことは義理の上にも出來なく成つたのであるから先生も能く考へてくれと松田は平生にませたことを附け加へた。僕

はそんなことに成らうとは寸毫も思つて居なかつたのだから困却してしまつた。それから僕は郷里に在る父が頑固で到底貧窮の子女を容れ能はぬことや家庭が随つて六かしいことや種々の情實を打ち明けて自分は山田を惡くは決して思はぬけれども成就しない緣と信じて居るからどうか其積りで居てくれと松田へ斷つた。僕は苦しかつた。其夜の酒は更に旨くなかつた。何故松田へ賴んだのであつたらうか然し賴んだことに誤りはない。矢張り僕には女に對して未練があつたのかも知れぬ。病院に奉職してからの僕はどうしても變であつた。其後松田は女へ斷りをいつたことゝは思つたがそれでも氣がゝりであつたから直接自分の事情を打ち明けた。女は疾に松田から聞いて知つて居る。最初から到底及ばぬ事と思つて居たのだから怨みに思ふ事もないといつた。然し僕が一言の失策をしみじみと詫びた時にうつ向いた彼の白い膝に涙が三四點煮染んだ。僕は何となく果敢ない可愛想な感じがした。さうして自分も彼の一身の爲めには一肌拔いで世話してや

らなければ成らぬと其時心に深く思つた。松田は此の事のために女が非常な煩悶をしたことを語つた。然し自制心の强い看護婦は擧動に何の變化もなく依然として忠實に働いて何處までも愼ましいのであつた。一人でも他人が側に居ると愛嬌のある彼は元氣よく笑ふのであるが僕と二人の時は打ち解けることもないといふ姿であつた。それが何となく齒痒いやうなもどかしいやうな感じがした。二人の關係は截然と極つたにも拘らず病院のうちの嫉妬は止まなかつた。藥局生は遂に庶務に迫つた。庶務のものは僕に一言もせずに彼を隔離室へ轉じた。僕は心中不滿に堪へなかつたがぢつと一言もいはなかつた。然し隔離室は裁判所に勤務して居た兄の夫婦と共に借りて居た家のすぐ近くであつたので彼は僕の家に往復した。僕を訪ねたのではない。其ずつと前からの懇意で姉を訪ねて來るのであつた。姉とは姉妹のやうであつた。姉は時々あれを妻にしたらよからうとまでいつた位である。兄にも勸めた。兄は俄かに可否の判決は下さなかつたが彼を愛して

居ることは姉に劣らなかつた。姉は僕が一家の事情まで打ち明けたこと抔は素より知らう筈がない。却て僕が最初から冷淡であつた樣に見て居たかも知れない。山田は姉と逢へば心底から快活に打ち解けて居た。それが僕獨りになると紙一枚の隔てがあるやうな態度であつた。其癖痒い所へ手の屆くやうに親切であつた。隔離室へ移してもさうであつたから他の嫉妬は益々募つた。憐れな看護婦は到頭そのために解雇されて宇都宮を去らねばならなくなつた。其時姉と散々別れを惜んだ。二日間姉は彼を引き止めておいた。さうして停車場まで見送つた。本當に汽車に乘る時の容子はお氣の毒なと姉は歸つていつた。僕も其日は缺勤してしまつた。暫くして姉のもとへ手紙が來た。其後上京して芝口の或商家へ奉公に住み込んだ。おかみさんといふのは家附の娘でそれでヒステリーであるから我儘な人である。此迄は下女が皆勤まらなかつたさうであるが私には少しも苦には成らぬ。近頃はおかみさんが怒らなくなつたというて旦那から譽められる。それでお

內儀さんのお供をしては時々見物に出られるので今の所は何も不足もないから安心をして貰ひたい。只あなたにお目に懸れぬのが遺憾だといふのであつた。先生へも宜しくといふ一句があつた。僕は此一句が非常に滿足であつた。さうして其手紙を繰り返して見た。姉は現在の彼の身の上を心の底から悅んだ。此丈けのことならどうでもないのであるが事件といふものは不思議に發展して行くのである。

翌年の一月である。用があつて歸省した。用はそこそこに達して三日程の猶豫があつたから急いで上京した。女の許へは手紙を出して本鄉の西片町に居た鹿沼の病院の養子だといふ醫者の處で落合ふやうにといつてやつた。彼は病院に居た時には相應の口から數次緣談があつたのであつた、それを皆拒絕した。彼は何時も餘り打ち解けることはなかつたのであるが拒絕したといふ時には屹度手柄さうに僕へ語るのであつた。それも今のやうに奉公をして居るのも僕の爲めであると思ふと濟まぬ氣がとめどもなく起るので以前から關係のある醫者に打ち明けた相

談をして彼を頼まうとしたのであつた。それも一つであるが實際僕に逢ひたかつたのだ。それなら一人で逢へばよかつたものを其氣は付かずに只一身の世話をすることにばかり腐心して居た僕は餘りに正直一圖であつた。極めてやつた時刻には僕は西片町へ尋ねて行つた。其醫者とは初對面であつたのだ。それを臆面もなく行つたのは僕の頭も變に成つて居たのである。格子戸を開けて案内を求めると女の下駄が一足爪先を揃へて脱いである。玄關の折釘には吾妻コートとショールとが懸つて居る。帽子と外套とをとつて此も折釘に掛けながらショールを握つて見た。女は疾から待つて居たのである。僕が座敷へ通つた時に彼はきちんと坐つて居た居ずまひを更に改めた。看護婦の白い服を脱げばいつでも唐棧の衣物であつた彼が縞の間にすつかり身なりの改まつたのには驚かずには居られなかつた。さうして坐に在る間絶えず女へ目を注いだ。僕は主人へ相談を仕掛けた。歸する處は氣の毒な彼の一身をどうかしてやつてくれといふに過ぎないのである。其時主

人は彼との關係を具に語つた。主人も漸く三十位な男であつた。穩かな性質らしかつた。然し餘り氣乘りはしない容子であつたが寧ろ先は當然のことゝいはなければならぬ。主人と山田との關係は密接であつたのだ。それだから僕との關係に就いても態々手紙の往復があつたのである。若し頼むといふことになれば先方から僕に向つてすべきことであつて赤の他人から自分の深い緣故のある人間の事を殊更に依頼されるといふそんな矛盾したことがどこにあるものか。相談は不得要領に畢つた。主人は僕等の關係に疑ひを抱いて居たのであらう。始終腑に落ちぬといふ風であつた。是も咎めることは出來ない。西片町を出たのは夜の十時過ぎであつた。女はもう芝へ歸るには餘り遲くなつた。僕は主人が必ず彼を泊れといふのであらうと思つた。それを何とも云はぬ。もう深い關係のある伴と思つたのだから男と一所に出る女を留めまいといふことは實際出來なかつたのであらう。女も不精無性にコートを着てショールを掛ける。僕も跋が惡く格子戸を

開ける。女はつゝいて格子戶を立てる。主人はランプを持つた儘默つて玄關に立つて居た。外は寒い晚であつた。ぽつりぽつりと森川町の通りまで出た。急に正氣づいた樣に街頭のともし灯が輝いて見えた。後を見ると女はしよんぼりとして兩袖を胸の所に重ねてうつ向きながら附いて來る。何處か宿屋へ泊らなければならぬと思つたが店の明りが眩いやうで何となく氣が咎めるやうでどの店へもはひることが出來なくて唯うかうかと步いて居た。ぞろぞろと人通りの繁きなかを電車がぐわうぐわうと過ぎて行く。電車に乘る氣もつかず當もなく步いて行つた。それから戾つて切通しの坂へかゝつた。坂が闇く成つた時後を見かへると二間許り後から小刻に刻みながら足を運んで女は附いて來る。池の端へ出た。夜の寒さは闇い空から急に押へつけて來たやうに感じた。到頭上野まで來てしまつた。停車場の橫丁で思ひ切つて宿屋の閾を跨えた。表のガラス戶を開いて僕がはひると女は躊躇して居る。僕はこつちへはひらないかといつた。西片町を出てそ

れまで一言もいはなかつたのである。番頭の挨拶は元氣であつた。案内されたのは少し離れのやうになつた部屋であつた。二間あつたやうであつたが鄰りの間には客はなかつた。何となく安心が出來るやうな氣がした。番頭に少しばかりの心付をすると番頭は二人を見てへえへえと頻りにお世辭をいふ。僕はすぐに風呂に暖まつて來ると電燈の下に堅炭がかんかんとほこつて居る。茶が茶碗に汲んである。縕袍に着換へて火鉢の前に坐つて少し冷めた茶を啜る。女は火鉢の側へも寄らず座蒲團の上へも乘らず堅くなつてうつ向いた儘である。風呂はどうしたと聞くと延べませうといふ。病院に居た時は打ち解けないといつても此程ではなかつた。僕も手持不沙汰に火鉢へ手を翳す。女中を呼んで酒を命じた。女中は出はひり毎に堅くなつて坐つて居る女の姿を不審さうに見て居た。さうして草履の音が態とらしくばたばたと聞えた。酒を二三杯引つ掛けて僕は火鉢の側へ寄つたらどうかといつた。漸く彼はすりよつた。それを敷いたらよからうといつたら漸く座

蒲團を半分ばかり膝の下へ入れた。さうしてぢいつとして居たが

「あの先生は田端に御親戚がございますさうですが」

と漸くのことでいつた。兄がそこにも一人あるのだといふと

「昨晩は田端へお泊りなのでございませうね」

重ねてきく

「さうだ」

と僕は何氣なしにいつた。

「お兄さんのお宅へお歸りになりますと宜しいのでございますのに私のために無駄な費用をお遣ひ遊ばして誠にどうも相濟みません」

と彼は妙に改まつたことをいひ出した。尤も彼は病院に居た時から非常に義理堅い女で姉が何かやると屹度返禮をした。餘り氣の毒だから滅多に物もやれぬと姉はいつて居た位なのであつた。彼はかういつて

「あの私の分は私に用意がございますから」
と更にいふ。僕は
「馬鹿な、そんな心配をすることはないさ」
といつて笑ひながらぐつと杯を引つ掛けた。それからといふものは女は少し打ち解けて德利を取り上げて漸く酒をさした。二本の德利が空になつたけれど僕の心は混亂して居たので微醺をも帶びない位であつた。大分時間が經つたらしい。內も外もひつそりとして居る。唯時々停車場の機關車がぴゆうと鳴つてどろどろと遠く響くのみである。呼鈴を押すと番頭が來る。
「へえ、お床は御一所に致しませうか」
と番頭は閾へ手をつく
「いゝや」
と僕は急に慌てゝ右の手を延べて疊を指しながらいつた。

「へえへえ」

と番頭は愛嬌を作つてやがて夜具を運んで來る。

「あのうランプを持參しましてございますから、エ、御用の節は何時でもどうぞベルをお押し遊ばして……エ、便所はすぐこちらでございますから……エ、明日は汽車にお召しになりませんでエヽ左樣でございますか……それではお冷を只今持參させますからエ、それではごゆつくり……………」

といつて番頭は去つた。女中がやがて盆へ土瓶とコップとを持つて來て枕元へおいて默つて障子をしめ乍ら女の姿をちらりと見て行つた。便所へ立つてもどると電燈が消されてランプが點けられてあつた。さうしてランプは余の枕元で室の隅の方にくつゝけてあつた。薄闇い方で女は僕の洋服を疊んで居るのであつた。僕は床の上に胡坐をかいて見てると女はランプと反對の隅へ行つて羽織を脫いでそれから着物を脫いで襦袢の片袖を脫いで床の上の寢間着に着換へた。さうして羽

織を疊んで上衣を疊んで襦袢を疊んだ。襦袢の袖は非常に派手な美しいもののやうに見えた。僕は襦袢の袖を譽めると

「あの此の間お内儀さんのお供をして參りました時此切がありましたのでまあ綺麗な友禪だと申しますとそんなによければ取つてお行きと申して下すつたのでございます。尺が少し足りませんので袖が短かうございます」

といつて赤い襦袢で一寸顏を掩うた。前にもいつたやうに其内儀さんといふのはヒステリーで氣分のいゝ時はそれや此やと女中をいたはつてお供で出る時には何かと買つてくれる。主人も内儀さんの機嫌がよければ喜んで竊に心付するといふので近頃懐は溫かである。それで貰つたり買つたりで漸く此頃では身の廻りも一通りは出來たのだといふのである。それで此の友禪の襦袢は内儀さんの供をする時には何時でも着て出るのだといつた。彼は着物の噺から一層打ち解けた。僕が心中頻りに苦悶して彼の一身に就いて將來の決心を慥めようと思つて有繋にいひ

出し兼ねて居るとは知らずに威勢よく蒲團の上に踊りあがつた。それでも僕が默つて居れば其の間彼も默つて居る。噺は暫時途切れた。電燈の光に比してランプの光は薄闇い。もどかしく成つた。

「此後はどうする積りだ」

と僕は突然聞いた。其聲は僕の耳にも穩かならず響いた。彼は暫く默つて頸を垂れて居たが更に其儘うつぶしてしまつた。僕は片隅のランプをとつて二人の近くに置いた。さうして明るく心を出した。女の束髮は僕のずり出した膝近くにうつぶして居る。女は驚て顏を揚げた。ランプが餘り近くに置かれてあつたのに氣がついて思はず

「まあ、あなた」

と女はいつて顏を赭らめた。彼があなたといつたのは前後に此時のみである。然し僕は堅唾を呑んで女の返辭を待つて居たのである。戲談の沙汰ではない。僕の

顏は恐ろしげであつたらう。女は僕の顏を見ると急に色を變じた。復た突つ伏して微動もしない。僕は餘りに寒からうと思つて後の夜著を掛けてやつた。三十分も經つたかと思ふ頃女は起きあがつた。怨を含んださうして遣る瀨のないやうな顏をして只一目僕を見上げてすぐにうつ伏した。

「どうにか私の一身は私が始末をしますから先生はどうか御心配下さらぬやうに……」

と慄ひながら微かにしかもきつぱりと女はいつた。さうして近くに置いたランプの光は女の膝にこぼれた涙にきらきらと映つた。僕はまたいぢらしく成つて心が鈍つた。餘り過激ないひやうをしたことを悔いた。どうにかするといふ其の事が若い女の一身には至難のことである。それを捨てゝ見て居るといふことは僕にはどうしても濟まされぬ。後に知人に此事を噺したらそれは君には女とすつぱり離れてしまふのが心殘りなのであつたらうといつて笑つた。さういふことも當時の

心の裡には潛んで居たかも知らぬ。それで其時女に對する僕の方鍼が定まつて居たかといつてもそこには何物もなかつた。決心がどうだと聞かれたとて女の心に何の定まつた考へがあらうか。腹臟なくいへば二人の間には意識されなかつた一種の强い粘著力が潛んで居たのである。

要領を得なくてもどうでも二人で相對して居ればそれで其時は氣が濟んだのである。實際病院を出た當時十分彼の一身に落付が出來て再び僕に遇ふことも無いといふやうになつたであらうならば僕は果敢ない心持がしたであらうと思ふ。ランプに照らされて居る女の髮を見おろしながら雜念に惱まされつゝ腕を拱いて居た。ふと横を向くと二人の姿がぼんやり障子に映つて居る。思はずはつとした。立つて障子を開けて見廻はした。夜は益〻靜かで今は機關車の響も聞えない。便所へ立つてもどつた時僕は身體の非常に冷却して居たことを心附いた。女は依然として死骸の如く動かぬのであつた。

五

翌朝僕は急に宇都宮へ立つた。疑懼と不安との念に驅られつゝ病院へもどつた。其夜の行爲に對して僕には心に解決のつけやうがなかつた。同宿の兄は檢事であつたので自然僕も兄の同僚と交際があつた。煩悶した結果遂に兄の同僚の二三の人に竊に判斷を求めた。或者は兄夫婦が愛して居るなら好配偶である公然細君にしたがよいといふ。或者は事情がさうであるならば斷然排斥しなくてはいかんといふ。僕の心には排斥するといふことがどれ程罪惡であるかといふことは明瞭に分つて居る。實際に於て惜しい心は十分である。然し惑つた末には人は心にもない處置をしてしまふことがあるので僕も一方病院の者や知人などに對しての恥辱をも感じたので遂やぶれかぶれで思ひ切つた手紙を出した。郵便函へ入れてからもその手紙の處置に對して不安の念に驅られて居た。僕の心は寂寞としてとり

とめもないむしやくしやしたものであつた。女の手紙がすぐに來た。非常に怨んで居る。それは知れきつたことだ。手蹟を見ると松田が書いた手紙である。松田も疾に病院を出てしまつて居た。僕等の關係から居惡くなつてしまつたのだ。後に松田に聞いて見ると其時女は神田に居た松田を尋ねて行つたさうだ。さうして散々泣いたさうだ。一所に成らうとは初めから思つては居ないのだけれど今になつてさう不人情に捨てられたのでは酷い。今さら心が咎めるから許婚の處へ知らぬ振りをして行く譯にも行かぬ。それではあんまりだといつて泣いた。松田は女に泣かれて他の下宿のものへ身がひけたといつた。松田は女に頼まれて其時怨みを書いたのであつた。僕は衷心から悔悟した。さうしてすぐに自分の不人情を詫びてしまつた。此時ばかりは自分で自分を不人情の極だと思つた。手紙の端へは其うち逢はれることもあらうし其時に何事も腹を割つて噺をしたい。此の間の手紙は自分の眞意ではないといふやうなことを具さに書いてやつた。すぐに二月は

來た。山田から又手紙が屆いた。鄕里の生家に久々で行く序でがあるからお目に掛かることが出來るだらうといふのであつた。或日病院の方に暇があつたから石橋の停車場から一里半程在の元の看護婦長を訪ねていつた。其家も醫者であつた。看護婦長は氣象の勝れた女であつたから病院內の折合ひが面白からぬことがあつたので病院長が留めるのも聽かずに出てしまつたのであるが僕に一遍はどうか來てくれと再應の手紙であつたから行つたのである。此處へも山田から手紙があつた。それは暫くのことでお目に掛つてそれから宇都宮へ行くといふ文意で明日が丁度其日に當つて居た。僕は思はず時間を過して大急ぎに停車場へ驅けつけた。今一足で汽車に乘り後れる所であつた。漸く車掌に押し込まれた時には暫く胸がせかせかして居た。宇都宮へついて出口の方へ急いで行かうとすると僕は驚いた。丁度僕が通り過さうとした或室から一番後れて出た女がある。山田であつた。石橋へは降りずにこゝまで來てしまつたらしい。狐につままれたやうに思つ

て物も云はずに出口を出た。それから停車場の待合で少時話をした。まだ先刻まで明日看護婦長の所へ行くものと思つて居たのに同じ列車で此所へ降りようとは餘りに突然であつたといふと彼は電報で知らして置いたのだがといふ。電報は石橋の在へ出た後へついたのである。尤も僕の宿所へ打つたのではなく彼も僕も知合ひの或處へ打つたのであつた。それで電報を受取つた人は散々僕を尋ねたさうである。人の惡い病院の奴は僕の行先を明かさなかつた、それに僕の家へは其人は憚つて來なかつたのだといふ。其時の事は能く記憶して居る。停車場を出た時には寒い空風が乾き切つた市中を吹き拂つて稍鎭まつた時であつた。旣に山に傾いた夕日は凡ての物を黄色に染めて居た。道路からさうして市中の白い壁まで橙色の光を浴びて居た。女は化粧をして居た。其橙色の夕日が西を向いて行く彼の一身へ一杯に投げ掛けて居て美しく見えた。僕は別に何の考へもなく自分の家へ連れ込んだ。停車場で偶然遭つたから連れて來たといつた。事實は其通りであ

つたけれど僕等の關係を寸毫も疑ふ念のない兄や姉に對しては心に恥ぢない譯には行かないのであつた。姉の悅びは非常であつた。さうして女だけに彼の服裝から其順境らしいのを見てとつて心から愉快らしかつた。兄も僕に對して些つとも疑念を挾まぬやうであつた。僕も女を連れ込むといふのは呑氣なものであつたが兄も呑氣であつた。姉が心からの饗應を受けて山田は三日泊つて居た。錢湯へも姉と一所に行つた。借家は病院の近くで錢湯へ行くのには病院の前を通らねばならなかつた。漸く噂を止めて居た奴等は又姉と步いた彼の姿を見てそれから以前と異るあでやかさを見て想像して居た二人の關係に誤りはなかつたといつて俄かに騷ぎ出した。此時は既に僕の心には彼等の疑ひを心から打ち消す資格はなかつた。それでも以前からの關係であることを彼等の心に慥められるのが遺憾であつた。三日の間僕は女と打解けて語らなかつた。三日の間に兄夫婦の疑ひを招くべきことは寸毫もなかつた。彼がもう歸らうとした時に僕はしみじみ噺をしたいが

二三日暇取ることは出來ないかと竊に聞いた時幾日でも居りませうといつた。彼は鄕里へ急いで行くといつて居たのに又三日居てしまつた。五日でも七日でも居たかも知れぬ。僕の留まつて居れといふ言は彼は心の中で宇都宮へついた時から待つて居たであつたらう。姉の處に居たのではない。姉には暇を告げて出た。いくら辭退しても聽かずに停車場へ見送つた姉の手前を兼ねて已むなく汽車に乘つた。次の岡本へ下車して竊かに諜し合せて置いた士族町の或家へ戻つた。三日前に彼が電報を打つた家である。僕は彼に逢つたら到底別れねばならぬ運命であるから相互に納得の上泣くだけは泣いてもきつぱり手を切つてしまはうと篤と噺をする積りで其いひ樣も心の中であれこれと考へて居つたのであつたが停車場へ突然彼の化粧した姿を見た時には恍惚としてそれも此も忘れてしまつた。姉の手前を兼ねた三日の間はもどかしい齒痒い時間であつた。彼が表面姉のもとを去つた日の午後には少なからず不安の念を懷きつゝも病院の用はそこそこにして車で士

族町へ駈けつけた。もう手切れの断どころではない。しみじみ何をいつたのであつたか今ではちつとも記憶して居らぬ。彼は三日間一歩も外へは出なかつた。僕も三日といふもの碌々病院にも居ないで其家へ泊つて居た。兄も姉も彼が汽車で立つたことを信じて居たので二人がこんなことをして居ようとは毛程も勘付かなかつたのである。何事も暴露した現在でも此時のことだけは兄夫婦は知らずに居る。女か僕かゞ知らさなければ兄や姉の耳へは達する筈がないからである。何故といふのは兄は其後遠方へ轉任になつたのである。此三日の間に山田は何處までも女らしい、身も心も捨てゝ僕のいふが儘になる柔しい女であることを今更のやうに感じた。一言でも自分の身の上を訴ふることはなかつた。かういふ不運ないぢらしい女を僕は後遂に捨てゝしまつたのである。僕は心にもない薄情な人間になつてしまつたのである。三日目の朝に歸さうと思つたが遂愚圖々々と暇どつてしまつた。人目を忍んで日の暮合ひ頃の汽車で立たせた。停車場のランプの光は

寂しかつた。殺風景な汽車の扉ががたぴしと立てられて車掌の呼子がぴりぴりと鳴つたら汽車は夜の中へ大急ぎで紛れてしまつた。僕は家の者へ挨拶するために士族町へもどつた。一月に女を後にして來る時は心は疑懼と不安とを感ずるのみであつたが其夜女に去られた時はつくづく心の寂寥たるを覺えた。別れる時に僕は無理に少しばかりの小遣ひをやつた。彼はそれを燃えるやうな赤い錢入へ入れた。どういふ積りであつたかそれは別に紙へ包んで其錢入へ入れたのであつた。

病院の新築は落成して一ヶ月程たつた。表の鐵の垣根へ垂れた柳が黄色い芽を吹いて世間が急に春らしく成つた。四月の中旬であつた。理想通りの外科室で自分が主任で手術を施すのを僕は其の時大得意であつた。心は其方へ屈託して居た。丁度其時赤十字社の總會があつたので急に出席することに成つた。上野の花よりも何よりも上京して見ると氣掛りな山田に逢ひたくて堪らなかつた。二月に別れてから兎角身體の具合が惡いといつて其處は幾らか心得があるから仔細に容

態を書いてよこしたことがあつた。其後二三度よこしたがどうも益〻容子が變なのであつた。さういふ譯で折角可愛がつて惜んでくれた芝の商家も暇をとつて十幾年目とかで邂逅したといふ兄の家で厄介に成つて居る。芝の主人が殊に目を掛けてくれたので思ひの外の貯へもあるから當分の所では兄にも迷惑は掛けない。芝のもとの內儀さんが二三度訪ねて來てくれたことがある。氣分のよい時は是非相手に來てくれというてくれるが遂身がひけて行かれぬ。兄の家が申上げるも恥かしい程みすぼらしい抔といつてよこしたことがある。汽車が上野へつくとすぐに其家を尋ねて行つた。猿樂町の狹い路地で漸く探し當てた。穢い衣物を著た工女らしいのが四五人でせつせとボール箱を貼つて居る家であつた。彼の兄といふのも性質の悪るさうな人間ではなかつたが長い間貧乏な生活をして居ると見えて悲しげな餘裕のない容貌をして居た。僕は一寸躊躇した。破れた障子を開けて薄闇い店先を覗いた時せつせと刷毛を使つて居た兄といふのは怪訝な顏をして刷毛

を持つた儘つくづくとこちらを見た。名刺を出した時に何か合點したらしく二階へ向いて女の名を喚んだ。宇都宮からお出でに成つたよといつた時梯子段から女の裾がちらりと見えて急に又引つ込んだ。さうして暫くたつて山田は降りて來た。彼の手紙にあつた通りのみすぼらしい店の客としては僕の洋服姿は不似合であつたかも知れぬ。工女は怪しさうに見ながら身體をずつと前へ屈める。其後をやつと通つて險難らしい梯子段をあがつた。穢い二階であつた。隈に蒲團が疊んだ儘である。女の荷物であるらしい柳行李が白く鮮かである。狹い路地には二階建が相對して居るので此所の二階も光線が疎い。女は坐つた儘其稍穢い綿入の前を氣にして頻りに合せて居る。僕のために衣物を換へる暇がなかつたらしい。さうして先刻梯子段をおり掛けて躊躇したのは大方帶を締めたのであつたらうと僕は思つた。大きな柳行李には麻繩が掛けてある。僕は穢い二階を見てぼんやりして居た。女のいふに身體が引き續き工合が惡い。時々ボール箱の手傳ひをする

こともあるが此の三四日は酷く吐氣がして碌々物もたべられないで寢たり起きたりして居た。先生のお出に成るのは存じて居ましたがこんなに早いとは思はないので着物も著換へずに居て本當に只今は慌てましたといつた。髪も亂れては居ないが油氣が失せて居る。薄紅かつた頰も褪めて肉も落ちたやうである。其容態はどうしても姙娠の兆候が十分である。僕は前々からの手紙でそれは確めておいたものゝ變つた姿をかうして眼前に見ると此先き彼の一身はどうなるものだらうかといふ考へがすぐ胸をついて出る。女はかういふ住ひを見られるのが身づまりであるといふ容子がありありと見えてうつ向き勝ちである。さうして穢げな綿入を著た所は病院に居た時の貧しい姿にかへつて見えた。僕は矢張り氣になるから此の先きどうして行く積りだと此度は隱かに聞いた。するとかういふのも私の運でありますから決して先生をお怨み申しません、私の一身は私がどうかして行きませう、どうか先生は私のことはお忘れになつて奥さんをお極めになつて頂きます

と矢張り一月に言つたやうなことをいつて縞の褪めた膝の上にぼろぼろと涙を落した。迚も成就せぬ緣であるといふことは疾に僕からいつてある。それにも拘らずこんな情けない境遇に彼を陷らしめたものも全く僕の罪である。女の無言でうつ向いて居る時僕も唯腕拱いて默して居た。かういふ時間の長い程自分の心に慰藉を與へられるやうな感じがするのであつた。自分も女もはじめて苦い經驗を嘗めたのである。然し僕は散々放蕩もした揚句である。女は今年は二十三でこれまでも悲慘な境遇は經て來たのであるけれど身持は堅固で過して來たのである。放蕩をしたことのある人間に其位の鑑定のつかぬ理由があるものか。他人の間にのみ交つて二十三までも處女で居た彼は稀な女でなければならぬ。それが苟且にも身動きの出來なく成つたのは全く僕の罪であつた。彼の兄夫婦は好人物であることが分つた。尤も僕の土產物も僕に對する態度に幾らか變化あらしめたのも事實に相違ない。女房は二階へ茶を持つて出た。さうして女に向つて二階に許り居て、

は氣が欝していかぬから先生と散步でもして來てはどうかと勸めた。僕等の關係は疾に知つては居ることゝは思つたがかう捌けて出ようとは意外であつた。尤も女は兄に身を寄せる時には仔細に今の境遇を明かしたことであらう。それを知つて居る兄夫婦も彼の身を輕くするまでの間だけでも僕の手を切つてしまつては其は始末に困難せねばならぬ。此は少し物の道理を辨へたもの〻知らぬ筈はない所である。女は聽て鏡を取り出して髮を結んだ。左の手で髮の根元をぎつと一つに握つて櫛を持つた右の手で前へさらりと打ち返した。さうして二梳き三梳きと油をつけて梳く。額に皺を作りながら少しうつ向きになつて髮の形を鏡に映しつつ結んだ。前髮が鬢へかけてふわりと膨れて居る。少時髮を鏡に映し乍ら散らばつた品を疊紙に片づけて石鹼の箱を持つて油に成つた手を洗ひに梯子段を降りて行つた。容子が少し活氣づいたやうに見えた。僕は獨り殘つた時自分の顏を鏡に映して見た。まだ顏が靑ざめて居るのを知つた。女は綿入を蒲團の上に置いて

柳行李から出した晴衣に着換へた。手を洗ひながら涙の顔も洗つたと見えて心持のせゐかつやつやして來た。化粧はしなかつたが美しさは見違へる程に成つた。二人は手を携へて出た。さうして上野から淺草の公園をぶらついて其晩は淺草へ泊つてしまつた。東京には四日許り居た。田端に居た兄の家へは行かずに女を連れて散歩してはそこゝと行き當りに泊つた。其間女はもう泣かなかつた。自分の宿料を出さうともいはなかつた。いくら何といつても兄さんの所に唯世話に成つて居るのも身がひけるだらうといつてやつた小遣ひも氣の毒さうにはしたが拒むこともしなかつた。其時は赤い錢入は持つて居たが別に紙へ包むといふ手數もしなかつた。僕は彼の貯へが乏しいことを悟つた。更に嚢中の許す限り若干の錢を與へた。僕も彼の姙娠した手紙を見て懊惱した時や、二階で果敢ない姿を見た時とは違つて手を携へて散歩するのは有繋に愉快であつた。女も愉快であつたに相違ない。然し其時はもう二人の最後であつたのだ。僕は其時限り逢はぬやうに

成らうと思つて別れはしなかつたのである。宇都宮へ歸る時に山田が姙娠した事情を逐一田端に居た兄に思ひ切つて明かしてしまつた。自身に度々上京して女を見舞ふことは到底不可能である。さうかといつて女が不憫で捨てゝは置けなかつたからである。兄は一言も僕を責めなかつた。加之自分が後には其女を引きとつて必ず分娩させてやるから其邊は苦にすることはない。幸ひ自分には子がないから出來た兒は自分等の手で育てようといふのであつた。僕は心から兄に感謝した。僕は非常に安心して病院へ歸つた。六月に復た上京した。勿論其間に女からの手紙はあつた。僕はまた逢へるからというてやつた。女は待つて居たのである。僕も一つは自分の職業柄で能く女の身體の健康も確めたいと思つた。自分も病院を出て七月には開業する運びに成つたので其準備のために出京したといふこともこまごま噺して見たく、此は直接噺をしたいと思つて手紙ではいつてやらなかつたことではあり其他心にはいろいろのことも思つて田端へついた。先づ兄か

ら其の後の女の容子を聞いてからにしやうと思つた。それといふのは手紙にはいつてよこさぬけれど或は女の周圍に變化がないとも限らぬ。若しさういふことがあつた場合に突然胸を痛めるよりも兄に聞いて覺悟をしてからにしたいと思つたからである。此が畢生の失策であつた。兄はもう斷然逢ふなといつた。逢へば未練が增すばかりである。どうで一所に成れぬものなれば態々深みに落ちることでもあるまい俺が女を世話する都合もあるからといふのであつた。僕はがつかりした。何事にも勇氣が失せたやうに感じた。さうして兄の意志に逆らはぬことが女の一身の爲めでもあると思つたから全く兄に從つて女を再び訪ねなかつた。然し東京は詰らなかつたから急に用を達して歸つてしまつた。歸りの速かなのを兄は悅んだ。僕がどれ程落膽したかといふことは兄は果して想像したであらうか。是尤も若い同志が相談の上に手を切る抔といふことは到底それは不可能である。是非共それには他人の手を借らねばならぬ。兄はそれを知つて居た。いや誰でもそ

れは知つて居る。僕自身でもさうなければならぬことゝいふのを知り切つて居る。然しもう此が別れといふことを互に呑み込んだ上に十分名殘を惜んで見たかつた。兄は二人の恩人である。されど此だけのことをさせてくれなかつた一段はどうしても僕には不滿である。僕はそれから失意のうちに豫定の如く七月を以て開業した。僕は戰地から歸つた時はどこかで病院を開くといふ大志を懷いて居たのだがそれが僅か一年半でこんな間に合せの醫院に燻るやうに成つてしまつた。父は頑固な人で何でも自分で設計してしまふ。二言目には財政が許さないからといふ。此間も友人が來て君のやうな外科思想のあるものがどうしてこんな外科室を拵へたかといつた。父はつましい人だ。人から來た手紙の封筒でも屹度裏返しにして使用する。さういふ心掛だから餘裕もない身上から僕等を成業させたのでそこを思へば逆ふことも出來ないのである。僕の心の弱くなつたのは自分でも驚かれる。母が今病氣である。其病氣は決して輕くない。それで母の命のあるうち

にどうしても嫁をとれと半分は無理に極められてしまつた。それはまだ遂近頃のことである。其相談のあつた時は僕は非常に苦しんだ。憐れな看護婦はまだ身輕には成つて居らぬ。兄の許に引きとめられて居るものゝ心には僕を手頼つて居るには相違ない。彼が將來を案じて心で泣いて居る時に自分が蔭で配偶を探すといふことは知られぬにしても心が咎めて其氣には成れないのである。然し薄弱なる人の心は忽ちに變化する。數次强ひられるうちにはいくらかそこに傾いて來る。さうしてかういふ女はどうかといはれる時、其女はどういふ女であらうかといふ懸念がふと浮んで來るやうに成る。かう傾いては僕の心は敗北したのである。さうして何にも六かしい注文はせずに人のよからうといふことをいゝとして殆んど人任せに極めてしまつた……。

若い主人は此まで嘶を續けて更に

「それは山田の方がずつといゝんだがな、なにもう構はない……だがあれも臨

月だ、今夜にも知らせがあるかと思つてるんだ、それは父には祕密だがな……母の看護をさせるならあれなら此上もないのだが、然し女も身持では他人の世話どころではないから、どつちにしても駄目なことだ」

と途切れ途切れに獨語した。さうして

「君これは必ず祕密にして居てくれなくちや困るぜ、世間へ知れても體裁が惡いし、そんな噂が立つと緣談などゝいふものは蹶づき易いものだしな、何もそれは自分の失策を隱して、先を欺くといふ譯ではないが、病氣の母に心配を掛けたくないからな、母はもう今に嫁に世話に成れるといふやうなことをいつて悅んで居るのだからな」

若い客は此時まで身體を横にして肘を立つて頭を掌で支へながら聞いて居たが起き上りながら

「うん、そりやさうだ、然し君の所へ來たものは却て仕合だと僕は思ふぜ」

といつた。

「なぜ」

と主人は問ひ返した。

「なぜつて君はそれ程女といふものを果敢ないものと思つて居るのだから他の者よりは同情が多い譯だらうと思ふのだ」

若い客がいふと主人は又憐れな女の上を語る。

「だから僕は六かしい事はいはないし、山田の手紙も此間みんな燒いてしまつた。……だが其後數次の手紙は來たのだ。大抵松田へ宛てゝ來たのだが、私の事は御心配なく先生はどうか奥さんをお探しなすつて下さいといふので、僕の手紙も欲しいやうな書き振りだが僕は餘りやらないやうに仕て居た。近來はもうよこせなくなつた、兄へ遠慮しなくちやならないからな」

「田端に居るんだな」

客はきいた。主人は

「うん、もう田端へ行つて二ヶ月に成るだらう、身輕になればあとは私自身でどうにか身を立てます、さうして浮いた心のないことを先生へお目に掛けますと、手紙ではいつて來てあるが、配偶が出來たといつたら、さすがに泣くんぢやないかと思ふんだ。自分が今結婚をすると極つて居ても、女にさういはれるのは惡い心持はしない。女だとて將來どうなることか分りやしないが、何だか斯う獨身で居てくれゝばいゝやうな感じがするんだ。人のものにすると思ふと惜しいな」

とかういつて

「然し男が生れても女が生れてもあれに似てればいゝ子だらうと思ふんだ。私は何だかいゝ子が生れさうに思はれますつて女の手紙には書いてあるよ」

と微笑する。

「だがな隱し子だから當分顏も見ることが出來ないや」
と主人いひ畢つた時
「そりや女はもつと酷いだらう、生涯逢はれないかも知れないぢやないか」
と若い客は言下にいつた。
「病院に居た時分にはな、他人がよくなつて退院するのがあると神經質の奴は無闇に羨んでばかり居るので馬鹿なことだとけなして居たものだが矢つ張り自分が心配で堪らない時は人がみんな平氣な顏をして居るやうでどうも羨ましい心持になるよ……だが君等はまあいゝな」
主人はいつた。
「君まあ苦しめるだけ苦しんで見給へ。さうすれば自分に幾らか慰めることが出來るといふものだらう。それもさ他人のことだからまあいへるやうなものだが……いや然し他人のことゝいふと表面ばかり見るからよく見えるのだ。誰れ

でも君裏面をさらけ出したら全く清潔なものといふのは無いかも知れないぜ」

客は慰めるやうにかういつた時主人は急に自分の同情者を得たといふやうに

「君にも何かあるかい」

と問うた。

「まあそんなことはどうでもいゝや、だがもう何時だ、一時かいや一時過ぎだぜ」

客は兵兒帶から時計を出してかういつた。向うの酒藏が繁盛であるなら今頃は賑かな釀母より唄が聞かれる筈なのであるが今はそれもない。只しんしんとして恐ろしい靜かな夜である。耳もとではランプの心の底の油を吸ひあげる音が微かに聞かれる。ランプの焰がまたゝいたので今までしんみりと二人を見おろして居た天井の丸い光がゆらゆらと搖れた。夜番の鳴子が遠くから聞えてやがて橫町へはひつたと見えてがらりがらりと急に大きな八釜敷い音を立てた。

（明治四十二年一月）

おふさ

刈草を積んだ様に丸く繁つて居た野茨の木が一杯に花に成つた。青く長い土手にぽつぽつとそれが際立つて白く見える。花に聚つて居る蟲の小さな羽の響が恐ろしい唸聲をなしつゝある。土手に添うて田が連る。石灰を撒いて居る百姓の短い姿がはらりと見えて居る。白い粉が烟の如く其手先から飛ぶ。こまやかな泥で手際よく塗られた畦のつやゝかな濕ひが白く乾燥した田甫の道と相映じて居る。蛙が聲の限り鳴いて居る。田の先も對岸も皆畑である。畑は成熟しつゝある麥の穗を以て何處までも掩はれてある。麥の穗は乾いた土の如くこまやかに見える。桑畑が其間にくつきりと深い綠を染め拔いて居る。さうして村々の森がこんもり

として畑を限る。遠い森は麥の中に沒しつゝある如く低く連つて蒼く垂れた空に强い輪廓を描いて居る。鬼怒川は平水の度を保つてかういふ平野の間をうねりうねり行くのである。ヤマベを啄む川雀が白い腹を見せつゝ忙し相にかいかいと鳴きめぐる。ひらりと身を交して河原に近い淺瀨の水を打つて飛びあがる。午時を過ぎた日の光を浴びて總ての物が快く見える。髮結のおふさはいそいそとして土手を北へ一直線に歩きつゝある。中形の浴衣の上には白い胸掛を掩うて居る。おふさが此の土手を北へ通ふ時は屹度器量一杯の支度である。白い胸掛は見るからはきはきとして小柄なおふさを三つも四つも若くして見せた。油や櫛や職業に必要な道具の小さな包を左に抱へて右に蝙蝠傘をさして居る。普通人に異つた枯燥した俤がないではないがおふさに心配は見えない。土手を北へ通ふ時おふさの顏は晴々しい微笑を含んで居るのである。小娘でもするやうに肩の蝙蝠傘をくるくると廻す。おふさは廿六である。短い道芝の間に白い足袋が威勢よく運ばれて行

く。土手の果には鬱然たる森が有つて其森から手を出した様に片側建の人家が岸に臨んで居る。川はぐるりと左へ曲折する。それで三四の白壁が遠くから河岸を陽氣に見せる。廻漕店の前には土手の下に高瀬船が聚つて居る。土手を斜に削つた坂には高瀬船へ積み込む米俵が順序よく轉されつゝある。あたりには土管やら空な酒樽やら雜多の物品が廻漕店の庭へ續いて土手の往來を狹くして居る。おふさは蝙蝠傘を窄めて人足の間を過ぎた。惡戲好な人足共はおふさの後からぶつ切つた樣な短い詞で揶揄つた。然しおふさの耳には何にも感じない。さうして足早に歩き出して向うの理髮床の店へはひつた。おふさが遙々と長い土手を通ふのは此の店があるからより外に何等の理由も想像されぬ。店には五十近い女房と一人は廿位な一人は十四五の娘とで働いて居る。男の職人は交らない。おふさは女房と顏を見合せて唯あどけなく嫣然とした。さうして髯を剃らせて居る客の後から姿見へ自分の姿を映して又嫣然とした。器量一杯の支度を映して見ることがおふ

さには非常に嬉し相である。おふさは蝙蝠傘と包とを網を吊つた棚へ乘せた。女房も他の二人も白の仕事衣を覆うて居る。それが痛く汚れて居る。おふさは小娘の肩をそつと叩いて、糊付けた自分の胸掛を一寸抓んでそれから小娘の仕事衣を抓んで喉の底から搾り出す樣な妙な聲を出して又あどけなく嫣然とした。小娘は

「えゝよ、何でもおほきなお世話だよ」

と振り掩る樣に體をゆすつて、危げに使つて居た剃刀の手を止めて一寸舌を出して見せた。おふさは揶揄ふ樣なあまえる樣な態度で又妙な聲を出して嫣然した。

「そんなことするもんぢやねえ、お民は」

此も剃刀を使つて居た娘のお道がたしなめる樣にいつた。お民は

「さうだよ、本當にえゝんだよ」

おふさの方を向いてかういつた。女房は頻りに鋏の音をさせながら櫛で抄ひあげる樣にしては髮の先を少しづゝ斬つて居る。目をしかめつゝ一心に鋏を使つて

居る。暫くして理髮を畢つた小學校の敎師らしい客が棚の荷物を抱へて立つた。おふさはしげしげと客の顏を見る。客は店先の柱に吊つた籠の雲雀に一寸目を注いで聽て去つた。洋服に下駄を穿いた後姿が姿見の向うへ遠くなつて外れてしまつた。おふさは敎師の後姿を見て居たが又喉底から搾り出す樣な聲をさせて女房が忙し相な鋏を止めてこちらを見た時自分の頰を撫でたり、敎師の後姿を指したり、さうして拇指を出したりした。主婦さんは頷いて見せた。おふさの態度はそはそはとして來た。

「あの先生ことどうしたもんだい」

お民は白い布を折つて竿へ掛けながらいつた。

「さうなもんかえ、庄さんに似て居るつていふんだぞ、少しえゝ男を見りやかうやつて拇指を出して騷ぐんだもの、庄さんが氣にばかり成つて居るんだから」

お道はいつた。さうして

「さうだなあおつかさん」

女房の方を向いていつた。

「庄さんはそんぢや罪だな」

お民はませたことをいつた。

罪だ罪だと人のいふのを聞いて居てお民は口眞似にいつたのである。おふさは水槽の蓋を開けて見て水が無くなつたとお民へ手で知らせた。お民がぼんやり立つてゐるのでおふさは手桶を提げて立ち掛けた。女房は

「お民、々々」

と急に叱るやうにいつた。お民は引つたくるやうに手桶を取つて往來を横ぎつて走つて行つた。土手の降口でぐるりと裾をかゝげた。其姿が土手の下へ隠れた時おふさも往來を横ぎつて走つた。さうして川を見おろして立つた。理髪床の店からは川の水は見えない。對岸の村が淺い木立の緑をかぶつて、それがおふさの立

つて居る往來の端とくつついて見える。木立の間に隱見する二三軒の障子が目に立つ。川の曲折したあたりから水は竪にしらしらと遠く見え渡る。おふさが辿つて來た土手も青く一目に走つて居る。其遙かに先から今白帆が二つ上つて來る。白い番の矮鷄が土手の下からおふさの足許近く表はれた。鷄冠にくつつく程一杯に背負つた尾が軟風に吹かれてひらひらと動く。甲走つた聲で雄鷄が鳴いた。後へ反つて嘴を開いて小さな喉が裂け相にして二聲三聲鳴いた。さうして又白い尾をひらひらと吹かれながら矮鷄は土手に隱れた。土手の中腹の青草を足で掻いては餌を求めて歩くのである。お民はのぼつて來た。手桶を土手の上り口へ置いて手を掛けた儘大儀相にして一寸休息した。おふさはお民へ片手を貸して手桶を運んだ。其間土手の往來はがたくり馬車が蹄に埃を蹴立てゝ過ぎた。荷物を山のやうに積んだ車が行つた。人が通つた。走るものは一瞬間止まるものは永久に疎末な姿見の鏡裏に其形體を印する。往來が途絶えた時鏡裏は平靜である。唯尤も近

い入口の柱に吊つた籠の雲雀のみは茶碗の粟をこぼしつゝ逆立つた頭の毛を天井の網に突き當て突き當てもがいては絶えず鏡裏に活動して居る。水槽の水が滿ちて更に川から手桶が運ばれた時おふさはバケツに雜巾を浸して水槽からさうしてそこゝを拭いて歩く。おふさは又一隅に吊つてあるランプを外して見る。ホヤの曇りを拭つて心を出して見て剪を入れる。さうしてランプを以前の釘に掛けて手の臭を嗅いで見る。

「本當にえゝや、助からあ」

お民は斯ういつて石鹸を出してやつた。おふさは石油臭い手を洗つてそれから顏を洗つて又姿見へ自分を映して惚れ惚れと見る。

「よつぽど庄さんには焦れて居るんだなあ」

お道がつくづくと見ていつた。暫く途切れた客の後から一人の男がずつとはひつて來てどつかり椅子へ腰を卸しながら

「おゝ髭だ」

胴間聲を出していつた。

「おゝ髭だ」

とお道はすぐに眞似をして

「大層威張つてどうしたもんだえ」

と笑つた。男は首筋を椅子へ凭れさせて微笑して居る。日に焼けた顔がてらてらと光つて見るから丈夫さうな男である。紺の筒袖で無造作に三尺帶を締めて居る。一杯に開けた胸には毛がふさふさと生えて居る。彼は高瀬船の船頭である。彼は其ばりばりした髭面へ刷毛で石鹼を塗られたにも拘らず、おふさへ何か手眞似で揶揄つた。おふさは何と合點したのか變な僻んだ顔をして指を二本鼻の下へ當てた。

「そうら二本棒だつて云はれてらあ、默つて居ればえゝのに」

お道が船頭をたしなめる樣にいつた。彼は又何かいはうとしたが剃刀持つたお道の手が脣を押へて居たので聲が出ない。

「剃刀で切つちまあぞ、饒舌(しやべ)くると」

皆がどつと笑つた。おふさの顏は又晴々とした。

「此の着物はえゝ柄ぢやねえか」

お民が羨ましさうにいつた。

「みんな出入の所から貰あんだとよ、本當にえゝやな」

お道もいつた。

「そんなに欲しけりやおれが吳れてやらあ、亭主にうつちやられたら尋ねて來る方がえゝや」

「八釜しいよ、又はじまつた」

二人は斯ういつて又どつと笑つた。此の店へ來る客の多くは船頭や人足や百姓

等である。此の地方に特有な粗暴な言語が絶えず交換されるのでかういふ應答も少しも不思議に思はれて居らぬ。おふさは姿見の後へ引つ込んでぐるりとかゝげた裾を外して帯を締め直してさうして又店先で茫然として往來から遠くを見渡して居る。女房の客は髮が刈り畢つた。白い布が毛だらけに成つた儘そつと解かれる。おふさはふとそれを見ると女房の手から其白い布を取つてぱさぱさと毛をはたく。女房は小さな布を前へ一寸掛けて客の口のあたりを濡らす。それから剃刀を合せて切味を手の平で試しながら椅子の側へもどる。

「此女はこりや何だい、啞かい」

卅五六の髭のある其客が聞いた。横柄らしい、稅務署の官吏でもあらうかと見える男である。

「へえ啞ですがね、旦那は知らねえんでしたかね」

「うん、俺は知らん」

「能く此所へ來るんですがね、こゝらぢや知らねえものは有りませんぜ」
「さうか、尤も俺はまだ此所へ來て二箇月だからな、それで此の女はどうかしたといふのか」
客は先刻からの傍の噺に釣り込まれて居たのでおふさに就いて聞き出した。女房は左のモミアゲを剃り落して剃刀の返しを使ひながら
「これでも一度は亭主を持つたんですがうつちやられたんでさ、それで自分ぢやさうは思つて居ねえんですからね」
「どこだい、まあ此の女は」
客はまだ戲談半分の態度で聞く。女房は剃刀に氣を取られて半は氣勢の拔けたやうに語る。
「此の川西なんですがね。お袋が放埒でね。お袋の亭主に成つたのが、酒屋者で越後から來て婿にはひり込んだんだといふ噺でしたね。わたしは別段能く知り

ませんがね。これが又猫の樣におとなしいんだつていふんですから、それでまあ嗅が增長したんですね。藏では親方株に成つて居たつちふことだが、旦那等は能く藏のことは知つてる筈ですが、杜氏とか何とか云つてましたね。それで働いちや持つて歸るのを、留守に成ると飮んだり打つたりといふんですからね。亭主もまさか男だから怒らねえこともねえんでせうけれど、そこらの處は知りませんがね。なんでも亭主は苦勞性なんで、酒が心配で內へは滅多に歸れねえで居るもんだから、いゝ幸にしちや男を拵へてねえ、此嗄が出來ていかく成つてからさうだつていふんですから、それでいゝ年をして自分の息子の樣なねえ床屋の職人と巫山戲てからつきり値はねえんですよ。そんなんだから亭主はこれがね餘ッ程大きく成つてからだといふんですが、出つちやつたんですと、そこへ行くと身元の知れねえ遠國者は思ひ切が能うがすかんね。それでもまさか子供は可愛いから手當にするんだつて拵へた財產は置いて行つたんですと、私

は能く知りませんがね。それで床屋の職人だつて身持は能くねえし、お袋も幾らか外聞を考へたんでせう、手を切る積りに成つたんだけれど唯ぢや職人がうんと云はないんです。それで酷いんですね、店を持たせるからつて、此の啞をくつつけてまあ此處へ店を出したんですね。其頃は内がどうにか成つたつていふ噺ですが、これは廿四でさね其時にね。是はいゝ者持つたと思つて一所懸命でさね。其うちお袋は死んぢめえました。飲んだのが障つたのに極つてまさ。職人は庄さんていふんですが、さうなりや何でこんな啞なんぞう守つて居るもんですか、茶屋女を受け出してね、これは家へ暫くやつて置いて筑波向うへ行つちまつたんでさ、それでもこれはうつちやられたとは思はねえんですから……」

剃刀は顎を滑かにさうして徐ろに走る。女房は顎を大事に抱きあげるやうにして自分の首を曲げて剃刀を動かす。おふさは此の間手拭竿の手拭をもみ出したり、流しを洗つたり、毛屑を掃いて見たり、ちよいちよいと手を動かして居る。お

道の手が明いて客が少時途切れた。おふさはお道を姿見の後へ導いた。棚の包をとつて髮結の道具を出す。鐵瓶の湯を注いで毛の癖揉をはじめた。船頭も姿見の後へ腰をおろして暫く新聞紙をがさつかせて居たが横に成つていつか眠つてしまつた。

「何でもうつちやられた時は泣いて泣いてひどかつたさうですね。獨ぼつちでほんとに不便なものでさね。さういつても近所鄰といふものも身内といふものもあるし世話はしたさうですがね。仕やうがないから、亭主が仕込んで置いた髮結をやらせることにした譯なんですね。剃刀の使ひ方なんざまあ一寸は出來るやうに仕込んで置いたもんだから、今ぢやたいした役に立つてこれもいつて見りや亭主のお蔭ですがね。さうすると三月ばかり經つてひよつくり亭主が歸つて來たんで、さうしたらもう離れつこなしなんです。それをどう騙したか甘く騙して又行つちまつてね。何でも貧乏で暮しが出來ねえから遠くへ行つて稼い

で來なくつちや成らねえんだとね、稼いで錢が溜つたら歸つて來て復店で働くんだからお前も稼いで待つてろとね、かう呑み込ませたといふんですが私も深いことは知りませんがね。さうなんでせうよ、それからといふものは一所懸命に錢を溜める料簡に成つてる容子なんですからね。初のうちは皆可哀想だつて餘計な賃錢をやつたり、着物なんぞ吳れたりして面倒見たんですがね。此の浴衣だつて貰つたにや相違ねえんです。それが駄目なんです。亭主がね時々來ちや騙して巾着をはたいて持つて行つちやあんですからね。亭主が困るから來るんだと思つてるんでせう、それから持つてる丈はみんな遣つちまあんでさあ。そんなこつたから亭主も極りが惡くつて村へは行かねえで、途中へ呼出しを掛けてさうしちや二三日遊んで行くんです。それが知れてからといふものは、皆錢はくれても、本人に持たせねえやうにして置くさうですよ。それで此の店で復た稼ぐんだと聞かせられてからは時々かうして來ますがね。朝のこともある

し、今日のやうに晝過に成ることもあるし、來ちやそつちこつち掃除して行くんですから、內の子供等は助かる譯ですが、どうで駄目なことを本當に思つてるんですから不便なものでさね。亭主にばかり一心に成つて居て片輪ものといふものは仕樣のないもんでさね。他人がなにと敎へて見た所で本當にしませんし、揃揃つたら面倒だし、それよりか嬉しがるやうなことに仕向けた方が當り障りがありませんからね…………」

女房は語り續ける。

「そりや何かい、亭主といふ奴はどんな奴か知つてるかい」

客も此度は釣り込まれたらしい。

「それがね旦那、その亭主は庄さんていふんですがなかなかいゝ男でね、一寸お世辭もいゝし、つきあつちや惡いことはまあ有りませんよ。此店だつてね隨分やつて行けるんですが、身持が修らねえで――尤も此頃はお上で八釜敷から打

つこたあ止めたやうですが、前々からサガリもそつちこつちあつて居憎いも居憎いんでせうしね、それにおんなじものなら口の利ける者の方がいゝに極つてますからね。戲談には片輪者は情が深過ぎて困るの、それに何故だか冷たいから厭だので庄さんはいつてる位なんですからね。それでもまさかに可哀想だと思はねえことも無えんでせうし一人ぼつちなのも知つてるんですから、うつちやつて心持のいゝ筈はねえからまあ一つは容子見に來なくても居られねえんでせうね」

「然し錢を攫つて行く處は酷い奴ぢやないかな」

「それがね旦那、屹度庄さんは此店へ顏出しちや行くんですが、みんなに揶揄はれて弱る時もありますよ。遁口上だか知れねえが庄さんがいふのには錢を貰つた方が本人は上機嫌だし、こつちには惡くもねえし、却つて爲めだから預つて置くといふんですが、さうはいふものの庄さんは惡い人間にや見えませんね。

まだ精々三十三四でなかなか捨てたもんぢやありませんよ。全く過ぎものゝ亭主ですから、餘り過ぎた亭主もよしあしでさね」

剃刀は頰のすべてを反覆して走つた。女房は剃刀に氣を取られて無遠慮に饒舌る。ぞんざいな仲間を日夕相手にして居るので全くぞんざいに成つて居る。おふさは元結の端を絲切齒で嚙み切つた。

「なんでも思ひ出しちや此處へ來るんでせう。掃除をして置いて亭主に譽められたい一心ですからね。さうしちやかうして器量一杯の支度をするんですからね。洒落るといふことは他人が敎へなくつても獨りで知つてるから恐ろしいものですよ。尤も饒舌らねえのだから解らねえといへば解らねえやうなもんですがね」

女房は更に

「どつちにした處で生殺で罪は罪でさね、旦那」

と最後の一句を續けた。白い布が胸から除かれた。

「旦那洗ひませう」

客は長い時間から椅子を離れた。客は滑かに剃られた顏を拭きながらふと姿見の間から、長火鉢の側で髮を結うて居るおふさを見た。

「仲々これはうまいもんだな」

銀杏返が一つの髷を形られた。

「悧巧ですからね。此で口が聞ければたいしたもんだが惜しいことに………」

女房は椅子に倚つた客の髮を綺麗に拭き取りながらかういつた。さうして

「何時でも來ればかうしてみんなの髮を結つて歸るんです。其代りね、金鍔を髮結錢位と思つて買つてやるんですが、それがどれ程いゝ心持なんですかね、其の嬉しい容子を見ちやなんでなくつても買つて遣るのが惜しかありませんね。どうも不自由なせゐか、子供見てえな處がありますからね。なんぼなんでも當

り前なら廿六にも成つて金鍔位ぢやそんなに騙されやしませんからね」といつた。高瀨船が一艘ついたと見えて白帆が一つ土手にくつついて止つた。大きな白帆は遠い野を掩うて姿見へ大きく映る。白帆は力なさ相にぐつたりとする。帆綱が解かれたと見えて白帆はくたくたに成つて更にすつと下つた。こつうんと丸太を投げた樣な響が土手の下から近く聞えた。すつと立つた檣を殘して姿見には復たすぐに川がしらしらとして土手が靑々として村から野から一杯に映る。鏡裏の雲雀が止まず動いて居る。客の髮は油をつけて幾度となく櫛を入れられた。女房は白い布をとつてぱさぱさと襟のあたりを叩いた。客は一遍頸を撫で姿見を見て立つた。女房は茶を汲んで出す。暫く客が途切れた。突然に半ば頭を剃り殘した六つ位の小坊主が泣き泣き駈けて來た。入口の杜のもとで頻りに雲雀の籠へ屆かぬ手を延しては地團太踏んで泣きわめく。婆さんが一人あとから走つて來て小坊主を抱へようとする。小坊主は婆さんの手にはおへぬ。雲雀は驚い

て羽叩きして騷ぐ。店の者は皆笑つた。
「そらおまはりさんだぞ」
と婆さんは威す。小坊主は泣きた沈めた。おふさは髮を結ひ畢つて一寸店を覗いた。さうして女房へ妙に手眞似をする。何か子供にくれてやれといふのらしい。
女房は唯頷いて見せる。小坊主は漸く婆さんに引かれて行つた。
「此れで子煩惱ですからね」
と女房は客へいつた。
「廿六だといつたかな。それにしては若いな。口が利けたら相應に騷がれたんだらうな」
「氣味が惡いから手出しはしませんね。それに今ぢや亭主ばかり氣に成つて居るから尙更のことでさね」
「此店は何時越して來たんだい。大分繁昌だな」

「もう二年ですよ。私もうちは二三里あるんですが妙な事でしてね。親方が放埒なもんですからね。餘計者を引きずり込んだりしちや、私も面白かあ有りませんからね。到頭こちへ分れたんでさ。借家でしたが今ぢや庄さんから道具一式讓られたんですから、もう大丈夫でさ。弟子もね、女の子の方が扱ひいゝもんですからみんな女ばかしにしてね、これで結構やつて行けますから」

「女ばかりだからまあ感心なものさな。それでも今は親方と往復はあるのかい」

「なに時々來ますがね、八釜敷ことばかりいつて仕樣がねえんでさ、とつくからもう喧嘩するやうなことはありませんがね。いゝ年しちや獨の方がいゝ位なもんですよ。口論したいことはねえんですがね、あんまりだと我慢出來なく成りますからね、それでも駄目でさね、女の方が惡いとしかいはれねえんですから」

女房はぼさぼさした顏で烟草を吸ふ。

「それでも私は子供が一人ありますからね。えゝさうです男です。あと一年で卒業ですから電信局へ勤が出來るんです。此までは私も一心に成つて送りました。それ一人が手頼ですからね」

かういつて火皿へ紙を押込んでぐりつと廻して烟脂のついた紙を火鉢の隅へ棄てゝ詰つた羅宇をふうと吹いた。

「こんだお民結つてもらへ」

女房は呶鳴つた。客は

「いや、おほきに」

と横柄に挨拶して出て行つた。

おふさは稍膨れた包を抱へて鬼怒川の土手を歸りつゝある。上機嫌の容子がありありと見える。膨れた包は金錢である。それをおふさは大事相に抱へて居る。

おふさの心は的確に知る由はない。密封した箱に小石や木片や硝子の破片や雜多の物を入れて此をがらがらと振る時に中なるものが小石であり木片であることを其一つが想像しえたとしても全部を知ることは能はぬであらう。おふさの心はそれである。おふさに對する何人の想像も確かであるとは斷言が出來ぬ。然しながら此の土手を通ふ時は平生の僻んだ容貌がなくなつて唯そはそはと快げである。靜かに考へる時は皆おふさを哀だと思ふ。逢うて語る時は皆笑つて揶揄ふのである。それが孰であるにしても亭主の噂を聞かされることが非常におふさには快く見える。卅は女の頽齡である。其卅を眼前に控へた身を以ておふさはあどけなく土手を往復する。南風が軟かに且つ涼しく野茨の花に吹き渡る。透徹せる蒼い天は此の青年の如き地上の草木を保護するためガラスの蓋を掩へるが如く見える。野茨の花の開く數日間が一年の内に於て尤も爽快で且つ四圍が不安の念を起させない時期である。太陽は此の大地を暫時も離れ去ることを惜むもの丶如く暮れ兼

ねて躊躇して居る。此の如き間に在つて麥の穗のみは悲しい色を浮べつゝある。萬物に活力を與へて强く照らす日の光に堪へ兼ねるもの如く麥の穗は焦げたやうに黄變しつゝ行くのである。日の射し加減でまだ靑味を含んだ麥の穗に其侭をほのかに浮べる。斜に渡る日の光は更におふさのあどけない頰をしげじげと覗いた。

（明治四十二年九月）

教　　師

此の中學へ轉任してからもう五年になる。子供が三人出來た。三人共男ばかりである。此の外には自分に何の變化も無い。依然として理化學の實驗を反覆して居る。自分は一體褊狹な人間なのであらう、同僚ともそんなに往復はない。田舍の教師抔といふものはてんでみじめな情ない人間が聚合して居るに過ぎない。俸給の不足だとか同僚に對する嫉妬の惡評だとかいふことを能く口にしたがる。それを聞くのが自分には厭なのだ。然し生徒は好きだ。自分は邊福を飾らない。髮は三分刈と極めて置く。髭なんぞは立てたことがない。それで生徒も最初のうちは自分の風采が揚らないので少しづゝ輕蔑しかけたものもあつたが現在ではみん

なが能く服從してくれる。敎授上に忠實を心掛けて居るのが自分の唯一の誇りである。中學の敎師は比較的時間の餘裕を有して居るのだが、それでもやりやうによつて仲々忙しい。暇を拵へては釣竿擔いで出懸ける同僚もあるんだが、そんな餘計なことはしなくてもいゝだらうと思つて居る。斯ういふ連中は能く泣き出さないばかりに生徒に苛められる。それといふのもみんな自分が惡いのだ。中學の敎師は又よく更迭する。此處では大分新陳代謝が行はれた。然し彼等に對する自分の記憶は甑のやうなものだ。殘つて居るものは味噌でいつたら滓ばかりだ。だが唯佐治君ばかりはいつ迄經つたとて到底自分の腦裡を去らぬであらうと思ふ。どうかすると長身瘦軀の佐治君が涙を落しながら椅子に倚つて居る容子がありありと見える。何の力が自分にかういふ强い印象を止めたのであらうか、凝然と考へてゞも見ようと思ふと却て解らなく成る。佐治君は哲學科出身の文學士である。社會學を專攻したのだといつた。佐治君は何時でも底深く沈んで居るやうな

態度で其長い體をぐつたりと二つに折つて椅子に倚つて居る。さうして目を瞑つて居る。佐治君の髮はどんな時でも能く櫛が入れられてある。洋服でもすつかり體にくつついて居る。固より其周圍は極めて清潔で且つ整頓されてあつた。佐治君はそれで獨身の生活をして居たのである。自分には彼の凡てが能くさうされたものだと不審に思はれる位であつた。だが佐治君には毫もハイカラな分子は交らない。自分の性格は全く佐治君とは相反して居た。どうしてか自分は放任的でテーブルの上でもごつちやである。教室でもよく試驗管を壞すので會計の方でぐづぐづいひたがる。書記の今井君は別段懇意だから小言が餘計に出る。内へ歸つてもさうだ。惡戲者ばかりだから障子は何時も穴だらけだ。自分は近頃寫眞といふ道樂を覺えた。少しの餘裕があると器械を擔いで出掛ける。寫眞をはじめてから滅切忙しくなつた。學校の方を疎略にすることは自分の主義に反して居るからだ。道樂といふと語弊があつていかぬが自分が寫眞を始めたのは理化學の應用と

いふことに興味を持つたからである。自分は不器用だから碌なものは出來ない積りではじめたのだが近來は少しは美的思想も發達して來たやうに感ぜられる。世上に發表された有らゆる印畫がどうも自分の製作を越えて居るものが少いやうに思はれて來た。自分は近傍一二里の間はどんな小徑でも跋渉して見た。能く散歩に出た同僚が又かといつた樣な眼で自分を見るのに出會つた。だが途中で佐治君に一回でも逢つたことがない。佐治君は滅多に外出しないのである。下宿の婆さんがいふのに敎頭が時々訪ねて行く。其時は屹度碁を打つ。碁を打たなければ讀書をする。さうしては机へ肘を懸けて唯ぢつとして何だか考へてばかり居る。それは優しい人だがちつとも打解けないので氣が置けるといふことであつた。自分は訪問が嫌だから二三遍佐治君と往復したに過ぎぬ。下宿屋の婆さんは自分が嘗て妻を喚び寄せる間暫く居たことがあるので途中で遭つても婆さんは話しかける。自分には碁を打つやうなそんな悠長なことはとても我慢がしきれぬ。自分は疎放

な人間である。だが此でも敎育者の義務といふことを知つて居る點に於て誰にも劣らないといふ自信を有して居る。卒業生の貧乏な者の爲めには有力者に說いて學資を出させて置くのがある。五年居るうちには地方の父兄に知人も出來てる。それで自分は敎育者の義務を果すのには一所に長く在る事が第一の條件だと思つて居る。此だけは佐治君に愧ぢない積である。佐治君は在職一年で九州へ去つてしまつた。其短い一年間自分は一緒に生徒の監督をした。それで相互に意見を交換する必要と機會とがあつたのだ。其短い間に必要から尤も相接近したので佐治君に就いての觀察も怠らなかつたのである。佐治君の瞑想に耽つて見えるのは哲學を硏究して居る者に通有な狀態だと思ふから格別不審にも思はなかつた。だけれども下宿屋の婆さんがいつたやうに何處かに狎れ難い處があつた。無頓着な方の自分にさへさうだから他の同僚の多くは日々の辭令の外に隻語をも交さなかつた。佐治君は生徒に讀者の多い中學世界へ靑年訓といつたやうなものを始終書

いて居た。書く事は眞面目だが內容は自分を甚だ感服せしむるに足るものがなかつた。佐治君はまだ大學を出たばかりである。生徒としての經驗はあつても敎師としての觀察はまだ淺い。自分のやうに十年實際に臨んで居るものゝ眼からは徹底しない處があつた。或時雜誌の方から自分へも寄稿を依囑して來て報酬のことまで書き添へてあつた。それで筆を執れば原稿料を得られるのだといふことも知つて居た。佐治君は其報酬によつて收入の幾分を增して居るのだといふことも勢ひ想像された。佐治君は他の類似の雜誌へも寄稿して居たのである。報酬を欲するのだらうといふ想像が微かに佐治君の人格を疑はしめた。自分はどうかすると酷く此の疑を深めて佐治君に對して輕侮の念を起すこともあつたが、面前に其沈んだ姿を見る時はすべてが消散してしまつた。佐治君は迚ても憎むべき人でなかつた。佐治君の人格を疑つた自分の不明は後に至つて深く悔いた。佐治君は他人の談笑することがどんな心理狀態に在るのか解釋の出來ない卽ち光明の方面には

寸時も其心を住せしむることの不可能な人なのである。

其頃同僚の一部に惡戲が流行した。特色のある連中は大抵犧牲に供せられた。自分は到底活動せずには居られない人間なのである。今木君といふのは尊大なので同僚の冷笑を買つて居た。生徒の父兄が面會にでも來ると反身に成つて控室を出る。それが滑稽なので時々擔いでやる。今井君は器用な性質なので父兄の文字をそつくり眞似して名刺を拵へる。それを小使に持たせてやる。さうすると今木君は例の如く出て來てはそこらを彷徨ついて極り惡る相にしてもどつてしまふ。其容子を見たいばかりの惡戲なのだ。今木君は怒るかと思ふと怒りもしない。といふのは今木君は酷く生徒に苛められる仲間なので免職になつたら明日から糊口にも窮するやうな肩身の狹い人間だからだ。さう思ふとそんな惡戲をするのは罪なことなのだが其頃はそれが行はれた。そんなことは今では止んだが其頃は暫く續いた。書記室へ行くものは自

分が居たら書記の今非君と二人で冷かさずには措かなかつた。だが佐治君に對しては今非君も一言を發することも出來なかつた。佐治君が其弱々しい瘦軀を靜に運んで來ると今非君の態度が急に改まつて畢ふ。側から見て居ると滑稽な位であつた。自分はこんな巫山戲たことをしても責任は全うするに足るべく十分の勉强を繼續して居た。佐治君は英語を擔當した。英語は生徒に甚だ趣味あるものではない。それで佐治君に就いて生徒は所謂鹽加減を見はじめた。佐治君は生徒を威壓する樣な人ではない。生徒は與し易いやうに思つて居たらしかつた。丁度二學期の初に就職したのであつた。天長節の式場で佐治君は演說した。其聲は低かつたが徹底して自ら人をして傾聽せしめた。生徒は感に打たれた。自分も演說の上手なのに喫驚した。能く聞いて見るとそれも其筈で佐治君は熱心な基督敎の信者である。日曜日の演壇に立つたことも數次であつたのだ。

時候は漸く寒くなつた。ガラス窓の外には櫻の枯木が空つ風に搖られて居る。

ベース、ボールの選手が乾燥したグラウンドに各自その膂力を振つて居る外屋外に人を見ることが少なくなつた。ストーヴの側には何時でも數人づつ職員の或者が雜談して居る。ストーヴは慥に佐治君と自分とを接近せしめた。自分は教育上に就いて佐治君と語つた。さうして意見が能く一致した。自分は同僚の大部分が教育に就いて何も考へて居ないことが癪に障つて居たけれど佐治君に遭ふまでは沈默を守つて居た。自分は教師といふものは換言すれば畑の南瓜位なものだと思つて居る。悧巧なものは餘り無いものである。此の二三年間には大分更迭があつた。去つたものは成熟した南瓜がもぎとられた樣なもので後任者は蔓の先へ膨れた青い南瓜だ。どうも段々教師の値打が下落して行くのだから仕方がない。免職になつた奴はてんで腐つて落ちた南瓜なのだ。自分はこゝで忌憚なく所信を發表すれば校長無用論を唱道する。大きな一室を占領して毎日何をして居るのか聞いて見たくなる。それで南瓜の熟したか熟しないかも分らずに居る。自分は百姓の

家に生れたから能く知つて居る。西瓜にした處で庖丁で裂いて見なくつたつて指の先で彈いて見れば出來たか出來ないか屹度知れる。校長は箸へ挿して喰はせて見なけりや南瓜の味が分らないのだから困る。其が證據には校長會議などゝ大袈裟な場所へ出て何を齎したか。旅費日當の遣ひ殘りで細君の土産を買つたつて敎育上の成績には成るまいぢやないか。金錢が欲しけりや寧ろ敎育者を止めてお店の番頭になるがいゝ。前垂掛けた方が餘程増だ、とかういふ風に横道へ外れて自分は遠慮もなく饒舌つた。いつも佐治君は能く聞いて吳れるので自分は思はず興に乘じてしまふことがあつた。佐治君の沈んだ低い聲は自分に壓せられて畢つて自分のいふが儘に聞いて居なくては成らなかつた。自分の罵倒が劇しい時佐治君は少し困るやうであつた。さうして自分が金錢が欲しけりや商人になれといふ時にはどういふものか佐治君は顏を赤くするやうに見えた。ぐつたりとした體が更に俯向くやうに思はれた。自分は異樣に何物かゞ佐治君の心裡に伏在して居るの

ぢやないかとも思つた。或は金錢を談ずることの野卑なのを羞ぢるのではないかと思つたので、それからは金錢に就いては餘りいはぬやうにして居た。

西風が總ての梢を吹き拂つて、更に木の葉が地上の一隅に聚合して居るのを見出しては執念く搔き亂して居る。鴉子鳥や鶸が木の葉の如く西風に吹き飛ばされんとしつゝある。自分は此種の渡り鳥が殘酷なかういふ風に吹かれる爲めに何を求めて態々此地に來たであらうかと疑ひたくなる。裸になつた樹木は各特有の姿態を現はして廣濶な平地に人目につき易く突つ立つて居る。寫眞道樂の自分には絕好の季節である。滿地の綠が目に美しい時は寫眞道樂の冬である。寫眞には色彩が出ない。光線が我々の眼底に落つるのと乾板の上にレンズを透す時とは其現象が違ふ。乾板は餘りに銳敏で又遲鈍である、明暗の度が强過ぎる。それでどうも現在の寫眞術に於ては我々は冬の木立が撮り易いのである。寫眞狂の連中は寫眞を繪畫と頡頏させる。美術の範圍に進めると力んで居る。又寫眞は到底駄目だ

と排斥して居るものもある。自分にはどうでもいゝ。自分が面白く感じて居れば
それで滿足なのだ。缺點は幾らもある。除き去るべき必要はある。又早晚除き去
られねばならぬのは勿論である。それは自分等の責任でもなければ義務でもない。
自分等は唯器械を擔いて步いて居ればそれでいゝのである。冬は一切の動物が萎
縮する。同僚にも散步するものを見なくなつた。佐治君には固より逢はない。自分
は一枚でも滿足な種板が欲しいので短い時間を節約して冬と甚だ親密に成つた。
街道を挾んで赤楊の枯木がすくすくと立ちならんで居る。街道の傍に一區域をな
して菜畑がある。周圍に靑いものは其畑だけである。靑菜は軟かに見えるけれど
それがどうしてもさびた冬の色である。荷馬車が悠長に赤楊の間を過ぎて行く。
自分はかういふ處へ出ると原板に映ぜしむべき形體の外に色彩の美といふことを
感ぜずには居られない。佐治君は恐らくこんな處を見たことはないのだらうと思
つた。佐治君は强ひてでも散步の趣味を養つたならば虛弱な身體を健康に向はし

むることが出來るだらうと思つた。自分は勸めて見たが佐治君は默して頷くのみである。

或る日曜日であつた。自分は思ひ切つて遠くへ出て見ようと思つて生徒を二人ばかり連れて出掛けた。田甫のあたりをぶらついて居るうちに西風が吹き出した。日光續きの山の上に泥の塊を斤板へぶつつけた樣な雲の浮んだ日は屹度後に西風が吹くのであるが其朝は心付かずに出たのが失策であつた。寫眞はもう駄目になつたので折よく來かゝつた馬車に乘つてもどることにした。馬車は止つた。八人乘の馬車へはもう六人詰つて居る。生徒の一人を步かせねばならぬ。自分は一寸困つた。さうすると端に居た小豆色の頭巾を冠つた女が

「窮屈なのはお互ですよ、一人位どうかなりますわね、構ひませんお乘んなさいよ」

さうして

「みなさん少しお詰めなすつて下さいな」

客の方へ命令でもする樣にいつた。少しの空席が出來たので生徒も漸く乘ることが出來た。自分は女に會釋した。

「いゝえあなたどう致して」

と女は輕快である。馬車は田甫を越えて麥畑へ出る。乾燥した麥畑は埃の爲めに霧が立つたやうである。とある村で馬車が止る。御者は馬の口をしめす。同時に向うからも一臺の馬車が來て立場の前へ止つた。立場の婆さんは烟草盆を出してそれから九人前の茶を汲んだ。頭巾の女は

「さあ皆さんどうですか」

と左の手に盆を持つた儘敷島を出して膝の上の烟草盆から火を點けた。みんな茶碗が盆へもどつて五厘の銅貨が一つ宛茶碗の底に落ちた時女は帶の間から二錢の銅貨を出してぽんと盆へ載せて

「はいお婆さん下げておくんなさいよ」

馬車は復た埃の立つてる中を軋りはじめた。棒のやうに眞直な街道の傍には桐の枯木が暫く續いて其下にはぼつぼつ立つて居る枯菊が切な相にゆらついて居る。處々の桑畑には白い糸のやうな桑の木が立つて居る。桑の木のうらには小鳥の止つたやうに落ち殘つた枯葉が二三枚づゝ着いて居る。其枯葉を烈しい西風が吹き散らさねば止むまいと絕えずゆさぶつて居る。遠くの林は空に吹き立つた埃の爲めにぼんやりとして居る。反對の方向へ他の馬車も動き出した。馬車は黑い塊の如く段々埃の中へ小さく成つて行く。女の卷烟草の灰が自分の顏へ五月蠅くかゝる。女は漸く氣がついて

「まあどうしたんでせう、本當に濟みませんね」

女はいきなり吸ひかけの卷烟草を捨てた。烟草は道の端へさうして畑の方へ吹き攫はれながら微かに烟を立てる。馬車は其の烟に遠ざかつてずんずんと走る。

自分は此の日目的の獲物はなかつたけれど天然の變化に對する興味を以て失望することはなかつた。桑の枯葉や女の捨てた卷烟草の烟をも見遁さぬやうに注意力の加はつたことを自覺して快感を禁じ得なかつた。此の日は又自分に嘗てない人間に對する興味をも感知した。車中の女――小豆色の頭巾をかぶつた其婀娜な女でなかつたならば、其女がいつたのでなかつたならば、それでなくても窮屈な八人乘の馬車へ更に一人を乘り込ませることを他の客は肯じなかつたのであらう。自分は女の勢力といふものをつくづくと感じた。自分の見る處では女は何處かの酌婦でなければならぬ。尤も嫌な階級の女である。然しどういふものか車中では其女に對して自分は毫も惡感を催さなかつた。のみならず後に至るまでさうである。自分は其女のはきはきした仕打のために愉快であつた。あばずれた女であるに相違ないことは知つたけれど自分の感情は其爲に損はれなかつた。自分はどうして其女が自分の心を捕捉したかを不審に思つた。自分の心は其時平生の權威を

保つに足らぬ大なる缺陷を生じて居たのだ。徒歩の覺悟であつたならば三里の道程は自分等三人に於て素より何でもないのだ。馬車に乘らうとしたのが自分の心を其時薄弱なものにして畢つたのだ。馬車を止めて乘らぬと斷つてしまふことも ちと決行し難い。さうかといつて生徒を殘さねばならぬ。自分獨り歸り去ることが自分に苦痛である。それで自分は困つた。馬鹿げたことであるがそれが咄嗟の間である。思案の餘裕はないのだ。意外にも婀娜な女が自分を滿足させてくれた。自分は感謝せざるを得なかつた。女は自分の心の缺陷に投じたのである。それから其の車中に在つた短い時間が女を自分の眼に映ぜしめた總てゞあつたのと小豆色の派手な頭巾が顏の面積を狹くしたのとが惡感を起させる動機を與へなかつたのであらう。それから頭巾といふ派手な色彩が又惡感を未發に防いだに相違ない。頭巾は女の顏の惡い部分を除却した。自分は寫眞と同じことだと思つた。レンズを透して原板に映ずる物象、單に其物象だけに就いて自分等は發見するこ

とに苦心して居るのである。原版に映ずる以外のものがどんなであつてもそれに構はぬ。レンズが肉眼より重寶な所はそこだ。素人に寫眞を見せると屹度此は何處だと聞く。何處だつてそんなことを聞く必要は無いんだ。素人は屹度それに極つて居るけれども撮つた寫眞は見せたくなる。それでさう聞かれると一寸癪に障る。變なものである。とかういふことを自分は考へた。考へることは自分には滅多ならず無いことだ。此も佐治君の感化であつたかも知れぬ。淺薄なことを考へたからとてそれは自分だけに仕方がない。自分は埃の立つ麥畑さへ興味を發見する樣に成つたのを衷心悅んで居る。さうして佐治君にも天然を味はしたいと思つた。佐治君は一度も天然を語つたことが無い。自分は女に逢つて種々なことを考へて見てから其女に對する追憶に興味を持つやうに成つた。獨身の生活をして居る佐治君が果して女といふ者に對してどんな思想を懷いて居るかゞ疑問に成つた。其翌日佐治君へ一日の始終を語つた。佐治君のいふ處は自分をして益〻疑を深くせし

めた。悲觀が私の總てゞあります。花が開いても凋落の尋で來ることを思うて之を見るに忍びません。見ても何等の快感が起りません。それでありますから冬の天地程切實に私に悲痛の感を與へるものはありません。到底悲痛は私の全身を支配して居るのですといふのであつた。自分は落花の後に來る深綠や熾烈な日光の萬物を生育する無限の活力やさうして我々がそこに眼を放つ時に全身がむづむづする程壯烈な感を起すことなどを主張して見たが佐治君は冷かなること石の如くであつた。車中の婀娜な女に就いて自分は大なる發見でもした如く其感想を語つた。佐治君は一言も發しない。遠い處を尋ねるかと思ふ樣に佐治君はしんとした。涙が胸で組んだカフスを滑つてストーブに落た。熱した鐵板は直ちに其涙を蒸發させた。自分は意外であつた。其時自分は涙の蒸發したことにふと意を注いだことによつて僅に自分の心を外らした。佐治君は到底了解すべからざる人格である。いやそれが當然だらう。佐治君は哲學者たるべき人である。自分等が淺薄

なことをいつて見たつてどうなるものか。自分は專ら自分の本領たる理化學の方面に向へばいゝのである。敎育者としては佐治君と意見の交換もしなければならぬ。それ以上は僭越だ。自分は何故に理化學を選んだ。學資の缺乏から早く專門に向はなければならぬ事情もあつたのだけれど、空を論ずることが多岐多端に流れて單純な自分の性情が到底それに堪へることも出來ず、又それを好まなかつたからである。眞は唯一であるといふことは天人の間に通ずる大法則である。理化學が尤も適切に之を說明し得る。そこがきびきびして自分にはたまらず愉快だからである。自分の本領は涙がストーブに落ちて蒸發することに意を留める處にあるのだ。無益なことはもう思ふまい。とかう心づいてから佐治君と接近はして居たが深く立ち入つていふことは無かつたのである。

學年試驗も畢つて三十幾人の卒業生が送り出された。證書の授與式に臨んで校長の陳腐な演說があつた。一體此の中學の校長は體軀の矮小なのがみじめだ。何

時でも狐疑して居るやうに人を見て居る。此が不快である。虚位を擁して居るのが人をして輕蔑せしめる。校長は嫌である。佐治君も演說した。青年に對する一片の訓示で特に奇拔なものではなかつたが其沈痛な低い聲が自分の胸を刺戟した。佐治君の人に强ふることの無い態度が自分を傾倒せしめた。其内に百五十人の新入生が皆釣合はぬ新調の製服をつけてぞろぞろと登校した。さうして無邪氣な顏をならべた。自分は此の少年に何物かを注入してやりたいと思つたから自ら請うて其一組の監督を受持つた。佐治君も新入生の組を受持つた。依然として佐治君との接近は保たれた。佐治君に對して居ると自分は何とはなしに曳きつけられるやうな心になつて、時には自分の心理狀態に疑を挾んで見たくなることもあるやうに成つた。然し疎放な自分の性格は改らなかつた。惡戲は時あつて行はれた。暑中休暇は其年から短縮されて九月に入ると直ぐに各教室は開かれた。自分は此の夏例の器械を肩にして鬼怒川の上流に溯つた。鬼怒沼山を攀ぢて雜草の中に

淺く湛へた鬼怒沼を探檢した。周圍の樹林と雲霧の變化と皆乾板に映ぜしめた。さうして沼が鬼怒川と全く何の關係もないことを慥めて、陸地測量部の地圖の誤であることを發見した。峽谷十里の間は自分をして天下の絕勝であることを驚嘆せしめた。關東の野に成長して比較的近距離で然かも坦々たる會津街道の通じて居るにも拘らず、今まで知らずに居つたことを自分は心に慚ぢた。未知の山水を發見して具體的に世間に紹介することの手柄であることを喜んだ。併し漸く自分は此の大なる自然は口徑二吋に足らぬレンズを以てして到底其の千百萬分の一をも彷彿せしめることの出來ないことを悟つた。人間が天地の間に介在して粟粒一つ攫へるのに生涯の努力を要するのだといふやうなことをも思はしめた。さうして此の峽谷を出る時其粟粒の千百萬分の一でもいゝから攫へて行かうと思つて改めて奮發の念を起した。三ダースの乾板を費し盡した。枯木ばかりが寫眞に適して居ると信じて居た謬想を根本から打破して峽谷を出た。それと共に自分の體力が意

外に頑健であつたことを憶めた。兩手の日に燒けたのが自分にも目に立つた。授業の開始されたのは原板の整理がまだ畢らぬうちであつた。家に歸つて見ると原板は勞力と時間とを費したことの徒爾ならざるを思はしめるものがあつた。自分は自分の技倆を信じていゝと思つた。學校では博物の沼崎君が古い麥藁帽子をかぶつて學校園に其姿を曝して居る。佐治君は依然として石の如く瞑想に耽つて居る。佐治君を見ると自分は折角養ひ得た氣力が滅入る樣な心持がしてならぬ。自分の休暇中に於ける活動を誇つて見たい積であつたが、自分は控へてしまつた。それで佐治君が此の夏を如何に銷したであらうかといふ疑問が起つたので自分は聞いて見た。一寸歸省しましたと極めて單純な挨拶であつた。佐治君は少し顏を赤らめた。此は佐治君の癖らしい。ぐつたりと萎れた樣な佐治君に其先を追求する念慮は起らぬ。自分は飽氣なく思ひながら過して居た。其内に書記の今井君から自分は佐治君が他へ轉任することに內決してあることを聞いた。在職が短日月

であつたがそれだけでは自分には唯少しく意外に感ずる位であつたであらう。今井君は俸給の増額されたことをも語つた。自分は全く疑問を喚び返した。雜誌の寄稿者たる佐治君に對して消滅しつゝあつた疑問が卒然として復起した。教育者として漫りに金錢に拘泥することの陋劣なるを痛罵した時に、顏を赤らめた微かな事柄が火の如く自分の眼に映じた。此の休暇中に轉任の運動をしたのかも知れぬ。自分へ答へ能はなかつたのも內に疚ましきことがあつたからではなかつたらうか。自分は屢教育ある基督教徒の驚くべき墮落を耳にしたことがある。其記憶が一層自分をして佐治君に對して不快の念を增進せしめた。自分は勢ひ冷かなる眼を以て佐治君を見ない譯には行かなかつた。さうして淺薄な自分が果して絕對に金錢の誘惑を排斥し得るかといふことの反省もなかつた。又佐治君に對する惡感が甚だしき惡意でない嫉妬の念を加味して居ることをも自覺することが出來なかつた。自分は旅行することが好きである。興に乘じて人に語ることもある。然

し人が輿に乘じて自分へ旅行の噺をするにそれが同輩のものであつた時にはそれに釣込まれると共に心に一種の寂しさを感ぜざるを得ぬ。自覺せぬ嫉妬の念に驅られるのである。榮轉する佐治君に對しても自分は獨り棄てられるやうなさうして名狀し難い微かな寂しさを感じたのである。當時自分に反省と思索との習慣が少しでも養はれて居たならば佐治君に對して自分の爲めに支配されるやうなことは無かつたであらう。轉任の噂があつてから一ヶ月過ぎた。其間路傍の人の如く冷淡であることを持續した。自分は悔いて愧ぢざるを得ない。

其頃はまだ惡戯は止まなかつた。數學の敎師の大森君がフロックコートを新調した。今井君が洋服屋から探知したのである。狹い町だから何でも隱せたものでない。此の事實は自分等に絕好の材料を供給して且つ奇拔な考案を浮べしめた。今井君が小使に大風呂敷を持たせて大森君の家から其フロックコートを取寄せた。大森君の命令だといはしたので細君は何の氣なしに大きなボール箱へ入れた

儘持たしてよこした。丁度自分の時間が二時間ばかり暇だつたので書記室で考案を凝した。大森君は職員中第一の肥大漢で、敎授の時間でもボールドの前に立つて居るのを大儀だといつて止むを得ぬ外は椅子へかゝつて居る。又寛濶な日本服が着心がいゝといつて此まで決して洋服に成つたことがない。殊に夏は年齢の割合に禿げた頭からたくたくと汗を流して苦しんで居る。其代り冬は滅多にストーブの側に寄らぬ。脂肪に富んだ手を出してどんな時でも胼がきれぬといつて誇つて居る。大森君は比較的短軀なので袴を鳩尾の下で締めて居る。其容子が滑稽である。自分等は其體へ洋服を着せて見たいといつてはよく揶揄つた。大森君はどうしてもだぶつかせた日本服を脱がぬ。揶揄はれる度に禿げた頭を手の平で叩いては抗辯する。然し式場に列席するためにはフロックコートの必要が生じた。といふのは大森君は漸次俸給を増して資格に相違を生じたからである。大森君は案外正直な人だ。自分等を驚かしたのは其ヅボンの太いことである。艢に自分の兩

脚を容れて餘裕があつた。自分は小使に命じて何でもいゝからと短い棒を何本も持つて來さした。さうして兎に角胴腹や足の太いなりに組み立てた。特に腹へは新聞紙を卷いたりして其特色を發揮せしめるには容易ならぬ苦心を費した。自分は偶然の思付からフートボールの革袋をむいてゴムへ一杯に空氣を吹き込んだ。それへぐりぐりと目や鼻や口を描いた。大森君の特色の一つである禿を誇張して髮を描いた。人の顏らしく成つた大きな赤い玉が落せば床板の上を跳ね歩いた。それをそつと据ゑた。さうして此の異樣な人物は書記室に鄰した宿直室を獨り睥睨した。自分は成功すべき惡戲を滿足した。今井君が名刺を模造した。給仕が叮嚀に持つて行つた名刺は大森君を欺いた。大森君をおびき出す前に幾度か宿直室は覗かれた。體軀に似合はぬ大森君はそゝくさとして居る。名刺を持つて何處だ何處だといひながら書記室へはひつて來た。今井君はこんな時に澄し切つて居ることの出來る人である。今井君は宿直室に待たせて置いたからといつた。宿直室

へ生徒の父兄を待たせて置くといふことは有るまじきことである。大森君は惡戯とは思はなかつたからうつかりガラス戶を開けた。其處に異樣の人物は大森君を睨み落した。大森君が其癖の禿た頭を手の平で叩いた時自分は迚もたまらなくなつて書記室を飛び出して仕舞つた。大森君は有繫に苦笑しつゝ去らざるを得なかつた。大森君が去つてからも書記室ではみんな腹を抱へた。自分はまた宿直室を覗いた。突然書記室のガラス戶を開いて佐治君がはひつて來た。佐治君は何か今井君と語つた。今井君が自分を喚んだ時自分はぴたりとガラス戶を閉てた。どうしたことか自分は惡事でも發見された樣に感じた。好い鹽梅に室內の惡戯は佐治君の目には觸れないやうであつた。今井君は先生が何か君に用がある相ですと自分を見ていつた。今井君は自分等に對する時は君といふのだが佐治君に對しては先生と敬稱して居る。佐治君は自分等のどこか落付かぬ容子のあるのが異樣に思はれたのだらう。お忙しいならば後程といつて去つて畢つた。佐治君が何で自分を

態々尋ねるのか不審であつた。自分は佐治君に疎かつた。佐治君の心裡を忖度して惡意を以て疎んじたのだ。だが佐治君の悄然たる後姿を見た時には自分は何となく哀れつぽく懷かしい思がふと心の中に起つた。其の日の放課後に自分は惡戯に費した時間を塡補するために多忙であつた。理化學の敎室で或る實驗に從事した。器械の裝置が畢つたので自分は椅子に倚つて暫く窓外を見た。沼崎君は褪衣一つに成つてホーレーキを擔いて學校園を歩いて行く處である。ホーレーキといふのは立鎌と熊手とを背中合せにくつゝけて拵へた農具である。近頃までかぶつて居た古い麥藁帽子は棄てゝいつもの鍔のさがつた冬の帽子である。幾年たつたのか褪めきつて居る。帽子の形が茸の樣だ。今井君はすぐに赤ハッと綽名した。赤ハッといふのは初茸に類似の茸で此の地の方言である。夏が過ぎたら復た沼崎君は赤ハッに成つた。沼崎君がホーレーキを擔いで出るやうに成つてから雜草が除かれた。倒れかゝつたコスモスの花にも大抵杖が立てられた。コスモスの花は

空に浮いたやうにふわり咲き出した。自分も小さな庭へコスモスを植ゑて置く。コスモスは白い花が一番目に立つ。赤い花は少し陰氣である。自分の庭のは學校のよりもいゝ。だが多數に在るのと遠くから見るのは學校園の特色で沼崎君の手柄である。給仕がそつと扉を開けてはひつて來た。實驗中はうつかりはひるのを許さないことにしてあるので給仕はよくそれを守る。何だと自分はぶつきら棒に聞いた。彼は佐治君が會ひたいといふことを告げるためによこされたのだ。それで忙しいかどうかと聞くのである。大森君などであつたらいきなりはひつて來るのだが、佐治君はそれだけ遠慮深い。自分は不審に思ひながらもすぐに來てくれと傳へてやつた。佐治君は靜にはひつて來た。自分は其綺麗に磨かれた靴が目に入つた。佐治君には閑雅な趣がある。日頃惡感を懷いて居たけれどかうして面接して見ると自然と自分に畏敬の念を起させる。自分は從來濫りに人を敵視したる癖があつた。それで居て相手の方から折れて口を利かれると機先を制せられたや

うで且つ自分が餘りに力瘤を入れ過ぎたことが妙に極りの惡いやうに感ぜられてこつちが却つて閉口して畢ふ。佐治君に對しても受身になつてしまつた。自分は立つて椅子を讓つた。佐治君の人を畏敬せしめる態度は自分をして無意識にかういふ動作を起させた。然し佐治君は辭退した。自分は更に再三薦めた。然し長軀を屈して受けなかつた。自分は自分の腰を掛けるものがないことに氣が付いた。室内には椅子が一脚しかなかつたのだ。佐治君は一脚の椅子に自分のみ身を寄するやうな人ではない。自分はつと立つて小使と呶鳴つた。小使は慌てゝ駈けて來た。椅子を持つて來い、急ぎだ急ぎだと命令した。小使は椅子を持つて廊下を傳つて來る。面倒臭いので自分は駈けて行つてひつたくるやうにして教室へもどつた。佐治君は却て氣の毒相な顏をしてテーブルの前に立つて居たがあたふたとはひつて行く自分を迎へ見て少し體の位置を轉じた。自分はすぐに其椅子を佐治君の傍に据ゑた。佐治君は自分が椅子につくのを待つて漸く腰を卸した。いつもの

如く俯向いて居る。
「お忙しい所でしたらうか」
佐治君は重く口を開いた。
「いゝやなに用があるといふ譯ではないです」
自分はかういつた。
「お宅へおもどりのお邪魔をしても相濟みませんが」
其の低い聲が倘沈んで心もとなげである。
「えゝ決して、暢氣なんですからそんなことはないです」
自分は勢かういはなければ成らなくなつた。佐治君は例の如く力の抜けたやう
に椅子に倚りながら暫時無言であつたが
「私はもう此の中學を去らなければ成らなくなりましたが、それに就いては此の
一年間最も親密な御交際を頂いたあなたへ心殘りのないやうに申上げて置きた

いことがあるのです、お聞きくださるでせうか」

「何でもどうぞ」

自分は丸太でも投げ出した樣にかういつた。さうして餘りに曲のないのに氣が付て椅子を少し後へずらしてすつと自分の破れた靴を引いた。

「それは私の過去から現在に接續して居る運命であります。此の學校にもせめて三年も奉職して居ることが出來ましたならば幾らか義務を果すことが出來たでありませう。僅に一年で去るのは私の心に羞ぢない譯には行かないのであります。然し私の境遇は私を鞭つてかういふ方向に赴かしめたのであります。現在に於て私の身を處する最善の方法はこゝを去ることなのですから仕方がありません。此は私のすべてをお話し申さねばわかりませんけれど………………」

兩手を拱いで首を傾けた佐治君は其柔和な小さな目を閉ぢた。

「私は高知の、士族といつても極めて小身な貧しい家に成長しました。私が中學

にはひる年頃に成つた頃にもう私の一家は糊口することだけが苦痛でありました。私はそれでもどうかして高等の學術を修めたいといふ希望が絶えず小さな頭を往來して居ました。其頃市中に相應な財産を所持して居た商人がありました。私は其商人の養子に成りました。そこには娘が一人あつたのです。私の父は昔氣質な義理堅い頑固な人で、其時町人の家へ養子にやることは成らんと拒んだのでしたけれど然し父は私を愛して居ました。さうして私の切なる希望を達せしめる方法、即ち私の長い將來の學資を得せしめるのには其商人に托する外に何も思案はなかつたのです。私は其頃の不完全な小學に於ては成績の佳良な生徒であつたのです。商人——私が今養父と呼ばねばならぬ人は金錢を擁して倨傲でありました。貧乏士族の子ではあるが性質が惡くないやうであるから養子にしてやるのだといふのであります。養父がこれ程のことをいふのを父は有繫に知りませんでした。舊藩の時代に於ける士族の壓迫に對する怨恨が一つ

は養父の念頭を去らなかつたので有ませう。私の一家は事實の上に町人の家に降服したのであります。自分の財產は、一人二人を敎育するために何の增減する處もないから、それだけの金錢は捨てた積でくれてやるのだと養父は酒を飮んではいひました。頑固な私の父が其當時私を養子にやるに就いてどうして自分を枉げましたか、又到底相容れざる私の父から養父はどうして私を貰ひ受けましたらうか。私は性質が全く母に似たのであります。母は女らしい人でした。女らしいだけに遠い將來を慮れと望むのはそれは無理でした。それ故私の希望は直ちに母の希望でありました。母は泣いて私のために父に訴へたのです。又他に人があつて私を頻りに養父に薦めたのでした。私はどうして頑固な父の反對も顧慮しないで養父の許に走つたのでせう。母の同情が私の心を丈夫にする第一の味方でありました。さうして倨傲な養父の許に甘じて居りましたのも一念學問のみ志したからであります。學問といふことは學校を順序よく經過して

行くといふことより外に觀念はなかつたからであります。さうして養家を離れては私の目的を達する方法が絶無であると信じたからであります。母の性質を享けた私は現在は猶更であります、嘗て人と相爭ふことを能くしません。遂に少年の虛榮心が私を盲目にして養家に送つたのであります。養家の娘に對する私の情は遂に深く私を其家に結びつけました。無邪氣に騷ぐべき少年の時代に私は早く婦女子の情味を知つたのです。私はそれに就いて何も意識しては居ませんでした。娘は私の妻として最初から定められたのであります。娘は私に優しくしてくれました。私は小さな心にも糊口の苦しみを刻まねばならぬ家庭を離れて周圍がすべて華やかな家族の間に介在して唯愉快でありました。それが私の最も幸福な時代でありました。幸福な時代であつたことを追憶する時幸福は既に去つて畢つて居るのであります。私が異數に婦女子の情味を知つたのも果敢ない少年の一夢に過ぎませんでした」

自分は佐治君に引き入れられるやうに感じた。始終俯向いて居る其頬を見つめて居た。

「養父は投機的の人でした。悲運は養家を襲ひました。投機の失敗は急激の打擊でありました。養父は殆んど狂奔しました。然し及びません。一家は一人の心から破れました。それでもその時はまだ表面だけはどうにか繕つて行くことが出來たのであります。其うちに私は中學の課程を終りました。私の妻は乳兒を抱きました。泣き叫ぶ兒を措いて妻は立ち働かねばならなくなりました。私は父として其泣く兒を賺しながら、机の前に坐することもありました。順序として私は高等學校に進まねばなりません。私は約束が履行さるべきものと思つて居ました。然し養父は酒の勢を藉りて私を突き放しました。今日以後は一錢も學資として支出することは出來ぬといふのであります。薄弱な私は妻と相抱いて泣きました。父は之を聞いて激怒しました。それ故自分は最初に拒絕したの

である。最早一刻もそんな人でなしの家に置く譯には行かぬ。早速離縁させると敦圉くのです。尤も父の感情は五年間一度も和らげられなかつたのです。養父は一回も父を訪ねないばかりか、父がたまたま私に遇ひに來ましても、多忙だといつて挨拶もせぬことがありました。みんな金錢から來る倨傲の態度でした。父は齒嚙みをして怒りました。さうしてお前が可愛いからおれは默つて居る。おれはまだこれ程の侮辱を蒙つたことはない。以前ならば一刀のもとに切り捨てるのだといひました。養父は義理といふものの上には驚くべき放膽な人であります。それでも私は妻を捨てゝ父の命に從ふことは、其苦痛が許しませんでした。私は養家に對して五年間の恩義があります。私の妻が私に對して貞淑であることは既往も現在も變りはありません。私は泣いて幾度父の家に往復したでせう。私に於ける子といふ繋累は父の怒を餘儀なく鎭めました。養家の境遇が私を見棄てゝから、私は他に學資を仰ぐべき道を求めねばならなくなり

ました。私を救ふ人は唯一人あればよいのであります。私は世間が意外に狭いことを知りました。微細な私といふ一人が、人の視線に洩れることは當然のことであつたのでせう。然し遂にその人が有りました。私は妻子に別れて岡山へ赴きました。單純な寄宿舍の生活は始まりました。私はこれから孤獨の境涯に移つたのです。岡山に居るうち養父は益〻自暴自棄に陷りました。店は全く人の手に歸して私が最初の休暇に歸省した時には小さな假住居に一夏を過しました。飢渴が目前に迫るやうになりました。貧窮は私の幼時から經驗した處でありますが。私の成長した家は私を敎育することさへなければ、どうにか糊口の道は立つのです。貧窮は家族の者に於て常態であつたのです。然し養家の落魄は痛く私を悲ましめました。私は斷然私の學資の一部を割いて、妻に送ることに決心しました。一部といつても僅かに三圓に過ぎません。此の三圓が私の他借の學資に於ては非常の減額であります。それと同時に妻の爲めには心强い收

入でありました。私の子は此がために成長したといつても過言ではありません。私はまた其頃から飜譯や其他のことで雜誌へ寄稿しはじめました。茶話會一席の會費に過ぎぬ收入が私の一家を潤ほしました。一身は別離して居ても妻と苦痛を分ちたいといふのが私の念慮であつたのです。

私の恩人は遂に私を捨てませんでした。私は大學へ進みました。其頃の私の一家はもう形容が出來ません。養父は依然とした投機的の成功を夢想して豪語して居ます。家族とは殆んど交渉がなくなりました。私が大學へはひつてから妻は幼い子を抱いて上京しました。落魄の身を故郷に曝すことが堪へなかつたのと、一つは私を見ることの機會があるといふ心の慰藉があつたからであります。東京からは歸省するといふことは私には出來なかつたのです。私の長い暑中休暇は悉く糊口の資を得る爲に費されました。私は遠く離れて居るために妻を忘れようとはしません。だから妻の近く來たことが幾分私の心を丈夫にしま

した。然し私は憔悴した顏を見ることは却て苦痛の種でありました。妻は裏長屋の一隅に潜んで居ましたた。僅かばかりの賃仕事をして居たのですけれどもそれで糊口の出來ないのは勿論のことであります。私は止むなく學資の內から其時六圓づゝ割いて與へました。雜誌へ筆を執ることも絕えず止めませんでした。此が私の家族に取つては重大な資本でありました。此は私の成績に少なからぬ影響を蒙らせました。其時まだ表面の成績といふことを冷視する程に私の修養は積んでありません。私は時々妻に會ふ機會はありました。然し妻の姿は只私を泣かせるだけであります。それよりも私の心を抉ぐつたのは私の幼い子であります。高等學校に在學中私の子は腦膜炎に罹りました。幸に生命は繫ぎましたが、土地に良醫がなかつたのと落魄の境涯とで十分の加療が出來なかつたのです。其爲め病後の私の子は白痴のやうになりました。女の子が六つといへば相應に物心がつかなければならぬ年齡であります。然し私の子はまだ言語

も不明であります。到底發達の見込はありません。妻が私に一身を捧げ憐みを請ふ有様は私をしていぢらしく思はせます。だが私は私の子に對して衷心からの愛情が薄いのです。多年別離して居たことが愛情を惹き起す動機を與へなかつたのでせう。私が强ひて抱かうと思つても恐れて近づきません。數次其子の歡心を買ふ方法をとつて見ましても、すべての機能の遲緩した私の子は他の幼い子に見る樣に快く懷くといふことはないのであります。それでも私の子であります、仕方がありません。子に對する妻の苦心を私も身に分たねばなりません。遂に養父からは離婚を迫まられました。然し私に子のあるといふことが何時でも父の口を箝ませました。父は我慢し兼ねた時に其離婚のことを私へ劇しく迫つて來ます。私は止むなく本姓に復歸することにだけは成りましたが然し私は落魄の故に貞淑な妻を捨てることは出來ません。私が岡山に往つた頃知名の牧師が來ら

れたことがあります。私は其牧師の演說を聞いて感動しました。さうして牧師の宿所を訪ねました。それから私は深く基督敎を信ずるに至りました。妻を去ることを基督敎は大なる罪惡として戒めて置きます。妻は私が父から受ける壓迫を知つて居ます。時にはあなたの將來のために私を捨てゝくださいと要求することがあります。此が女の口から泣かずにいはれませうか。私が妻を去る時には妻は卽時に此の世の人ではありません。妻は死を決して居ます。白痴の子を抱いて深夜に彷徨つたことが幾度だか知れないといひました。懷にした剃刀をとつて死なうと決心して見ても子を殺すに忍びなかつたといひます。私の妻は意志の鞏固の女であります。動機を與ふれば死するにちつとも遲疑しないでありませう。さうすれば私は更に殺人の大罪を犯さなければ成りません。此が私に忍ばれませうか。私のかういふ境遇から私の腦髓は思索に耽る習慣がついて居ました。私にも功名心は沒却することが出來ません。だから勢ひ硏究の餘

地が多い學科を選ばせました。さうしてまだ發達の途上に在る社會學が私の心を惹いたのです。卒業してからも私は直ちに收入の方法を立てなければならないのでありました。一つは私の虛弱な身體を少しでも改善の途に赴かしめるには田舍が尤もいゝと信じましたから私は此の中學へ赴任することに成りました。赴任と共に妻は高知へ歸らせました。妻子と同棲することには父の頑强な反對があつたからであります。父に對する遠慮から故鄕とはいひながら妻を遠くへ逐うたのです。それと共に一方には妻を慰めるために俸給から十二圓を割いて送りました。妻は高知へ去る時決して泣きませんでした。妻の銳くなつた眼光は却て私の心を强く刺戟しました。さうして妻に送るべき十二圓は私の收入から分割し得べき最大限度であります。私はまた恩人へ學資の返濟をしなければならぬ義務を有して居ます。私は更に又父の老後を慰めるために若干を割いて居ます。私の生活が此でどれだけの餘裕がありませう。それで止むを得ず

雜誌の寄稿に勉强しました。私の周圍と私との間を圓滑にして幾らでも幸福に接近せしめるには切實に正當な方法から得る金錢の必要を感ぜしめます。私の家族に福音を齎らすものは金錢の外に何もありません。私は此の暑中休暇に上京して或る講習會に臨みました。其時知人から此の程設立になつた九州の商業學校に教鞭を執ることを勸誘されました。俸給の增額が心を惹きました。私は講習會の畢ると共に其報酬を旅費にして歸省しました。故鄕に近く關東を去るといふことに依つて父の心を動かしました。哀訴の結果私が妻子を迎へることの承諾を得ることに成功しました。私の收入は一ヶ年に就いて二百四十圓を增すことになりました。私も敎育者として金錢を目的とすることの卑劣な行爲であることを知らないものではありません。それで九州に去ることは一たび私の良心を苦めました。然し私の行爲は罪惡ではないと思ひ返しました。それに妻子を復活せしむることが出來るからです。家庭を形ることによつて妻は長い困

難から救はれます。唯頑固な私の父は妻子と同棲することを許容する條件として父が養父との交際を絶對に拒絶することに就いて決して容喙してはならぬといふことでありました。私が父に服從してもしませんでも兩方の父は到底交誼を全うすることは出來ないのです。それは私が苦慮しても及びません。私は私の憐むべき妻を救ひ得たことを以て滿足せねばなりません。俸給の增收はまた私の恩人に對する義務を果す時間を短縮することが出來ます。貧窮な父の老後を慰めるに大なる便宜を有します。かうして私は斷然九州に去ることを決しました。然しながら敎育者として僅に一年で辭し去るといふことが私の良心に創痍を蒙らしめねばなりません。私はあなたに羞ちなければなりません。無言で去るに忍びません。それ故私はこれだけを聞いて頂きたいと思つたのでした：

……」

佐治君は姿勢を少しも崩さない。其低い聲が自分の敎室の內に充滿して强く白

分の耳を刺戟するやうに感じた。佐治君に此の如き事實が存在して居やうとは夢想だもしなかつた。自分は佐治君を疑つて居たことの不明を衷心から羞ぢた。佐治君に於てはじめて人格といふものを認め得た如く感じた。自分は此から後の佐治君が漸く幸福の生涯を送りうべきものと想像せられた。さうして其一事を以て佐治君を慰めようかと思つた。然し自分は佐治君のために心から身體から捉へられて自分は竦縮んだやうな狀態に在つた。一語をも發し得なつた。自分も俯向いて沈默を守つて居た。

「然し私の煩悶はそれでも永久に去りません」

佐治君の聲がひどく自分に響いた。

「私は父の條件に就いては暫く忍びませう。私の家庭に於ける煩悶は永久に去ることはありますまい。私の嗜好は碁を打つ以外には何もないのです。私は睡眠狀態に在る時の外は絕えず私の腦髓を苦めて居ます。私の腦髓を苦しめねば私

は寂しさに堪へません。碁は私の腦髓を休ませるものではありません。私の一日は責任ある時間を除いてはすべて苦悶であります。私には以前から一種の癖があります。衣類も唯一着でも品質の善良なるものを叮嚀に所持して居ることに滿足したいのであります。器物の如き物でも見て快いものでなければ私は日常の使用に堪へません。順境に立つて私が專門の學術を攻究することが出來たとしても到底私は間斷なく腦力を消耗して行かねばなりません。さういふ時にせめて妻の容貌が美しかつたならば私は妻に對することによつて私の疲勞を恢復することが出來るでありませう。他に嗜好のない私には妻の美貌といふことが私を慰むべき唯一の條件であるのです。だが私の妻は見るも厭はしい醜婦であります。逆境に立つて苦闘した結果內に潜んで居た鞏固な意志が歷々として容貌の上に表現されて來ました。私は妻に逢ふ時最初の一瞬間は必ず嫌惡と恐怖との念を起さないことはありません。家庭を形つたならば生活の安心から幾

分女らしい優しさを恢復することが出來ませう。其他に於ては年齢が絶對に許しません。從來私は妻の爲に悲しみ妻を救ふことにのみ專ら私の心を傾けて居ました。さうして稍恢復した私の運命は私と同棲せしめることになりました。それと同時に私の心には切實に妻を厭ふの念が湧起しました。私は九州に去ることに依つて愁眉を開きうる筈でなければなりません。然しながら妻に對する煩悶は私の心を更に掻き亂しました。私は此の幾年來自分自身のすべてをも公平に判斷しうると思ふ程煩悶に伴ふ思索と考慮とを養つて來ました。それでも私には私の家庭に光明を發見することは出來ないのであります。妻は商人の家に唯奢侈な少時を送つただけであります。俗用の書状だけでも私の代筆が出來るならばまだしものことであります。私の机の上の整理さへ安心して任せることは出來ません。私の後天性の道義心は頑強な父の反對をも顧みず此の如き絶望に近い妻と共に家庭を形らせるのです。さうして私は白痴に等しい私の子を

發達せしめるためにに父たるものの義務として能ふ限りの力を盡さねばなりません。養家に人となつた當時の私は妻の愛情を味ひ得た外どうして私の眼が美醜を分ち得たでありませう。私は後日の悔を貽すことに餘りに無邪氣であつたのであります。私は不滿足な妻を腦裡に浮べては絶えず憂鬱に陷ります。妻と私との間を繫いで放たないものは一片の道義心に過ぎません。私の信ずる程度に於ける基督教は毫も私の煩悶を解決してはくれません」—

淚がぼろぼろと憔悴した頰を傳はつて流れた。

「此の數年來私は幾度私の境遇に就て心のうちに解決を求めたか分りません。さうして何時でも無效に畢つて居るのであります。私の理性が築き上げたものを感情は直ちに根柢から破壞し去るのであります。破壞されつゝ私は身を處理し來つたのでありました。私は煩悶して憂鬱に陷る時そこに私の住居を求め得る如く感ぜられます。憂鬱の狀態が私に快感を與ふる樣になりました。私の身體

は同時に損はれなければ成りません。悲しい快感を得るために私の細胞は減少します。私は私の肉を殺がねばなりません。」

佐治君は暫く默した。

「私はすぐに福岡へ移ります。私の去つた後聞いてくれる人がありましたらどうか私を語つて下さい。私は從來嘗て人に打明けたことがありませんでしたが、あなたにだけはお話しせねば心が濟みません。」

又暫く間を措いて

「どうも御迷惑なことでしたらう」

佐治君の噺は途切れた。自分はかういふ場合どう挨拶していゝか分らなかつた。實際の處自分の心は弱いのである。自分は唯困つてしまつた。ふと見ると窓の外から沼崎君がホーレーキを擔いた儘微笑しながら覗き込んで居る。放課後にも學校に止つて日を暮すことのあるのは沼崎君と自分ばかりである。

「君はまだかい」

沼崎がいつた。

「もう歸らう」

自分は答へた。三人は一緒に學校の門を出た。

自分は家に歸つてからもぼつとして同情に堪へぬ佐治君の身の上を思つて居た。自分は座蒲團を枕にしてごろりと横に成つた。妻は私をどうしたのかと疑つた程である。自分は從來なかつたことが頭を往來した。心理狀態の變化を自覺した。自分の少年時代からの友人で文藝といふ方面に志した男がある。二年前に逢つた時彼は頻りに人生の意味といふことを語つた。自分には固より解らない。又解らうともしなかつた。彼は市ヶ谷とか牛込とかの見附を始終往復したといつた。あの見附の附近には大雨の後などにはよく土手の半腹が墜落するのを見る。それから土手の榎の木には鴉がとまる。落葉の後には寄生木のホヤがあからさまに見

える。少年が空氣銃を持つてそこらを彷徨ふ。或日そこを過ぎると少年の空氣銃が一羽の鴉を打つた。鴉はすつと落下した。土手に近づいた時鴉は最後の力を振はんとして羽を動かしたが其體は枯芝の中にどさりと大きな響を立てた。少年が駈けよつて攫へた時鴉は悲しい聲をあげて鳴いた。此の見附の現象に何等かの意味があるやうに感ずるといふのであつた。自分はそれは引力の作用だといつた。地殼の一部に空虚を生じた時陷落といふ現象の生ずるのは當然のことである。ホヤの木があつても何でもないぢやないか。鴉が落ちた時に大きな響を立てたのは落下率が加はつたからだと半分は戲談にいつた。此でも自分は天然を愛すること位に知つて居るのだといふと彼は天然の皮相を見たつて何になるといつた。去年の夏に逢つた時彼は又いつた。此の間或る不幸な女に逢つて其經驗を聞いた。女は泣いて訴へた。自分は其時女に向つて徒らに慰安の道を求めるよりも悲しめるだけ悲しんで運命に服從しなさい。さうすれば生存の意味が深くなる。それと同

時にあなたの値打が增すのだといつてやつたといつた。自分にはどうしても分らん、君等はつまらぬことに苦勞したものだとさういつてやつた。さうすると彼には君は百姓のことを知つて居るだらうといふから勿論だといつた。百姓が作物を栽培することに僞があるかといふからそれは神聖なものだといつた。百姓のすべては努力に在るぢやないかといふから努力の最高位に居るものだらうといつた。さうすれば神聖なる努力だらう。百姓は苗の一把は惜むまい。然しながら此を田に植ゑた時其一株を踏まれても怒るだらう。穗が出て花が咲いた時は一夜の嵐にも心を勞するだらう。稻が竹竿に掛けられた時更に之を惜むの度は加はるだらう。籾が玄米になつて玄米が更に白米に變じた時はどうである。白米の一粒だに惜まるゝ所以のものは百姓の力が段々そこに加はるからである。卽ち神聖なる努力の値打である。物質の値打ではない。籾からさうして白米に至る程物質は却て減却しつゝあるではないか。神社であつても佛閣であつても莊嚴の氣人を壓するもの

は之を造營した各の人及び爾後の繼續せる長い時の間之に奉仕する人々の敬虔なる態度の具體的表現である。人の力が人を壓するのである。君は態度といふことが解らぬと見える。研究する目的物の最も大なるものは天文の學だらう。小なるものは檢微鏡の學だらう。さうして兩者の間に値打の差別があると思ふか。そこに差別を見出さぬのは目的物に對する研究者の敬虔なる態度の全く同一なるが故である。學問といふものは神聖なる努力の結晶であると彼はいつた。自分はそれはそれに相違ないが。同一の努力をしても成功するものとせぬものとが有るぢやないかといつたら、それは天分の問題だ、各自に天分を盡すまでのことだ、其盡すといふ處が神聖なる努力だ、其態度に値打が存在して居るのだと彼はいつた。それぢや下手に生れた者は損ぢやないかといふと、損益といふ語はそんな處へ用ゐるものぢやないと彼はいつた。彼は又十日徒手安坐して之を一年半年若くは一ヶ月後に回顧してそこに何物がある。唯一日の旅行で十分である。努力は孰れに

多い。追憶の分量が孰れに多い。さうして其旅行に事件が加はれば加はる程、苦痛が加はれば加はる程、其事件や苦痛に對して旅行者の心理の働きが波打てば波打つ程そこに分量も意味も値打も生じて來るのぢやないか。意味ある人生、値打ある人生を微細な一點にも發見するのが我々の本領である。さうしてそれに努力することに依つて我々の意味も値打も增して來るのだといつた。自分は少し茶化して聞いて居た。小學校の生徒にでもいつて聞かせるやうにいふのが面白くなかつたからである。少年時代から隔てない間柄ではどうも頭にはひり憎いものだ。だがこんなことも其後はすつかり忘れて居た。佐治君の噺を聞いてふつと思ひついた。どうかすると廿年も前のことをふつと思ひ浮べることがある。心理學者は此の狀態を何とかいつて居るのだらう。佐治君を見るとひどく自分がちつぽけな樣に見えてならぬ。大學出身は幾人か見た。佐治君のやうな人には逢はぬ。それで居て佐治君は絕えず家庭の煩悶ばかりして居る人だ。狹い一局部に限られて居

る人に過ぎないのだ。そこには何があるのだらう。自分はぐたりと成つた儘起きられなかつた。

翌日佐治君は生徒に告別の挨拶をして早く歸つた。自分は放課後鬼怒川の上流の寫眞二三葉を懷にして佐治君の下宿を訪うた。荷物は大抵通運に託したといつて室内ががらりとして鞄一つだけが殘されてあつた。佐治君は鞄の中から白い晒しの切を出して茶器を拭つて茶を侑めた。自分が寫眞を出して見せると佐治君は熟視した。鬼怒川の上流が天下の絶勝であることや、殊に豪雨の後に於ける水勢の劇甚なことや、自然の絶大なる威力が峽谷の民に迷信を抱かせて居ることや種々なることを語つて見た。佐治君は

「私は自分の境遇と性情とがかういふ深山を跋渉することを許さないだらうと思ひます。あなたに依つて此の大觀に接することを得たのを感謝致します。私は固より美を好むものであります。美術といふものゝ如何なるものなるかも學ん

で居ります。然し私の心は一方に非常な薄弱なものでありますが、錐を以て穿たねば痛みを感ぜぬ程强烈な刺戟にも堪へて居ます。私は現在の畫家の描いた多くの誇張した山水畫を見ることを好みません。誇張が繪畫の要素の一つであることは私も信じて居ます。然し現在多くの繪畫は誇張に伴ふ浮薄と虚僞との惡感を催さしむるのであります。だがあなたの寫眞は私の前に眞實といふものを現はしてくだすつたのです。眞實は私に於て第一の滋味であります。」

といふ意味のことを語つた。

「鬼怒川の分ならば幾らもありますが宜ければ今夜印畫して置きませう。明日會へお出掛の序に一寸寄つて見て下さい」

自分は更に

「どうかあちらへ御出に成つたら勉めて郊外の散歩でもなすつたらどうですか、あなたの健康は必ず恢復されるに極つて居ると思ふのですが」

と極めて普通なことをいつて見た。

「御忠告に從ふやうに心懸けませう」

佐治君はぽさりとしていつた。

次の日は日曜日であつた。職員間には佐治君に對する送別會が催された。自分は昨夜印畫に時間を費したので起きたのは十時であつた。空はからりと晴れて狹い庭のコスモスの花が氣輕相に見えた。自分は水洗ひした印畫を縁側へならべ干した。それが乾いたので自分はガラスの定規で端を切つては臺紙を貼りつけた。そこへ佐治君が訪ねて來た。佐治君は庭から通した。座敷のうちは雜多の寫眞や古い臺紙や新聞紙やごつたに散亂して居た。潔癖な佐治君は坐るに快くなかつたのであらう。此の日は自分の妻は同僚の細君同士に何か寄合があるとかで不在であつた。自分は冷えた茶を侑めた。佐治君は箱からぶちまけてあつた寫眞を一枚々々と見て居た。自分は其間水洗ひがよく出來てなくても變色することや、糊が

惡くても矢張り變色するといふことやそれから此の貼り附けることが米國では一つの技術と見做されて居ること抔を語りながら一心に手を動した。時間が大分經つた。日が斜に射し掛けて來たやうである。自分の手もとも薄闇くなつたかの樣に心得た時玄關でおとづれる聲がするやうに思はれた。

「どなたかお出のやうですが」

佐治君は注意してくれた。

「こんちは」

といふ低い叮嚀な聲である。自分は其儘立つて見た。庭の竹垣からすくすくと立つた陰氣な赤いコスモスが一杯に日を浴びて居る。其蔭にぼんやり立つて居るのが見えた。出て見るとみすぼらしい爺さんが何か天秤棒を卸して居た。

「何だい」

自分はいつた。

「へえ、鮹ですが、これつきりで、安く致して置きますから……………」

哀れつぽい爺さんである。

「幾ら目あるか掛けて見ないか」

自分は財布を出しながらいつた。爺さんは腰へ挿した秤を出して籠を引つ掛けて秤の棹を目よりも高く揚げた。

「おい爺さんそれぢや餘ンまりはねるぞ」

「へえへえ」

と爺さんは少し分銅を動かす。どうも變である。爺さんはやがて

「旦那どうぞ見ておくんなせえまし」

自分へ秤の目を讀めといふのである。爺さんは又自分が出した小笊へ鮹をあけて更に濡れた竹籃を掛けてさうして正味が幾ら有るかと聞くのである。

「二百四十五匁だそれで相場は幾らだい」

「へえ、六掛でがすが今日は荷ばたきですから五掛五分の勘定でようがす」
「六かしい勘定だな、十三錢四厘七毛五朱か、爺さんそれぢや分るまい、十三錢五厘やらう、さあ廿錢銀貨だぜ此は」
爺さんは銀貨を受取つて暫く目の近くへ持つて行つてへりをこすつて見たりして穢い財布を空に成つた籠から出してざらざらと錢を手の平へまけた。
「旦那どうぞこれからお剰錢だけをとつて頂きてえもんですが」
「お前私に取れといふのか、それぢや六錢五厘だよあゝもうとつたよ」
爺さんは文久錢の交つた小錢を又ざらざらと財布へ入れて長い紐をくるくると絡んだ。
「まあお珍らしい、あなたお出下すつたのでせうか、大層遠方へお出でなさる相ですが、……そこへお立せ申してどうしたんでございませう」
妻の聲で挨拶して居るのを聞いてふと見ると妻は二人の子を連れて歸つて來た

處である。何時の間にか佐治君が竹垣の側に立つてこちらを見て居るのである。送別會の時間が切迫したので暇を告げようと思つて出て來たのであつたらう。

「あなたまあ一寸おあがんなさいまし、お茶でも召し上つて下さい」

妻はお世辭をいつて居る。自分は氣がついたから

「どうもうつかりして居て御迷惑でしたらう。私は寫眞を二三枚仕上げてあとから行きますからどうか一足先へ行つてください」

「さつきからお出でくだすつたのでせうか、私は唯今お出でになつたばかりだと思ひました」

妻は佐治君へ挨拶しながら自分の方へ近づいた。妻に抱かれた子は生えはじめた白い歯を出して佐治君へ向つて兩手を振りながら母の手の上で立つたり屈んだりして嬉々として騒ぐ。

「本當に此の子は人怖ぢがないのですから、まあどうしたもんでせう此の容子は」

佐治君へ挨拶して妻は
「今日も奥さん方で大笑ひなのねえ」
と獨りでいつた。さうして自分を見て笑ひながら
「あなた厭だ、小笊なんぞ持つてどうしたんでせう」
妻の腰にくつゝいてた次男は小笊の中を見せろとせがむ。小笊を次男の頭へ持て行くと鮒の水がぽたりと垂れる。首を縮めて甘えた聲を出して騒ぐ。そこらの子供と遊び暮した板面者がまた一人門から駈け込んだ。下駄を一間もあとへ飛して駈けあがつた。佐治君はまだ去らずに居る。
「いま鮒を買つた所さ」
自分は爺さんのことを妻に語つた。
「お爺さんお前さん眼が惡いの」
妻は改まつて聞いた。

「へえ、わしも近頃すつかり見えねえもおんなじに成つてしめえまして」

「そんなことでお前さん胡魔化されやしないかね」

「結構これで出せえすりや烟草錢にや成りますからね、有難えもんでがす。旦那方わしの顏を知つてますからなんだかんだ氣をつけてくれます、なあにわしがたべるだけなら日に二合もいりましねえから」

「能くねえまあ、お前さんそんな年に成つてもう商賣に出なくつてもいいだらうがねえ」

妻は同情してかう聞いた。

「わしも息子は早く持つたんでがすが一人前になつたと思つたらころりやられちやつて、倒見たのがわしのくされでがす、それから貰ひ子をしましてね、廿五まで育てゝうつちやられつちめえました、思ひ出すと忌々しいことでがすが、嫁を取らねえで置いたのが間違でがしたんべか、到頭女に騙されて連れ出され

てしめえました。足尾の銅山に稼いで居るつてちらつと聞いたこともありましたが、殘せるやうだら結構でがすが、殘りやしますめえ、食つて通るだけならこつちに居たつてよさ相なもんでがすが、此も好きぢやしやうがあせん、何も其女だつて女房にしちやなんねえといふ譯でもねえのに、わしもこれ息子が生きてりやこんな目にや逢はねんでがすが、こりやいゝ野郎でがしたよ」

爺さんは天秤を杖に突きながら

「何でも實子でなくちや駄目でがす、自分の子供が寶でがす」

呟くやうにいつた。

「お前さん、足尾に居るのが分つたら連れて來たらどうなの」

妻はいつた。

「こんな厄介者の處にや戻つちやくれますめえ、わしもはあつくづく忌々敷くつて、七十からに成つてからいに足腰がきかなくなつてからうつちやられちやみ

じめなもんでがす、わしも此で幾らも擔いちや出ねえでがすが夜は随分草臥れます、去年と今年ぢや大變な違げえでがす、爭はれねえんもんです、一年たあいはれません、わしも何處でのたるか知れたこつちやありましねえが此も因緣だと覺悟はして居ますのせ：．仕樣があせん、私もはあ野郎ゞこたあ諦めましたから：：：：：：」

自分も妻も唯爺さんを見て立つた。佐治君も竹垣の側に立つた儘凝然として居る。日は漸く闇くなりかけた。爺さんは見えない目を瞬つた。

籠の繩を天秤の端へ絡んで暫く思案したやうにして居た。

「心得違げえせえなけりや憎い野郎ぢやあがあしねえが、なあに手前だつて碌な目にや逢はれねえから駄目でがさあ」

爺さんは急に氣がついたやうに

「難有うごぜえました」

といつてのめり相な體へ天秤を擔いだ。
「また買つてあげるからお出よ」
妻は後から聲を投げかけた。
「へえへえどうぞ」
爺さんは竹の杖を突いてよぼよぼと出て行つた。佐治君も續いて出た。二人の姿は程なく薄暮の中に隱れた。夜は段々濃く、立つて居る自分を壓して閉ぢた。

（明治四十二年十月）

鄰室の客

一

私は品行方正な人間として周圍から待遇されて居る。私が此處にいふやうな祕密を打ち明けても私を知つて居る人の幾分は容易に信じないであらうと思はれる。祕密には罪惡が附隨して居る。私がなぜそれを何時までも匿して居ないかといふに、人は他人の祕密を發くことを痛快とすると同時に自分の隱事をもむき出して見たいやうな心持になることがある。そこには又微かな興味が伴ふのである。

私は山に遠い平野の一部で、利根川の北に僻在して居る小さな村に成長した。村は靜かな空氣の底に沈んで櫟林に包まれて居る。私の村は瘠地であつたので自然櫟林が造られたのである。丈夫な櫟の木は伐つても伐つても古い株から幹が立

つて忽ちに林相を形つて行く。百姓は皆ひどい貧乏である。だが櫟がずんずんと瘠地に繁茂して行くやうに村には丈夫な子供が殖えて行く。或時は其聚つて騒ぐ聲が夕燒の冴えた空に響いて遠く聞えることがある。私は自分の村を好んで居る。さうして櫟林を懷しいものに思つて居る。櫟林は薪に伐るのが目的なので團栗のなるまで捨てゝ置くのは一つもない。それで冬になつて木枯が吹きまくつても梢には赭い枯葉がぴつしりとついて居る。春の日が錯綜した竹の葉の間を透して地上に暖か相な小さな玉を描くやうに成つてすべての草木がけしきばんで來ても、櫟の枯葉は決して落ちまいとしがみついて居る。「ぢい」と細い聲を引いて松雀がそこに鳴くやうになれば地上には幾らかの青味を帶びて來る。然し櫟林は依然として居る。四月になつて、春がもう過ぎて畢ふと喚び挂けるやうに窮屈な皮の間から手を出して棕櫚の花が招いても只凝然として死んだやうである。諦めたやうに棕櫚の花がだらけて、春はもうこぼれたやうに殘つて居る菜の花にのみ

係を留めて來た時其赭い枯葉を咄嗟に振ひ落して蘇生つたやうになる。さうして僅か四五日のうちに新樹の林になるのである。いつて見れば春といふ季節は櫟林と何等の交渉もない。私は此の植物に同化されたといつていゝのであらうか、私の一身は極めて櫟林の生態に似て居る處がある。さう自覺した時私は櫟林が懷かしくなつた。隨つて櫟林に向つていつも注目を怠らない。春雨が浸み透つた梢の赭い葉が、頭を擡げ出した麥の青さと相映じて居るのに見惚れることすらあるのである。然しこんな下等な樹木を好んで居るといふものは恐らく他にはないであらう。

私は櫟林が春と交渉がないといつた。然しながら長い春の間には櫟も他の樹木の如く皮と幹との間から水分を吸收する生理作用を怠らない。私の一身も春といふ期間に於て索莫たる境涯に在つたのである。それでも櫟が窃に水分を吸收して居るやうに、私にも亦隱れた果敢ない事柄がある。私がはじめて此の世の空氣を

吸うて泣いた聲は私の家では四十八年目に聞かれた聲であつた。其時母の乳が乏しかつたので普通ならば「さと子」といつて他の家へ託される筈なのであるが、私の爲めには特に乳母が抱へられた。どういふものか私の家へ來る乳母の乳が止つて畢つたので前後十一人の乳母が交代された。其頃はそんなことの出來る程私の家には餘裕があつたのである。十一人目の乳母が虚弱な私を育てた。乳母は田舍には滅多に無いといはれた位縹緻のいゝ女だといつた。私も幼い時には非常な綺麗な子であつたので、後には女に好かれるといふやうなことを能く見る人がいつた相である。これはずつと後になつてから聞いたのであるが有繫にそれを聞くことは不快ではなかつた。私には又かういふことがあつた。私はふと一人の女を見るのが好きになつた。女は私よりも五つ六つ年嵩で、私は十一二であつた。私は其頃近い町の姻戚の家から學校へ通つて居た。稍暑い日に女は蝙蝠傘を翳していつでも同じ時刻に學校の前を往復するのであつた。女は何かの稽古にでも通

つて居るらしかつた。私は暇があれば學校の門に立つて見た。唯其女を見るのが好きであつたまでゞある。私が其時少年の身でさうした心持で立つて居ようとは人の知る筈はないのである。其癖私は其頃はまだ他人が女を批評していゝとか惡いとかいふのを聞いても、どんなのがいゝのか惡いのか分らなくてさういふのを不審に思つて居た位なのであつた。それで其女のことは其後久しく忘れて居た。ふと思ひ出してからは屢記憶から喚び返す。すらりとした矢絣の單衣姿で綠の蝙蝠傘をさして居る。日光が仄かに蝙蝠傘を透して化粧した顏が薄らに靑く匂ふ。私が最初に思ひ出した時には女の姿はそれ程に明瞭ではなかつた。それがだんだん記憶を反覆して居るうちに女の姿がはつきりとかう極つて畢つたのである。私は兎に角こんなことであつたから性情が何等の抑制もなく行つたならば曠野のうちに彷徨ふやうな索莫たるものではなかつたであらう。私は病氣の爲めに斷然廢學せねばならぬやうになつた。其時私はまだ廿にもならなかつた。私は復た櫟林

に沒却して此の靜かな村の空氣を吸はねばならぬことになつた。全く孤獨の境涯に移つた。日さへ明ければ田畑に出る百姓は私の相手ではなかつた。心身共に疲勞した私と何時までゞも相對して居てくれるものは樹木の外にはないのである。それからといふものは厭だと思つて居た櫟の木もだんだんに好きになつた。私は健康の恢復しかゝるまで數年間徒然として過した。其間女といふ念慮の往來したことはあるが自分ながら明かにどうといつて述べて見る程のこともない。私に妻帶を勸める人もあつたが其噺を運ぶのには私の心は餘りに沈んで居た。私が周圍から品行方正な人間として待遇されて居たのも當然である。私が斯ういふ狀態を持續して居たのは病氣といふ肉體の缺陷と私を挑發する機會が一度も與へられなかつたからとでなければならぬ。私の村に相手になつてくれるものがないといふのは私と百姓との間には生活狀態から自然著しい隔てを生じて疏通し難い點が多い爲めである。百姓の子でも麥の臭に滿ちた畑の中に働いて居る時や、熊手を持

つて櫟林の間を落葉掻に行く處をちらりと見た時や其姿が有繋に目を惹くことがないではないが、それは唯一瞥した感じに過ぎないので、暫くも私の心を動かすには足らぬのである。私の生涯の春もこんなであつたけれど赭い枯葉を振ひ落したやうに時期が來つて忽ちに變化した。さうして人一倍の陋劣な行爲を敢てしたのである。それは私の家に一人の女が來たからであつた。

二

私の村の學校の敎師に溝口といふ老人があつた。彼はみじめな殘骸をそつちへこつちへ逐ひやられて到頭邊鄙な私の村へ逐ひつめられたのであつた。自ら士族だといつて居たがさういふ俤もあつた。擊劍をしたしるしだというて皺だらけの手の甲を見せることがあつた。目もどうかするとぎろりと光ることもあつたが生活の壓迫からいつとはなしにさもしい心が出たと見えて酒でもやるとへこへこと

頭を下るのであつた。遲くまで子があつたと見えて夫婦共に七人の家族だといふことを聞いて居た。老朽の教師の俸給で七人の糊口は容易なことでないのだから到底好な酒までには及ばないのである。然し性來の子煩惱と見えて能く生徒の世話をするといふので父兄とは懇意にして居た。そつちこつちと訪ねては酒にありついて居た。さうして其歸りには茄子でも芋でも其季節のものを貰つて提げて行く。自分の小さな風呂敷包を首へ括つて兩脇へ大きな南瓜を抱へて行くこともあつた。よろよろとして行く處を見ると遊戲に耽つて居る村の子供が騷ぎながら先生の後に附いて部落の境まで行く。風呂敷が解けて茄子でも芋でも轉げ出すと教師は慌てゝ拾つては袂へ入れる。生徒はわあと先を爭うてそれを拾ふ。先生は更に慌てる。生徒は各手柄でもしたやうにそれを先生へ返すのである。斯ういふ教師が其頃まだ世間に存在して居たといふのは不審に思はれるやうであるが、それを蔵つて畢ふことが忽ち其一族に悲慘な目を見せなければならないので情實とい

ふものが幸に餘命を繋がしめて居たのである。庭に散つた木の葉がそつちこつちと掃き寄せられるやうに自己の運命の終局までには幾多の學校を移つて歩かねばならぬ。然しかういふ教師は役に立たぬ割合には父兄の間には氣受がいゝ。それといふのは子煩惱で能く生徒の世話をするのと應對が砕けて居て他の教師のやうなツンとした所がないからである。百姓の目には袴を穿いてる教師の地位は立派なものである。だからさういふ人間から親しい言葉を挂けられるといふことが彼等には滿足なのである。私は此の教師を憫むべきものと思つて居た。私の家は父母と私と唯三人のみの家族であつたから此の教師の私の家を訪問すべき機會は少なかつた。それでも時々來ることは來た。如何にも控目にして居る容子を見ると私の母は不取敢酒を出さぬ譯には行かなかつた。其歸る時には又野菜の一包が彼の手に在つたのである。或時彼はまた非常に恐縮した容子で私の家へ來た。酒が其元氣を恢復した時に私の母へ嘆願があるといひ出した。それはかうであつた。

彼の長女で、彼の妻の郷里の知合の人が媒酌で其近村へ嫁に行つたのがあつた。それが一年ばかりになるのだがどうしても亭主が厭だといふので逼げて來て畢つた。それが遂近頃のことである。假令下女奉公をしても酌婦に賣られても亭主の側へもどるのが厭だといつて聽かぬ。厭だといふものを無理に逐ひ歸して間違があつたら取り返しのつかぬことである。酌婦に落ちぶれさせることも忍びられない。さうかといつて自分の家へ置いたのでは其の日其の日に困つて畢ふ。どうかあなたの家に暫く預つて下女代にでも使つておいて貰ひたい。針仕事は一人前のことは差支がないからといふのであつた。私の母も氣の毒に思つたし、僅に三人の家族のうちでそれも私の父は大概他出して居るので家に在るものは母と私二人のみで、傭人が寂しい夜をやつと賑はして居たに過ぎない不自由だらけな生活であつたのだから、針仕事の出來るといふのを幸に一時預つてやらうといふことにも成つたのである。私も其時どういふものか私の家に女が一人殖えるといふこと

が決して惡い心持はしなかつた。それで私は其次の日の夕方それがどんな女か見たいやうな氣もしたので行つたこともない教師の寓居へ用をかこつけて行つて見た。ひどい穢い住居であつたがそれでも厭な心持も起さずに歸つて來た。學校は私の家からでは大分隔つて居たので教師の寓居も遠かつた。二三日して母といふのが其女を連れて來た。女の弟といふ小さな子も一緒に手を引かれて來た。母といふのは教師とは大分年齡が違ふやうに見えた。さうして教師の無頓着なのと違つて仲々一癖あり相な容貌であつた。女は其夜から私の家の人となつた。私の情史の第一頁が此れから染められるのである。女は既に男といふものゝ間に築かれてある一重の垣が除かれた身であつたのである。女はおいよさんといつた。二十一だとかいつたが少し大柄であつたので二つ三つは隱して居るかと思はれた。おいよさんにはくつきりと色の白い所が第一の長所であつた。夜になると能く吊しランプの側で髮を束ねた。以前熱病に罹つたことがあつて其後髮の毛が恢復しな

いのだといつて夜束ねた髮も朝になると耳のあたりへ短い毛が少しこけて居るのであつた。おいよさんには何處といつて格別にいゝ所はなかつたが人の心を惹くのは其涼し相な目であつた。然しぢろりと横を見た時には意地の張つた女であるといふことを思はしめた。それは窮乏な家庭に成長した丈に野卑なさもしい處もありはあつたが、それは極めて冷靜に見ていつたことで母も私も同情して居たのであるからそんな缺點を見付けようといふ念慮は其時ちつとも持たなかつたのである。敎師の子だけに手紙を書くことが女としては達者であつたのも母の心に投じたのであつた。おいよさんは每日針仕事と炊事の手傳とをして居た。唯時々その大柄なのには似合はず加減が惡いといつては臥せることがあつた。敎師はおいよさんが來てから遠い處を能くおとづれた。好きな酒も非常に遠慮して時には遁げるやうにして飮まずに歸ることもあつた。さうしておいよさんが平生から虛弱であつたことをいつて母へ哀訴するやうに賴んで行くのであつた。敎師の腰の

低い割合においよさんにはツンとした所があつた。我儘に育てられた女であつたのだ。尤も此は私がおいよさんと別れてから母も私も思つたことである。私の病氣のために心配した母はおいよさんにも深く同情したのである。障子の蔭で針仕事をしながら

「おいよさんもお弱くて困りますね。それに何だか思はしくないんですつてお父さんも大抵の苦勞ぢやないんでせうね。あなたも我慢することは出來ないんですかね」

私の母がいつたことがあつた。

「どうしても私厭なんでございますから」

暫くたつてからおいよさんの聲でかういつた。

「それでもあちらでは戻したいといふんぢやありませんか」

「どうでございますか」

「此間あちらから人が來た相でしたね」
「そんなことを父が申して居りましたが」
「籍はまだ送つてないんだつてましたね」
「まだこちらにございますから私さへ戻らなければそれまでなんでございます」
「そんなことを聞いては何ですがそれには譯もあるんでせうがね」
「私どうしても厭なんでございます」
私は襖を隔てゝかういふことを聞いたことがある。私は耳を欹てた。おいよさんは戸籍は送つてないといつたけれど夫のある女である。夫のある女といふものは決して善い感じを與へるものではないのである。然し私に近くおいよさんの居ることは私に少しも不快の感を起させない。おいよさんが私の家に少し落ち付いた頃私は其涼し相な目を見てふと何處かで見たことがありはしないかと思つた。追求の念が絶えず私をそゝつておいよさんの顏を見させたのである。おいよさん

はこれを何と思つたか、私がおいよさんを見る度においよさんも私を見返すのであつた。

三

其頃からでは餘程前のことであつた。或遠方の姻戚に葬式があつたことがあつた。夏といつてもまだ暑いといふ頃ではなかつたが、竹の筒には百合の花が供へられてあつた。藪の草の中などにはまだ山百合が膨れ出しもしなかつた位であつたから、草花の好な私は其白い花が何といふ百合であるかと見て居たのであつた。其土地は私の村とは違つて樹立も稀に只田が濶々として何處にも日が一杯に射して居た。そこらの庭の隅には其白い百合がぎつしりと花を持つて簇生して居るのを見た。田が連つて居る土地だけに私の村のやうではなくどこにも空地といふものは極めて少なかつた。棺が庭へ卸された時見物に集つた村の者と客とが庭にぎ

つしり詰つた。私は垣根の側に混雜を避けて居た。私の側には見物の女が三四人居た。私はうつかりして居ると其中の一人があれと喫驚したやうにいつた。私に一番接近した十五六の女の子の背負うて居た乳飲兒が其女の子の肩へ挂けて白く乳を吐いた。さうして其とばしりが私の紋付の羽織へかゝつたのであつた。女の子は赤い顏をして居る。後へ廻した片手を外して手袋で私の羽織を拭かうとする所であつた。私は手巾を出してそつとふいた。女の子は挨拶のしやうもなく唯はらはらして居た。日がすぐに羽織を乾して乳の痕がうすく袂に印された。私はふと又肩の處に褐色の粉がぽちつと附いて居るのに氣がついた。指の先で彈いて見てもそれでも微かに粉が殘つて居た。其時私の側からもう距つた先刻の女の子を人越しに見た。乳飲兒が白い百合の花を持つて居る。其百合の花粉が私の肩に觸れたのであつた。女の子は唯それだけのことで私の記憶に存して居る程のことはなかつたのである。だから其後更に思ひ出すことも無かつたのであるが、おいよ

さんを何處かで見たことのある女のやうだと暫く案じて居た末到頭これが記憶から喚び起されたのであつた。おいよさんはさう思つて見ると其時の女の子である。或時私はそれとはなしに其土地に居たことがあるかないか聞いて見た。さうして其子がおいよさんであることを慥めた。それにしても私は其時の女の子と今のおいよさんとの容子が何から何まで變つて居るのには驚いた。私の夏羽織は其儘になつて居た。私のやうな邊鄙の土地に居るものは晴衣の夏羽織を用ゐることはそれは滅多にないことなので幾年でも仕立てた儘に保存されて居るのである。乳の痕が微かに見えて居た。私はおいよさんに見せて目を睜るのを見た。かういふ些細な事實がおいよさんと私との間を近くすることを速めた。それからといふものはお互に幾分遠慮がとれて來たのであつた。おいよさんが來たばかりの頃はまだ單衣であつた。風呂敷包一つ持つて近くの叔母の所へ客に行くといつて出た儘遁げて來たのだからといつて、おいよさんは紺飛白の洗ひ曬しと中形の浴衣と

二枚より外持つては居なかつた。浴衣を着て襷掛になるとおいよさんは一寸人目を惹くのであつた。紺絣は柄が不似合なので別人のやうになるのであつた。秋も涼しくなつたのでおいよさんは其紺絣ばかり着るやうに成つた。私はそれを心に不滿足に見て居た。だがこれまでも私には妙な一つの癖があつた。一人の女を始終見て居るとすると惡く見えて居る所がなくなつてくれればいゝがと思ひながら見ては又見るのである。惡い處が幾らづゝでも私の目に惡く映る度合の減ずるやうにと心掛けるのであつた。私は見馴れることに勉めたといへばいへるのである。おいよさんの紺絣の姿もだんだん見づらくないやうになつた。おいよさんは私の冬着の支度に骨折つて居た。或日私が秋草の植込に水を注いで居た。私のやうな邊鄙な土地で秋草を作らうといふものは私の外には一人もないのである。私はそれを自慢の一つにして居たのである。

「あなた一寸お出でなすつて下さい」

おいよさんは呼びに來た。座敷へ行つて見ると

「これを通して見て」

縫ひ上げだ綿入を二つ襲ねておいよさんは私の後へ廻つた。

「どうするんだい」

どうするか私に分らないことはないのだが、默つて立つて居るのが極りが惡いやうな氣がしたのでかういつたのである。私はどこまでも初心であつた。

「あらまあどうでもようござんすよ」

おいよさんは構はずに着物を私に引つ掛けさせて、後で膝をついて裾を合せて引張つて見たり、前へ立つて袖を横に引つ張つて見たりして白いしつけ糸をとつて口に入れては齒で嚙みながら

「もう何處へ行つてもようござんすよ」

おいよさんは着物をとりながら私を見て嫣然とした。おいよさんは遠慮がとれ

ると共に私に對してはきはきして來た。私の家庭に於いておいよさんは便利な人になつた。特に私には日常のすべてに於て女といふものゝ便利なことをつくづくと感ぜしめた。

秋も冷かになつた。教師はよく來たがおいよさんの爲めに袷の用意をして來ない。母はどうで屆けてよこす見込はないのだらうと唐棧の袷地を買つてやつた。夜ランプの下でおいよさんが袷地をいぢりながら母へ義理を述べた時には私は心窃にうれしかつた。次の日においよさんは反物の尺を測つて一寸考へて復た測つてそれを裁たうとして居ると、教師からだといつて近所から行く生徒が手紙を持つて來た。おいよさんは反物を擴げた儘すぐに封を切つた。暫く物案じをして居たがすぐに其所を始末して母へ暇を告げて出て行つた。おいよさんは其日は歸らなかつた。次の日も歸らない。おいよさんの針仕事は依然としておいよさんが束ねた儘そつくりと柱の側に置かれてある。私の心は何んだか形容し難い寂しさを感

じた。此の時限り私はおいよさんに別れたのではない。それにも拘らず私はおいよさんに對して前後に此の時程果敢ない思をしたことがない。どうしても心が騷いでならないのであつた。おいよさんは三日目の夕方私が跣足で秋草へ水をやつて居る所へ風呂敷包を抱へてもどつて來た。

「まだ極りがつかないもんですから人が來たんだつていひました。私はいつだつておなじなんですから駄目ですよ」

かういつて

「それでもね、私が置いて來た着物は二枚ばかりとゝきました。私がこゝへ來て居ることは來た人も知らないんですからね。どこへ行つて居るんだつて頻りに聞いた相ですよ」

おいよさんは寂しく笑つた。どうもはきはきとして居ない。おいよさんは又何かいはうとしたが傭人が畑から歸つて來たので私のもとを去つた。私はおいよさ

んを見てひどく不安に感じた。それでも其夜ランプの下で自分の袷地を裁つて威勢よく篦をつけて居るのを見て少し心がゆつたりしたやうであつた。おいよさんの家からはそれつきり何ともいつて來なかつた。おいよさんは依然として私に便利な人であつた。私は外出する度毎においよさんの用を達してやつた。私は自分から何か欲しいものはないかと聞いてやるのであつた。赤い綿フランネルだのメリンスの半襟だの私はおいよさんの爲めに買つて來た。おいよさんのはきはきした態度は初心な私の眼を掩うたのである。

或晩私は便所へ立つた。便所の戸を開けようとした時私はおいよさんの部屋の障子が一杯に明るくなつて居るのに氣がついた。便所に近い六疊の間がおいよさんの部屋にあてられてあつたのである。夜はもう何時位であつたか知れなかつたが秋雨が止まず降り注いで居る。廂を掩うて居る桐の木がもう落葉して居るので其落葉へ雨はばしやばしやと打ちつける。廂へもじとじとと打ちつける。さうか

と思ふと草鞋で歩いて來る足音のやうにしとしとと遠い響が聞えて來る。蟀が滅入るやうに鳴いて居る。さういふ錯雜した響の中に夜はしんとして更けつゝあるのを感ぜしめた。便所を出る時にもおいよさんの部屋は障子が一杯に明るくなつた儘である。暫く立つて見たが障子の内は唯靜かである。おいよさんはどうして居るのであらうか、或はうつかり眠つて畢つたのではなからうか、眠つたとすると枕元へ引きつけたランプは危險である。それで私は障子に近づいて外からがたがたと輕く障子を動かして見た。起きて居るならば何とか驚いて聲を立てる筈であるのに一向返辭もない。私は有繫に心が咎めながら到頭障子を開けて見た。おいよさんは熟睡して居る。こちらを向いてさうして蒲團の外へ延した右の手から雜誌が披いた儘こけて居た。大縞の浴衣を着たしどけない姿で肩が掛蒲團から脫け出して居た。枕元の二分心のランプは心が一杯に出て油煙が微かにホヤの上に立つて居る。さうして室内はほのかに臭くなつて居た。おいよさんは深夜に障子

を開けて私がはひつて來たとは知らない。さうして輕く體に波を打たせながら息づく外に微動もしない。ランプの光はおいよさんの無心な白い顔を見守つて居る。私は立つたまま堅くなつたやうになつて見おろした。おいよさんの口もとの筋がどうしたのか少しぴくぴくと動いた。私はつとしやがんでランプの心を引つ込めた。裾がおいよさんの手に觸れた。おいよさんはぎよつと目を開いた。さうして驚いた機會にすつと一時に息を吸ひ込んで、まあと一聲出して打消すやうに手を擧げた。おいよさんは手を引きながらランプのホヤを倒した。おいよさんは慌てゝ身を起しかけた。其時はもう私が火を吹つ消したのでおいよさんの姿は唯目前に見えなくなつてしまつた。それと同時に生暖い風がふわりと私の肌に感じた。

四

翌朝目が醒めて見ると秋の日が障子の腰にかつと光を投げ掛けて居た。私は暫

くもぢもぢして天井の木理を見つめて居た。以前からどうかすると酷く體ががつかりして居て唯ぼうつとして時間を過すのが屢であつた。これは私が病氣の爲であつた。小勢であるだけ私の家はひつそりして居るのであるが今朝はそれが殊更靜に感ぜられた。障子の外では庭で傭人が陸稻を扱きはじめたと見えてぼりぼりと懶相な音が聞える。又目を瞑つて居ると襖がそつと開いたやうである。ふと見るとおいよさんが私の部屋の外へ塵拂と箒とを掛けに來たのである。おいよさんが箒を取りに來た時は私はまだ熟睡して居たらしかつた。襖をそつと締める時おいよさんは冠つて居る手拭の下から私を見て嫣然とした。おいよさんが嫣然とする時には屹度口が小さく蹙まつて鼻の處に微かな皺が寄るのであつた。私は身内がだるくなつて居るので、其時はおいよさんを見て厭な心持――厭といふ程でもないが――がした。庭先から聞える懶い稻扱の音を聞きながら又うとうととして漸く起きたのは十時近くであつた。毎朝の習慣で私は便所へ立つた。窓の障子を開

けて見ると西に聳えた杉森の梢が二尺ばかり間を隔てゝ廂にくつつかうとして居る。其間から空が見える。夜の降りが強かつたので秋の空は研ぎ出したやうに冴えて見える。杉の木の間から見える空も青く光つて居る。横からも竪からも秋の空が窓を覗いて居るやうである。廂の上に立つた桐の木へ啄木鳥が一羽飛んで來た。丈夫相な爪先で幹にしつかとつかまりながらぼくぼくと嘴で叩いては時々きゝと鳴く。さうして幹をめぐりながら上部へのぼつて行く。私は凝然として見て居た。私は以前病氣で居る間からぼうつとして畢つて居る時は或物に目をつけると喪心したやうに何時までも見て居るのが癖であつた。其ぼうつとして見て居ることから他へ移る運動が懶くてたまらぬのであつた。其朝もさういふ心持で啄木鳥に見入つたのであつた。威勢のいゝ啄木鳥は赤い腹を出したり黒い脊を見せたりしてぼくぼくと幹をつゝいて居る。其姿は赤い半股引を穿いて尻をねぢあげて大形な飛白の羽織を引つ挂けたやうである。さう思つて見るとぐつと後へ首を引

いては嘴が痛からうと思ふ程ぼくぼくと強く叩く其動作がひどく滑稽で私は思はず興味を持つた。私はぼうつとして何かに興味を持つて來ると先から先へと瞑想に耽つて舉ふことが度々であつた。私は足が痺れたので漸く便所を出た。自分の部屋の障子を開けると空はからりとしてすべてが皆きらきらした日光を浴びて居る。傭人は四人で向合になつて陸稻を扱いて居る。各左手に積んだ陸稻の束をほぐしてはぶりぶりと扱いて居る。女が一人其扱いだ藁を小さな束に拵へて居る。小さな蜻蛉が薄い羽を日にきらめかしながらすいすいと飛びめぐつて居る。庭におりて見ると杉の梢にも蜻蛉の羽がきらきらと光つて見えた。私は水浴をするために楊枝を使ひながら井戸端へ行つた。其所には井戸端を覆うて葉鷄頭が簇生して居る。赤い葉が目に眩きばかり燃え立つて居る。白い手拭を冠つたおいよさんが葉鷄頭の蔭に洗濯をして居る。盥の中には私の着物がつけてあつた。朝から暖かなのでおいよさんは例の浴衣を着て居た。私が井戸端へ立つと

「汲みませう」

おいよさんは急いで水を一杯汲んでくれた。私はおいよさんのする儘に任せた。釣瓶の水がぼんやり立つて居た私の下駄へざぶりとかゝつた。

「まあ濟みません、私が後によう〳〵洗つて干して置いてあげますから」

さういつておいよさんは手拭の下から私をちらりと見た。只水を汲ました丈では何でもないことである。然し私は其時おいよさんに對してどういふものか心が臆したのであつた。おいよさんも言葉遣がいくらか違つて居た。私はふと傭人を見た。二人はこちらに後を見せて居る。二人がこちらを向いて居る。其時陸穂を手にした儘一人がにこにこしながら私の方を見た。私にはそれが嘲弄されるやうに感じた。だが群つた葉鷄頭は私の方からはすかして見えるけれどずつと離れた庭の中央からでは私等二人は掩はれて見える筈はないのである。彼等同士が唯饒舌つては笑つて居たに過ぎないのであつた。それでも私は其時厭な心持がしたの

であつた。水浴をしてから幾らか爽快になつた。私は跣足になつて雨で倒れかゝつた秋草に杖を立てたりした。門の側のカナメ垣の外へいつも來る商人が天秤をおろして近所の百姓と噺をして居るのが私の耳にはひつた。見ると百姓は商人の荷から生薑の束を引き出してまけろというて居る。不作だから不廉いことはないと商人はいつて居る。時節が後れたから筋が堅くてもう不味いといふやうなことを聲高にいつて百姓は生薑を買つた。

「生薑位はおめえ只ぶん投げて行くことにしてもいゝんだ」

百姓がいふと

「商人がおめえそれで立ちきれるかい」

と天秤を杖につきながら商人がいつた。

「おめえそれでも今の鼻持つ時にやどうしたつけ」

「又そんなこと、つまんねえことをいふなよ」

―それだつておめえが通つて來る時にや俺はなんぼおめえがことをかばつてやつたか知れめえ。又おめえも能く追出され追出されしてな」

百姓は暫く笑つたが間を措いて

「あんな時からぢやおめえも年とつたな」

「年もとらな」

二人は戯談半分にこんなことをいつて笑つて居る。かういふ野卑な對話でも私は平生ならば幾分の興味を持つたであらうが其日はいつまでも聞いて居ることが出來なかつた。其日は兎に角私に不快の感を與へることの多い日であつた。おいよさんは洗濯物を葉鷄頭に添うて干した。私は白い衣物を葉鷄頭の側に干すのが好きであつた。おいよさんは私の下駄を洗つて軒下へ干してそれから例の如く針仕事に挂つた。おいよさんの態度は私にはちつとも變つて居るやうに見えなかつた。私も二三日して體の工合か心持がせいせいとして來た。さうしてそれから私

等二人は屢人目を忍ぶやうになつたのである。數月は經過した。其間おいよさんは私にさへ能くかう平氣で居られると思はれる程素振には出さなかつた。後になつて見ると私も隨分匿情といふことではおいよさんに劣らなかつたと思はれる。世間に隱さうといふ念慮が私の心に强かつたからである。私は其間どういふものかおいよさんに對して熱烈な情を燃やしては居なかつた。唯おいよさんを遠ざけることは私に悲しかつた。長い月日の間には各缺點が分つて來る。心の遠慮のとれた間柄になつてからはおいよさんに我儘な所もあつた。窮迫した家庭に成長したからだと思はれるだけ野卑な處もあつた。私は總てを心に承知して居て厭にもならずに關係を續けて居たのである。一種の惰性であつたといはねばならぬ。

五

おいよさんの父なる敎師の身には必然の運命が來た。其職を罷められたのであ

る。憐むべき教師は自分の妻の郷里に身を落ち付けるといふことになつた。私の母へはくれぐれもおいよさんを頼んだ。おいよさんの一身は私の家でどんなにしても處理してくれるやうにといふのであつた。其後もおいよさんは別段變つたこともなく私の家に在つた。季節はだんだん寒くなつた。葉鷄頭も其他の秋草も霜でぐつたりとして畢つた。落葉が喬木の梢から飛んでどこの庭にも散らばつた。干蕎や籾の筵にも夕日の射す頃には小さな櫟の葉が輕く轉がつて居る。落葉が大抵掃き竭されて秋草は刈り去られて冬らしくなつた庭が蒼い空のもとにからりとして來た。世間は改まつた。おいよさんは自分の家から持つて來た古い綿入羽織を引つ掛けて居た。私の母から與へられた唐棧の袷の上へ其古ぼけた羽織を着るのは不恰好で又憐れげであつた。私の母はまた羽織の材料を見つけてやつた。それが仕立て上げられた時おいよさんの容子がきりゝとなつた。櫟林には到る處藁が吊された。此は落葉を猥りに採るなといふ印である。蒿雀(あをじ)が其乾いた落葉を輕

く踏んで冬は村へ行き渡つた。おいよさんと私との間には人知れず苦惱が起つた。おいよさんの身體の工合が變に成つたといふことである。半信半疑のうちに一ヶ月待つて見た。どうしても懷胎したらしいとおいよさんも心配な顏をして私に語つた。私も自分の身の破綻であるやうに思はれて窃に其處分を考究した。おいよさんは時々朝から臥せることがある。私は心配になるからだらうと思つてそつと枕元に行つて見るとおいよさんは其一塊肉のために私に訴へるのであつた。さうしてかうなるのもあなたが惡いのだと私を責めることもあつた。けれどもおいよさんの臥せつて居ることは例の加減が惡いからだらうと人は思つて居るのだからそんな疑を抱かれることはないと私は思つて居た。私はそれとはなしにそこらで懷胎した女の思ひ切つた身の處分法を聞いた。其度毎に私はおいよさんに告げて其ぢつと目を据ゑて身にしみた樣をするのを見た。一ヶ月はまた經過した。けれどもおいよさんの體は常態には復さなかつた。其内に田舍の正月が近づ

いて來た。おいよさんは正月になつたら母の郷里へ行つて來たいといつた。おいよさんは或日人の居らぬ處で私に錢をくれといつた。それは小遣としては少し多過ぎた請求であつたが、衣服一枚拵へたいのだといふのを聞いてそれにしては餘りに少ないのではないかと思つた。私はせがまれては快くはなかつた。然し物蔭に立つてぢつとおいよさんの目を見る時は變な心持になつて畢ふので私は此の請求もすぐに容れたのであつた。おいよさんは近いといつても河を渡つて行かなければならぬ或町へ反物を買ひに行つた。私はおいよさんが行くことに就いて苦心した。さうして口實を授けた。私にもずるい考が起るのであつた。おいよさんの妹で看護婦に成つて居るのがあつてそれが遠くへ行つて居る。其妹から數日前に封狀が屆いて居る。それでは其中に封じてあつた爲替を取りに行くのだと私の母へはいつて行けとかう敎へたのであつた。おいよさんの反物は柄は絣であつたが翳せば見え透くやうな安物であつた。おいよさんは仕立を近所の少しは針仕事の

出來る女へ賴んだ。これが二人の間を疑はしめる材料を提供したのであつた。おいよさんには冬衣のさつぱりしたものは一枚もなかつた。有繫によごれた着物で郷里へ行くことを羞ぢたのであつた。おいよさんは正月の上旬に霜の上解けないうちといつて未明に人力車で出て行つた。おいよさんが行つてからも私はひどく不安の念に驅られて居た。おいよさんは出て行く前に私の腹は私がどうにかしますと、私も知つて居ますからといふのであつた。どうする積かと私は聞いて見たら知合の女に竊に處分をしたものがある。其家へ客に行つてどうとか思案を借りて見る積だといつた。私は惡いことだとは思つたが、どうにかそれが人知れずに葬つて畢へるならばと有繫に思はぬ譯には行かなかつた。世間へどうしても知らしたくないといふ念慮が先に立つて私はそれを抑制する言葉が私の喉から出なかつたのである。おいよさんが行つてから心は少しも安まらなかつたが、此の前おいよさんが其家へ行つた時程に私に寂しい心を抱かせなかつた。

おいよさんが行つて幾日かたつてから私が茶の間の火鉢の側で新聞紙を見て居ると母は靜に私へいつた。あたりには人は居なかつた。母はかういつた。それは能く聞いて見ねば分らぬことではあるが、おいよさんの針仕事をした女の窃に耳打する所によると二人の間は疑はれて居る。外にどうといふことはないが近頃おいよさんが其の女に逢ふと懷胎した時はどうしたらいゝだらうといふやうなことをよく聞くのである。一度や二度のことではないのでそれがどうも變である。尤も懷胎したとすれば顏のつやが善過ぎるからしかといはれぬが、大事をとるならばおいよさんは再び戻さぬ方がよいかも知れぬといつたといふのであつた。母はそれで其女に二人の間は人目につくやうなことでもあつたかと聞いて見ると何にも別にないといつた。それでは決して人には語つてくれるな、私もさういふことがあらうとは思はずに居たのだから能く聞いて見るからと其女の口止をしたのであつたといつた。私は其時唯無言で家蔭の霜柱がほろりと崩れるのを見て居た。

無言の自白は母の心を和げた。さうなれば私にも思案はあると母はいつた。私の隱れた惡才が窮策を運らしたのである。欺きおほせるだけ人を欺かうとしたのである。一つにはおいよさんがそれ程欲しい女ではないが此儘別れて畢ふのも惜しいし、身體の容子も聞いて見たいしそこには色々あつたのである。それで私は母にかういつた。窃においよさんの家へ行つて身體の容子がどうであるか見て貰ひたい。さうして別に變つたことがなかつたら、まだ針仕事をして貰ひたいからどうとも其處はいひやうがあらうから再び私の家へ來るやうにいつて見て貰ひたい。連れて來て二三ヶ月も置いたならば近所の人の疑も薄らぐに相違ない。耳打した女へは或はさうかとも思ふから又連れて來て二人の容子も能く見たいと思ふのだからとかういつて置けば其内に慥にさうと疑を容れることも出來まいからと私は母へ迫つた。私の母は怜悧な女であつたけれども私のこんな淺猿しい事を聽いた。私はそれでも決しておいよさんと關係はせぬといふ事を母へ誓つた。母は窃においよ

さんの家へ行つておいよさんを喚び寄せる事にした。おいよさんは風邪を引いたといつて臥せつて居たけれども別に變つた事はなかつたと母はいつた。私はそれを聞いて胸を痛めた。さうして更に安心した。おいよさんと私との間はまた以前に戻つてしまつた。それを私の母は疑はない。母は私にのみは尊い盲目であつた。私は情を通じて居たけれども私の理性の強い抑制は以前よりも冷靜な關係を持續させたのである。私はもとからおいよさんに執着して居なかつた。人目の蔭でおいよさんの目を見る時は私の心は變になるのであつたが私はどこまでも隱匿しようといふ念慮が強く働いて居た。二人は到底別れねばならぬ筈に極つて居るのだから愈別れとなつた時は決して私に思を殘してはならぬといふ事まで數次おいよさんに斷つて置いたのである。さういふ口の下から私は其關係を續けて居たのである。此が凡人の淺猿しさである。

櫟林にも春の光が射し透すやうになつた。私はおいよさんを返す氣になつた。

私の情が冷かであつたから隨つておいよさんにも餘所々々しいところが出て來た。さうすればまた私の心にはおいよさんに不快な所が見えて來る。我儘に育つたと思ふやうな所も明かに分かるやうになつたのである。母は後の憂のないやうと窃に貯へて置いた手切の金を私に渡した。私の母は何處までも知らぬ分で其金も私の苦心から出たことにした。別れ噺も私から持ち出した。一ヶ月たつうちにおいよさんも其積りになつた。私の家へ來てからおいよさんには着物が殖えた。いよいよ歸ることになると着物を包む風呂敷もない。私は他出した時萠黄の木綿を一反買つて來てやつた。おいよさんは一心にそれを縫つた。大きな包がおいよさんの部屋に置かれた。噺がすつかり極つて畢ふと何となく又心が惹された。無理に逐ひやるのが氣の毒のやうにもあつたのである。私はおいよさんの部屋に忍ぶことを抑制し得なかつた。加之私は手切のことでまだ噺があるからと母を欺いて遠慮もなくおいよさんの部屋へ行つた。其頃おいよさんは加減が惡いからとい

つては部屋に籠つて居た。私の母は有繫に氣が揉めるのだらうといつた。最終の日が來た。雨の降る日であつた。おいよさんはしをらしく母へ挨拶した。母も叮嚀に時儀をした。私は側にそれを見て居た。車の幌を挂けて出たので村の人々には私の村を離れて行くおいよさんの姿は見られなかつた。おいよさんとはそれつ切り逢つたことがない。然しおいよさんの噺はまだ少し殘つて居る。其後おいよさんから手紙が來た。封筒には私の友人の名が書いてある。私は心もとなく封を切つて見た。又懷胎したやうに思はれる。先のは幸にこつそりと始末した。此度はもう引き續き身體が惡いので危險なことを冒すことは出來ぬ。それにしても今一度相談がしたいから、こつちへ來て逢つてくれと嫦曳の場所まで書いてあつた。私も困却して畢つた。逢つてやらねばなるまいかと思つたが、何だか闇い深い穴へでもはひるやうな氣がして恐怖心が私を躊躇させた。手紙がまた來た。一旦手は切つたけれど、其時はかういふ體になつて居ようとは思はなかつた。それをす

げなく扱ふのは無情だといつて散々に怨んだ手紙である。私も思案のしやうがないので母へ打ち明けた。母も非常に心配した。深い溜息をついた。私は母の容子を見るのがつらかつた。母は幾度も手紙へ目を通した。然しまだ考へやうもある。此の手紙には一旦手を切つたと書いてある。此も後の證據に保存して置かねばならぬ。それからあれの母といふのが尋常ではないらしいし、又どんな奴が智惠を貸さぬものでもない。能く容子を探つてからにしなければならぬ。それにしても家に居ない方が却ていゝかも知れぬ。何處かの海岸へでも行つて保養かたがた暫く居て來たがいゝと私の母はいふのであつた。私はそれから常陸の平潟の港へ身を避けた。私はそこで又一人の女を見た。

六

其頃は時候も梅雨期の終に屬して居たので世間が鬱陶しかつた。障子の紙がゆ

るんで雨がしとしとと降つて居た。轉地した二三日はひどく落付かなかつた。それでも變つた土地の狀況がだんだん私を紛らせた。平坦な土地のみを見て居た私にはすべてが目を惹いた。海岸は皆一帶の丘阜である。其丘阜を丸鑿で刳りとつたやうな小さな入江が穿たれてある。入江に添うて港の人家が建てられてあるのである。人工を加へた一筋の街道が此港と丘の後の村々との間を僅に繼いで居る。港の町の大部分は其窮屈な海岸から遁げ出したやうに延び出して其街道を挾んで居る。宿は此小さな入江を一目にした三階建であつた。私の案內されたのは二階の中の間である。座敷の障子を開けておけば雨の入江が勾欄から見える。然し小さな入江は窮屈に見えた。入江を抱へた丘の一端は拳のやうに一段高い。其處に立つて居る一簇の老松の梢には夕方になれば鴉が四方から聚つて鬱陶しい雨に打たれながら騷ぐ。梢に棲みつくまでは飛び交し飛び交し騷いで居る。二三日の間は此の鴉の騷ぎが私の心を引き立てた位であつた。一日空の模樣がよくなり掛けた

ので私はすぐに散步に出た。入江の岸を傳うて臭い漁師町を越して丘の間を小徑の導くまゝに行つた。小徑は貝殼の白く散らばつた畑の間の窪みである。ぽつぽつと穴が明いたやうに空には靑い所が見えて來た。丘の間からところどころ行手に靑い煙の立つて居るのが見える。其煙は空へ明いた穴に吸はれるやうに眞直に立ち騰つて行く。空の穴は心持よくずんずんと擴がつて行く。煙がすぐ近くに見えて小徑がめぐつたと思つたら丘の上へ出た。畑がひろびろと見渡される。目の前には穢い着物を着た女が其火を燃やして居るのを見た。それは麥の束であつた。穗先へ火のついた麥束を片手に翳して燃やしながら、片手に別の束をとつて其燃やして居る穗先から火を移す。めろめろと燃えはじめたかと思ふと焦げた麥の穗がぼろぼろと落ちる。短くなつた燃えさしの麥束はぽつと傍へ投げ棄てる。そこにも煙はうすく立つ。女は燃やしては棄て燃やしては棄て非常に忙しげに手を動かして居る。私はふと燃えさしの麥束の散らばつたあたりに地にひつゝいて

白い花の簇がつて居るのを見た。それは野茨の花であつた。軟かな長い枝がつやゝかな綠の葉をつけてすつと偃ひ出して居る。燃えさしの火が白い花を焦して居た。高低のある丘にはそこにもこゝにも麥を燒く煙が穩かな空氣に浮んで行く。畑の女はたまたまの晴を見定めて麥の仕納をして畢はうといふのらしい。私はかういふ農事の仕方を此時はじめて見た。私は珍らしさに暫く立つて見て居た。空は一杯に晴れた。有繫に日は暑く照つて來た。私は爽快な丘の上を步いた。海が丘の先に見え出した。海は一足毎に前に擴がつて來る。蟠屈した松が斷崖に臨んで居る。私は好奇心から松の枝を攀ぢて見た。瞰おろすと波は唯白い泡である。岸に立つて見る波は大きいのも小さいのも必ず立ちあがつて來る。瞰おろす波は唯白い泡がざわざわと動いて四方へ擴がるのみである。私は暫く其綺麗な白い泡の變化を見て居た。遠くを見ると褐色の斷崖が連つて沖に相對して居る。打ちつける波が描く白い一線が水陸を畫して居る。そこを去る時私はふと枝の間から近

くに船の泛いてるのを見た。麥を燒いてる女に聞いて見たらそれは松魚船だといつた。こんな所で松魚が釣れるのかといつたら、そこでは松魚を釣る餌にする鰯を網ですくつて居るのだといつた。此から松魚が運ばれるのだと私は心に勇んだ。濱はこれまで不漁であつた。私は此の日はすべてが快かつた。さうしてもう歸らうと思つて見ると一段低い畑に婀娜な女が立つて居た。此の女が沖を遠く見て居たのである。私が小徑へおりた時女も畑からおりて來た。私は此の女が私の鄰座敷の客であつたことに氣がついた。さうして女がどうしてこんな所へ來たものかと不審に思つた。だが私が窮屈な宿の座敷を出て散歩したことの愉快であつたことを思つた時その不審は晴れた。女も退屈まぎれに出たのだらうと思つた。女は私に近よつた時急に兩手の袖を重ねて胸を掩うた。さうして餘所を向いた。私は其日から鄰座敷に心をおいて見るやうになつた。私の座敷は前にもいつたやうに二階の中の間で女の座敷は突き止りであつた。襖一枚が二つの座敷を隔

てゝ居る。私は宿へついた時から鄰座敷に女の客があることを知つて居た。只婀娜な女だと思つて居た。丘の畑で逢つてから急に私の注意が促されたのである。

其次の日から空がまた六かしくなつた。私は濕つぽい室にばかり籠つて居た。身體がだるくなつて半日位うとうとゝ横になつて居ることもあつた。鄰座敷の女も滅多に障子の外へさへ出ない。それでふつつりと音沙汰もない。大方此も臥せつて居るのだらうと思はれるが私には女の座敷を覗く機會がない。一つの柱が兩方の座敷を境してどちらの障子も其柱に建てつけてある。私は其柱から先へ理由もないのに一歩でも越えることは出來ない。越えて行つて見たとしても鄰の座敷はひつそりと障子が閉てゝあるのであつた。それでも女が二階をおりて用達しに行くのには私の座敷の前を通らねばならぬ。其の時女は屹度袖で胸を掩うて居る。鄰の障子がそつと開いた時いつでも私は目を欹てる。どうかすると女は障子を開けた儘私の座敷の前を通らぬことがある。私が障子の外へ出て見ると勾欄に

兩手をついて入江を見て居たのが障子をはたと締めて引つ込んで畢ふ。其時でも屹度着物で胸を掩ふのである。散歩から歸つて見ると女は帳場の脇で新聞紙を見て居ることがある。女は鄰座敷に唯一人である。女一人で居るといふことがどうも私の腑に落ちぬ所であつた。さうかといつて女は決して厭らしい點はなくしをらしい容子であつた。或日鄰の座敷では何かさらさらと卷紙でも卷いて居るやうな音が微かに聞えた。やがてばちりと筆を擱く音がしてそれからかたりと硯箱の蓋を落す音がした。ひつそりとした鄰の座敷からは茶碗へ湯を汲む音さへはつきりと私の耳に響くのであつた。私の懷疑心は鄰の座敷に對して神經を銳敏にして居たのであつた。やがて女は一封の手紙らしいものを持つて、着物で胸を掩ひながら私の座敷の前を通つて二階をおりて行つた。二三日たつてから私は少しの雨間を見て散步に出た。復た此の畑へ行つて見た。青い煙も立つて居らなければ百姓の女も見えぬ。燃やして棄てた麥束は此の間の儘ぐつしりと濕つて居る。

僅かの間に白い野茨の花もなくなつた。懶げな海と相接して空がどんよりと低く垂れて居る。私は寂しさに堪へなかつた。宿へもどつたのは正午少し過ぎであつた。鄰の座敷には草履が二足脱いであつてひそびそと噺をして居るのが聞えた。聽て私が自分の座敷の障子を開けてはひつた時噺は少し途切れたやうであつた。又以前よりもひそひそと語りはじめたやうである。女中が私へ晝餐を持つて來た時、鄰の障子が開いて女は一人のお婆さんと楷子段をおりて行つた。お婆さんは私の座敷をちらりと見て會釋して行つた。田舍の人としては品のいい怜悧相な人であつた。髮は油が乘つて居たが半分程は白いやうであつた。私はあのお婆さんは今日はじめて來た客かと女中に聞いて見た。女中はもう二三度來たことがあるので、鄰の女もあのお婆さんが連れて來たのである。女はもう三週間ばかり鄰の座敷に居るのである。さうしてお婆さんが來るといつでも此所の主人とお婆さんとで頻りに相談をして居るのだといつた。まだ海水浴といふ時節でもないから客

も少ない此の港の宿に保養であるとしてもあの女は不思議である。私は箸をとりながら尚女中に聞いて見た。唯手持無沙汰にして聞くよりもかうして膳に向いて聞くのは私には張合があつた。

「私もよくは知りませんがね、あの方はお氣の毒なんですと」

女中は丸盆を膝に立てゝかういつた。

「お前知つてるかいそれを」

私は聞かないわけには行かなかつた。

「本當はね、私知らないんですがね、さういふことといつてますんですよ」

「誰がいつてるんだい」

「此所の旦那さんが他人でないんですつて、旦那さんがねあのお婆さんと噺しちや困つたなんていつてますよ、それだけですよ」

私は土瓶から注いだ茶を一杯に飲み干した。

「あの方あれで廿四ですつて、別嬪でさあね」

女中は盆を立てた儘いつた。其噺は要領を得なかつたが此の宿が女と姻戚の間柄であるといふのを聞いて私は女が一人で身を託すことの出來る理由を知つた。鄰の座敷へは其夜お婆さんが泊つた。其次の日もお婆さんは歸らなかつた。鄰の座敷ではよくひそひそと噺をした。私はお婆さんが帳場で主人と噺をして居るのも見た。其時お婆さんも主人も唯烟草の烟を吹いて居るもの丶如くであつた。私は鬱陶しい宿の退屈に堪へないので思ひ切つて雨の中をそこからでは遠くもないといふ炭坑を見に出掛けた。二日ばかりで雨は晴れた。私は山の途中から光る海を見た。山を出て宿へついたのは日が後の丘に傾きつ丶ある時であつた。小さな入江には松魚船が五六艘泛んで居る。船は皆帆を張つたやうに建てた檣へ網を干してある。入江を抱へた岡の松にはもう鴉が塒を求めて騷いで居る。岡の出鼻から突然船が現れた。裸の漁師が挂聲をしながら艪を押して居る。船は船との

間を矢の如く入江にはひる。艪の手が止ると船は惰力を以てずうつと汀まで進む。汀には港の人が集つて居る。濱の子供が幾十人となく人々に交つて居る。私は暑いので荷物にして來た着物を宿の店先へ投げて濱へ駈けつけた。やがて船からは松魚をぽんぽんと淺い水に投げる。船からおりた漁師が裸のまゝ松魚の尻尾を攫んで砂の上に運ぶ。幾十人の濱の子は水にひたりながら先を爭うて松魚を運ぶ。松魚は十づゝ其頭を揃へて砂の上にならべられる。人々が騷々しく其松魚を圍んで立ち塞がる。幾十人の子供は裸のまゝ一齊に聲を立てゝ叫びはじめた。「くなんしよくなんしよ」と叫ぶ。後には只「なんしよなんしよ」と聲を限りに叫ぶ手傳つた賃錢に松魚を呉れと叫ぶのである。立ち塞つた人々は其叫聲には頓着なしに松魚の處分をしてずんずん外へ運んで行く。やがて一尾の松魚が子供の一人の手へ渡された。子供は直ちに走つて行つてしまつた。私が宿へもどる時彼等は松魚を錢に換へたと見えて各一文二文と分配しつゝある所であつた。數日前

とは異なつて港は何となく活々として來た。私は再び宿へもどつて來た時、宿の前には何かの肉であらうと思はれる綿のやうな黃色な然かも大きなものゝ浮んで居るのを見た。半ば岸へ揚げられて波にゆられて居る。それが酷い臭氣を放つて居た。

「どちらの方へ、はあ炭坑へお出でになりましたか」

主人は私へ挨拶する。私は帳場の前へ一寸坐る。此の間のお婆さんはまだ歸らなかつたと見えて帳場の側に坐つて居た。お婆さんは自分の前の烟草盆を私の方へ移して輕く時儀をした。

「大分濱らしくなつて來ましたね」

私も主人へ挨拶した。

「えゝこの鹽梅ぢや此からよからうと思ふんですがね、これで少し續いてくれなくちや困りますからね」

「馬鹿に臭いですな」

と私がいつた時主人は机の上に披いてあつた帳簿をはたと閉ぢて

「今も其噺をした所ですが、此は鯨の肉ですがね、どうも日數がたつて居ますからすつかり腐つて居るんです。そこらに浮いて居たのを引つ張つて來んですが肥料ですな」

主人はかういつて更に

「どうぞまあ、お二階で御ゆつくり」

といつた。又た威勢のいゝ掛聲がして松魚船がはひつて來た。私はつと店先へ立つて松魚の人だかりを見た。

「此の臭が厭だつていふんだからね」

お婆さんが主人に向つていつてるのを聞いた。

鄰座敷はひつそりとして居る。女中が茶を持つて來たので、私は默つて鄰の座

敷を指して肘を頭へあてて女は寢て居るかと聞いた。
「しよつちふなんですよ、それに今日はね、此の臭が厭だつてね、吐いたんですよ。本當に此の臭は厭ですわね」
女中はこつそりとかういつた。私はふと女が懷胎して居るんぢやないかと思つた。さう思ふと酷く人に身を避けて居るやうなのが思ひ合される。
「これぢやないか」
と私は手で腹を描いて女中に聞いた。女中は冷かに微笑しながら
「そんなことといふと旦那に叱られますがね、本當にをかしんですよ、それだがまだ見た處ぢや分りませんわね」
私へすりよつて小聲でいつた。
お婆さんが楷子段を昇つて來たので女中は慌てゝ行つて畢つた。
「只今はどうも」

とお婆さんは私に挨拶した。鄰の座敷ではお婆さんの低い聲が聞えた。

「どうだね、お前まだいけないかい。それぢやあつちの都合もあるから私は行くからね……」

あとの方は能く聞えなかつた。更に低く女の聲がしたやうであつたがそれはちつとも分らなかつた。やがてお婆さんは小さな包を持つて出た。

「またお目にかゝります」

とお婆さんは私に挨拶して行つた。私は障子を開けて入江を見て居るとやがてお婆さんの車が威勢よくがらがらと走つて行つた。

其夜私は目が冴えてまぢまぢと雜念に驅られたのであつた。鄰座敷の女が懷胎して居ると氣がついた時私はおいよさんに對する心配が募つて來た。手紙にあるのが本當であればおいよさんの身體にはもう變化が起りかける時期である。おいよさんも鄰座敷の女のやうに陰氣にならねばならぬであらう。平生から虚弱な身

體ではましてさうなければなるまい。おいよさんは正月に行つた時も懷胎して居た。さうして人知れず恐ろしい罪を犯して身輕になつた。ほつと息をつく間もなく又た懷胎して畢つたのである。私等はよくよく運も惡いのであつた。おいよさんはもう此度は身體が恐ろしくてそんなことは出來ないというて獨で苦しんで居るのである。鄰座敷の女はどんな事情が纒綿して居るであらうか。おいよさんのやうな境遇に在るのではなからうかと私には思はれてならぬ。さうしておいよさんのしたやうな罪を犯す念慮もなく又さういふ方法も知らず唯沈んで居るのであらう。それを思ふと私は窃に愧ぢ入らねばならぬ。然しおいよさんの心持になつて見ると私は一概においよさんを貶して畢ふ氣にはなれぬ。おいよさんは夫を嫌つて遁げて來たのである。それが一家の事情から今では其夫の村に近く住まねばならなくなつた。懷胎してはもう私の家には居られないのである。そこはどういふことにしても體面上私の家ではおいよさんを置く譯に行かないからである。さ

うかといつておいよさんは耻を曝して嫌つた夫の近くに居ることが出來ようか。さうして思案の末に嘗て自分が知合であつたといふ女を訪ねる氣になつたのである。おいよさんはそれつ切り私の家に來なかつたならばもう心配を招くことはなかつたのである。然し私も喚んで見たかつたし、おいよさんも來ることが厭でなかつたばかりに更に又苦勞の種が播かれたのである。おいよさんは私の冷かな情に弄ばれたのである。私は到底陋劣である。私の母は能く穿鑿して見ねば容易な判斷は下せないといつたが私はどうしてもおいよさんを信じて私も亦十分に苦んでやらなければおいよさんに濟まぬ。私はいつそおいよさんが逢ひたいといつた場所で逢つてやればよかつたとかういふ鹽梅に私は此の夜いつになくおいよさんに同情が湧いた。私は港へ來てからもおいよさんとの交渉がどうなつたか思案しない日はなかつた。私の欝して居た心は餘計に雨を厭うたのであつた。私はおいよさんの身の始末に思ひ到ると鄰座敷の女に對してどういふものか微かな恐怖心

を抱くやうになつた。

七

次の朝私は疲れたやうになつて起きられなかつた。漸く眼が醒めた頃女は障子の外を通るやうであつたがそれからはひつそりとして居るか居ないか分らぬやうであつた。私が起きた時女中は鄰の座敷へ來て女の容子を聞いて居る樣であつた。聽て女中は楷子段から番頭を喚ぶと番頭は小綺麗な蒲團を抱へて上つて來た。鄰の座敷では番頭と女中とが其蒲團を敷き換へて居る樣であつた。私が障子の外へ出て見た時女は座敷を出て勾欄に近く入江を見て立つて居た。寢くたれた浴衣に肉色の扱帶をしどけなく垂れて居る。髮もさらりと耳のあたりへこけていつもより顏が蒼味を帶びて見えた。私を見て慌てゝ座敷へもどつて障子の蔭へあちら向に立つた。しどけない姿が少し障子の外へ出て見えて居た。番頭はお世辭

をいうて居る。

「昨日はあの臭ひで大分お困りでござんしたらう。酷いものでござんすからね。それでも夜のうちに片付けて畢ひましたからもう臭いやうなことはありません。今日は海も凪がようござんすから誠にせいせい致して居ります。此分では後に又松魚船が參ります」

女はそれに對して何とかいうて居るがそれが極めて低い聲である。私は耳を峙てゝ聞くのであるが、いつでも女のいふことが能く分つたことはない。丁度私は磁石に吸はれたやうに隔ての襖へ耳をつけ聞いても聞きとれぬ程女は靜にものいふのである。私はいつでもぢれつたい心持になるのであつた。番頭は威勢よくものをいふ。蔭で聞いて居ても女の氣を引き立てゝやらうといふのらしかつた。

「先頃こゝへ鯨があがりましてね。それが鯱に攻められたんですがね、此時は大騒ぎでした」

女中は私の座敷の前で柱へつかまりながら勾欄へ腰を掛けた。

「港の船は殘らず出拂ひです。この沖で見つけたんですから私も乘つて行つて見ましたが、其時は鯨はまだ死にきりませんでした。鯨といふ奴はあれでみじめなもので何も防ぎ道具といふ物がないんですから、鯱に攻められた日にやどうすることも出來ないんですね。唯まあ逃げる丈けなんですね。鯱の方は何百匹だか分りやしません。斯う背中に角のやうな鰭があるんですが、そいつを水の上に出して一杯に鯨を取卷いて居るんです。あれを見ちや鯱もなかなか大きなもんです。鯱鉾とは丸つきり違ひますわね。其うちに潜水器をかぶつてむぐつて見た奴があるんですが、鯱はみんな鯨の頭の方へばかり聚つて居て鯨の肉を食ひ取るんださうです。それで尻尾の方へは決して行かないんですからね。尻尾で一つ彈かれたら何でもまた堪りませんから、鯱もそれは知つてるんですね。そこは漁師ですからね、到頭鯨へ綱を掛けて、そいつを船へ繼いで曳いて來た

んです。鯱も人間には構はなかつたさうです。もう此の港の口へ近づいて來たとなつたらそれでも鯱はすつと沖へ引つ返して行きました。さうかと思つて居るとその中の一番大きなのが二三匹角を立てゝ戻つて來ましてね、殘念だといふんでせう、鯨を一食ひ食ひ取つて行きました。これにはみんな驚きましたね。何しろ鯨といふ奴は大きいものですから、港へはひらないので其まゝ置いたのですが、それがあなた明日の朝見ると、夜鯱が來たと見えて鯨の肉がしたゝか嚙じられて居るんです。一口に百五六十貫づゝも食ひ取るんですからね。さうかといつてそこらに其肉が浮いてるんですから食つて畢ふ譯でもないんです。一體鯱といふのは酷い奴ですね。そこら一杯水は赤くなりましてね。その時の騷ぎはお目に掛けたいやうでしたな」

障子の外へ膝をついて番頭は語つた。私も閾の所までずり出して其噺を聞いた。

「番頭さん見たやうなことをいつてどうしたもんだ」
女中はすぐにかういつた。
「何だい私行つたぢやないか、亥ぜつ返しちやいけないよ」
「それだつて番頭さんは船に弱いんだつて歸つた時は眞蒼でしたよ。ようく御覽になつたのはうちの旦那さんでさね。おゝ厭な番頭さんだ」
女中はかういつて笑ひながら遁げて行つた。
「本當に口の惡いおきんどんでしやうがない」
番頭も笑ひながら
「まあどうぞ御ゆつくり」
といつて立つた。
「大分お暑くなつて參りましたな」
私へもお世辭をいうて去つた。それから鄰の座敷には別に變つた事もなく女は

矢張り滅多に座敷の外へ出ないのであつた。尤も空がすつかり切上つて夏の日が急に暑く照すやうに成つてからは女の座敷も障子が開けてあつた。私は女の座敷を一目見たいと思つたが遂に一足も境の柱を越した事がない。まして障子が開け放しになつてからは、私は自分の座敷の前の勾欄から海を見て居る時、僅に其座敷を振り返つて見る事にさへ恐怖心を抱いて居た。女は日に幾度も私の座敷の前を通る。女の前には私の座敷は少しの隠す所もない。鄰の座敷は私の爲には全く祕密である。私はしをらしい其女が心憎かつた。私は宿の女中にも戯談すらいはなかつた。私は鄰の座敷へひどく氣兼があつたからである。私にそれだけの愼んだ態度がなかつたならば女は鄰の座敷を移したかも知れぬ。私は其時に人目を避けたがる女を他へ追はなかつた程靜粛な客であつた。私は鄰の女が餘りにひつそりとして居るので、却つて私の心が刺戟された。私は夜になつて眼を瞑るといろいろと雜念が起つておいよさんのことを考へ出さずには居られなかつた。私はお

いよさんに就いては困つては居たのだけれども此の宿へ來て、ひそりとした鄰の座敷が私をそゝるやうになつてから一層恐怖心が増して來る。私の心はひどく弱くなつたのである。

或日の午後であつた。私は麥藁帽子一つで散歩に出た。宿の店先から左へとつて行くと後の丘の續きが崖を造つて立ち塞つて居る。そこには洞門があつて街道が通じてある。洞門をくゞつて行くと平潟の入江に似て更に小さな入江がある。小さな入江のほとりには漁師が小さな村を形つて居る。街道の端には「コマセ」といふ微細な蝦のやうなものが干してある。「コマセ」の臭氣が鼻を衝いた。此の漁村は九面といつてもう國が異つて居る。短い洞門をくゞれば直ぐに磐城の國であるといふことが散歩の度に私の興味を湧かせるのであつた。又洞門が暗い口を向けて居る。そこを出るとからりと海が見渡される。此から私は坂路を匆來の關の跡へ行つたことがある。此の日は街道に從つて海岸を行つた。關田の濱が弓な

りに私の前に展開して來た。小さな溝のやうな流が濱豌豆の花が簇がつて咲いて居る砂にしみ込んで末のなくなつて居るあたりから下駄を手にして汀を歩いた。ばしやりと碎ける波の白い泡が幾らか勾配をなして居る砂濱の上をさらさらと輕く走りのぼる。土地の人は此所を「ウタレ」というて居る。足が時々冷たい泡にひたる。私がぶらぶらと歩いて居ると私の後から「ウタレ」を傳うて來るものがある。此は白い泡に從つて行つたり來たりしつゝこちらへ走つて來る。私は立つて待つて居た。竹を弓のやうに曲げて弦を張つたやうに網が張つてある。其異樣な網で泡立つた淺い水をすくつて其水と共に走る。右の手ですくつて左の手の笊のやうなものへ叩く。私は近かよつて笊の中を覗いて見たら小さな蝦のやうなものが跳ねて居た。此もコマセといつて此は人間が喰べるのである。あの船で捕るのが沖コマセといつて糠のやうにこまかなさうしてそれが肥料に成るコマセだといつた。汀に近く五六艘の小舟が平らな波に乘つて白帆を張つて居る。見ると

「ウタレ」に近い暗礁の上に一人釣をして居るものがある。波が其巖を越えてざらりと白絲を懸ける。それが落ち切らぬ内に又あとの波が越える。釣する人は波の越える度に片足を揚げると波は其足の下を越える。巖越す波に攫はれぬ樣にかうするのだらうと思ひつゝ絶えず然かもゆつたりと波を避けつゝある其容子を見乍ら暫く立つて居た。波はゆらゆらとゆるく私の眼の前に膨れて更にそれが低くなつて汀にばしやりと白い泡を碎く。膨れあがつた波の面には更に幾つもの小さな波が動いて一度必ずきらきらと暑い日光を反射する。弓なりの網を持つた人はもう遙かに「ウタレ」を走りつゝ小さくなつて居る。其先には平潟の入江の口から遙かに遠く橫はつて見える小名濱あたり一帶の土地が手を出したやうに突出して居る。私は磯を傳うて尙ほ進んだ。だんだん行くと「ウタレ」に近く大きな棚があつた。それが此の空濶な濱にたつた一つぽつりと立つて居る。以前鹽をとつたことがあつたと見えて棚には甑朶が載せてある。此の濱を往來する人が盗むこ

ともないと見えて雁朶はそつくりとしてあるやうに見える。雀が棚に聚つて騒がしく囀つて居る。雀がどうしてこんな所に鳴いて居るのであらうか、雀は蛇が乾いた砂を渡らぬことを知つてさうして此の棚に其子を育てやうと云ふのであらうか。雀は便利な人の檐端を恐ろしい蛇の爲めに追はれたのである。それにしてもどうして此の棚が棄て去られたのであらうか恐らく失敗のなごりであらう。私は砂を攫んで投げて見た。雀は一齊にばあと飛んで松原を越えて行つた。此の空濶な濱を控へて後には一帶の松原が濃い緑を染めて居る。日がいつかぼんやりとなつて薄い雲を透して見えながら雨がはらはらと落ちて來た。私はざくりざくりと踏み止りのない砂の上を松原へ駈け込んだ。さうして私は松の根方に一人の女の俯伏して居るのを見て喫驚した。只凝然として見て居たが服裝もしやんとしたどうも見たことがあると思つたら慥に私の鄰座敷の客であつた。女はどうしてこんな所に來たものであつたかと狐につままれたやうに思つた。女は大儀相である。

私はそれを見棄て去ることが出來なかつた。

「どうかしましたか」

と私は聞いた。暫くたつて女は私の聲を聞いて顔をあげた。いつもより蒼白い女も、喫驚したやうであるがそれでもしをらしく落付いて居つた。

「いゝえ、どうも致しませんが、少し……」

と云ひ淀んで居る。

「それでもどうかなすつたんでせう」

私は下手な聞き様をしたものである。

「少し氣分が惡るうございまして」

女はいつものやうに低い聲である。

「腦貧血でも起したんぢやないか」

私は獨でかう呟いた。

「胸が少しいけませんでしたが、もう落付きました」
「どうです少し背中でも叩きませうか」
「いゝえもう決して」
女はかういつてそつと首を擡げた。どうしたものか女の眼は涙でうるんで居る。女の固辭するので私は唯立つて見て居た。私は女が更にひどく悶えて居ても實際は女の體へ手を觸れることが出來ないで唯はらはらして居たかも知れぬ。私は此の女にひどく恐怖心を持つて居たからである。女は起ちあがつた。單衣の砂を叩いて前を合せた。さうしてほつれた髪を兩手で掻き上げた。雨はいつか晴れて居た。雨の粒ははらはらと乾いた砂の上にまぶれて畢つた位に過ぎなかつた。あたりにはみやこ草の花が砂にひつついて黄色にさいて居る。こぼれ松葉がみやこ草にもぱらりと散つて居る。女は立つて蝙蝠傘を杖づいて歩き出した。私も無言の儘女の先に立つて歩いた。私は漸く小徑を求めて松原から街道へ出た。小徑の雜

草が着物の裾にさはる。月見草が私等二人を見て居るやうにところどころ雜草の中から首を擡げて居た。私は車夫が空車を曳いて來るのがあつたら女を乘せて歸さうと思つたが街道の途中に車はなかつた。少し行くうちに幸ひ藁屋の小さな茶店があつたので私はそこへ女を休ませた。私は茶店の婆さんから淸心丹を貰つて女にやつた。暫くたつ內に女の顏色も恢復して來た。私は婆さんへ少しばかりの心づけをして茶店を立つた。女は有繫に帶の間から錢入を出したのであつたが私は無理にもどさせた。やつとのことで匆來の停車場へついた。上りの列車を待つ間私は態と女に離れて居た。女も凝然と腰掛けた儘いつまでも俯伏して居た。列車の窓から見ると日は靑草の茂つた丘のあなたに隱れて其光を沖一杯に投げて居る。海の水は深い碧である。沖の小さい白帆が目に眩きばかり夕日の光を反射して居る。列車に乘つたかと思つたらもう闕本の停車場である。私は人力車を呼んで女を乘せた。此の時女はもう餘程恢復して居た。私は女の後から徒歩で急いだ。女の車

が田甫を遥かに越えて丘の間に隱れるまで私は速い步調を止めなかつた。

八

次の日女は一日座敷を出なかつた。尤も朝の内私の座敷の外へ來て昨日の義理を述べた。白地の絣の上に帶はきりゝと締めて居た。大抵の女はかういふ場合には笑顏を作つて挨拶をするのであるが、女はいつものやうに沈んで居る。もとより慌てた態度はなくしつとりと落付いて居る。私は却て此の女に對して心がおづおづとして居た。さうして私は別に何にもいはなかつた。何とか女に重い口を開かせるだけのことが出來たのだと後には思はれるのであるが其時は唯堅くなつて居た。其日散步に出て見た。濱で搗布を燒いて居る烟が重さうに靡いて居た。穢い漁師の女房は海から搗布を刈つて來てぶつぶつと火で燒く。其灰が沃度の原料である。空の模樣が幾らか變になつたやうに思はれた。夜に成つたら入江のうち

には船が一杯に詰つた。宵の口どの船からも小さな松明の火がともされた。舳に立つた漁師が手に翳してぐるぐると廻轉させて其火を水に投じた。其夜は闇かつた。空には幾らか雲が飛ぶやうに見えた。沖は「シケ」であるといつていつもよりどうどうと騷がしい響をおくつて來る。入江の口に打ちつける波が唯白く見えた。私はランプの下にごろりと成つた儘大地の底からゆすつて鳴る樣な濤の響を聞いて居た。ふと表にがやがやと人聲がしてやがて遠くなつて畢ふのを聞いた。帳場へおりて見ると主人は居なかつた。何でも難船があつたといふのである。店先を人が忙しく走せ違つて居る。どこがどうして居るのか私にはちつとも分らなかつた。暫く店先を出て立つて居ると港の磯にどつと篝が燃えあがつた。然し篝が其光の及ぶ範圍内に動いて居る人々を明かに見せる丈で一向にあてどもない。篝に近くに行つて見た時船が一艘おろされるやうであつた。私は漁師町の方へ駈けて行つて見た。行き止りが闇くなつて居るばかりでそこには何の容子もない。

引つ返して駈けて來ると、提灯が洞門の方へ向つて走せる。洞門からも提灯が走つて來る。提灯と提灯と何か罵るやうにいつて走せ違つた。私も洞門に向つて進んだ。下駄の音が洞門の内側に響いてこんこんと鳴るのを聞いた。九面の漁村へ出た。白い波が窮屈な入江の口から押し込んで來るのが見えた。がやがやと人聲が騷がしい。ほつかりと火が光の空へぬけて居る。私は凸凹の道を曲折しつゝ漁師の家の間を過ぎて行つた。闇のなかに人とぶつからうとする。行つて見ると庭に篝が焚いてあつて人が一杯に其火を取り捲いてがやがやと騷いで居る。人越しに見ると裸になつて居る四五人が筵の上に腰をおろして慄へ乍ら焚火に手を翳して居る。難破船の漁師が此處へ救はれたのだといつた。其なかに十三四の男の子が交つて居る。焚火に手を翳しながら哀れな顏をして周圍の人だかりを見まはして居る。他の漁師共はさまで驚いた容子もない。皆茜の褌をしめて居る。私は意外に感じた。私の側に立つて居る漁師の女房らしい女が噺をして居る。土地に特

別な荒い言葉で罵るやうに語つて居る。私もそこへ口を出して聞いて見た。これは小名濱から今朝船を出した漁師であつたが平潟の港にはひらうとしたのであつたが夕方から波が荒かつたしそれに闇かつたので遂船底が暗礁へさはつた。船は暗礁へ障つたらもうすぐにばらばらになつて畢ふ。漁師はそれでも皆板子を持つて波に突きのめされつゝ泳いだ。一人やつと上陸したので此村から救ひの船が出た。聲をたよつて救ひ上げた。皆救はれたが唯一人見えぬ。十三四の子でさへ命を拾つたのに其漁師はどうしても此處へ上陸せぬ。平潟へも上陸せぬといふ。波を避け損つて深く捲き込まれたものであるかも知れぬ。其漁師は此の子の父であつた。救はれた時少年は口が聞けなかつた。庭へ焚火をして漸く温めてやつた時彼は頻りに其父のことばかり聞いて居たといふのであつた。焚火には薪が投げられた。焰がぱつと燃えあがる。ぼうぼうと音をたてゝ燃えあがる。焰の光は周圍に人が描いて居る丸い輪の内側を明かに照して居る。人々の顏が赤く恐ろしげで

ある。私は後に居てさへ顔の熱いのを感じた。私が戻つて來た時平潟の船は既になくなつて唯どうどうと濤の響を聞くのみであつた。主人はまだ歸らぬと見えて宿の帳場も寂しかつた。

座敷へもどつた時女は一枚細目にあけた雨戸の隙間から暗い入江を見て居る所であつた。女は私を振り向いて今夜の模樣を聞いた。女はこれまで私と口を聞いたことが一度しかないのであつた。私は其時女に近づいた。さうして悉皆私の見たことを語つた。閾に近いランプの光が浴衣姿の女を美しく見せた。今夜も女はきりゝと帶を締めて居た。

「可哀想な人もあるものでございますね」

女はいつた。女の瞬つた目には涙の漲るのを見た。さうして女は暫く横を向いてしまつた儘であつた。難波船の噺ばかりでそんなに悲しくなる筈はないと私は不審に思はれた。私は立つて雨戸の隙間から外を見た。一杯につまつた松魚船が

暗の底にぼんやりと眠つて居る外何にも目に入るものがない。私は氣がついて自分の座敷へもどらうとした時ふと女の座敷を見た。蒲團の上に枕の倒れて居るのがちらりと見えた。私は此の宿へ來てから一度も女の座敷を覗いたことがなかつたのである。私は何となく心に不安を感じた。夜中にうとうととして居ると一しきりどこともなく人聲が騒がしく聞えたやうに思つたが私はそれつきり眠つて畢つた。

明くる朝起きて見ると空は拭つたやうに晴れて居た。港の松魚船はもう一艘も居ない。みんな夜中に漕ぎ出したと見える。がやがやと遠く私の耳にはひつたのは其時の騒ぎであつた。私は洞門をくゞつて又九面まで行つて見た。今朝はもうひつそりとして唯干したコマセの臭ひが鼻を衝くばかりであつた。波もさらさらとゆるやかである。散歩からもどつて來ると鄰の座敷には客が一人殖えたやうである。聞いたやうな女の聲で威勢よく語つては時々笑聲も交る。女の聲といふの

は此の間のお婆さんであつた。女が階子段をおりて行つた時お婆さんは私の座敷の方へ來て

「先日はどうもまあ、あれが飛んだ御厄介になりました相でございまして、どうもねえあなた、獨りでそんな所迄本當に私もびつくり致しましたよ。どうかするとまあそんな事を致すんでございますから」

お婆さんはかういつて

「あのお立て換へがあります相ですが」

と帶の間から巾着を出さうとする

「いゝえ決してそんなこと、そりやいけません」

私は無理に押し留めた。

「それぢやどうも相濟みませんでございますね」

お婆さんはすぐに

「ですがね、あれも漸く片がつきましてね」

と分らぬことをいうて獨で悦んで居るやうである。これまでとは違つてそわそわして居る。女は階子段を昇つて來た。氣がついて見ると今日はきりつと晴衣に着換へて居る。髮にも櫛の目が通されてある。

「車はもう來たかい」

お婆さんは聞いた。

「まだのやうでございますが」

低い聲であるが分明と女はいつた。がらがらと表に空車の音がして女中は聽て知らせに來た。

「それではどうもながなが御厄介になりましたが……」

お婆さんは私へ挨拶をする。女も後から挨拶する。女は着物を着換へたせゐか何となくはきはきしていつもより美しく見えた。私が店まで送らうとするとお婆

さんはたつてとめる。私は態と遠慮して勾欄に近く立つて居た。翳した二つの蝙蝠傘が軒の下から現れて忽ち他の軒へ隱れて畢つた。私は鄰の座敷を覗いて見た。火鉢も茶器もちやんと隅にくつつけてあつて唯からりとして居る。番頭はすぐに塵拂と箒とを持つて來て鄰の座敷を掃除した。

「旦那、こちらはゆるつとして居ますからこちらのお座敷になすつたらどうでござんす。これからもう海水浴のお客さんがそろそろ參りますから、今のうちいい座敷をおとんなすつた方がようござんすぜ」

と番頭は注意してくれた。然し私はそこへ移る氣にはなれなかつた。私は女に對して非常に遠慮して居た。座敷にも私は遠慮がない譯には行かなかつた。ひつそりとして居るので鄰の座敷は却てまだ女が居るやうな心持がしてならぬ。私は其夜もひどく寂しい鄰の座敷を控へてつくづくと思案した。お婆さんは女の身は片がついたといつて悦んで居た。恐らくもう心配がなくなつたのであらう。女が

はきはきとして見えたのも其爲めではあるまいか。それにしてもおいよさんの方は母がどう運びをつけて居るのであらうか少しも分らないのである。鄰の座敷の女に逢つてから私はひどく心が弱くなつておいよさんに對する心配も增して來た。私が遙々此の港まで身を避けて居るのに女は私に苦悶させようとして待つて居たものゝやうであつた。私には他の理由は少しも分らないのに唯片がついたといつて悅んで見せて行つて畢つた。私はどこかへ打棄つてしまはれたやうな心持になつた。私は快々として居た。一日間を隔てゝ母から手紙が屆いた。私は心もとなく封を切つた。手紙にはかうあつた。あのことは窃に極りをつけた。歸つて來ても誰に義理をいふ必要もない。唯知らぬ顏をして居ればいゝのである。歸りたければ歸るがいゝ、逗留して居たければいつまでゞも居るがいゝといふのであつた。私は此の時つくづく母の慈愛といふことを感じた。私はすぐに宿を立つことに決心した。其日のうちに上りの列車に乘つたのである。鄰の座敷にはまだあ

との客は這入らなかつた。

其後おいよさんはどうなつたか知らぬ。私が歸つた時母は何も知らないで居れといつた。私は母に强ひて聞く勇氣もなかつた。それでも一年許りの間はおいよさんから何とか六かしいことでもいつて來やしないかと懸念がないではなかつた。私はずつと後になつてふと村の内外に當時おいよさんとの噂が立つて居たことを聞いた。實際あつたことでなければ其噂はいつか消滅して畢ふから後になれば分るといふことを人が一般にいつて居る。私の陋劣な手段は私の噂を葬つてしまつた。さうして今では村の内外に私を疑つて居るものがなくなつた。私はおいよさんとの間の行爲を罪惡だと知つて居る。然し私はそれを羞ぢるよりも先づうまく匿しおほせて私の身を保ち得たことを心窃に悅ばぬ譯には行かぬ。私は僅に危い刄の先を免れたのであつた。世上を顧みても自分の非行を衷心から悔悟し得るものが果して幾人あるであらう。私はもうおいよさんに未練はない。今日まで

思ひ出させては私をぢれつたくさせるのはおいよさんではなくて鄰座敷の女である。女はいつまで經つても私には了解が出來ぬ。女は到底解けない謎である。私はうつかり女に手を出すことはもう一度で懲りた。私の心をいつまでもぢらすのはその鄰室の客である。

（明治四十三年一月）

太十と其犬

一

太十は死んだ。

彼は「北のおっつあん」といはれて居た。それは彼の家が村の北端にあるからである。門口が割合に長くて兩方から竹藪が掩ひかぶつて居る。竹藪は亂伐の爲めに大分荒廢して居るが、それでも庭からそこらを陰鬱にして居る。おっつあんといふのはをぢさんでもなく又おとっつあんでもない。其處には敬稱と嘲侮との意味を含んで居る。いつが起りといふこともなくもう久しい以前からさうなつて畢つた。彼は六十を越しても三四十代のもの、時には二十代のものとのみ交つて居た。彼の年輩のものは却て彼の相手ではない。彼は村には二人とない不男であ

る。彼は幼少の時激烈なる疱瘡に罹つた。身體一杯に疱瘡が吹き出した時其鼻孔まで塞つてしまつた。呼吸が逼迫して苦んだ。彼の母はそれを見兼ねて枳椇(けんになし)の實を拾つて來て其塞つた鼻の孔へ押し込んでは僅かに呼吸の途をつけてやつた。それは霜が木の葉を蹴落す冬のことであつた。枳椇の木は竹藪の中に在つた。黃ばんだ葉が蒼い冴えた空から力なさ相に竹の梢をたよつてはらはらと散る。竹はうるさげにさらさら身をゆする。落葉は止むなく竹の葉を滑つてこぼれて行く。澁い枳椇の實は霜の降る度に甘くなつて、鵯て四十雀のやうな果敢ない足に踏まれても落ちるやうになる。幼いものは竹藪へつけこんでは落葉に交つて居る不恰好な實を拾つては嚙むのである。太十も疱瘡に罹るまでは每日懷へ入れた枳椇の實を嚙んで居た。其頃はすべての病が殆ど皆自然療法であつた。枳椇の實で閉塞した鼻孔を穿つたといふことは其當時では思ひつきの輕便な方法であつた。果物のうちで不恰好なものといつたら凡そ其骨のやうな枳椇の如きものはあるまい。其

枳椇の爲に救はれたといふことで最初から彼の普通でないことが示されて居るといつてもいゝ。蘇生したけれど彼は滿面に豌豆大の痘痕を止めた。鼻は其時から酷くつまつてせいせいすることはなくなつた。彼は能く唄つたけれど鼻がつまつて居る故か竹の筒でも吹くやうに唯調子もない響を立てるに過ぎない。性來頑健な彼は死ぬ二三年前迄は恐ろしく威勢がよかつた。死ぬ迄も依然として身體は丈夫であつたけれど何處となく悄れ切つて見えた。それは瞽女のお石がふつつりと村へ姿を見せなくなつたからであつた。彼がお石と馴染んだのは足かけもう二十年にもなる。秋のマチといふと一度必ず隊伍を組んだ瞽女の群が村へ來る。其同勢のうちにお石は必ず居たのである。晩秋の收穫季になると何處でも村の社の祭をする。土地ではそれをマチといつて居る。マチは村落によつて日が違つた。瞽女はぐるぐるとマチを求めて村々をめぐる。太十の目には田の畔から垣根から庭からさうして柿の木にまで挂けられた其稻の收穫を見るより瞽女の姿が幾ら嬉し

いか知れないのである。瞽女といへば大抵盲目である。手引といつて一人位は目明きも交る。彼等は手引を先に立てゝ村から村へ田甫を越える。褰げた裾から赤いゆもじを垂れてみんな高足駄を穿いて居る。足袋は有繋に白い。荷物が圖拔けて大きい時は一口に瞽女の荷物のやうだといはれて居る其紺の大風呂敷を胸に結んで居る。大きな荷物は彼等が必ず携帶する自分の敷蒲團と枕とである。此も紺の袋へ入れた三味線が胴は荷物へ載せられて棹が右の肩から斜に突つ張つて居る。彼等は皆大きな爪折笠を戴く。瞽女かぶりといつて大事な髮は白い手拭で包んでさうして其髷へ載せた爪折笠は高く其位置を保つて居る。覗いたやうに折れた其端が笠の內を深くしてそれが耳の下で交叉して顋で結んだ黑い毛繻子のくけ紐と相俟つて彼等の顏を長く見せる。有繋に彼等は見えもせぬのに化粧を苦にして居る。毛繻子のくけ紐は白粉の上にくつきりと强い太い線を描いて居る。削つた長い木の杖を斜について危げに其足駄を運んで行く。上部は荷物と爪折笠との爲

めに圖拔けて大きいにも拘らず、足がすつとこけて居る。彼等の此の異樣な姿がぞろぞろと續く時其なかにお石が居れば太十がそれに添うて居ないことはない。然し太十は四十になるまで恐ろしい堅固な百姓であつた。彼は貧乏な家に生れた。それで彼は骨が太くなると百姓奉公ばかりさせられた。彼はうまく使へば非常な働手であつた。彼は一剋者である。一旦怒らせたら打つても突いてもいふことを聽くのではない。性癖は彼の父の遺傳である。だが嘗て亂暴したといふこともなくてどつちかといふと酷く氣の弱い所のあるのは彼の母の氣質を稟けたのであつた。彼の兄も一剋者である。彼等二人は兩親が亡くなつて自分等も老境に入るまでしみじみと噺をした事がない。さうかといつて太十はなかなか義理が堅いので何事かあると屹度兄の家へ駈けつける。然し彼は何事に就いても少しの意見もなければ自ら差し出てどうといふこともない。氣に入らぬことがあれば獨でぶつぶつと怒つて居る。さうした時は屹度上脣の右の方がぴくぴくと釣つて恐ろし

い相貌になる。彼の怒は蝮蛇の怒と同一狀態である。蝮蛇は之を路傍に見出した時土塊でも木片でも人が之を投げつければ卽時にくるくると捲いて決して其所を動かない。さうして扁平な頭をぶるぶると擡げるのみで追うて人を嚙むことはない。太十も嘗て人を打擲したことがなかつた。彼はすぐに怒るだけに又すぐに解ける。殊に瞽女のお石と馴染んでからはもうどんな時でもお石の噺が出れば相好を崩して畢ふ。大きな口が更に擴がつて鐵漿をつけたやうな穢い齒がむき出して更に中症に罹つた人のやうに頭を少し振りながら笑ふのである。然し瞽女の噂をして彼に揶揄はうとするものは彼の年輩の者にはない。隨つて彼の交際する範圍は三四十代の壯者に限られて居るのである。以前奉公して居た頃も稀には若い衆に跟いて夜遊びに出ることもあつた。彼も他人のするやうに手拭かぶつて跟いて行つた。歸る時にはぽさぽさとして獨であつた。若い衆はみんな自分の女を見つけると彼を棄てゝそこらの藪や林へこそこそと隱れて畢ふ。太十はどの女にも嫌

はれた。丁度水に彈かれる油のやうであつた。それでも彼は晝間は威勢よく馬を曳いて出た。彼は紺の腹掛に紺の長いツッポ襦袢を着て三尺帶を前で結んで居た。襦袢の襟を態と開いて腹掛の丼を現はして居た。彼は六十越しても大抵は其時の馬方姿である。從來酒は嫌な上に女の情といふものを味ふ機會がなかつたので彼は唯働くより外に道樂のない壯夫であつた。其勤勉に報ふる幸運が彼を導いて今の家に逐つた。彼は養子に望まれたのである。其家は代々の稼ぎ手で家も屋敷も自分のもので田畑も自分で作るだけはあつた。手堅にすれば樂な身上であつた。夫婦は老いて子がなかつた。彼はそこへ行つてから間もなく娵をとつた。其家の財產は太十の緣談を容易に成就させたのであつた。

二

太十が四十二の秋である。彼は遠い村の姻戚へ「マチ呼バし」といつて招かれ

て行つた。二日目の日が暮れてから歸つて來た。鄰村の茶店まで來た時そこには大勢が立ち塞つて居るのを見た。鄰村もマチであつた。唄ふ聲と三味線とが家の內から聞えて來る。彼はすぐに瞽女が泊つたのだと知つた。大勢の後から爪先を立てゝ覗いて見ると釣ランプの下で白粉をつけた瞽女が二人三味線の調子を揃へて唄つて居る。外の三四人が句切れ句切れに囃子を入れて居る。狹い店先には瞽女の膝元近くまで聞手が詰つて居る。土間にも立つて居る。さうして表の障子を外した閾を越えて往來まで一杯に成つて居る。太十も其儘立つて覗いて居た。斜に射すランプの光で唄つて居る瞽女の顏が冴えて見える。一段畢ると家の內にはがやがやと騷がしく成る。烟草の烟がランプをめぐつて薄く擴がる。瞽女は危ふげな手の運びやうをして撥を絃へ挿んで三味線を側へ置いてぐつたりとする。耳にばかり手賴る彼等の癖として俯向き加減にして凝然とする。さうかと思ふとランプを仰いで見る。死んだ網膜にも灯の光がほつかりと感ずるらしい。一人の瞽女

が立つたと思ふと一歩でぎつしり詰つた聞手につかへる。瞽女はどこまでもあぶなげに兩方の手を先へ出して足の底で探るやうにして人々の間を拔けようとする。惡戯な聞手はわざと動かないで彼の前を塞がうとする。憫な瞽女は倒れ相にしては徐に歩を運ぶ。體がへなへなとして見える。大勢はそこゝから假聲を出して揶揄はうとする。かういふ果敢ない態度が酷く太十の心を惹いた。大勢はまだ暫くがやがやとして居たが一人の手から白紙に包んだ饅頭が其かしらの婆さんの手に移された。瞽女は泊めた家への謝儀として先づ一段を唄ふ。さうして大勢の中の心あるものから饅頭を得て一くさり唄ふのである。三味線の胴が復た膝にもどつた。大勢は森とした。其一くさりが畢ると瞽女は絃を緩めて三味線を紺の袋へ納めた。さうして大きな荷物の側へ押しやつた。大勢はまたがやがやと騷がしく成つた。其時夜は深けかゝつて居た。人はだんだんに去つて狹い店先はひつそりとした。太十はそれでも去らなかつた。店先へぽつさりと獨で立つて居ること

は出來ない。横手の流元の引窓から彼は覗いた。唯一つの火鉢へ三人が手を翳して居る。他の瞽女はぽつさり懐手をして居る。みんな唄の疲が出たせゐか深い思に沈んだやうにして首をかしげて居る。太十は尙ほ去らうともしなかつた、突然戶が開いた。太十は驚いて身を引いた。其機會に流し元のどぶへ片足を踏ん込んだ。戶を開けたのは茶店の女房であつた。太十は女房を喚び挂けて盥を借りようとした。商賣柄だけに田舍者には相應に氣轉の利く女房は自分が水を汲んで頻りに謝罪しながら、片々の足袋を脫がして家へ連れ込んだ。太十がお石に馴染んだのは此夜からであつた。さうして二三日歸らなかつた。女の切な情といふものを太十は盲女に知つたのである。目が見えて態度のはきはきとした女は少年の頃から決して太十の相手ではなかつた。太十もそれは知つて居る。知つて居るといふより諦めて居た。それよりも猶ほ女のつれないといふことが彼には當然のことなのでそれを格別不足に思ふといふことはなくなつて居たのである。女房とすら彼

は餘所目には打ち解けなかつた。朝夕顔を見合はす間柄はそんなに追從いふことの出來ないのは當然である。だが其兄とさへ昵まぬ太十だから、どつちかといへばむつゝりとした女房は實際こそつぱい間柄であつた。孰れの村落へ行つても人は皆惡戲半分に瞽女を弄ばうとする。瞽女もそれを知らないのではない。然し彼等は其僅少な金錢の爲に節操を穢しつゝある。瞽女でも相當の年頃になれば人に譽められたいのが山々で見えぬ目に口紅もさせば白粉も塗る。お石は其時世を越えて散々な目に逢つて來たのである。幾度か相逢ふうちにお石も太十の情に絆された。さうでなくても稀に逢へば誰でも慇懃な語を交換する。お石に逢ふ度に其情は太十の腸に浸み透るのであつた。瞽女は秋毎に村へ來た。さうしてお石は屹度其仲間に居たのである。太十は後には瞽女の群をぞろぞろと自分の家へ連れ込むやうになつた。女房は我儘な太十の怒癖を怖れて唯むつつりして默つて居た。然しお石は義理を缺かなかつた。其大きな荷物の中から屹度女房への苞が出され

た。女房も後には其見えない女の前に蕎麥の膳を運んでやるやうになつた。一つには何處へも出たことのない女の身にはなまめかしい姿の瞽女に三味線を彈かせて夜深までも唄はせることがせめてもの鬱晴しであつたからである。

三

或秋のことであつた。お石は子犬を懷へ入れて來た。子犬は古新聞紙へ包んであつた。子犬は新聞紙にくるまつて寢て居た。懷から出すとぶるぶると體を振るやうにしてあぶなげに立つ。悲しげな目で人を見た。目が涙で濕ほうて居た。雀の毛を挘つたやうに瘦せて小さかつた。お石は可哀想だから救つて來たのだといつた。太十は獨で笑ひながら懷へ入れて見ると矢張りくるりとなつて寢た。鍋の破片へ飯をくれたが食はない。味噌汁をかけてやつたらぴしやぴしやと嘗めた。暫くすると小さいながら尾を動かしてちよろちよろと駈け歩いた。お石が村を立

つてから犬は太十の手に飼はれた。太十は從來農家の附屬物たる馬と雞との外には動物は嫌ひであつた。猫も二三度飼つたけれど皆酷く窶れて鳴聲も出せないやうに成つて死んだ。猫がないので鼠は多かつた。竹藪をかぶつた太十の家は內も一杯煤だらけで晝間も闇い程である。天井がないので眞黑な太い梁木が縱横に渡されて見える。乾いた西風の烈しい時は其煤がはらはらと落ちる。鼠のためには屈竟な住居である。それでも春から秋の間は蛇が梁木を渡るので鼠が比較的少ない。蛇は時とすると煤けた屋根裏に白い體を現はして鼠を狙つて居ることがある。さうした後には鼠は四五日ひつそりする。收穫季の終が來て蛇が閉塞して畢ふと鼠は蕎麥や籾の俵を食ひ破る。それでも猫は飼はなかつた。其太十が犬だけは自分で世話をした。壞れた箱へ藁しびを入れてそれを圍爐裏の側へ置いてやつた。子犬はそれへくるまつて寢た。霜の白い朝彼は起きて屹度犬の箱を覗く。犬は小さいながら成長した。春らしい日の光が稀にはほつかりと射すやうになつて

姿がみづみづしい青さを催して來た頃犬は見違へる程大きくなつた。毛が赤いので赤と呼んだ。太十が出る時は赤は屹度附いて出る。附いて行くのではなくて二町も三町も先へ駈けて行く。岐路があると赤はけろりと立つて太十の追ひつくのを待つて居る。太十が左へ向けば其時一散に左へ駈けて行く。太十は左へ行く時には態と右の方へ足を運ぶ。赤がぱらぱらと駈けて行くのを見て左の方へ歩いて行くと赤は暫く經つて呼吸せはしく太十を求めて駈けて來る。かういふ惡戯を二度も三度も繰り返して居る太十の姿を時として見ることがある。赤は煎餅が好きであつた。赤に煎餅を食はせて居る太十の姿がよく村の駄菓子店に見えた。燒けの透らぬ堅い煎餅は犬には一度に二枚を嚙ることは出來ない。顎が草臥れて畢ふのである。唯欲し相にして然も鼻をひくひくと動かす犬を見て太十は獨で笑ふのである。赤は恐ろしい人なつこい犬である。後足で立つて前足を胸に屈めていつまでも立つことが出來た。さうしては何か欲しいといつては長い舌を出してぺろり

ぺろりと自分の鼻を嘗めた。太十が庭へおりると唯悦んで飛びついた。うつかり抱いて太十はよく其舌で嘗められた。赤は太十をなくして畢つてぼさぼさと獨りで歸ることがある。春といつても横にひろがつた薺が、枝を束ねた桑畑の畝間にすつと延び出して僅かに白い花が見え出してまだ麥が首を擡げない頃は其短い麥の間に小さな體にしては恐ろしげな毛を頭に立てた雲雀がちよろちよろと駈け歩いて居る。赤は雲雀を見つけるとすぐ其後に土烟を蹴立てゝ駈けて行く。雲雀は低く飛んでは遙かに先へ行つて畑の境の茶の木の株に隱れたり又飛んだりして遁げて歩く。赤が吠える聲は忽ちに遠くなつて畢ふ。頬白が桑の枝から枝を渡つて懶げに飛ぶのを見ると赤は又立ちあがつて吠える。桑畑から田から堀の岸を頬白が向の岸へ飛んでなくなるまでは吠える。さうして赤は主人を見失ふのである。さういふ時には尻尾を脚の間へ曲げこんで首を垂れて極めて小刻みに歸つて行く。赤は又庭へ雀がおりても駈けて行く。庭の桐の木から落ちたサヽキリが其長い髭

を徐ろに動かしてるのを見て、赤は獨で勇み出して庭のうちに輪を描いて駈け歩いた。さうしては足で一寸サヽキリを引つ返して其髭の動くのを見て又ぱらぱらと駈け歩いたことがある。壻の文造と畑へ出ることもあつた。秋蕎麥の畑には唯一杯に花が白かつた。赤は地鼠の通つた穴を探し當てたものか蕎麥の中を駈け歩いた。赤の體が觸れて蕎麥の花が先へ先へと動いた。暫く經つと赤はすつと後足で蕎麥の花の中から立つ。さうして文造を見つけていきなりぱらぱらと駈けて來る。鼻先は土で汚れて居る。赤は恐ろしい威勢のいゝ犬であつた。さうして十分に成長した。夜はよく足音を聞きつけて吠えた。晝間でも彼の目には胡亂なものは屹度吠えられた。次の秋のマチが來た。太十は例の如く瞽女の同勢を連れ込んだ。赤は異樣な一群を見て忽ちに吠え迫つた。瞽女は滑稽な程慌てた。太十は何といふことはなく笑つた。さうして赤を叱つた。赤は甘えて太十に飛びついた。更に又瞽女の一人にも飛びついた。瞽女はきやつと驚いた。お石は自分の犬がこ

んなに威勢よく大きくなつたのを知つて悦んだ。お石は赤を抱かうとして其手を長い舌でぺろぺろと嘗められた。威勢のいゝ赤は其から幾年間を太十の手に愛育された。太十とお石との情交は移らなかつた。お石は顔に小さい皺が見えて來てもう遠から白粉は塗られなかつた。盲目の衰へ易い盛りの時期は過ぎ去つて居るのである。其でも太十の情は依然として深かつた。

四

彼がお石を知つてから十九年目、太十が六十の秋である。彼はお石を待ち焦れて居た。其秋のマチにも瞽女は隊を結んで幾らも來た。其頃になつてからは瞽女の風俗も餘程變つて來て居た。幾らか綺麗な若いものは三味線よりも月琴を持つて流行唄をうたつて歩いた。さうして目明が多くなつた。お石は來なかつた。それつきり來なくなつたのである。太十は落膽した。迷惑したのは家族のものであ

つた。太十は獨でぶつぶついつて當り散した。村の者の目にも悄然たる彼の姿は映つた。惡戯好のものは太十の意を迎へるやうにして共に悲んだ容子を見てやつた。太十は泣き相になる。それでもお石の噂をされることがせめてもの慰藉である。みんなに揶揄はれる度に切ない情がこみあげて來てさうして又胸がせいせいとしたりした。其秋からげつそりと寂しいマチが彼の心に反覆された。威勢のいゝ赤は依然として太十にじやれついて居た。太十は數年來西瓜を作ることを繼續し來つた。彼はマチの小遣を稼ぎ出す工夫であつた。それでもそれは單に彼一人の丹精ではなくて壻の文造が能くぶつぶついはれながら使はれた。お石が來なくなつてから彼は一意唯錢を得ることばかり腐心した。其年は雨が順よく降つた。彼はいつでも冬季の間に肥料を拵へて枯らして置くことを怠らなかつた。西瓜の粒が大きく成るといふので彼は秋のうちに溝の底に靡いて居る石菖藻を泥と一つに掻きあげて乾燥して置く。麥の間を一畝づゝあけておいてそこへ西瓜の種

をおろす。畑のめぐりには蜀黍をぎつしり蒔いた。麥が刈られてから日は暑くなる。西瓜の嫩葉は赤蠅が來て背めてしまふので太十は畑へつきゝりにしてそれを防いだ。敏捷な赤蠅はけはひを覗つて飛び去るので容易に捕ることが出來ない。太十は朝まだ草葉の露のあるうちに灰を挂けて置いたりして培養に意を注いだ。やがて畑一杯に麥藁が敷かれた。蔓は其上を匍つた。蔓の末端は斜に空を向いて快げである。織巧な模樣のやうな葉のところどころに黄色な花が小さく開く。淡綠色の小さな玉が幾つか麥藁の上に輕く置かれた。太十は畑の隅に柱を立てて番小屋を造つた。屋根は粟幹で葺いて周圍には蓆を吊つた。いつしか高くなつた蜀黍は其廣く長い葉が絕えずざわついて稀には秋らしい風を齎した。腹の底まで凉しくする西瓜が太十の畑に轉がつた。太十は周圍の蜀黍に竹を縛りつけて垣根を造つた。日はまだ非常に暑かつた。怖る怖る首を擡げた蜀黍の穗がすぐに日に燒けて鳶色に變じ出した。太十は番小屋の穢い蚊帳へ裸でもぐつた。西の空に見え

た夕月がだんだん大きくなつて東の空から蜀黍の垣根に出るやうになつて畑の西瓜もぐつと蔓を突きあげてどつしりと黄色な臀を据ゑた。西瓜は指で彈けば濁聲を發するやうになつた。彼はそれを遠い市場に切り出した。晝間は瑁の文造に番をさせて自分は天秤を擔いで出た。後には馬を曳いて出た。文造はもう四十になつた。太十は決して惡人ではないけれどいつも文造を頭ごなしにして居る。晝間のやうな月が照つてやがて舊曆の盆は來た。太十はいつも番小屋に寢た。赤も屹度番小屋の蔭に足を投げ出して居た。

或日太十は赤がけたゝましく吠えたのを聞いて午睡から醒めた。犬は其あとを吠えなかつた。太十はいつでも犬に就いて注意を懈らない。彼はすぐに番小屋を出た。蜀黍の垣根の側に手拭を頰かぶりにした容子の惡い男がのつそりと立つて居る。それは犬殺しで帶へ挿した棍棒を今拔かうとする瞬間であつた。人なつこい犬は投げられた煎餅に尾を振りながら犬殺しの足もとに近づいて居たのであ

る。犬殺しは太十の姿を見て一足すさつた。

「何すんだ」

太十は思はず呶鳴つた。

「殺すのよ」

犬殺しは太いさうして低い聲で應じた。

「殺せんなら殺して見ろ」

太十はいきなり犬を引つつるやうに左手に抱へた。

「見やがれ殺しはぐりあるもんか」

犬殺しは毒ついて行つてしまつた。太十の怒つた顏は其時恐ろしかつた。赤は抱かれて後足をだらりと垂れて首をすつと低くして居た。荒繩で括つた麻の空袋を肩から引つ懸けた犬殺の後姿が見えなくなつてから太十は番小屋へもどつた。

赤は太十の手を離れるとすぐにさつきの處へ駈けていつて棄てられた煎餅を噛つ

た。太十はすぐに喚んだ。赤は長い舌で鼻を嘗めながら駈けて來て前足を太十の體へ挂けて攀ぢのぼるやうにしていつものやうに甘えた。夜になつて文造が番小屋へ來た。それは犬殺しが何處かで赤犬の肉を註文されて狙ひをつけたのだから屹度殺してやるとそこらで放言して行つたといふことを知らせる爲めであつた。文造は心底から大事と思つて知らせたのであつたが然し此は知らなかつた方が却て太十にも犬にも幸であつたのである。實際其頃は犬殺しの徘徊すべき時節ではなかつた。暑い時には大切な毛皮が役に立たぬばかりでなく肉の保存も出來ないからである。太十はそれを知つて居る。さうして肉の註文を受けたことが事實であるとすれば赤は到底助かれないと信じた。赤犬の肉は黴毒の患者に著しい效驗があると一般に信ぜられて居るのである。太十は酷く其胸を焦した。

五

次の日に懇意な一人が太十の畑をおとづれた。彼は能く來た。さうして噺が興に乘じて來る時不器用に割つた西瓜が彼等の間に置かれるのである。白い部分まで齒の跡のついた西瓜の皮が番小屋の外へ投げられた。太十は指で彈(はじ)いて見て此は甘いと自慢をいひながらもいで來ることもあつた。暑い日に照られて半分は熱い西瓜でもすぐに割られるのであつた。太十の鬱いで居る容子は對手にもわかつた。

「おつつあんどうかしやしめえ」

對手は聞いた。太十は少時默つて居たが

「いつそのこと殺しつちまあべと思つてよ」

ぶつきら棒にいつた。

「何よ」

と對手はいつた。然しそれが餘り突然なので對手はいつものやうに揶揄つて見

たくなつた。

「まさか俺がこつちやあるめえな」

とすぐにつけ足した。

「どうせ犬殺しの手にかけるなら自分でやつちまつた方がいゝと思つて……」

太十は口をしがめた。

「それぢや、おつつあん赤か、どうしたんでえまあ」

太十は犬殺しの噺をした。對手の心裏にふとそれを殺してやらうといふ念慮が湧いた。其肉を食はうと思つたのである。赤犬の肉は佳味いといはれて居る。それも他人の犬であつたらさういふ念慮も起らなかつたであらうが、衷心非常な苦惱を有して居れば居る程太十の態度が可笑しいので罪のない惡い料簡がどうかすると人々の心に萠すのであつた。

「殺しちまあ」

太十がいつた其聲は顫へて居た。犬の身に起つた不幸な出來事は薄弱な太十の心を掻き亂して畢つた。彼は殺すと口には斷言した。然し彼の意識しない愛惜と不安とが對手に愁訴するやうに其聲を顫はせた。殺すなといへばすぐ心が落ち付いて唯其犬が不便になつたのである。然し對手は太十の心には無頓着である。

「おつつあん殺すのか」

斯ういふ不謹愼ないひやうは餘計に太十を惑はした。

「さうよな」

と太十は首をかしげた。

「どうせ駄目だから殺しつちまあべし」

威勢よくいつた。さうかと思ふと暫らく沈默に耽つて居る。

「殺した方がよかんべな」

投げ出したやうに低い聲でいつた。其處には對手に縋つて留めてくれといふ意

味もあつた。だが殺すなといふ聲は太十の耳に響かなかつた。

「それぢや思ひ切つてやつちまあんだな。どうせ見こまれちや駄目だからな。おつつあんさうするんだな」

太十は返辭をしなかつた。然し彼の薄弱な心は大きな石で壓へつけられたやうに且つ釘付にされたやうに、彼の心の底にはそれが又厭であつたけれどさうしつかと極められて畢つた。彼の心は劇しく動搖して且つ困憊した。

「それぢや三次でも連れて來べえ」

對手は去つた。太十は一隅を外した蚊帳へもぐつた。蚊帳の外には足が投げ出してあつた。蠅が足へたかつても動かなかつた。犬は蔭の濕つた土に腹を冷して長くなつて居た。二人は來た。三次は左の手を赤の腹へ當てゝそつとあげた。後足は土について居る。赤はすつと首を低くしていつもの甘えた容子をした。犬には荒繩が斜にかけられた。犬は驚いてひいひいと悲愴な聲を立てた。三次が手を

放した時犬は四つ足を屈めて地を偃ふやうに首を垂れて身を蹙めた。さうして盜むやうに白い眼で三次を見た。犬がひいひいと鳴いた時太十はむつくり起きた。彼の神經は過敏になつて居た。

「おつつあん」

と先刻の對手が喚びかけた。太十はまたごろりとなつた。

「おつつあん縛つたぞ」

三次の聲で呶鳴つた。

「いゝから此れ引つこ拔くべ」

といふ低い聲が續いて聞えた。

「おつつあん此のタンボク引つこぬくかんな」

其聲が太十の耳に強く響いた。然し彼は默つて居た。二人は蜀黍の垣根に打ちこんであつた棒を拔いた。三次は握つて居た荒繩をぐつと曳くと犬は更に大地へ

しがみついたやうに身を蹙めた。三次が棒を翳した時繩は切れさうにぴんと吊つた。其の瞬間棒はぽくりと犬の頭部を撲つた。犬は首を投げた。口からは泡を吹いて後足がぶるぶると顫へた。さうして一聲も鳴かなかつた。

「おっつあん、うまくいつちやつた」

と先刻の對手は釣してある蓆から首を突つ込んだ。蚊帳の中は動かない。彼は太十の蚊帳をまくつた。太十は凝然と目をしかめて居る。

「おっつあん、ありやどうしたもんだんべな」

「埋めてやつてくろえ」

太十はやつとそれだけいつた。

「それもさうだがな、片身に皮だけはとつて置いたらどうしたもんだ」

「どうでも仕てくろえ」

蚊帳の中は依然として動かなかつた。二人は用意して來た出刄で毛皮を剝きは

じめた。出刄が喉から腹の中央を過ぎて走つた。ぐつたりとなつた憐れな赤犬は熟睡した小兒が母の手に衣物を脱がれるやうに四つの足からさうして背部へと皮がむかれた。致命の打撲傷を受けた頸のあたりはもう黑く血が凝つて居た。裸にされた犬は白い齒が食ひしばつて目がぎろぎろとして居た。毛皮は尾からぐるぐると卷いて荒繩で括られた。さうしてそれが番小屋の日南に置かれた。太十は起きた。毛皮は耳がつんと立つて丁度小さな犬が蹲つて居るやうに見える。太十はそれが酷く不憫に見えた。彼は愁然として毛皮を手に提げて見た。

「おつつあん可哀想になつたか」

と二人はいつた

「それぢやあとはおらが始末すつからな」

棒をそこへ投げ棄てゝ二人は去つた。血は麥藁の上にたれて居た。三次の手には荒繩で括つた犬の死骸があつた。太十はあとでぼさぼさとして居た。彼は毛皮

を披いて見て居た。彼は思ひついたやうに自分の家に走つて木の板と鉈とを持つて來た。蜀黍の垣根に括つた竹の端を伐つて釘を造つてさうして毛皮を其板へ貼りつけた。悲しい一日が太十の番小屋に暮れた。其夜彼は眠れなかつた。妄念が止まず湧いて彼を惱した。うとうととして居ると赤が吠えながら駈け出したやうに思はれてはつと眼が醒めたり、鍋の破片へまけてやつた味噌汁をぴしやぴしやと嘗めて居る音が聞えるやうに思はれたり、自分の寢て居る床の下に赤が眠つて居るやうに思はれたりしてならなかつた。彼は更に次の日の夕方生來嘗てない憤怒と悲痛と悔恨の情を湧かした。それは赤が死んだ日に例の犬殺しが鄰の村で赤犬を殺して其飼主と村民との爲に夥しくさいなまれて、再び此地に足踏みせぬといふ誓約のもとに放たれたといふことを聞いたからである。彼は其夜も眠らなかつた。一剋である外に缺點はない彼は正直で勤勉でさうして平穩な生涯を繼續して來た。殊に瞽女を知つてからといふもの彼は彼の感ずる程度に於て歡樂に醉う

て居た。二十年の歡樂から急轉して彼は備さに其哀愁を味はねばならなくなつた。一大慘劇は相尋いで起つた。

六

夜毎に月の出は遲くなつた。太十は精神の疲勞から其夜うとうととなつた。惡戲な村の若い衆が四五人其頃の闇を幸に太十の西瓜を盜まうと謀つた。太十の西瓜はこれまで一つも盜まれなかつたのである。彼等の手筈はかうであつた。二三人は晝間見ておいた西瓜をひつ抱へてすぐに逃げる。他のものは態と太十を起して蚊帳の釣手を切つて後から逃げるといふのであつた。太十は其夜喚んでも容易に返辭がなかつた。それ故さういふ惡戲さへしなかつたならば翌日たゞ太十の怒つた顏を發見するに過ぎなかつたのである。盜んだ西瓜は遙かに隔つた路傍の草の中で割られた。彼等は膝へ打ちつけて割つた。さうして指の先で刳つては食つ

た。水分があとに殘つて滓ばかりになつても彼等は頓着せぬ。彼等には西瓜の味よりも寧ろうまく盜んだことが愉快に思はれるのである。かうして汚れた西瓜の無殘な形骸が處々の草の中に發見されるのである。西瓜がなくなつて雜談に耽りはじめた時

「あれ」

と一人が喫驚したやうにいつた。

「どうした」

「何だ」

罪を犯した彼等は等しく耳を欹てた。其一人は頻りに帶のあたりを探つて居る。

「何だ」

「どうした」

他のものは又等しく折返して聞いた。

「錢入どうかしつちやつた」

其の聲はいたく慌てゝ居た。

「あれ落つことしちや大變だ、何處へなくしたつけかな」

尙幾度かそこらを闇にすかしても見た。然しそこらにそれが落ちて居る理由がなかつた。彼等は其夜其まゝ別れて畢へばまだまだ事は惹き起されなかつたのである。彼は家に歸れば直ちにそれを發見したのである。彼は忘れて出たのである。其夜彼等が聚合したのは全く惡戲のためであつた。惡戲は更に彼等の仲間にも行はれざるを得なかつた。

「そりや畑へ落して來たぞ」

他の一人がいつた。

「どこらだんべ」

落したと思つた一人は熱心に聞いた。

「西から三番目の畝だ、おめえが大いのを抱へた時ちやらんと音がしたつけが其時は氣がつかなかつたがあれに相違ねえぞ、こつそり行つて探して見ろ」

太十が復た眠に就いたと思ふ頃其一人は三番目の畝を志して蜀黍の垣根をそつと破つてはひつた。他のものは垣根の外でひそひそと笑ひながら見て居た。蚊帳にくるまつた時太十は激怒した。蚊帳の釣手を作つてまた横になつたが彼は眠れない。自分にも聞かれる程波打つた動悸が五分十分と經つうちにだんだん低くなつて彼は漸く忌々しさを意識した。さうして彼は西瓜は赤が居ないから盗まれたと考へた。赤が生きて居たら屹度吠えたに相違ないと思つた。さうして彼は赤を殺して畢つたことが心外で胸が一しきり一杯にこみあげて來た。彼は強ひて眼を瞑つた。威勢がよくて人なつこかつた赤の動作がそれからそれと目に映つて仕方がない。赤がいつものやうにぴしやぴしやと飯へかけてやつた味噌汁を嘗める音が耳にはひつたり、床の下でくんくんと鼻を鳴らして居るやうに思はれたり、そ

れにむかむかと迫つて來る暑さに攻められたりして彼は只管懊惱した。遠くの方で犬の吠えるのが聞える。それがひどく彼の耳を刺戟する。さうかと思ふと蜀黍の垣根の蔭に棍棒へ手を挂けて立つて居る犬殺がまざまざと目に見える。彼は相の惡い犬殺しが釣した蓆の間から覗くやうに思はれて戰慄した。彼は目を開いた。柱に懸けたともし灯が薄らに光つて居る。彼は風を厭ふともし灯を若木の桐の大きな葉で包んだ。カンテラの光が透して桐の葉は凄い程青く見えて居る。其の青い中にぽつちりと見えるカンテラの焔が微かに動き乍ら蚊帳を覗て居る。ともし灯を慕うて桐の葉にとまつた轡虫が髭を動かしながらがちやがちやと太十の心を亂した。太十は烟草を吸はうと思つて蚊帳の中に起きた。蜀黍が少しがさがさと鳴るやうに聞えた。太十は蚊帳を透して見た。其時月はすべてが熟睡した頃とこつそり姿を現はしかけて居た。畑がほのかに明るくなりかけた。太十は動くものを認めた。彼の怒は彼の全心を掩うた。彼は後の方からそつと蚊帳を出た。

倘前方を注視しつゝ草履を穿くだけの餘裕が其時彼の心に存在した。彼は蓆を押して外へ出た。棍棒が彼の足に觸れた。彼はすぐにそれを手にした。さうしていきなり盗人に迫つた。其時は既に盗ではなかつた其不幸な青年は急遽其蜀黍の垣根を破つて出た。體は鄰の桑畑へ倒れた。太十は一歩境を越して打ち据ゑた。其第一撃が右の腕を斜に撲つた。第二撃が其後頭を撲つた。それがそこに何も支ふるものがなかつたならば怪我人は即死した筈である。棍棒は繁茂した桑の枝を傳ひて其根株に止つた。更に第三の搏擊が加へられた。さうして赤犬を撲殺した其棍棒は折れた。惡戯の犧牲になつた怪我人は絶息したまゝ仲間の爲めに其の家へ運ばれた。太十は其夜も眠らなかつた。彼は疲勞した。

七

怪我人は蘇生した。續いて腦振盪を起した。其家族は太十を告訴すると息巻い

た。其間には人が立つた。太十の姻戚も聚つて見たが怪我人の倒れた側に太十の強く踏んだ足跡と其草履とがあつたので到底逃げる處を打つたといふ事實の分疎は立たぬといふのを聞いて皆悄れて畢つた。其内怪我人の危險狀態は經過した。然し全治までには長い時間を要すると醫師は診斷した。告訴を受ければ太十は監獄署の門をくゞらねばならぬと思つて居る。彼はどれ程警察署や監獄署に恐怖の念を懷いたらう。彼はそれからげつそりと窶れて唯とぼとぼとした。事件は内濟にするには彼の負擔としては過大な治療金を拂はねばならぬ。姻戚のものとも諮つて家を掩ひかぶせた其の竹や櫟を伐ることにした。彼は監獄署へ曳かれるのは身を斬られるよりもつらかつた。竹でも櫟でも何でも惜しくないと彼は思つた。だが其頃はまだ竹や木を伐採するには季節が早過ぎたのと一つは彼の足もとをつけ込むとで商人の値段は皆廉かつた。有繋に彼も躊躇した。恐怖心が湧起した時は彼には惜しい何物もなかつた。それで居て彼は蚊帳の釣手を切つて愚弄された

ことや何といふことはなしに只心外で堪らなくなる。商人は太十に勸めた。太十はそれが餘りに廉いと思ふとぐつと胸がこみあげて

「構はねえ、おら伐らねえ」

と呶鳴つた。

「おれが死んちまつたらどうも出來めえ」

と更に彼は自暴自棄にかういふやうになつた。唯一人でも衷心慰藉するものがあれば彼は救はれた。習慣はすべての心を痲痺した。人は彼に揶揄ふことを止めなかつた。さうして彼の恐怖心を助長し且つ惑亂した。彼は全く孤立した。

其日は朝から焦げるやうに暑かつた。太十は草刈鎌を研ぎすましてまだ幾らもなつて居る西瓜の蔓をみんな掻つ切つて畢つた。さうして壻の文造に麥藁から蔓から深く掘り込んでうなはせた。文造はちりぢりと日に照りつけられながら、時節でもない畑をうなつた。太十には西瓜畑が見ることさへ堪へられなかつた。彼

は物狂ほしくなつた。彼は鎌をぶつりと番小屋の屋根へ打ち込んだ。薄い屋根を透して鎌の刄先は牙の如く光つた。彼は蚊帳へもぐつてごろりと横になつて絶望的に唸つた。彼は白晝の光を厭つて目を瞑つた。靜かで且つ暑い番小屋には鎌の刄先が凄く白く光つた。文造は止めず鍬を振つて居る。其暑い頂點を過ぎて日が稍斜になりかけた頃、俗に三把稻と稱する西北の空から怪獸の頭の如き黑雲がむらむらと村の林の梢から突き上げて來た。三把稻といふのは其方向から雷鳴を聞くと稻三把刈る間に夕立になるといはれて居るのである。雲は太く且つ廣く空を掩うて一直線に進んで來る。閃光を放ちながら雷鳴が慇々として遠く聞こえはじめた。東南の空際にも柱の如き雲が相應じて立つた。文造は此の氣象の激變に伴ふ現象を怖れた。彼は番小屋へ駈け込んで太十を喚んだ。太十は死んだやうになつて居る。

「北の方はひでえケイマクだ、おとつつあん遁げたらよかねえか」

「うるせえな」

太十は僅にかういつた。彼は精神の疲勞から迚ても動く氣になれなかつた。雲は地上に近く掩ひかぶさつてあたりが薄暮の如く闇くなつた。頰白は塒を求めて慌てゝさまよつた。冷氣を含んだ疾風がごうと蜀黍の葉をゆすつて來た。遠く夕立の響が聞えて來た。文造は堪らなくなつた。彼は鍬を擔いで飛び出した。それと同時に屋根へ打ち込んだ鎌の切先が文造の額に觸れた。はつと押へた時文造の手の平は赤くなつた。犬の血に尋いで更に文造の血が番小屋に灑がれた。雨の大きな粒がまばらに蜀黍の葉を打つて來た。霧の如く白雨の脚が軟弱な稻を蹴返し蹴返し迫つて來た。田甫を渡つて文造はひた走りに走つた。夕立がどつと來た。黃褐色の濁水が滾々として押し流された。更に強く更に烈しく打ちつける雨が其氾濫せる水の上に無數の口を開かしめる。忙しく泡を飛ばして其無數の口が噏く。さうして更に其無數の噏が騷然として空間に滿ちる。電光が針金の如き白熱

の一曲線を空際に閃かすと共に雷鳴は一大破壞の音響を齎して凡ての生物を震撼する。穹窿の如き蒼天は一大玻璃器である。熾烈な日光が之を熱しては更に熱する時、冷却せる雨水の注射に因つて、一大破裂を來したかと想ふ雷鳴は、ぱりぱりぱりと乾燥した音響を無邊際に傳ひて、聽て其玻璃器の大破片が落下したかと思はれる音響が、づしいんと大地をゆるがして更にどろどろと遠く消散する。雨は飛散する玻璃の粉末の如く空間に漲つて電光に輝く。熾烈な日光が更に其大玻璃器の破れ目に煌くかと想ふ白熱の電光が止まず閃いて、雷は鳴りに鳴つて雨は降りに降つた。さうしてかららりと晴れた時、日はまだ西の山の上に休んで閉塞し困憊せる地上の總てを笑つて居た。文造が畑に來た時いつも遠くから見えた番小屋の屋根はなかつた。小屋は燒けて居た。四本の柱は焦げた儘地に立つて居た。其他は灰になつて濕つて居た。家族のものが駈けつけて夕日の光に灰を掻き分けた時、仰向になつた儘爛れた太十の姿を發見した。有繋に雷鳴を恐れたと見えて

雨手は耳を掩うて居た。屋根の裏に白い牙をむいた鎌が或は電氣を誘うたのであつたらうか、小屋は雷火に燒けたのである。小屋に火の附いた時はもう太十は何等の苦痛もなく死んで居た筈である。たつた一人野らに居た一剋者の太十はかうして僅かの間に彼の精神力を消耗した。更に大自然の威力は氣象の激變を驅つて眇たる彼の恐怖心に强烈なる壓迫を加へた。同時に其單純な生涯から葬り去つた。犬の毛皮を貼つた板は俯向に倒れて居た。さうして板の裏が僅かに焦げて居た。

（明治四十三年二月）

商機

汽車から降りると寒さが一段身に染みる。埒の側に植ゑた櫻の枯木が强い西風に鳴つて居る。彼は思はず首を引つこませた。さうして小さな手荷物を砂利の上に卸して毛糸の白い襟卷を擴げて顎から口へ掛けて包んだ。彼の乘つた上り列車が停車場へついた時に待つて居た下り列車が煙突から白く蒸氣を吐いて徐ろに出て行つた。停車場を出ると埃が吹つ立つて居る。遙か先の立場からがたくり馬車の喇叭が頻りと聞えて來る。汽車から下りた客は人力車に乘るものぽつぽつと蹙かまつて步くもの大抵は町の方へと急ぐ。彼は今水戶から來たので此處から或町へ行く目的である。預て定期の馬車が出るといふことを知つて居たのですぐに喇叭

の鳴る方へ行つた。革の手綱を執つて馭者臺に喇叭を吹いて居た馭者は近づく彼の姿を見て

「さあ出ますよ」

ぱかぱかと蹄の音をさせてる馬をぐつと引き締めながら催し立てる然し彼はちつとも慌てなかつた。彼の容子を見ると心に何か蟠りがあるやうでもあるが其活々した底力のある容貌は決して愁あるものではないといふことを知らしめる。八人乘の馬車にはもう客が七人詰つて居る。彼はやつと身を割り込んだ。さうして手荷物を膝に載せて白い毛糸の襟卷を捲き直して鳥打帽を少し前へ引いた。馭者は舌を上へ捲いてキッキッキと口の中で妙な聲をさせて革の手綱を緩めると馬は首を前へのめす樣にして蹄を立てゝ二足三足と重相に歩き出した。其時小豆色の頭巾をかぶつた若い女が小さな荷物を手に提げて安物の塗下駄をぽかぽかと叩き付けながら

「乘せておくれよ」

と駈けて來た。馭者は

「もう一杯ですよ」

「何だね人を、知らない振して」

女は意外にも叱り付けるやうにいつた。

「いゝから別嬪なら乘せてやれえ」

乘客の一人がいつた

「お客さん方それぢやどうぞもつとこつちへお詰めなすつて、もう一人乘るんですからね、そつち側の方です、ええこつちは私が乘つてますからこつちへ乘ると片荷に成つて車の運びが惡くていけませんからね」

馭者はズックをまくつて客の方へ顔を半ば表はしていつた。ズックは寒さを防ぐ爲に三方へ垂れて馬車の中を薄闇くして居る。後だけは括つた儘である。

「あなたこつちへ臀を持つて來て……さうです、さうすればいくらでも掛りますから」

馭者は臺の右の端へ臀を据ゑて居る。其左の空席へ掛けて斜に一番鼻の客を掛けさせた。四人の客は懶相に身體を動かす。女は漸くのことで乘り込んだ。

「どうも皆さんお氣の毒さま」

いひながら二三度顔をしがめて据らぬ臀を動かした。さうして左の袂を引つこぬく樣にして膝へ持つて來た。女はそれから頭巾をとつて車臺の外へ出して埃をぱさぱさと叩いて復たかぶつた。口が稍弓なりに上へ反つて顎のがつしりとした勝氣らしい顔である。少し雀斑はあるが色白な一寸人目を惹く。端の明るい處に掛けてるので小豆色の頭巾姿が引つ立つて見えた。それに人を人臭いとも思はぬげな態度は殊に車中の注目を値した。八人乘へ九人も詰め込まれたのだけれど客には若者が多いので女といふことが却て一同に興味を起させた。馭者はぴしりと一

鞭當てた。馬車が急にぐらりと搖れる。

「おゝ怖い」

態とらしく女はいつた。其途端に女の小さな荷物が馬車の外へ落ちた。

「あらまあ、どうするんだらう」

顏には左程の驚もなく然かも聲高に不遠慮にいつた。こんな時は馬丁がすぐに飛び降りる筈であるが横着な馭者は此日馬丁を伴はなかつた。白い襟卷をした彼は

「馬車屋さん少し待つておくんなさい」

ゆつたりと底力のある聲で馬車を留めさせた。さうして馬車から降りて其荷物をとつてやつた。女は有繋に頭巾へ一寸手を掛けて頭をさげた。さうして荷物の埃を叩いた。

「土産物でせうが壞れやしませんかね」

「何なら落した序に少し毒見しませうかね」

先刻から女の反對の側に居て其容子ばかり見て居た三人連の電信工夫が斯う揶揄ひ出した。

「おやまあそれには及びませんよ、誰かにたんと持つて行つてあげたらようござんせうよ」

女は濟したものである。客と客との膝はぎつしりと押しつけてあるので幾らかならず痛い。

「こりや酷いや松葉つなぎでもいゝね、姉さんとなら此上なしだが」

工夫の一人がいつた。

「そんだがぎつしり成つてつと暖ッたかでがんすがね」

五十格恰の手拭で頰冠をした百姓らしいのがいつた。

「それに旦那たんと乘ると車臺ががたつかねえでようがすぜ、なんちつても此の街道もまあだ砂利がのめらねえかんね」

馭者はズックの外から口を出す。

「私だつて隨分辛らいんですよ」

此度は女がいつた。

「そんなら、いつそのことみんなの膝の上へ横に成つたらどうですね、私らあ手の平へでも何でも乘せて置きますぜ」

「其方がお互に樂だね」

電信工夫は口々にいふ。

「横に成つたら頭の處は私の膝へ持つて來てくれなくちや厭ですね」

一番鼻の工夫がいつた。

「さうすると私等は脚の番ですね、こりやちつと割負がしますね」

女の鄰の小商人らしいのまでが遂相槌打つて乘り出した。車中は俄にどつと笑つた。女も一緒に笑つた。さうしてすぐ平氣になつて袂から敷島を出して燐寸を五

六本無駄にして吸ひはじめた。

女と相對して襟卷へ深く顎を沒して居た彼は左の手を膝の荷物に掛けて右の手を黒羅紗の前垂の下へ差し込んで凝然として居る。彼は水戸の或通りへ近く洋物店を開く計畫を成就した。其傍酒と醬油を商ふことに極めた。彼は今廿四歲の靑年である。暫く奉公をして年季の明けたのは廿二の暮であつた。それからは年の若いのと運が向かないのとで家へ歸つた儘そこゝと彷徨つて別に目に立つことも無くて過ぎた。然し二年間の境遇は悲慘であつた。境遇から彼は年齡よりもふけて見えた。客氣に驅られた彼は其間少なからず其心を苛立てた。彼の一家は以前から衰頽に傾いて居た。此の家運を挽回しようといふ希望は常に彼の心を往來して居た。廿四といふ今漸く彼を信じてくれる人が出來て或事情から閉店した洋物店を見つけてくれた。それは彼の老いたる父の世話に成つたことがあつて現に相應の地位にある人なので、舊恩に報ずる厚意であつた。資金の一部も其人の手を

煩はしたので、加之後見までもしてくれるといふのである。彼は踴躍した。洋物は全く彼には無經驗であるが彼はそんなことを顧慮する暇さへ無かつた。それから彼の奉公したのは大きな小賣酒屋であつたので經驗のある酒醤油も併せてやることにした。一つには比較的大きな店に十分の洋物を仕込むのは資本の不足をも告げたのである。店の飾り方とか店を維持して行く方法とかよりも此を土臺に家運を挽回しようといふのが彼の總べてを支配して居る。それでも譬へば老人に對したら女に對したらといふ客の待遇方法といふ樣な小さなことにも彼は頭を惱す。さうしては唯もう客にはお世辭をよくするまでのことだといふ簡單なことに考は何時も歸着してしまふのである。そんな心持からさつき女の荷物も態々とつてやつた譯で彷徨つて居た二ヶ月前の彼とは全く異つて居た。今此の極月の末といふに開店して初荷の賣出しを樂まうといふ手筈で店の方は大抵極りもついたし、彼は此を老いたる父母に告げようとして一先づ其家へ歸りつゝあるのである。

彼はかういふ寒い日に麻の財布を肩にして草鞋穿で掛取に歩かせられたことが數次である。さうして兎に角縁のすれた小倉の角帶へ紺の前垂の紐を結んでぽんとそこを手の平で叩いた時はどう見ても番頭とより外見えぬ丈に其習慣は商人らしい姿に成つて居るのである。隨つて彼の頭は分時も商業を去らないのであるが何といつても年は若いし嘗て自分が主になつて營業したことがないので今一軒の店を持つと成ると身に餘るやうな心持にもなるし、熾な希望と共に何處かに不安の念が蟠つて時には非常な取越苦勞もすることがある。比較的どつしりとはして居ても心の內はそわそわと落付かないやうで近來は新聞を讀んで居ても酷く身にしみないといふやうな狀態で絕えず心の底からむかむかと或物が込み上げて來るやうに感じて居る。顧客はどうしてつくるといふ胸算はあるけれども一人でもまだ定まつては居ない。大きな店の主人に成ることではあるが眞實まだ本當の商人には資格が備らぬ樣な氣もして成らぬのである。然しながら彼の希望は彼の精神

を作興し彼を活かしたことは事實である。洋々たる前途を思ふ時彼は何時も身體に力がはひつてぶるぶるつと震へる樣に感ずるのである。彼はかうした責任の重い身を水戸から汽車に搖られて來た。さうして野中の道を又馬車に揉まれつゝ行くのである。馬車は停車場からすぐに遠く開けた田甫へ出て南へと走る。刈田を渡る西風は依然として強く、垂れたズックを飜して吹く。田甫が盡きて小さな坂一つ上れば麥畑へ出る。乾燥した麥畑は埃で霧が立つたやうである。とある村で馬車はとまる。馭者はかじけた手で柄杓の柄を握つて馬の口をしめす。立場の婆さんが烟草の火とそれから九人前の茶を出す。一番端に居る女は盆を受取つて

「さあ皆さんどうです」

盆を先へ廻さうとする。

「まあどうぞさうして」

「どうもあなたの手からの方が甘いやうですから」

杯と例の工夫は戯談を止めない。女はまた左の手に盃を持つた儘敷島に火を點けた。茶碗がみんな盃へもどつて五厘の銅貨が一つ宛茶碗の底にはひつた時女は帯の間から二錢の銅貨を出してぽんと盃へ載せて

「はいお婆さん下げておくんなさいよ」

馬車は又砂利を軋りはじめた。棒のやうに眞直な街道の兩側には桐の枯木が暫く續いて其下にはぽつぽつ立つてる枯菊が切な相にゆらついて居る。處々の畑には白い絲のやうな桑の木が立つて居る。桑の木のうらには小鳥でも止まつた樣に落ち殘つた枯葉が一二枚宛しがみついて居るのがある。強い西風は其枯葉を吹き散らさねば止むまいと烈しくゆさぶつて居る。遠くの林は空に吹き立つた埃のためにぼんやりとして居る。馬車は其埃の中を黑い大きな塊の如く動いて行く。此間彼は無言でさうして店のことや老いた父母のことのみ考へつゝあつた。女の卷烟草の灰が彼の顏のあたりへ吹き掛つたので彼は急に我に返つて眉を顰めた。

「まあ本當に不調法しました」

女は氣がついていきなり吸ひかけの烟草を棄てた。烟草は道の端へさうして畑の方へ吹き擢はれつゝ微かに煙を立てる。馬車は其煙に遠ざかつてずんずんと走つて行く。

「まあ御覽なさい」

女は懷から新聞紙を出して彼の荷物の上へ置いた。

「私にはこんなことは信じられませんね」

又かういつて出した新聞紙の一部を開いて見せる。不老不死と標題した賣藥の廣告の處であつた。彼は唯慇懃に會釋した。褪めた唐棧の衣物を着た彼は今大きな店の主人になるものとはどうしても見えない。それでも他の客と異つてどつしりした態度が青年には稀な狎れ難い所があるので不審とでもいふのか女は一寸こんなことを噺しかけて稍情を含んだ眼で時々彼を偸み視た。

「つかないことをお聞き申すやうですがあなたはどちらでしたね、どうもお見掛け申したやうですが」

小商人らしいのが女に聞いた。

「私ですか、私は水戸ですよ」

「はあさうでしたか、其所まで聞いちや何ですが何かなすつてお出でなさるんでせうね」

小商人は工夫等のやうな不作法なことは有繫にいはぬが夫でも少しは戯談の口調でかう尋ねた。

「これでも私は商賣人なんですよ」

商賣人といふ女の返辭は車中の耳目を峙てしめた。商賣人といふことを解釋した工夫等は前よりも遠慮なしに饒舌つた。それでも女を赤面させるには足りなかつた。車中の一切を餘所にして襟巻に顎を埋めて居た彼も水戸と聞いて少し首を擡

げた。さうして遂賑かさにひかされて此も耳を峙てた。悲しい時でさへも人は笑ふことを禁じえぬのである。又一度立場へ止つて馬車は目的地の或町へ近づいた。彼は町の入口で降りた。頭はまたすぐに商賣のことが一杯に成つて自分の家へ志した。破れた垣根を見た時には彼は兩眼に涙を催した。さうして一層其心を興奮させた。

强い西風は夕の空を一杯に染めて止んでしまつた。彼は夜深まで靜かな室内に火鉢を擁して老いたる父母の爲に概況を語つた。彼の母は前途を危ぶんでこまごまと注意を與へた。うつかり呑口をもとからひつこ抜いて酒でもこぼさない様にといふことまでいつて父と彼とを笑はせた。彼は噺の序に異様に彼の記憶に殘つた馬車中の女のことを語つた。彼の父は其一端を聞いて想像が出來た。狭い町には此の女の評判は行き渡つて居たのである。その女は町の者で非常なあばずれである。一旦婿をとつたが到頭いやだいやだで通してしまつた。女の家の財産と一皮

むけた女の縹緻とは婿の心を强く牽いたのであるが女の我儘には父と雖手がつけられないで遂に離緣といふことに成つてしまつた。女の父は婿の去つた時家の企箱を失つたといつて嘆息した。そんな風で後に東京へ飛び出して勝手に電話の交換局かなどへはひつて遂に有勝な男との失策をして病氣に成つて家へ歸つて來た。療治をして居る間は靑褪めた顏をして有繫に悄れ切つて居た。さうすると父も可哀想に成つて本氣に勵まして醫者に通はせた。二ケ月許で頰には段々紅がさして來てまた以前の身體に成つた。さうすると何時の間にか化粧の仕方を氣にするやうに成つて鄰づかりで居た小學校の敎員と怪しい仲になつた。それから到頭一緒に逭げて敎員の出た水戸の地へ落ちついたのである。父の家業が穀屋であるので此度は辛棒出來るからと父へ泣きついて幾らかの資本を貰いでもらつて小さながらも水戸で穀屋の店を開いて居る。敎員といふのは猫のやうな男なのに女は反對の勝氣な性質ではあるし自分が資本を拵へたといふので世帶のことは一切女

の切り盛りであるとかういふのであつた。彼は合點が行つた。それと同時に自分が此度開業したら直ぐ手拭の一本も持つて行つて醬油の一樽も買はしてやらなければならぬとかういふ考がふと胸に浮んだ。さうして其瞬間に今まで動搖して居た心が楔子を打ち込んだやうにきつとした。斧の刄から飛ぶ木材の一片が地上に落ちて居たとて何人の注意をも惹かないであらう。然しながら其一片と雖此を楔子に削る時大厦の柱をも堅固にすることが出來る。今彼の胸に浮んだ考は餘りに普通でさうして又餘りに陳腐であつた。けれどもそれが彼の現在に於ては尤も適切で且つ貴いことであつた。彼は此で何だか商買の呼吸といふものを攫へ得たかの如く感じた時腕拱いた儘總身に力がはひつて獨りにつこりと微笑した。

（制作年月日不詳）

紀行・寫生文

炭燒のむすめ

一

低い樅の木に藤の花が垂れてる所から小徑を降りる。炭燒小屋がすぐ眞下に見える。狹い谷底一杯になつて見える。あたりは朗かである。トーンとトーンといふ音が遙に谷から響き渡つて聞える。谷底へついて見ると紐のちぎれさうな脚袢を穿いた若者が炭竈の側で樫の大きな榾へ楔を打ち込んで割つてゐるのであつた。お秋さんが背負子といふもので榾を背負つて凋れた谷の窪みを降りて來た。拇指を肋の所で背負帶に挾んで兩肘を張つてうつむきながらそろそろと歩く。榾は五尺程の長さである。横に背負つて居るのだから岩角へぶつつかりさうである。尻きりの紺の仕事着に脚袢をきりつと締めて居る。さうして白い顔へ白い手

拭を冠つたのが際立つて目に立つ。積み重ねた榾の上へ仰向になつて復た起きたら背負子だけが仰向の儘榾の上に殘つた。お秋さんは荷をおろすと輕げに背負子を左の肩に引つかけて登る。こちらを一寸見てすぐ伏目になつた。矢つ張そろそろと歩いて行く。榾を運んで仕舞つたら楔で割つたのを二本三本づゝ藤蔓の裂いたので括りはじめた。兩端を括つて立て掛ける。餘つ程重さうである。これが卽ち炭木である。女の仕事には隨分思ひ切つたものだと思つた。

小屋へ腰を掛けて居ると鶺鴒が時々蟲を銜へて足もとまで來ては尾を搖しながらついと飛んで行く。脇へ出て見ると射干（ひあふぎ）が一株ある。射干があつたとて不思議ではないが爺さんの說明が可笑しいのだ。山の中途でいかな時でも水が一杯に溜つて居るので一杯水といつてる所がある。そこに此草があるので、極暑の頃になると赤い花がさくのだと頗る自慢なのである。それで唯赤い花がさく草と思つて居るに過ぎない。可笑しいといつてもこれだけだ。

谷底の狹いだけに空も狹く見える。狹い空は拭つたやうである。其蒼天へ向いてすつと延びた樅の木がある。根の生え際が小屋の屋根からではずつと上にあるので猶更に延びて見える。梢で小鳥が啼き出した。美音である。何だと聞いたら爺さんが瑠璃だといつた。さうして解らぬことをいつた。小屋へ二つもくふのは珍らしいことだ。一つがくふと安心だと思つて鶺鴒がまたくつたのだ。つまり人間を手頼るのである。然しあんまり覗くと蛇が狙つていかぬ。かういふことを云つたのである。不審に思つたから再び脇へ出て見たら、杉皮が僅に雨を覆うて居る檐端の手の届く所に鳥の巣が二つならんである。射干のすぐ上である。子鳥はどつちも毛が十分に延びて居る。巣は思ひの外に粗末で草がだらけ出して居る。曩に出て見たので見つかつたことゝ思つたに相違ないのだ。早合點をしてあんなことをいつたのだ。自分は窃に微笑せざるを得なかつた。辨當をつかふのでお秋さんがお茶を汲んで山芋を一皿吳れた。お秋さんは草鞋をとつた丈で脚袢の儘疊

へ膝をついて居る。自分へ茶を出すため態々あがつたのだ。なぜだといふと土瓶へ二度目の湯をさしたらすぐに草鞋を穿いたからである。山芋は佳味かつた。山芋の續きが猪へ移つた。清澄には猪が居る。猪は山芋が好きで見つけたら鼻のさきで堀つて仕舞ふ。「うつかりすると曲角などで鼻のさきを眞黑にしたのに出つかはすことがあります」とこれは爺さんの愛嬌噺である。「あの雨の降る日などにはそこらの木まで猿がまゐります」とお秋さんが傍からいつた。お秋さんは滅多にいはぬ。自分は何か物をいはして欲しかつたのだから、絲口が開けた樣に思はれてこれだけが滿足であつた。射干が急に延び出して赤い花が目前に開くのを見る樣な心持である。これが谷の二日目である。

二

炭を出す所である。炭竈の口を突き崩したら焰がぽつと一時に吹き出した。自

分は思はず後へ下つた。炭竈のなかは眞赤なうちに黄色味を帶びた烈々たる凄じい火である。樅の二間餘の棒のさきへ鍵の手をつけたのを以て爺さんがそれを掻き出さうとする。炭竈の前は眉毛も焦げるかと思ふ程熱い。こんな大きな棒が果して使へこなせるものかと怪しみながら見て居ると、天井から藤蔓で自在鍵のやうなものをさげた。樅の棒はこれへ乘せ掛けたので差引が容易になる。案外な工夫である。これだから重い方が落ちついて扱ひいゝのだと笑ひながら鍵の手を眞赤な炭に引つ掛ける。炭の折れることがあるとかちんと石のやうな響がする。樅の棒は見るうちに火がついてぽつぽと燃える。燃えても構はずに掻き出す。遂にはじうつと傍の流へ突つ込んで、更に水に浸して置いた鍵の手で掻き出す。少し掻き出すと一つに寄せてそれへ灰を掛ける。一遍出したら爺さんの顏も燒けた樣に眞赤になつた。何時でも拔いたことの無い朧虎の帽子をとつてだらだらと流れる汗を拭いて居る。朧虎の帽子は毛が七分通も落ちて居て汗の爲に餘つ程堅くなつ

て居るだらうと想像されるだけの品である。

お秋さんはどこからか青葉のついた小枝をがさがさといふ程掻つ切つて來た。乾燥炭は既に灰から掻き出されてあつたがお秋さんは直炭の碎けを篩ひ始めた。乾し切つた灰は容赦もなく白い手拭へ浴せかゝる。それで粉炭がどれだけ有つたといふと俵の底が隱れるだけであつた。直に炭を俵へつめる手傳にかゝる。青葉のついた小枝はぐるつと丸めて俵の尻へ當てるのであつた。

お秋さんはこんなに忙しく仕事をして居たと思つたら、ふと見えなくなつた。自分は谷が急に寂しくなつた樣に感じた。尋ねるといふでもなく昨日炭木の運ばれた窪みを登つて行つた。眞急な崖へ瘤のやうにいくつもぼくぼく出た所に、草鞋で踏んだ樣に土のついた趾がある。瘤へ手を掛け足を掛け登る。お秋さんはその窪みに獨で枯木を挽いて居た。傍にはもう十本ばかり薪が積んである。窪みは深さも大さも皿程である。密生した樹立は雫も滴るかと思はれて薄暗い。自分

は薪へ腰を掛けた。お秋さんの手拭の糸目の交叉して居るのまでがはつきり見えるまでに近寄つた。お秋さんは兩足を延して左を枯木へ乘せて居る。鋸を押したり引いたりする毎に手拭の外へ垂れた油の切れたほつれ毛がふらふらと搖れる。懶い樣な鋸の音の外には何の響も無い。お秋さんは異樣な眞面目な顏で鋸から目を放さない。自分も腰を掛けた儘ほつれ毛と白い襟元とを見詰めて居るばかりである。物をいふのも惡いが默つて居ても却て極りが惡い。構はずにずんずん話を仕掛けたら善いぢや無いかといつたつてそりやさうはいかぬ。兎に角自分から口火は切つた。どんな事で口火を切つてどんな鹽梅に進行させたかといつたつてそれも言へぬ。お秋さんは餘計にはいはぬ。何處までも慎ましいのである、唯かういふことがあるのだ。此山蔭では蛙を「あんご」といふことや、蟷螂を「けんだんぼう」といふのだといふことやである。それから茸採りに行つて澤山あるといふことを「へしもにへしもにある」といふのだといふことであつた。これでは笑は

ずにはゐられなかつた。自分は忘れた時の爲めにと思つて手帳を出したら偶然どこかの盆踊唄といふのが書いてあつたのを見つけた。「ことしの盆はぼんとも思はない、かうやが燒けて、もかりがぶつこけて、ぼん帷子を白できた」といふのである。これを聞かしたら「ぼん帷子を白できた。」といふのを繰り返しながら暫くは鋸の手を止めて居る。さうして自分を見た時にはいくらか寂しみを帶びた溫かい微笑を含んで居つた。此所にもこんなのが有りますといつて「大澤行川（おほさなめが）の嫁子にならば花のお江戸で乞食する」といふのを低い聲でいつた。謠つたのではない。謠へば面白いのだが、お秋さんには迚てもそんなことを爲せて見ようつて出來ないから駄目だ。それどころではない。少し聞き取れぬ所があつたので折り返して聞いたら赤い顏をして仕舞つたのである。これが谷の三日目である。

三

一日抜けて五日目になる。宿で麥酒の明罎へ酒をこめて貰つた。八瀬尾へ提げて行くのだ。爺さんの晩酌がいつも地酒のきついので我慢して居るのだと知つたからである。樟の造林から廻る積りで道を聞いて行つた杉の木深い澤を出抜けたら土橋へは出ないで河の岸へ降りて仕舞つた。變だと思つたが向うの岸に人の歩いたといふ樣な趾が見えたから水を渉つて行つて見た。芒や木苺が掩ひかぶさつた間に僅に身を窄めて登るだけの隙間がある。段々行くと木苺の刺が引つ掛る。荊棘はいよいよ深くてとても行かれる所でない。酒の罎も岩へ打つゝけたらそれ迄である。木苺を採つて食つた。黄色い玉のふわふわとして落ち相になつたのは非常に甘い。木苺といつても六尺もあるのだから手を延して折り曲げねばならぬ。ふと自分の近くの青芒の上に枝がかぶさつて眞黄な花のさいてゐるのに氣が着いた。皂莢(さいかち)のやうで更に小さい柔かな葉が繁つて花はふさふさと幾つも空を向いて立つてゐる。すぐさま枝に手を掛けると痛い刺が立つた。放さうとしても逆さに

生えた刺なのですぐには放れぬ。漸くで二房三房とつた。豆の花と同じ形のが聚つてゐるのである。少し隔つてから振り返つて見ると滴る樣な新綠の間にほつほつと黄色い房のあるのは際立つて鮮かであつた。あとで聞いたら雲實(じやけついばら)とも黄皂莢(さるかけいばら)ともいふ花であつた。

岸が高いのに水が淺いといふのであるから兎にも角にも川をのぼつて行くことにした。樟の造林へは諦めをつけたのだ。季節は急に暑くなつて一兩日このかた單衣に脫ぎ替へたのであるから水を行くのは猶更心持がよい。ころころといふ幽かな樣な聲がそこゝに聞える。ぽしやぽしやと音を立てゝ行くと近い聲がはたと止つて何か知らぬが水へ飛び込むものがある。能く見ると底に吸ひついてゐる。そつと近づいて急に上から押へつけて攫へた。蛙に似て瘦せこけたるものだ。自分は必ず河鹿であると悟つた。河鹿に極つてゐるのだ。圖解以外に河鹿を見るのは今が始めてで素より攫へて見たのもはじめてゞある。幽かなやうな鳴聲

は河鹿の聲であつたのだ。自分は嬉しくて堪らなかつた。水の淺く且つ清いにも拘らず河鹿は底に吸ひつくと隱れた積りでじつとして動かぬ。自分は面白い儘に倚三匹ばかり採つた。さうして水際に生えてる蕗の葉を採つてそつと包んで萱の葉で括つた。疎らな杉の木立の中に糸のやうな菜種のひよろひよろと背比べをして咲いて居る所へ出た。此處までは二三日前に來たことがあつたから八瀨尾の近いことも分つて安心をした。お秋さんは一人で醋酸石灰――之はどういふものかといふと炭竈の煙を橫につないた土管のなかを潛らせれば、煙は其間に冷却して燻り臭いひどくすつぱい液體になる。其すつぱいことといつたら顫ひあがるやうだ。これが木醋といふので、これへ石灰を中和して仕上げたのが醋酸石灰で曹達で仕上げたのが醋酸曹達となるのだ。說明はもう十分として置く――を造つて居た。酒の罎はお秋さんの手へ渡した。お秋さんはまあ濟みませんといひつゝ丁寧に辭儀をしてすぐに炭竈の方へ行つた。河鹿は傍の水へ放した。鳴けばお秋さん

が聞くのだ。毎日自分と一所にお秋さんの許へ落ち合つた島の人は此日はたうとう來なかつた。島といふのは佐渡のことで、佐渡の國から造林の見習に來て居る男で、佐渡には金北山といふ山がある筈なのにどうしたものかこんな山へ來てこれ程大きな峻しい山はまだ見たことが無いといつて驚いて居る男である。苗字が「けら」といふのだとかで蟲のやうな面白い人ですねとお秋さんがいつた男である。此男が來なかつたので何故だか心持がよかつた。

お秋さんは自分が樟の造林へ行かれなかつたことを非常に氣の毒に思つたらしかつた。爺さんも爐の側へ來て居てお秋さんの弟に案内をさせようといふのである。爺さんは小屋へ來れば乾度爐の側に坐る。著くつても坐る。弟といふのは體が圖拔けて大きいのでまだ十五だといつても自分よりは目から上程も大きい。のつそりとして草履の下へ入れた小石をごりごりとこすつてゐて行くとも行かぬともいはぬ。恥かしいのだ。お秋さんが脇へ連れて行つて何かいつたらそれで行く

といふことに成つた。草履の丈夫なのをと探して居る。かうして居る所へ汚い着物を着た十三四の男の子が山桑を摘んで網に入れたのを背負つて登つて來た。お秋さんの側に寢て居た白犬が其子の足もとへ突然嚙みつく樣に見えた。男の子は泣き出し相になつて自分等の所へ駈けて來た。お秋さんは赤い顏をして微笑しながら白を叱つた。叱つたといつてもやつとのことでいつたまでだ。白は再びお秋さんの側へ寢た。男の子の手に持つて居るのを取つて見たら檜の柔かに延び出した小枝のさきに靑い團子のやうなものが二つくつついて居るのである。檜の木にはよくあるのである。お秋さんはそれを見て「ふぐり見た樣ですね」といつた。自分は意外であつた。お秋さんは眞面目である。能く聞いて見たらふぐりといつたのは鳶(とんび)のふぐりといふことで蟷螂の卵のことだ相である。

四

六日目は谷も畢りの日である。此日は極めてはやく行つた。自分は旣に八瀨尾の谷を辭する積りであつたがお秋さんが自分の爲めに特に醋酸曹達を造つて見せるといふ事であつたから一日延すことにしたのである。お秋さんはもう仕事場に仕度をして居る。爺さんは爐の側であつたが何か冴えない顏である。聞いて見ると小さな變事が起つたのだ。それは瑠璃の子が一匹殘りに居なくなつたといふ事なのである。夜明に蛇が來たに違ひない。昨日籠へ取らうと思つて居たのに少しの油斷でいまいましいことをしたと悄れる。親鳥は低い木の枝に止つてまだ騷ぎがやまない。怒を含んだ形であらうか、上へ反らした尾を左右へ動かして居る。鶺鴒までが小さな聲で鳴きまはつて居る。

此日は忙しくないと見えて爺さんは爐の側に居て種々な雜談を仕掛ける。何時か瑠璃の方は忘れて山口屋の風呂は世間に二つはあるまいといふ樣なことをいつて笑ふ。自分の宿のかみさんといふのは、大氣違で、犬に床まで敷いてやるとい

ふ位な變な人間であるから風呂までが變つて居るといふ譯ではあるまいが兎に角變つて居るのである。表の障子は崖と相對して崖には洞穴がある。風呂は其洞穴の中だ。宿の女に案内されて闇い所へ這入つた時は妙な心持であつた。着物を脱げといはれて見ると板の間がある。ぼんやりながら段々に物が見えて來るといふわけで、六疊間位に刳り抜いてあるのが焚火の煤で餘計に闇くなつて居るのだ。誰でもはじめは妙な心持がするであらう。

お秋さんの造つた曹達は純白雪の如き結晶である。これは食料の醋酸を造る原料である。下手がやると醬油のやうな色になることがある相だ。曹達を造つたら暇に成つたと見えて小屋へ來て腰を掛けた。手拭を外した所を見ると髮はぐるぐる巻で、今日は珊瑚のやうな赤い玉の簪を一本挿して居る。自分は考へた。お秋さんはまだ年が若いのであるに草鞋掛で毎日々々仕事に日を暮して居るのである。欲しいものがあつたとて此狹い谷底にばかり住んで居る身に何の役に立た

う。手拭だけが身だしなみである。白い手拭は平生に於ける唯一の裝飾品である。仕事といふのが隨分骨が折れる。薪を採つてそれを眞木割で裂いて干して置く。石灰に塊があれば臼で搗いて置く。忙しい暇には炭俵を坂の中途の小屋まで背負ひあげる。醋酸石灰でも曹達でも特別の技倆があるので其製品は名入で賣り出されて居るのであるが、一日の給料といつたら僅に二十錢に過ぎない。それで老父を助けて忠實に勞働して居るのである。お秋さんは鼻筋の慥な稀な女である。然し世間の若い女の心に滿足と思はるべきことは一つも備はつてない。かう思ふと何となく同情の念が思はず起るのである。

自分が暇を告げて出たらお秋さんは背負子を負うて坂の中途まで行つて居た。坂を登らうとする時白は追ひ返されて降りて來た。自分は忽ちに追ひついた。さうしてお秋さんは何處まで行くのか知らんが、步かれるだけ一所に步く積りで成るべく靜に足を運んだ。お秋さんは「私と一所では暇がとれて迷惑でございませ

う」といつて頻りに急ぐ。身一つでも容易でないのに能くも足がつゞくものだと思つた。「此所へ鹿が立つて居たことがあります」と杉の木の下でいつた。そこには刺がびつしり生えて白い花のさいた極めて小さな木があつた。眞赤な枸杞の實のやうなのがたつた一つ落ち殘つて居る。珍らしいから一枝折つたら「ありどほしの花でございます」とお秋さんが又いつた。坂を登り切つたら流石に息苦し相に胡蝶花の花の疎らな草の中へ荷を卸した。背負子を負ふために殊更小さな綿入のちやんちやんを引つ掛けたので體が何時もより小柄に見えた。手拭をとつたら顔が赤らんで生え際には汗がにじんで居た。うらゝかな日に幾らかの仕事をしてぽつとほてつて來た時は肌の色の美しさが增さるのである。白いものは殊更に白く見える。「あれこんな所に藤の花が」と樅の木を見てお秋さんがいつた。藤は散つたのもあつて房はもう延び切つてゐる。

樟の大木が掩ひかぶさつて落葉の散つてある所を出拔けると豁然として來る。

兩方が溪谷で一條の林道は馬の背を行く樣なものだ。兩側には樅の木の板がならべて干してある。いくらかの臭みはあるが眞白な板は見るから爽かな感じである。足もとから谷へ連つて胡蝶花の花がびつしりと咲いて居る。「あなた一寸待つて下さい」といはれて振り返ると「大層臭いやうですがアルコールは零れはしますまいか」といふのである。背中の甕の中には木醋から採つたアルコールが入れてあつたので、體の搖れる度にいくらかづゝ吹き出すのであつた。お秋さんは右の手を拔いて左の肩で背負子を支へて左の膝を曲げてそつと地上へ卸した。持つてゐて吳れといふので自分は背負子を支へてゐる。一寸引つ立てゝ見たら重いのに喫驚した。お秋さんは手頃の石を見付けて來て栓を叩き込んだ。

小さな山々が限りもなくうねうねと連つて居る。格外の高低もない。峰から峰へ一つ一つ飛び越して見たいと思ふ程一帶に見える。渺茫たる海洋は夏霞が淡く棚曳いたといふ程ではないがいくらかどんよりとして唯一抹である。じつと見て

居ると何處からか胡粉を落したといふ樣にぽちつと白いものが見え出した。漁舟である。二つも三つも見え出した。白帆はもとからそこにあつたのだ。尙じつと見つめて居るとぽちつと白いのが段々自分へ逼つて來るやうに思はれる。遠くはすべてがぼんやりである。谷の梢や胡蝶花の花や樅の眞白な板や近いものは近いだけ鮮かである。さうして最も近いものはお秋さんである。お秋さんは背負子を岩の上に乘せてくるりと背を向けて背負つた。

妙見越を過ぎると頂上で、杉の大木が密生して居る。そこにも羊齒や笹の疎らな間にほつほつと胡蝶花の花がさいて居る。一層しをらしく見える。淸澄寺の山門まで來ると山稼ぎの女が樅板を負うたのや炭俵を負うたのが五六人で休んで居る。孰れも恐ろしい相形である。山稼ぎの女はいくらあるか知れぬがお秋さん程のものは嘗て似たものさへも見ないのである。彼等とならんだお秋さんは恰も羊齒の中の胡蝶花の花である。寺の見收めといふ積りで山門をのぞいて見たら石垣

の上の一畝の茶の木を白衣の所化が二人で摘んで居る所であつた。山門の前には茶店が相接して居る。自分は一足さきに出拔けて振り返つて見たらお秋さんは背負子を負うた傭婆さん達に取り卷かれて話をして居る。たまたま谷底から出て來ると互に珍らしいのだ。攫へて放されないのだらうと思つた。お秋さんは人に好かれるといふのは極つて居ることなのだ。自分は規則正しく植ゑられた櫻の木の青葉の蔭に佇んで待つて見たがどういふものかお秋さんは遂に來ない。然し茶店まで戻つて見るといふこともしえなかつた。自分は急に油が拔けたやうな寂しい心持になつて宿へ歸つた。

清澄山は自分にはすべてが滿足であつた。然しお秋さんと言葉を交して別れなかつたことはどうしても遺憾である。針へ通した糸のうらを結ばないやうな感じである。

（明治三十九年七月）

佐渡が島

一　濱茄子の花

佐渡は今日で三日とも雨である。小木の港への街道は眞野の入江を右に見て磯について南へ走る。疎らな松林を出たりはひつたりして幾つかの漁村を過ぎてしとしとと沾れて行く。眞野の入江は硝子板に息を吹つ掛けた樣にぼんやりと曇つて居る。共平かな入江の沖には暗礁でもあるものと見えて土手のやうに眞白な波の立つて居る所がある。遠くのことであるから唯眞白に見えて居る丈でちつとも動く樣には見えぬ。此入江を抱へた臺が鼻の岬が遙かに南へ突出して霧の如く淡く見えて居る。沖の白い波が遠ざかつてしまつて更に幾つかの村を過ぎると對岸の長い臺が鼻の岬もだんだんに後へ縮まつて外洋がぼんやりと表はれ出した。だ

らだら坂を上つたらすぐ足もとに小さな漁村があつた。汀には家をめぐつて林の如く竹が立てゝある。竹は枝も拂はずに立ててあるのであるが悉く枯れて居るので葉は一葉もついて居らぬ樣である。此所は既に外洋を控へて居るので潮風を防ぐために此の如きものが一杯に立てられてあるものと見える。佐渡は到る所が物寂びて居るが此の漁村はまた格別である。秋といつてもまだ單衣で凌げるのに此濱は冬が來たかと思ふ程荒凉たるさまである。村へおりると穢い家ばかりで中に一軒夫婦で網絲のやうなものを縒つて居る所があつた。そこで土地の名を聞いたら亭主が皺嗄れた聲で西三河といふ所だといつた。ふと檐端を見ると板看板に五色軍談營業と書いてある。軍談師が內職に絲を縒つて居るので軍談師だから聲が變なのだと思つた。夫でも五色軍談が了解されぬので再び聞いて見ると三味線なしで語るのが只の軍談で三味線のはひるのが五色軍談だといつた。余は更にそれでは此の女房が三味線を彈くのだなと心の中に思つた。

此の漁村についてすぐに徒渉しえらるゝ程の小川があつて形ばかりの橋が架つて居る。橋を渡ると海中には突兀として岩石が峙つて居る。あたりのさまが此のなだらかな一帶の浦つゞきには極めて稀である。左は丘陵が直ちに海に迫つて急に低くなつて居る。低い所が汀でそこに街道が通ずる。路傍を見ると漸く乳房のあたりまであるかなしの灌木がむらむらと簇がつて居る。其灌木の眞青な葉にはは赤い花が咲き交つて居る。此が玫瑰の花で玫瑰の木は枝も葉も花も一切薔薇の木と異ならぬ。唯海邊に自然に生長して居るだけ枝も葉もひねびて一段の雅致を帶びて居る。枝には刺があるので余はそつと指の先で花を折つたら花がほろりと草の中に落ちた。腰を屈めて落ちた花をとらうとすると何だか世間が急に靜かになつた様な氣がした。不審に思うて立つて見ると世間が復た素の如くにざあざあと騒がしい。此は歩いて居る間は雨が笠に打ちつけるので耳もとが絶えず騒がしかつたのだが腰を屈めると笠が竪になつたので急に靜かさを感じたのであつた。笠

が堅になるまで空を仰いで見たら矢張り靜になつた。濱茄子の花は採れるだけ採つて雨の濕ひを拭つて手帳へ挾んでシャツの隱しへ押し込んだ。

小木の港へ辿りついたのは黄昏近くであつた。相川の町では木賃のやうな宿へ泊つて流石に懲り懲りしたのであつたから此所では見掛の一番いゝ宿へ腰をおろした。女が表の二階へ案内する。軈てランプを點けて來る。室内が急に明るくなる。此宿はまだ建築して間もないと見えて木柱から疊から頗る清潔で心持がよい。掃除したランプのホヤが殊に目につく。女は更に茶を出して呉れる。氣がついて見ると此女は驚くばかりの美人であつたのだ。まだ二十には過ぎまいと思ふ。佐渡のやうな豫想外に寂しい島へ渡つてこんな美人に逢はうとは全く思ひも掛けぬ所であつた。美人といふ以外に此女を形容の仕樣はない。余は一日雨を凌いだ爲め單衣もズボン下も濡れきつて旅裝が一層みすぼらしくなつて居るので此女に對して何となく極りの惡いやうな心持がした。障子を開けて女の出て行く所

を見ると紺飛白の單衣の裾に五分ばかり白いものゝ出て居るのが目についた。女の出て行つたあとで余は直ちに帶を締め直した。然し一日尻端折つた單衣の縮んだのはどうしてもうまくは延びなかつた。さうして余は手帳に挾んであつた玫瑰の花を出して一つ一つランプの下に並べた。障子を開けて出ると帳場がすぐ下に見おろされる。此帳場といふのは天井を一つぶち拔いてあるので其天井は二階の天井と一つに成つて居る。夫故二階の客間から出ると勾欄があつて勾欄の下に帳場が見おろされるので劇場の棧敷から土間を見るやうに出來て居るのである。帳場のさきには勝手が見える。竈の側ではさつきの女が串へ立てた魚の切身のやうなものを燒いて居たがそれを箸でおさへて皿の上で串を拔いたら襷を外して四つに折つて帶の間に挾んだ。左にお鉢を抱へて右に膳を持つて立ち上つた。余はそつと障子を締めて蒲團の上へ坐つた。此夜は客といふのは余一人であるので別に支度もしなかつたから冷たくなつたが此で我慢をして呉れというて茶碗には小豆飯

が堆くつけてある。女を見ると紺飛白の單衣に白地を重ねて居るのであつた。さつき裾から白く見えたのは此白地の丈が長かつたからに相違ないのだ。紺飛白も幾度か水をくゞつて紺が稍うすぼけて居る。此野暮臭い支度をして居ながら女は端然として坐つて居る。やつぱり美人である。余が箸を手にした時に女は玫瑰の花に氣がついてそれを手にとると共に何處で採つた花かと聞くので余は途中の西三河の海岸でとつたのだといふと「美しいものでございますノ、花といふものは、花を見て居るとなんにも要らんやうな氣が致しますノ」といひながら指の先で花瓣を掻き分けながら鼻へあてたりして「かういふ花が海邊にひとりで咲くのでございましようか」といつて驚いて居る。女は指の先までも色が白い。「葉も賤しい葉ではございませんノ」といつて威に挑へたさまである。花を抱へるやうな形に出た葉はぎつしりと幾重にも重つて居て其青さはともし灯の光に更に鮮かである。余は此女が葉の美しさを褒めようとは寧ろ意外であつた。余は小豆飯へ箸をつけ

る。箸は杉の太い丸箸で本もうらもない。堆い小豆飯には殆んと困却した。小豆飯の塊が思はずぽろりと膝へ落ちた。見られはしないかと思つてみると美人は玫瑰の花を手にした儘落した小豆飯には氣がつかぬ樣子である。

二　美人

翌朝女が茶を持つて來た處を見ると折目のついた紺飛白の單衣に帶をきりつと締めて裾に白地が覗き出しては居なかつた。二言三言いひ交した後女は余を導いて三階にのぼつた。三階は雨戸が立てきつた儘で闇い。障子だけがほのかに白い。雨戸の隙間から細くさしこむ日光は障子へ赤く映つて居る。女は南の戸袋の所でサルを外して戸を一枚あける。雨の濕りで戸は意外に堅くなつて居る。兩手へ力を入れて漸くのことで二尺ばかりあけた時に女の手の平は赤くなつた。外を見ると明るい空は青く澄んで一片の雲翳もない。佐渡は漸く晴れたのである。三

階の下からは瓦屋根がつゞいて其先は小さな入江である。碇泊して居る船の檣が汀に近く五六本立つて居る。昨日の浦といふのが此の入江のことである。入江の右は畑らしい岡が岬のやうに出て其先に樹立の繁茂した小さな島がある。女は岡を指して「アレは畑でございますがノ、アノずつと出ました先の蔭の所は磯でございましてアノ島は矢島經島と申しましても一つは此所からでも隱れて見えませんが其島と丁度向合つてせなに居ります所に冷たい水が湧いて出ますので夏になりますと小木のものがあの磯へ素麵冷しにまゐります」というた。必ず素麵を持つて遊びに行くといふのが感じがいゝ。余は此の女に白地の浴衣を着せて白い手拭をかぶせて素麵をさらさして見たいものだと思つた。三階から見る小木の港は新築した家ばかりで三階のすぐ下には僅ばかりの空地があつて燒木杙が立つて居る。傍には小さな土藏が燒け殘つたといふやうに壞れた荒壁が赤く焦げて居る。女のいふに小木の港は遠からぬ前に大火があつた。火は此の燒木杙の邊から發したの

で此宿は眞先に燒けて家人は何一つ救ふことが出來なかつたとのことである。「單衣位でございますとノ、どうもなりますが冬の物はよう出來ません」と女はいふのである。女の衣物も丸燒になつたのである。女は余が今日の行く先を尋ねるので余は赤泊の濱まで行く積であるが途中に大崎といふ所がある筈だから其所で博勞の家をたづねようと思ふのである。其博勞といふのは此佐渡へ渡航の汽船で知己になつて夷の港では枕をならべて泊つたことがあるのだといふことまで噺をすると赤泊ならばもう近い故ゆつくりしても決して大事ないといつて更に「博勞さんといふのは小柄で大きな聲を出す人でございませう」といつた。さうだそれで反齒な男だといふと「アノ博勞さんが何時か途中から雨に逢うたと申しまして簑を頭からかぶつて參つたことがございます。佐渡には道中簑と申すのがございましてノ、大きな荷物の上から掛けましても荷物が濡れんやうに出來て居りますのでございます。博勞さんは頭から冠りましても泥を引き擦るやうになりますので簑が

歩くやうだと申してみんなが笑ひましたのでございます」と女は思ひ出して堪らぬといふ樣に笑つた。余は思はず女を見ると女も同時に余を見た。見た目にはまだ笑を含んで居る。余等は二尺許に開けた雨戸の間から體の擦れ合うた儘外を見て居たのである。向き合うて見るとあんまり近いので急に何だか面ぶせに感じたので余は視線を逸らして其口もとを見た。口には鮮かに紅がさしてある。余は此の如き場合の經驗を有して居らぬので只兀然として女のいふことを聞いて居るのである。女は唯無邪氣に羞らふ所もないやうな態度である。それ丈余は更に平氣で居惜い氣持がした。譬へていへば女は凌霄（のうぜんかつら）である。凌霄はふしくれ立つた松の幹でも構はずに絡みかゝる。松の幹がすげなく立つて居てもずんずんと假ひのぼつて枝からだらつと蔓を垂れて其處に美しい花を開く。其花は此女が一つ嘶をして又嘶をするやうに落ちては開き落ちては開いて自ら飽くまでは其赤い大きな花が咲いて止まぬ。余は自ら凌霄にからまれた松の幹のやうな感じがした。凌霄の

やうだと思ひながら復た女を見ると此度は四本の指を前へ向けて勾欄へ兩手を掛けて一心に燒木杙を見おろして居る。余は其白い横顏をしげしげと見守つた。さうして此優しい靜かな昨日の浦を前にして何時までも唯立つて居たいやうな心持がした。其時丁度帳場で呼ぶ聲が幽かに聞えた。飽かぬ美人は三階を去つてしまつた。余も二階へ還つて冷え切つた茶を啜つた。

兩掛(りやうがけ)の荷物を手に提げて梯子段をおりて行くと女は既に洗濯してすつかり乾かした脚袢を出してくれた。底の拔けた足袋も一所に置いてある。足袋にはまだぬくもりが殘つて居る。今まで火へ翳して乾かしてあつたに相違ない。女は更に土間へおりて新しい草鞋の紐を通して小さな木槌で其草鞋をとんとんと叩いて呉れた。さうして余の後ろへ廻つて兩掛の荷物の上から蓙を着せてくれようとする。然しこの着せて貰ふことだけはしなかつた。何故だか默つて着せてもらふことがしえなかつたのである。其時の心持は後では自分にも分らぬ。蓙だけは昨日の雨

でぬれた儘強ばつて居る。草鞋の代が幾らかと聞いたら此は一足進上するのであるから代は要らぬといふことであつた。女は又赤泊の街道へ出る處まで敎へてくれるといふので二三町余と共に附いて來た。電信柱から左へ曲ると此からは一筋道で赤泊より外には何處へも行きやうはないからどうぞゆつくりお越しなされと辭儀をする。余は此時もしみじみ美人だと心に深く思ひ乍ら女の姿を見た。

街道は磯へ出る。薄霧の中に越後の彌彥山が眞向に見えてそれから南へ下つて稍遠く米山が見える。共に大きな島の如くに聳えて居る。海は極めて平らな凪である。沖の岩のめぐりに纔に動く波が日光を受けて金の輪を嵌めたやうにきらきらと光る。汀に近い蕎麥畑には蕎麥の花が眞白に咲き滿ちて居る。さらさらと輕くさし引く波が其赤い莖のもとへ差し込んでは來ないかと思ふ程汀に近い畑である。

街道は小山の間に入る。羽茂川に添うて行くと少しばかりの青田があつて青田へは小さな瀧が落ち込んで居る。瀧の側からは杉の大木が聳えて其杉の木には蠟が流れたやうに藤の實の莢が夥しく垂れて居る。丁度そこへ來かゝつた老人が頻りに合掌して其瀧を拜んで居る。余は此老人に「大崎はまだ遠いか」と聞いたら「ウン此かこれは御來迎の瀧だ」といつた。老人は耳が遠いのである。「大崎の博勞の家はまだ遠いのか」と大きな聲でいつたら老人はにこにこ笑ひながら「此から少し先へ行けば大崎になる。牛でも買に來たか、まだ二十にはなるまい、能う來たのう」といひ捨てゝ去つた。羽茂川に添うたまゝ街道は狹い峽間になる。路傍に大桶へ籠を打つて居る桶屋があつたので聞いて見ると博勞の家ならば後へ戻つて坂の上の高い所に見えるのがさうだといつた。桶屋のいふまゝに戻つて見ると住み捨てた

大きな草家の側に坂がある。坂をのぼり切ると二本の梨の木が兩方からすつと空へ延びて其梨の木には梯子が掛つて居る。梨の青い葉がばらばらと散らばつて居る。博勞は丁度日に近い緣側に足を投げ出して梨を噛つて居る所であつた。余の姿を見ると「能う來たのう」と例の大口を開いて反齒を剝き出しながら驚いたといつたやうな顏をしていつた。彼と夷の港の宿屋で別れたのは四日前である。別れる時に若し自分の土地へ通りかゝつたならば立ち寄つてくれと彼はいつた。余は屹度と誓つた。彼は其後毎日他出をするのであるからあとへかういふ人が來たなら瀧へ案內をして返せといひ置いては出たのだといつて獨で悅んで居る。緣に腰を懸けて庭を見ると一枚の筵につやゝかな著莪の葉をならべて其上に赤く染めた絲が二括りばかり干してある。筵の先には亂雜に手を建てた隱元が下葉は黄色に枯れて莢はまだなつて居る。博勞は板の間に蓙を敷いて「赤泊は俺が案內してあげる。赤泊の宿屋のとつつあんは能う物を知つて仰山話が好きだ。丁度赤泊へは越

後の仲間が牛買に來て明日あたりは歸るといつて居たから俺が話をして其船へ乘せてあげる。まあゆつくり休息して行け」といふので兎にも角にも草鞋をとつてあがる。部屋のうちは仕事衣やら穢い着物が亂雜に引つ掛けてある。天井からは煤が垂れて居る其煤の天井から吊つてある簑棚も漆で塗つたやうである。其棚には蝮蛇の皮を剝いて干したのが竹串に立てゝある。此部屋で白いものは此の蝮蛇の串ばかりである。今とつた梨だといつて博勞が籃のまゝ余が前に梨を薦める。自分はさつきの嚙りかけを一寸手でこすつて皮の儘むしやむしやと嚙りつゝける。余は拇指の爪が非常に延びて居たので其爪の先でぽつりぽつりと皮をむいて見た。鋲の頭のやうな小粒が一つ一つ板の間へ落ちる。博勞は「氣の長いことをするのう」と見て居たが「アヽ庖丁を出すのであつた」と此時漸く穢げな庖丁を手でこすりながら出して呉れた。梨はがりがりと石のやうな梨であつた。博勞の娘らしい十三四の子が裏戶から南瓜を抱へてはひつて來た。博勞は「あゝ丁度いゝ處だ生憎婆さ

んが居ないから」と自ら立つて爐へ榾を焚きつける。爐は余が居る板の間に近く一段低く造つてある。娘は默つて南瓜を切りはじめる。堅い南瓜は小さな手の力では容易に及が立たぬ。布巾で庖丁の脊を押したら漸く二つに割れた。娘は自在鍵を一尺ばかり下げて鍋を懸ける。黄色に刻んだ南瓜が鍋一杯に堆くなつて蓋はぬれた儘南瓜の上に乘せてある。焔は鍋の尻から四方に別れて鍋蔓の高さまで燃えあがる。遥かなる地の底からでも出るやうな微かな湯氣が黄色な南瓜の中から騰りはじめる。鍋は沸々として煮立つと突き上げられて居た蓋が自ら鍋と平らにさがる。娘は榾の先を長い火箸で突つ崩して榾を先へ出したら焔が一しきり燃えあがつた。娘は小さな體へ小さな筒袖を着て突き膝をして居る。赤い襟から白い可愛らしい顔を出して居る。此が博勞の娘かと思ふ程可愛らしい子である。火箸を持つた手を見ると指の先が赤く染つて居る。鍋は更に沸々として汁のとばしりが四方に飛ぶ。余は「南瓜が佳味(うま)さうだ」といつたら「こんなものが好なのだらうか」

と不審さうに娘がいつた。「不味いものが好なら佐渡の婿になつて十日も居るがいゝ」と博勞は大きな口を開いて笑ひながらいつた。榾の煙が靡いたので娘は長い火箸へ手を掛けたまゝ笑つて目をしがめて遙か後ろへ斜めに身を反らした。

四　牛の荷鞍

博勞に附いて小山を辿る。素足に草鞋を穿いた博勞の踵には赤く腫物が出來て居てぽつちりと白く膿を持つて居る。其腫物を見ながら附いて行く。博勞は此日も向う鉢卷である。夷の港へ渡る汽船の甲板でも遂に此鉢卷はとらなかつた。博勞の立ち止つた所から下に深い谷が開けた。遙かに木立の繁茂した間から一括りの白絲を又幾つかに裂いて懸けた位な瀑が見える。瀑は隨分の長さのやうであるが上部も下部も枝に遮られて見えぬ。此が博勞自慢の白岩尾の瀑である。博勞は「瀑壺まで行く氣があるか」と聞くので余は「是非共行つて見たいものだ」といふと

彼はすぐに蕎麥の花を掻き分けておりはじめた。蕎麥の花は頗る急斜面で曲りくねつておりなければ足の踏み處がしつかとしない。谷へおりると水を渉つて行く。水流は至つて狹い。石があれば石から石を跳ねて行く。水の深い所は岸の芒の根へ草鞋を踏んがけて行く。芒の根は草鞋が辷る。博勞の辷つたあとは更に辷る。其辷つた時には薊でも芒でも攫んで體を支へねばならぬ。「佐渡貉といふ位で此邊にはむじなの穴が仰山あつたものだがみんな獵師が打つてしまつて今では一つも居なくなつた」と博勞が獨言のやうにいひながら行く。漸く瀑の下まで行きついた。仰いで見るとこゝではさつき木の枝で遮られた下の部分だけが見えるのであとはちつとも分らぬ。「惜しい事には水が足らぬ」といふと「雪解の頃ならさつきの處から見るのに水は多し木の葉はなしそれは立派なものだ」と博勞は辯解する。荊棘の間をもとへもどる。體を屈めると荷物がぶらつと胸へさがつて蓙が前へこける。からげた尻へは岩打つしぶきが冷々とかゝる。博勞は別な方向をとつて芒の中を

のぼる。手で押し分けた芒は足で二足三足踏みつけて進む。余は芒が再び閉ぢないうちと博勞の後へくつゝいて行く。うつかりすると博勞の莚で目をこすられる。漸く小徑へ出た時には余の指からは血が少しにじんで居た。小さな水田のある所へ出た。小山の上であるから水田といつても籾の筵を五六枚干した位しかない。荷物は其田の畦へ捨てゝ博勞の導く儘に木に縋り乍ら行くと瀑の落口へ出た。瀑は此の田の傍を走る幅二尺ばかりの流の水である。大きなしなの木が瀑の上から谷へかけて斜めにさし出て居る。小柄な博勞は猿の如くすらすらとしなの木の梢にのぼつた。余もつゞいて登つて見た。二人の重量で梢はゆさゆさに搖れる。足のうらは直に深い谷で恰も宙に乘つたやうな感じである。此の深い谷の向うの瀑に相對した處はさつき瀑へおりた山腹でびつしりと蕎麥の花がさいて居る。一帶に山々は蕎麥でなければ豆が作つてある。然らざれば茫々たる芒である。博勞のいふ所によると「山を塑り倒いて置いて枯れた所で火を點けてそこへ

蕎麥でも豆でもばらつと撒いておくのだ」といふことである。さう思へば蕎麥の花の中には焦げた木が所々立つて居る。宙に乘つて見おろす瀑は上部の僅かゝ見えるだけである。此の瀑は孰れにしても厄介な瀑であるといはねばならぬ。瀑を後にして行くとすぐに小さな池がある。池には太藺が茂つて其下には盥を伏せた位な小さな島の形がある。此島といふのは由來のある島なので此小さな島から不思議にも清水が湧いて出るがいくら旱でも此の水だけは決して乾かぬと博勞がいつた。更に博勞が語る。此の池のほとりで一人の山伏が咒文を唱へて居たことがあつた。其時丁度牛を曳いて草苅に來て居た子供等が其咒文を聞いて居たことがあつたが山伏が去つてから牛の荷鞍を卸して其荷鞍を叩きながら山伏の眞似をして呶鳴つて居ると荷鞍が草の上から踊り出して其儘水中で島に化してしまつたといふ荷鞍の島はこれである。

五位鷺が一羽おりて太藺の蔭にぢつとして居る。折柄俄雨が一方から水面を騷

がしてさあつと降つて來た。鷺がすうつと飛び出して岸から垂れた小枝へ移つた。雨の脚が過ぎると水面は復た一方から靜かになる。汀には木の葉の滴りが水に大きな輪を描いて水馬が小さな輪を描いて居る。

五　漁村の能

俄雨のあとの草にはきらきらと日の光がさす。兩方から小徑を埋めて傾いた芒の穗を莖ですつて行く。博勞の跳ね返した穗が時々ひやりと頬へあたる。だんだん小山の頂を行くと芒の穗の上に海洋が表はれてやがて一目に見えるやうになつた。海洋は日光のさし加減と見えて唯紺碧である。あなたには彌彦山が皺一つ一つも數へることが出來る程近く見えて、其後ろに連亘して居る越後の山々も今日は明かである。余等が歩いて居る小山の裾に迫つて三角形の眞白な帆を掛けた船が一つ徐ろに其紺碧の水を辷つて走る。白帆も日光のさし加減と見えて眩きばか

りかゝやく。博勞は明日も日和だといつた。芒の穗を分けながら山をおりる。海が一歩づゝ狹くなつて木立のあなたに全く見えなくなつた時に僅かばかり水田のある所へ出た。博勞は突然「あゝ能がある」といひながら駈け出した。余は合點が行かなかつたが一所に駈け出した。田に添うて茂つた深い木立に入らうとした時に余の耳に幽かな笛の音が聞えた。木立に入ると大きな寺がある。本堂の廊下には人が一杯になつて見える。沓脱の左右には婆さん達が小さな店を出して通草や菓子を並べて置く。「平内さん能う來たがもう二番濟んだ」と其の內の一人の婆さんが博勞を見掛けていつた。「アヽさうか」と博勞は口癖の大聲を出して「俺が赤泊へお客さんを案內して來た」といひながら素足の草鞋をとる。余もごたごたと一杯に轉がつて居る下駄の間に足を踏ン込んで草鞋の紐を解く。兩掛の荷物を手に提げて段を昇らうとして見ると立ち塞つた人の頭の上に紙が貼りつけてある。番組と書いてあつて三番目には三井寺とある。博勞は荷物をこゝへ賴むがよいといつて

余の荷物をとつて自分の草鞋と余の草鞋とを一つに括つて婆さんに渡した。ぎつしりと詰つた人の後に二人は漸くに立つた。見ると此の本堂といふのは新築したばかりでまだ壁の上塗もしてない。中央の板の間を殘して左右はそこにも人がぴつしりと坐つて居る。廊下も前の人は皆坐つて居る。女や子供も交つて居るが膝へ抱かれた子供迄が大人しくして居る。正面には白の幔幕が張りつめてあつてチヨン髷結つた七十以上と見えるひよろひよろした老人と若者とが麻裃をつけて端然として居る。鼓が足もとに置いてある。幔幕の際には此外坐つて居るのが四五人ある。板の間のこちらの隅には青竹を折り曲げて櫓の形に組んだものが立つて居て小さな釣鐘の形が下つて居る。釣鐘からは長い紐が垂れて居る。本堂のうちは此丈である。軈て老人が鼓を膝へとると若者は鼓を左の肩へとる。赤い紐がだらつと老人の膝からさがる。老人は笹の葉を押し揉んだやうな掛聲をしぼり出して右の手を徐ろに一杯に擧げて打おろすと鼓はパチツといふ音がする。若者は太

い聲を掛けて斜に打ちあげると此れはポンと鳴つた。互に鼓を打つて居ると左の方の幔幕がまくれあがつたと思つたら網代の笠をかぶつて右の手に青笹を擔いで一人表はれた。此が三井寺の狂女といふのだと心のうちに思ふ。狂女は造りつけたやうな姿勢でそろそろと歩く。二間ばかりで板の間へ出る。板の間へ出るとこちらを向いて以前の速度を以て歩いて來る。狂女の衣裝は燦として美しい。然かも古色を帶びて居る。左の手は四本の指を揃へて袖口をぎつと押して突つ張つて居る。板の間を擦つて一歩々々と踏み出す白い足袋の先が目につく。青笹も笠もとつて捨てた所を見ると下は溫い相貌を含んだ假面である。白く塗つた假面はこれも古色を帶びて居る。假面に鉢卷した紐がぱらつと後へ垂れて居る。假面から少し下へ顎が出て見えるが其顎から汗がぽたぽたとこけて來る。後ろの幔幕に附て居る男が時々白紙を以て後から汗を拭いてやる。狂女は白い足袋の先を踏み出し踏み出し蛙聲の如き謠につれて板の間を舞ひめぐる。極めて鈍い運動であるが骨

が折れるかして舞ひながら手元が絶えずぶるぶると震へて居る。「三井寺では子役が居ないのですか」といふ聲が余の耳もとで聞えたので振りかへると余の側に立つて居た一人が相手に噺をしかけたのである。之がさうですと相手はすぐ眼の前を指す。白衣の子役は閾一つを隔てゝ見物と並んで坐つて居るのであつた。相手は更に「アレは小木の桶屋だ相ですね」と狂女をさしていつた。余は此を聞いてさつき博勞をたづねる時分に太桶へ箍を打込んで居た桶屋のことを思ひ出してあゝいふ職人仲間にこんなものがあるのかとゆかしい心持を禁じえなかつた。聽て狂女が二三歩すさつて中啓持つた右の手と右の足とを突き出した腰をぐつと後へ引いて假面が屹と靑竹の櫓を見あげた時に「ア、いゝ」と際どい聲が又余の耳許で響いた。見ると博勞が向鉢卷をした首を曲げて反齒の口を開いて見惚れて居るのであつた。三井寺が濟むと本堂一杯であつた見物が一齊にわあわあと騷がしくなつた。更に番組は鉢の木が濟むと板の間の四隅には荒繩を引つ張つてランプが吊

された。見物が漸く動いて余等の前は疎らになつた。余は閾際まで進んだ博勞を見ると何時の間にか胡麻鹽頭の男と話をして居たが余を見ると「明日は此人が牛を越後へ積んで歸るといふから乘せていつて貰ふことにしたがよい」と其男に余を紹介した。二人は牛がどうとかいふことを符貼交りに云うて平内さんが相手の袂へ手を入れて二人で握り合うたと思つたら平内さんは其癖の大聲を出して「そりやあんまり安く買つたなあ」といひながら口を鉗んで向鉢卷した頭を横に曲げた。又鼓が鳴つて船辨慶が初まつた。板の間に居る辨慶と幔幕がまくれて出た靜とが悠長に應答をする。辨慶は八字に髭のある大柄な男で時々瞼をぱちぱちと叩く。靜が板の間の中央に蹲ると後ろの幔幕の際に居た男が金烏帽子をかぶせた。其男がどうも見たことのある顏だと思つたら此れは小木の宿屋の主人であつた。袴をつけて端然たる姿が餘り變つたので一寸見には分らなかつたのである。余は此を博勞に話すと「ア、鉢の木の仕手を舞うたのがさうだ。どうも能う舞ふ」とい

つた。烏帽子をつけた靜が白い足袋の先をそつと出し出し舞ひめぐる。四隅に吊つたランプの光が烏帽子に輝き衣裝に輝いて美しい。「アレは小木の石屋でワキなら何でも務めるのだ」と博勞が語る。靜が去つて知盛の幽靈が薙刀を振り廻して出た。薙刀は時々ランプを叩きさうになる。其度毎に薙刀の刄がぴかぴかと光る。能く見ると銀紙が貼つてあるので處々皺がよつて居る。長い髮をかぶつて伏目に荒れ廻る知盛の顎は赤い布で包んである。辨慶が頻りに珠數を押し揉んでは押し揉む。博勞は此時突然「此辨慶珠數の房を振るすべ知らん」と叫んだ。余は辨慶に聞えはせぬかと心配した。板の間近く膝に抱かれて居た子供が薙刀に驚いたはづみに持つて居た梨を落した。梨はころころと板の間の中央まで轉つて行つた。外はまだ黃昏である。婆さん達の店が片づけにかゝつて居る。余は先程婆さんの箱の中に椿の葉へ乘せた米饅頭のあつたのを見ておいたのでそれを一包買つてやつた。婆さんは「此れは椿ダンゴといふのだ」といつた。草鞋も足袋も手に提げたま

ゝ博勞に宿へ案內されて行く。本堂の庭から石段をおりる。途々聞くと佐渡には二派の能の先生があつた。此の博勞の平內さんも若い時分には先生に跟いて歩いたことがある。其後平內さんの先生の方は衰微してしまつて今日の一味だけが立派に立つて居る。然し平內さんの先生には名作の翁の假面が祕藏してあつた。百兩の値打はあると一口にいつて居たのであるが五六年前の洪水で家も藏も流されて其假面も一所に失つてしまつた。それは海へ落ちたのであつたと見えて後に磯へ打ちあげられたのを漁夫が拾つたけれど其時には鼻も缺けて元の姿はちつともなかつたといふのである。余は實際能を見たのは生來此の日がはじめてゞある。然かもかういふ孤島の僻邑に能の催しがあらうなどゝは夢にも思ひ設けなかつた所である。其見物人といふのが大抵は百姓や漁夫のやうなものであるだらうがそれが子供に至るまで靜肅にして居たのは意外であつた。其役者といふのが桶屋や石屋や宿屋の主人などでありながら相應に品位を保つて見えるのも向う鉢卷をと

つたことのない博勞の平内さんが能の智識のあるのを見ても此の島の人の心に優しい處のあるのが了解される。博勞が遭うて其日から懇切であるのも宿屋で出掛に必ず草鞋を一足くれるのも小木の宿屋の美人が洗濯をしておいてくれたのも皆此の優しい心の發動でなければならぬ。佐渡といふと昔は罪人の集合所であつたやうに思つて居たのであるが淸潔なる島の空氣は彼等の感化のためには穢れなかつたと見えるのである。博勞は此夜も余と共に泊つてしまつた。

此所は越後の寺泊と相對した赤泊の漁村である。

六　草　鞋

夜明にうとうととして居るとばらばらと雨が廂を打つ。又うとうととしてふと枕を擡げると博勞は既に起きて蒲團の上に烟草をふかして居る。「まだ雨だらうか」と聞くと「日和だ日和だ」と障子を開けて見せる。さつきのは通り雨であつたの

だ。客がみんな爐の側に聚つた。越後の博勞だといふ胡麻鹽頭の男も此の宿に泊つたと見えて爐の側へ來て居る。客の膳が悉く爐のほとりへ運ばれる。宿の亭主も一所に飯をくふ。亭主といふのは五十格恰の恐ろしい噺好きの男で一箸目には饒舌つて居る。相手が皆去つてしまつたら余を攫へて饒舌る。「佐渡といふ所は氣候がいゝ上に桑が自然に生えて居るのだけれど惜しいことに養蠶に熱心するものがない。まあ氣候がいゝから何も知らずに飼つても二年や三年は當るが其うちに癖がはひるともう呆れてしまふといふので情ないことだ。本當に此所へ來て養蠶をしようと思ふものがあれば五枚や十枚の種紙ならば人が手傳つても桑位は摘んでやる。兎に角人氣がいゝのだから人の桑だつて少しばかり摘んだのでは泥棒だなどと騷ぐものはない」とこんなことを饒舌る。客の膳が引かれて給仕の女房がお鉢を隅へ押しつけて去つたのも知らずに饒舌る。亭主は一人でお鉢を引きつけて盛つては喰ひ盛つてはくひ五杯六杯とくふのである。余は博勞の平内さんと宿の裏へ

出る。うらはすぐに汀で船が一艘繋いである。牛がぞろぞろと曳かれて來る孰れも人の腹あたりまでしかない小さな牛である。孤島の產物は孤島相應の體格しか持つことが出來ないものと見えて此間中から見る牛は殆んど狗ころでもあるかと思ふ程小さなものばかりである。亭主は此所でも饒舌りはじめた。「佐渡の牛は藁沓を穿かなくても自由に山坂を步く。それが便利だといふので仰山飛驒の國へ賣れる。飛驒の國へ牛を曳いて行つたものは谷を籠で渡されることがあるが渡しの途中で綱がだんだんたるむとみんな眞蒼になつて籠が向うへついた時にはもう死人のやうになつてしまふ。此所の人はどこへ出るにも船だから海はちつとも驚かないが飛驒の籠渡しでは慄へてしまふ相だ」と亭主はいつた。岸から船へ板を渡して水夫が三人ばかりで牛を船へ引つ張り込む。牛は板を渡つても船へはどうしてもはひるまいとする。さうすると一人の水夫が後から牛の臀をぐつと持ち揚げて押し込む。一杯に糞のついた臀でも構はずに持ちあげる。牛が悉く積まれた時余

は平内さんに別を告げて船へ乘つた。平内さんは此時は鉢卷はして居なかつた。水夫の一人は余の草鞋を汀の水でざぶざぶと濯いで舷へ括りつけてくれた。十一反の白帆が檣に引き揚げられると船はゆらりゆらりと岸を離れる。舳から「とり舵」と船頭が大聲で呶鳴ると舵がぎいつと鳴つて舳が稍南の米山へ向いた。船はゆるやかに搖れて搖れる度に赤泊の漁村の上に五寸一尺と連山が聳えて來る。兩方の舷から屋根を葺いたやうな櫓といふもので船は掩はれて居る。其櫓の中心から檣が立つて居る。余は櫓へ乘つて檣のすぐ下で横になる。空は水の如く澄んで居る。海は空の如く靜かである。空氣は冷かである。此の冷かな空氣を透して日光がちりちりとさす。白帆は余がために日覆の如く此日光を遮るのである。白鳥の翼でなでるやうな軟風が時々そよそよと渡つて來る。白帆はふつと膨れると耳もとで帆綱がぎりぎりつと鳴つてやがてばさばさとたるむ。船頭は余の近くで舵へ手を掛けて悠然と烟草を燻らして居る。余は「日のあるうちに寺泊へつけるか」と聞いた

ら「いゝや此牛は柏崎へ積んだのだ。さうさ此の鹽梅では夜中でなければ柏崎へはつけまい」といふのである。赤泊を出帆する時に舳を米山に向けたのを變だと思つたのであるが此れは以ての外の失策をしてしまつた。寺泊へ渡つて日頃目について居た彌彦山へ登らうと思つて居たのであるが柏崎からでは十一里も戻らねばならぬ。もう悔いても間に合はぬ諦めるより外はない。余は荷物を枕にしてとうとうとなる。海は極めて靜穩であるが沖へかゝつてからはノタといふ波が大きく搖れるので船が大きくゆらりゆらりと搖れる。搖られながらうとうととなつて居ると帆綱が絶えずぎりぎりつと軋つては白帆がばさばさとたるむ。醉醒に水は毒だようと舵取の唄ふ追分の聲が耳に響く。突然に「もう國境は越したかな」と一人の水夫が呶鳴つた。余はむつくり起て見ると佐渡は驚く許り遠くなつて土手のやうに山が連つて居る。彌彦山は岩の崩れた趾も明かに見えるやうに近よつて居る。米山はまだぼんやりとして南方遙かに遠い。櫓の下で牛がどたどたと騷ぎ出した。水

夫が三人同時に覗き込んで際どい聲で呶鳴りつけた。牛はぴつたり靜かになつた。余も櫓から覗いて見ると牛はひしひしと二側につめられて角がぎつしり舷の所で横木に括られてある。此時まで余と枕合になつて居た胡麻鹽頭の博勞がむつくり起きて突然に「どうだ」といふと舵とりの男は「佐渡あらしならいゝが南だからどうち駄目だ。出雲崎へ向けて見ても煽られるんだから今日は柏崎は御免だ出雲崎へつける位なら一層寺泊の方がよからう」といふと「運賃が十五圓ばかり狂ふがいゝや仕方がねえ」と胡麻鹽頭のフケを搔き落しながら博勞がいつた。どうやらこれでは寺泊へ行けるらしい。最初の目的が達せられるかと思ふと心中窃に悦ばしさを禁じえなかつた。あんまり彌彥山が近くなつて居たと思つたのも道理であつた。寺泊へついたのは五時頃である。磯へつくと船はぐるつとめぐされて艫が波打際まで突きあがる。余は笠と蓙を投げ出して草鞋と荷物とを手に提げたまゝ波の引いた途端に磯へ飛びおりた。一日の航海中牛は遂に一聲も鳴かなかつた。

佐渡を見ると悠然として海を掩うて長く横はつて居る。大きな盥に水を一杯に汲んで鍋蓋を浮べれば鍋蓋のとつ手を横から見たのが佐渡が島である。鍋の底から燃えあがつた焔のやうな夕燒の空が佐渡を包んで平穩な海一杯にきらめいて居る。佐渡は余がためには到底忘れられぬ愉快な境であつた。三日は雨であとの一日丈が晴れたのであるが其雨の日に相川の金坑を見てこんなことがあつた。初めは工場の殺風景に驚いたのであつたが泥を溶いたやうに濁つた濁川といふ小さな溪流の岸に沿うて行くと高い支柱を建てゝ大きな箱戸樋が連つて居る。箱戸樋は溪流について屈折して走る。所々僅に紅した蔦の葉が支柱に絡んで戸樋を偃うて居る。疎らに立つた芒の穗が戸樋に屆かうとして傾いて居る。白い雨が蔦の葉をぬらして芒の穗に打ちつける。余は秋寂びた雨の中に立つて此の戸樋を流れるものは何であるかと思つた。戸樋は泥土の如く粉碎された鑛石が水と共に送られて居るのであつた。即ち金銀の水であるといふことが出來るのである。自分の頭の

上を金銀の水が絶えず流れて居るのかと思ふと金山が急に美化されてしまつたやうに感ぜられた。佐渡は此の如くにして到る所余がために装飾されて居るかとも思はれる。外見は凡そ佐渡ほど寂びた所は少なからう。然しながら仔細に味はうて見ると余はまだ佐渡ほど美しい分子を有して居る所に逢うたことがない。佐渡は博勞だけでも十分であるが唯博勞だけでは鼠地の切れのやうな感じを免れぬ。佐渡が島では小木の港で美人に逢うた。美人は鼠地へ金糸銀糸で刺繡つた牡丹の花である。さうして博勞の娘はつやゝかな著莪の葉へ干した染糸で刺繡つた蕾でなければならぬ。美人は夜ちらりと見て朝は別れてしまつたので何といふ名かそれも知らぬ。宿屋の娘であつたか女中であつたかそれもしかとの判斷は出來ぬ。余は何故匆卒に其宿を立つてしまつたのであつたかとそれも分らぬ。毎日々々不快な宿を遁げるやうに立ち去るのが旅中幾十日の習慣になつて居たからであつたらう。然し兎にも角にも昨日の浦を見おろしながら美人と噺をした。其噺は飽氣

なかつた。惜しいはかないやうな思が心の底に潜んで居る。牡丹の花のうらを返して見ると金糸銀糸は亂れて居る。余が美人を憶ふ時には幾分の亂を生ずる。其心の亂れは刺繡の金糸銀糸が亂れて居る如く唯美しくあるべき筈の亂れである。余はかういふ想に耽りつゝ船が磯へ搔きあげられるまで荷物と草鞋とを手に提げたまゝ呆然として立つて居た。水夫の濯いでくれた草鞋はすつかり乾いて居る。佐渡の形見として余の手に殘つたものは小木の宿屋の美人がともし灯のもとにゆかしがつた手帖の間の玫瑰の花と此草鞋とのみである。草鞋も小木の美人が槌で叩いてくれた草鞋である。紺飛白の裾から白地の覗き出した美人の姿がすぐに眼前に浮ぶ。然しそれはもう過去の記憶である。現在のものは此の草鞋のみである。歩いて歩いて底が拔けて足のうらが痛くなつてならぬまでは此の草鞋は穿き通して見たいやうに思ふ。草鞋の底が拔ければ髮の毛の亂れのやうに藁が兩方へ喰ひ出す。それでもぎつしり結んだ紐は手で解かねばいつまでも足について決し

てとれるものではない。此草鞋の紐はどうしてもぎつしり結んで置かねばならぬ。余はかう思ひながら靜かに暮れ行く寺泊の磯の砂濱へ笠も蓙も荷物も投げ出して徐ろに草鞋の紐を結んだ。

（明治四十年十月）

鉛筆日鈔

八月二十八日

▲黄瓜

松島の村から東へ海について行く。此れは東名(とつな)の濱へ出るには一番近い道なので其代りには非常に難澁だといふことである。磯崎から海と離れて丘へ出た。丘をおりるとすぐに思ひ掛けぬ小さな入江の汀になつた。青田があつて蘆の穗も茂つて居る。蘆のなかにはみそ萩の花がしをらしく交つて居る。畦を拾つて行くと田甫が盡きて小徑もなくなつた。仕方がないから楢の木の間を心あてに登つたら往來があつた。丁度いゝ鹽梅に鮪賣でもあらうかと思ふ男が天秤を肩に乘せた儘ぶらつと兩手をさげて左の方から坂をのぼつて來たから一所になつて噺をしなが

ら歩いた。男は松島のホテルへ鰻を賣つて歸りだとのことである。此所らの近道は此邊の人でも知つて知らずだのに能くわかつたと彼はいつた。鰻賣が教へてくれた道を來たら雜木の間で低い草葺のたつた一軒家へ出た。緣先では白い手拭をかぶつた娘が一人で絲を小籰に掛けて居る。ぼくりぼくりと音がするので家のなかを覗いて見たら十五六の舍弟らしいのが土間で麥を搗いてるのであつた。余は此一軒家が何となく面白く感じたので緣の隅へ腰を掛けると娘は急いで小籰と共に膝をずらして余に席を與へた。小籰の側には胡瓜が五六本轉がつて居るので一本剝いて見たくなつたから無心をすると娘は小籰の手をやめて戶袋の蔭から柄の短い錆びた鉈を出してくれた。此れで皮をむけといふのである。狹い庭には糠交りの麥が筵へ二枚干してあつて其先には鳳仙花がもさもさと簇つて居る。其下が崕である。余はすゞろに興を催しながら鳳仙花の傍に立つて此の意外な庖丁を持つて木か竹でも削るやうにして皮をむいた。胡瓜の眞白な肌に錆のあとがほのか

に移つた。然し喉が乾いて居たので非常に佳味かつた。簇つた花の上には糊をつけた白絲が三括りばかり竿に掛けて干してある、余は此邊の人は山稼ぎでもするのかと娘にきいて見たら、此邊一般の鼻に掛つた言葉でうつむいたまゝ低くいつたのだからよくは分らなかつたが「出はつて居りやヘン」といふやうに聞えた。
岨をおりて田甫へ出たら富山の寺がすぐ頭の上にあつた。

八月三十日

▲東海美人（しうり）
草の露がまだ乾かぬうちから暑くなつた。宮戸島の宿を立つて東名の濱へもどる一錢の渡しまで來ると干潮で水が非常に淺くなつて見える。草鞋も脚絆もとつて危ぶみながら徒渉して見ると水は漸く膝のあたりまでしかなかつた。徒渉して見たのが何となく嬉しかつた。昨日の渡守は今白帆を揚げて沖へ出て行く所であ

る。渡しは舟の必要もなくなつたので漁でもしようといふのであらう。弓なりの砂濱が遙かにつゞいて居る。白泡のさし引く汀を行くと草鞋の底から足袋のうらがしめつて心持がよい。だんだん行くとそこにもこゝにも東海美人が打ちあがつて居る。東海美人といふと何だか洒落れて居るが合せ目に毛が生えた滑稽な貝である。五寸もあるのが目の前に轉がつて居る。余は嘗て蛤位の大きさより外は知らなかつたので餘り珍しく思つたから笠も蓙もはふつて波打際をあさつた。大きいのがあれば曩に拾つた小さいのは棄てゝ濱一杯にあさつた。見返ると笠も蓙も遙かの遠くになつて居た。遠くといへば冲はぼんやり薄霧がなびいて居る。貝は手拭の兩端へしつかり括つて手に提げた。

砂濱の盡きる所が松林で、松林を出ると野蒜である。野蒜から石の卷街道へ出る積りで或小村へ來ると今の東海美人は毒だといはれたので惜しかつたが棄てゝしまつた。婆さんが笊へ玉蜀黍を五六本入れて提げて來た。それは生かと聞いた

ら茹でたので直ぐにたべられるのだから買つてくれといつた。そんなら買はうといつたら婆さんは路傍の民家の淺い井戸で余の砂だらけの手拭を洗つて其玉蜀黍を括つてくれた。馬の齒のやうな玉蜀黍である。

八月三十一日

▲山雉(やまどり)の渡し

鮎川の港からだらだらと上つて勾配の急な坂をおりる。杉の木の間を出ると茶店がある。茶店の前を行き過ぎようとすると女房があとから呼びかけてお山へ渡るなら草鞋を買うて鹿の土産を持つて行けといつた。此れはお山の砂を草鞋へつけて來ることは昔から禁じてあるので島へ渡るものは皆新しい草鞋を穿いて、もどりの船に乘る時にはぬぎ捨てる筈だ相である。鹿の土産といふのは小さな煎餅の括つたのである。渚へおりると船頭小屋には四五人で榾火を焚いて居る。客

が集らねば船は出さないといつて一向に取り合はぬ。小船が一艘動搖しつゝある。雨が降つて來た。突兀たる岸の巖には波がだんだん強く打ちつけて小船が更に動搖する。雨が大粒になつた。幻の如く見えた金華山は復た雲深く隱れて裾だけが短く表はれた。山の裾はなつかしい程近い。桐油を着た道者がぞろぞろと余の後からおりて來た。各自に背中を高くして小荷物を背負つて居る。一行の饒舌るのを聞いて船頭のうちの老人が一行のものを米澤ぢやないかといつた。米澤の山の中だといつたので言葉でどこのものでも分ると老人は頗る得意である。道者が來ても船はまだ出さうともせぬ。海がだんだん惡くなり相なので何故出さないのだといふと此日の渡しは此れ限りなので金華山から鮎川へ酒買に渡つたものが戻るまで待つて居るのだといふのである。鮎川に二人で酒を飮んでるのがあつたがあれなら迚ても今日のうちには歸り相はないと道者の一人がいつた。遂には船頭も待ちあぐんで一人が南京米の袋をかぶつて出て行つた。所がそれも沙汰がな

い。屹度あいつも引つ掛つたに違ひない。呑氣なにも程があるといつて道者等が頻りに呟いて居る。幾ら待つても島の酒買は來ないのでやつとのことで船が漕ぎ出された。三人が艪を押して舳の一人が櫂をとる。巉巖に添うて船が進む。鹿渡しの岬に近づくと波は澎湃として船が思ひ切つて搖れる。岬に打ちつける波は花崗石の如き白い柱を立てる。北方に開けた海上には江の島列島が大小相並んで狹い瀬戸の間から見える。列島は波の穗に隱れては復あらはれる。桐油を頭からかぶつて余と向き合ひになつてた男は目がどろつとしてさつきから下脣が垂れた儘であつたが遂に桐油でぐるつと顏をくるんで轉がつてしまつた。他の道者も顏が眞蒼になつて小縁へしがみついた儘反吐をついて居る。老人の押して居た艪は艪べそが外れた。老人は狼狽して嵌めようとしたが船の動搖が激しいので幾らあせつても嵌らぬ。止めろ止めろいゝやいゝやと兩肩からうんと力を入れた男が聲にも力が籠つて叱りつけるやうにいつた。老人は極りわるげに船の底に蹲つた。雲

が一方からだんだんに尖げると三角に握つた握飯のやうな金華山が頭から押へつけるやうに聳えて居る。中腹の神社から下には鋏で梢を刈り込んだやうな木立が青い芝の間に鹽梅されて庭園の如く見える。常盤木の繁茂した山上には綿打ち弓から飛ぶ綿のやうな雲がちぎれて居る。船が岸へつくと道者は一同に漸く生き返つたといふ鹽梅で「船ぢや我折つたやァ」といひながらばらばらと勢よく馳けあがつた。青い芝は地にひつついた樣になつて居て糸薄の草村が連つて居る。道者は口々に鹿々と呼んだら思はぬ糸薄の中から大きな角が動いて鹿が五六匹あらはれた。土產を出して見せると五六尺の近くまで寄る。こちらから更に近づくとつい と逃げる。投げてやればたべる。一行の旅裝が黃色な桐油を掛けたり笠をかぶつたりして居るので氣味が惡いのであらう。鹿が煎餅をたべる所を道者が三四人で手と手をつないで鹿を坂の下へ追ひつめようとしたが、鹿は輕く飛び退いてけろつと立つて居る。道者はこんなことをしては騷いて船の中に居た時とは別人の

やうである。よく見ると鹿は糸薄の中にそこにもこゝにもけろつとして立つて居る。其斑紋の美しいことは奈良の鹿などの到底及ばぬ所である。顧れば一行の乘つて來た船は追手に帆を揚げて雨の中に遙かに隔つて居る。木立にはひると庭木のやうに見えたのは皆二抱三抱の樹ばかりであつた。

雨はしとしととして深更までやまぬ。厠へ立つたら目の前をひらりと飛ぶものがあつた。驚いて見ると鹿である。手を出したら鹿は指のさきへ鼻づらをこすりつけた。

九月一日

▲猿

社務所から出た一行十人ばかり白衣の先達に案内されて金華山を登る。坂が極めて峻しい。曉の霧がひやひやと梢を渡つて雨がはらはらとかゝる。老樹の欝然

として濕つぽい間を行くので深山の樣な寂しい心持がする。忽ち後の方で猿々と呶鳴るものがあつたので振りかへると一行のうちの三四人が立ちどまつて梢を仰いで居る。余も急いでおりて行つて見ると五六匹の猿が縱の喬木に枝移りをして居る所であつた。猿はゆさゆさと枝を搖しながら四つ足を立てゝこちらを見おろして居る。赤い顔がほのかに見える。余は猿の樹に居るのを見たのは此が初めてゞある。からかつても見たい樣な氣もした。一行のものは皆樹の下へ集つて口々にオンツアマ、オンツアマと呶鳴つて手を叩いたり樹を搖ぶる眞似をしたりして騷いたけれど、彼等は一向平氣で枝をゆさゆさと搖がして居る。猿といふものは何處で見ても剽輕なものである。道者の一行が騷いて居るうちに先達は一人で行つてしまつたかして後姿も見えなくなつた。ばらばらと先達の後を追ひ掛けながら道者の一人がいふのを聞くと、此前に來た時は猿が丁度栗を搖り落した所へ通り掛つたのでみんな拾つてしまつたら枝から糞をかけられたといふのであつた。

△烏

山巓の小さな社の縁(えん)へ腰をかけて一行の者は社務所で呉れた紙包の握飯をひらいた。縁先には僅かに二坪ばかりの芝生がある。何處から來たか烏が二羽來て一羽は芝生のめぐりに立つた樹木のとある枯枝へとまつて一羽は足もとへおりた。おりた烏は嘴をあげたり首を曲げたりして握飯が欲し相に見て居る。余は鹿の土産がまだあつたので投げてやつたら、ひよいと一跳ね跳ねてそれを咥へて元の處へ戻つて足で押へてはむのである。さうして又嘴をあげたり首を曲げたりして見て居る。握飯を包んだ紙を投げてやつたら嘴で引返し引返しして其紙の中の飯粒をはむのである。幾百千の參詣者が繰り返し繰り返し登山するので烏までがこんなに馴れてしまつたのであらうが、深い木立の間を雲霧にぬれて漸く山巓について何となし人寰を離れた感じで居る所へこんな烏が飛んで來たのは更に別天地の

やうに思はれた。一人が握飯の食ひ殘しを呉れたら何と思つたかそれを啣へた儘霧深い谷をさして飛んでしまつた。飛ぶ時に啣へた握飯がぽろりと缺けて芝の上へ落ちた。枯枝に止つて居た一羽はこちらを見おろして居たが遂におりては來なかつた。さうして此も大きな聲で鳴いたと思つたらついと芝の上の飯をさらつて飛んで行つた。外洋の霧は山陰の梢を吹きあげて蓬々として更に吹きおろす。木の葉が交つて飛び散る。

▲鹿の糞

霧の吹きつけるなかを山蔭へおりる。やつぱり樹木が深くて坂が急である、だんだんおりて行くうちに霧が薄らいて枯れた梢の間から空が朗かに見え出した。又誰か後の方で鹿々と呶鳴つた。あれあれと一人が指して居る方を見たら、其時はピオウと鳴いた聲ばかりで鹿は見えなかつた。ピオウと復た鳴いた時は聲が遙かに遠くなつて、三聲鳴いた時はやつと聞き取れる程であつた。

深い樹立を出ると疎らな赤松が見え出して窪んだ草原のやうな所になつた。先達は「皆さん此所は不淨場であります」といつて自分が先に小便をした。一行の者も皆小便をした。草の中には羊齒の葉が秀でゝ既に枯れた自然生の芍藥も交つて居る。此所からすぐに海へ出る。岸は皆削りたつた大きな巖である。斷面には縱横に切れ目があつて恰も十文字に繩を掛た大荷物が問屋の庭に積み揚げられたやうな形である。小徑は此斷崖の上をめぐりめぐつて北へ走る。一行はばらばらになつて先達に跟いて行く。左を仰いて見ると鬱蒼たる山の巓は頭に掩ひかぶさつた樣で其急峻な山の脚は恰かも物蔭から大手を開いて現はれた人が奔馬をばつたり喰ひ止めた樣に此小徑で切斷されて居る。小徑については到る所青芝と糸薄が茂つて居る。さうして糸薄の中には疎らに赤松が聳えて居る。時々鹿に逢ふことがある。山蔭に居る鹿は能く馴れては居らぬと見えて屹度逃げて行く。一つか二つか離れて居るのがひよつこり人を見ると非常に狼狽して草村を跳ねて逃げて行

く。糸のやうな脚で跳ねるのがふわふわとした綿の上でも跳ねるかと思ふ樣に見えて如何にも輕げである。驚いて逃げる時にピョウと細い聲で鳴き捨てるのである。五六匹も揃つて居るといふと體と體と押し合ふ樣にして或距離の所まで行くとけろつとして何時までもこちらを見送つて居る。無邪氣なものである。「鹿の尻はモッコ褌をはめた樣だなシ」といふ聲が又後の方から聞えた。大箱の岬といふ札の立つ所へ出た。急な山の脚が海へ踏ん込む前に青芝の小山を拵へて其小山の頂近くから截斷して海へ捨てゝしまつた時に恐ろしい懸崖が出來た。此が大箱が岬である。四つに偃うて覗いて見るとさらさらと僅に碎くる白波が遙かの下の方である。其遙かな下の方に小さなものが動くやうに見える。それがだんだん昇つて近づく所を見ると一匹の小さな蝶であつた。暫く見て居たら心持が惡いやうになつた。「大箱の岬を覗くものは馬鹿だといふのだ」と道者がいつた。青芝は地にひつついた樣で綺麗である。鹿が此芝をくひに來ることがあると見えて豆粒

のやうな鹿の糞がころころと轉がつて居る。青芝の上に休んで居ると何時の間にか蝶は懸崖の面を舞ひあがつたものと見えて小さな黄色い羽をひらひらと動かしながらめぐりめぐつて鹿の糞へとまつた。際涯もない外洋を望むと今日ばかりは波がないのかと思ふ程平靜である。余は一朝暴風が此平靜な海を吹き亂して雲と相接して居る水平線の先の先から煽り立てゝ來る激浪が此の大箱の懸崖に吼えたけびてしぶきのとばしりが此の青芝へ氷雨の如く打ちかゝる時に牡鹿が角を振り立てゝ此岬に突つ立つ所を想像して見た。

九月九日

▲會津に入る

草葺ばかりのみじめな米澤の市中は戶が漸くあいた所である。老女がまだねくたれ髮を掻かぬ姿といつてやりたいやうだ。機(はた)の聲のみが忙しく響く。

小さな峠を一つ越えて關町といふ村で提げて來た小包を出した。郵便局といつても事務員がたつた一人しかなかつた。二三町來ると其事務員が「お客さん」といつて追ひ掛けて來た。「局へ殘す筈の受領證を渡して仕舞つたから換へて呉れ」とお辭儀をするのであつた。あたりには白苧が干してある。

又峠になる。大臼のやうな炭俵を背負つた女達がおりて來る。二尺ばかりの短い棒を手に手に持つて居る。棒を俵の尻へ當てると立つた儘に休むことが出來るのである。牛追が杓子のやうなものを杖について居るので「何をするのか」と聞いたら牛の腹の蠅をぺたぺたと叩いた。綱木の村へおりる。出羽の地もこれ限りである。溪流を引いて麻を渡した淺い地が所々にある。モツペを穿いた女どもが晒した麻の皮を扱いて居る。家がみんな荷鞍ぐしだ。荷鞍ぐしといふのは棟が千木を建てたやうになつてるのである。

檜原峠へかゝる。峠のやうな峠である。山が深いだけに溪流が大きい。汀には

竹林の如き虎杖がまだ花をもつて居る。道は又他の溪流に添うてのぼる。兩方から一丈餘りに延びた蓬が茂つて、撓むまでさいた鳥兜草が丈を爭うて立ち交つて居る。一丈餘の蓬で箸を折つて見たらやつぱり蓬のかをりがした。頂上まで蓬や鳥兜草が繁茂して居るが頂上に至るまでそれが兩側二尺ばかりは薙ぎ拂はれてある。馬や牛を牽いて草苅がこんな所まで來ると見える。頂上は國境である。

會津へ一歩くだれば一變して山毛欅の深林になる。梢には霧の如く白雲がとざして雨になつた。蓙が雨のためにしめつて板のやうに强ばつて來たら山毛欅が竭きて橡の林になつた。雨がやんだ。橡の葉は既にいくらか黄ばんで居るので林は急にからつとして來た。溪流の響きが漸く聞える。橡の林を出た。白衣の行者が五六人桐油で包んだ大きな幣束を擔いて峠へかゝる所である。見あげるとまだ雲がある。行者はぬれに行くのである。

忽ち一大湖水が現はれた。鬱然たる周圍の樹木を浸して居る。湖水に迫つて大

きな茶店があつて二階には誰でも住み相である。店には煤けた障子が締め切つてあつて障子の破れがふらふらと搖れる。此怪しげな茶店で峠で切つた草鞋を穿きかへる。旅客の穿き捨た草鞋が障子の蔭に堆く積んである。ぬるい茶をのみながら女房がしみじみといふ噺をきく。湖水は以前は萱原であつたが磐梯山が破裂した時に土灰が一方を塞いだ爲め水は落ち行く瀨を失つて此の如く湛へたのである。湖水の底には四ヶ村が埋沒して居る。二十戶の村で纔に七人のみが生きた所もある。最も悲慘であつたのは山の畑へ稼ぎに行つた老人である。磐梯山にあのやうな烟の立つ筈はない。山の凶事であるかも知れぬと二人の子を促して慌てゝ駈け出したのであつた。二人の男の子は血氣であつただけに危い命を拾つて逃げおほせたが老人は足のつゞかなかつた計に何處で泥土に埋まつたか遂に歸つて來ない。破裂のあとは七日まで山の鳴動が止まぬので檜原の村では家財を悉く馬に乘せて夜は殊に恐ろしさに堪へ兼ねて逃げようとしては流石に躊躇して夜を明す

といふうちに山の騒ぎが止んだのである。知つた人が埋つて居ると思ふと「船で渡るのも心持が悪い」といつて女房はぽつさりとする。榾が燻ぶつて青い烟が天井をめぐる。

茶店のうしろには疎らな桑の立木があつて其間に菽が作つてある。狭い畑は二三歩ですぐに汀へおりる。湖水を隔てゝ遙かな草山の裾にぽつぽつと四角な白いものゝ見えるのは秋蕎麥の畑である。

道は湖畔に添うて稍高くなる。湖水を見渡すと汀をめぐつて白骨の如き枯木が水中に亂立して居る。大樹は枝幹其儘で小樹は手の骨や足の骨を立てならべた如くに短く朽ちて居る。枯木がなかつたら檜原湖は唯幽邃な湖水であつたに違ひない。凄いものは此水中の枯木である。小舟が一つ枯木に繫いである。

磐梯山も雨が晴れた。急峻な山腹を今一朶の雲が駈けのぼるやうにして頂から横に走つて山を離れると磐梯の全形が明かである。湖畔から見る磐梯山は殆んど

破裂の趾のみが表はれる。頂から地盤の底まで唯一刀の下に截斷し去つたやうなのが破裂面である。其形狀は假令ば銹びた大釜の破片を立てた如くである。大釜の形體が若し全くあつたならば磐梯山をも容れることが出來るだらうと思ふ程大きな破片である。其所々から烟草の烟の如き白烟が立つ。其所が現在の噴火口である。湖畔の崕には芒蓬が生えて其傍を過ぎる時はまだ濡れて居る四五本の芒の穗がゆるやかに搖れて恐ろしい磐梯山の面を撫でるやうに見える。芒のもとには野菊のやうな花が眞白である。

（明治四十年三月）

彌彥山

新潟の停車場を出ると列車の箱からまけ出された樣に人々はぞろぞろと一方へ向いて行く。其あとへ跟いて行くとするとすぐに長大な木橋がある。橋へかゝつてぶらぶらと辿つて來ると古傘を手に提げた若者が余の側へ寄つて丁寧な辭儀をなし「新潟はどちらへお泊りですか」と問うた。彼は宿引であつたのだ。「何處といふことはないが郵便局へ用があるのだから其方へ行かねばならぬ」と斷る積りでいふと、「局ならばすぐ手前のうしろに當つて居ります、手前には電話もありますスケに佐渡の汽船へお差支を掛けるやうなことは致しませんから泊つて下され」といつた。余は構はずにぶらぶら來ると宿引も跟いて來る。橋の向うは新潟

の市街で水に臨んで人家が長く接續して居る。後を顧みると岸が遙に遠くなつて茂つた葦が短くなつて見える。此所で漸く橋は半分位迄來て居たのである。「此橋は立派なものぢやないか」と宿引へいつたら、「へえ四百卅間ございますから」と宿引がいつた。橋の下には濁流が溶々として漲つて北へ海につゞいて居る。西南の方を望むと此大江の水の通ずる區域は唯一帶の平野と見えて空を遮るものがない。其間に唯一つの山が晴れかゝつた雲の間から射しかける夕日の空を背にして丁度水上に聳えて居るやうに見える。余は呆然として此周圍に見とれてしまつた。橋の欄干に凭れながら荷物に挾んであつた地圖を披いて見ると宿引は此時まだ余の傍に居つたのであつたが「旦那あれはお彌彦山でこゝから八里ございます、丁度これに當ります」と地圖を覗き込んで指しながらいつた。余が彌彦山を知つたのは斯くして此信濃川の長橋に立つてであつた。どうしても一度登攀して見たいといふ念が此時油然として起つた。此は九月の十三日の雨上りのことである。

一

九月の十九日に佐渡の赤泊の漁村から和船に便乘して越後の寺泊へ渡つた。船は白帆を張つてノタといふゆるやかな波にゆれながら舳はいつも彌彥山へ向いて居た。寺泊へついたのは丁度黃昏近くであつたが泊らうかどうしようかと思つたので或宿屋へ立ち寄つて見ると、「あなたの足ならばまだまだ彌彥までは行けるさあさあ急いで行つたがよい」と其宿屋の女房が促し立てる。宿屋の女房が客にこんなことをいふといふのは全く意外であつた。然し其夜はひどい闇であつたのでたうとう途中で或家へ泊めて貰うた。さうして翌朝しらしら明に其家を立つた。夜が明けた所を見ると其家といふのは眞白にさいた蕎麥畑の間に在つて低い小さな草山が屋根へ覗き込み相になつて居る。此山は何だと家人に聞いたら此はお彌彥だといつた。余は近くへ來て見ると彌彥山がかうもつまらぬものに成るのかと驚いた位であつた。山を左に見て街道を半里ばかり來ると彌彥の神社になつた。神社の前に相接して居る宿屋も起きて間もない樣子で客が朝の參詣に出る所であつ

た。鳥居をくゞつて左へとつて行くと手入の屆いた杉林がある。杉林を出ると山坂で、低い峰ではあるが縈廻しつゝ登る。まだ早朝のことであるから前後に登山するものは余の外にはない。頂には棚をめぐらして中に少しばかり石が積んである。此が祭神高倉下の廟である。あたりには瘦せた薄の穗が五六本疎らに立つて居て重さうに傾いた儘搖ぎもせぬ。廟の傍にあつて見渡すと渺茫たる日本海はすぐ山の脚もとからひらいて居て、悠然たる佐渡が島が此海を掩うて長く横はつて居る。島の上には一抹の白雲が斜に棚引いて一二の峰が僅に其雲に相接して居る。沖は一帶に唯拭つた如く平らで踏ん込んだ山の脚近くには丁度建て干した網の目のやうな菱形がほのかに水面に現はれて居る。此は靜かに動く波の姿である。見渡す限り一片の白帆もない。佐渡から今朝も船が出たとしても此所からぽつちりとでも目につく距離まで來るのにはまだ時間が經つて居らぬ。氣がついて見ると相接した一村の人家があつて此所から屋根が見下ろされる。小舟が漁に出る所と

見えて磯近く羽蟻のやうに散らばつて居る。地圖を披いて見たら此漁村は寺泊であつた。寺泊がこんなに近くに見えようとは思はなかつた。寺泊から長汀南下して其所には半分海へ突出した米山が遙かの空に聳えて居る。米山のうしろに模糊として蟠つて居るのは、蓋し能登の半島である。廟の一歩下には小さな建物があつて廟の看守人が居る。此へ腰を掛けさして貰ふと土器へ冷酒を一杯くれた。佐渡はうしろになつて蒲原の平野が雙眸のうちに聚る。平野は悉く黄熟した水田で信濃川が竪に走つて其間に隱見する。平野のさきには國境の高山が綿々として相連互して居る。其連山の高低した間に眞正面に峙つたのは粟が嶽だといつた。其遙かな粟が嶽の山腹から二筋の青い煙が立ち騰つて居る。煙の末は薄らいで横に棚引いて居る。今朝は一帶にぼんやりと霧がかゝつて居るが此二筋の青い煙だけは極めてはつきりとして山よりも近く見える。此懶い樣な天地の間に眼をあいたものは此ばかりだと思ふ程青い煙は活々として居る。彌彥の峰つゞきが角田山と

なつて又一つ立つて居るので北方の一部だけは隱されて居る。地圖で見ると五ヶの濱や角見の濱が此角田山の附近に散在して居る。「此等の濱は何邊か」と看守人に聞いたら「此所からでは隱れて居てしかとは方角も分らぬ」といつた。此五ヶや角見の濱々からは毎年夏になると一群の女づれが關東を指して來る。草鞋を穿いて紺の大風呂敷に葛籠を背負つて皆一樣に菅の爪折笠を冠つて毒消しといふ藥を賣つて歩く。田舍の百姓家を戶毎に尋ね廻つて一種の調子を持つた言語で押し強く藥を勸める。日が暮れゝば炊ぎの手傳をして民家へ泊めて貰ふので商ひの高が少ない割合には相應に利益を見て行くといふ。笠のうらから見える彼等の容貌は極めて美しいものがある。彼等の殆んとすべては謠が上手であるので要りもせぬ毒消しを買うて米山甚句を唄はしたと自慢するものがある位である。遠征隊を組織して出る程あつて彼等は家に在つても勞働が激しいとのことで其角見の濱から出たといふ一人に嘗て聞く所によれば女が十六になつて六斗の米俵が背負ひな

ければ仲間に交際が出來ぬ程耻かしいとしてある。正月の小遣を得るためには各自に八九貫目の蛸を籠で背負うて夜角田の山を越えて夜明に底樋川を渡つて其川口の内野の市で錢に換へる。それで一睡もまどろむことなしに又山を越えて引つ返すのだといふ。幾十人が打ち揃うて高張提灯を先へ立てゝ聲のかぎり唄ひながら行くのはそれは賑かなものだといつた。秋も彼岸になれば散り散りになつた女群は以前の如く一つになつて關東を後にして去る。其彼岸は既に來つて居るのである。或は女群は今此見える連山の一角を志して越えつゝあるのであるかも知れぬ。驚くべき健脚を奮つて彼等が山坂を辿る時は丁度沖の波がしらが搖る如くに打ち揃うた幾十の白い爪折笠が高低しつゝずんずんと進んで行くのであらう。山坂幾つ攀ぢ盡して此蒲原の平野が表はれた時には今此頂から連山を見る目に遮るものがないやうになつかしい此山が先づ目につくであらう。何處かの一角に其保が見える樣な心持がする。濱々の漁人は今其茅屋に久しい間の妻や娘を持ち疲れ

つゝ居るに相違ない。其濱々が山のうしろに隱れて居るのである。此峯つゞきは角田山で畢つて其さきは平野が海と相接して居る。其角田の山を幾らも相隔らぬ所に眞白く川口が見える。余は一も二もなくそれは蛸を賣りに行くといふ内野の川口だと思つたので看守人に聞いて見たら「あれは新潟であの煙が石油製造所だ」といつた。余は新潟はもつと遠くに離れて居るのだらうと思つたのであつた。煙だといふのは埃が吹つ立つた樣な色で斜に長く棚引いて巾廣に海を掩うて居る。看守人の居る所を辭して復た廟の傍に立つと佐渡の雲は依然として白く海へ映つた儘である。痩せた薄の穗もやつぱり傾いたまゝ動かない。更に一遍ぐるつと見廻して見ると低くて小さなつまらぬ山と思つた此の彌彥の眺望の濶大なのには今更の如く驚かずには居られぬのである。

杉の林へ下りると根こじにした小さな杉の木と唐鍬とを側に置いて二人の老人が焚火をして居る。藁で板の樣に拵へたものを背負つて居るので何といふものか

と聞いたら、此は「バンドリ」といつて此を當てゝ置けばどんな荷物でも背中が痛くないのだといつた。暫く噺をして居るうちにふと良寛上人の噺が出た。良寛さんといふ人は墓から碗を拾うて來たので良寛さんそれは死人の碗ぢやありませんかといつたら洗うてたべてるといつたといひますといふ樣なことであつた。一人の老人は顔を地面へ擦りつけるやうにして燻ぶる火を吹いて居る。それは枝豆を焦がしながら燒いて居るのであつた。

彌彦から吉田へ出る間は稻刈りがはじまつて居る。路傍には榛の木が立ちならんで居る。其榛の木へ幾筋となく繩を引つ張つて其繩へ小束を掛ける。それ故恰かも塀と塀との間を行く樣になつてる所がある。燕といふ所で大道へ店を出して果物を商つて居る女があつた。柿があるので甘いかと聞いたら古い樹でなければまだ今頃はコンゲナ柿は出ない。ホンネ、カンドを甞めるやうだといつた。甘露のやうだといふのである。燕から渡しを越えて長い堤をぶらぶらとカンドの樣だ

といふ柿を味ひつゝ歩いた。長い堤が盡きると又川がある。此は二瀬になつた信濃川の本流である。此所には長橋が架設してある。橋を越えれば三條の町になるのである。橋は暫くは空橋で其下には蜀黍畑が作つてある。鳶色の重い穗はすくすくと延びて橋に屆かうとして居る。左右は孰れも茫々として際涯もないかと思ふ程蜀黍畑が連續して居る。此長橋の上に立つて彌彥山を顧ると既に遠くなつた榛の木の上に何時の間にか莊嚴な姿になつて峙つて居た。

越後も國境を越えて蒲原の平野があらはれゝば同時に何處からでも屹度秀麗な彌彥山が目につく筈でなければならぬ。此くして彌彥は遂に越後の名山たるを失はぬ。

（明治四十年五月）

旅の日記

一

九月一日

金華山から山雉（やまどり）の渡しを鮎川の港までもどつた。汽船で鹽竈へ歸らうとしたのである。大分まだ時刻があつたので或旅人宿の一間で待つことにした。宿には二階がある。然し其案内されたのは表の店からつゞいた二間のうちの一間である。他の一間には宿の娘らしい紺飛白の着物を着た十六七の子が針仕事をして居るのであつた。余は旅裝がみすぼらしいので何處の宿でも屹度待遇は疎末なのである。それでも余の座敷だけは店先からは見えぬやうになつて居る。店先ではとんとんと杵の音がする。余が表の障子をあけて此宿へはひつた時に其障子の蔭で宿の女

房らしい女が肌衣一つで下女らしい女を相手に笄のやうな形の丸い杵を持つて小さな臼で白い粉を搗いて居たのである。余は草鞋を解きながらそれはどうするのかと聞くと明日は盆だから佛へ供へる團子にするので米をうるかして置いて搗くのだと其の笄のやうな形の杵を交る交るに打ちおろして居た。其の杵の音が聞えるのである。余は座敷へ案内されてからもうるかすといふことが解釋に苦しんだ。丁度針仕事をして居る娘は閾一つ隔てたのみであるから娘に聞いて見たらそれは水へ浸しておくといふことなのであつた。顔をあげた所を見ると娘はどことなくぼんやりと冴えないもののやうである。然し其時はさう思つたまゝで別に氣にも止めなかつた。其内に今日は鹽竈行の汽船は來ないといふ知せがあつた。殘念だがこゝへどうでも泊らなければならぬことに成つてしまつた。余は鉛筆と手帳とをいぢつて見たが退屈したので新聞を貸してくれといつたら娘は仙臺の河北新報といふのを二三日分持つて來てくれた。それが如何にもはきはきとしない態

度である。碌に見る所もない新聞だからぢきに不用になつた。それから荷物を枕にして横になつて見た。先刻から茶碗でも茶菓子でも一杯になつて嘗めずりまはつて居た蠅が五月蠅く顏をはひまはる。荷物の風呂敷で顏を掩うた。さうして居ると襯衣がひどくしめつぽく不快に感じ出した。かたがた心持が落付かぬので到底眠ることが出來ない。風呂敷をとつて起きて見ると娘はいつかこちら向になつて肘を枕に横臥して居る。どうしても大儀相な容子である。娘はやがて仕事を捨てゝ去つた。余は娘の仕事をして居た座敷が明るいので座敷をとりかへることにしてもらつた。余は又横に成つてごろごろして居ると何時の間にか娘はまた余がさつきの座敷の襖の蔭に横になつて居る。粉を舂いて居たのは娘の母と見えてそこへ括り枕を持つて來てそつと掻卷を掛けてやつた。銀杏返しに結つた娘の髮が開け放つた襖の蔭から少し出てすぐ余が眼の前にこちらを向いて居る。盃が來るといふので母が結うてやつたのであらうか油がつやつやとして居る。余は此は病

身な娘で仕事でも何でも唯氣任せにして置くのだらうと思ふとひどく哀れになつて時々娘を見るといつもぢつとして日の暮れるまで動かぬのであつた。其翌朝は雨がじとじとと降つて居た。蒲團の中でもぢもぢして居るとそこゝでぽんぽんと杵の音が聞える。便所へ立つたら鄰の家の窓に白い大きな團子の盆に竝べてあるのが見えた。余の座敷の近くにある宿の佛壇を見るとそこにも皿へ團子が堆く供へてある。佛壇にも青笹だの鬼灯だのが飾つてあつて燈明がともつて居る。余は一つは好奇心から宿へ其團子を請求した。昨日の娘が一皿持つて來てくれた。黄粉がふり掛けてあつて其の上から砂糖がばらつと掛けてある。すぐに箸をとつて見る。唯臼で搗いた粉はあらかつたと見えて齒切が餘りよくはなかつたがそれでも余は一つも殘さなかつた。皿の底の黄粉まで丁寧にくつゝけてたべてしまつた。皿を持つて來た所をつくづく見ると娘は眼のまはりが幾らか隈になつて容易ならず貧血して居るのである。何處までも大儀相な果敢ない姿である。しとやか

なのも病身故であらうと思ふと又改めて切ない哀れな心持になる。余は身體が惡いのかと聞いたら娘はいゝえと唯一言曖昧にいつた。余は更に此の土地にも盆には踊があるかと聞いたらありませんといつた。心持のせゐかそれが酷く寂しく聞えた。皿を置いて立つて行く娘の後姿を見たらふと帶の結び目の非常に小いのに氣がついた。拳の大さ程であつた。

二

其日は後に雨が止んだ。降るだけ降つた雨は地上の草木に濕ひを殘して心持よく晴れた。汽船は定刻に先つて港へついて靜かに煙を吐いて居る。昨日から待つて居た乘客はごやごやと渚に集つた。空は一杯に晴れて日がきらきらと射して居る。沖かけて波は平靜である。甲板の上は乘客が一杯になつた。日光を遮るために布が覆うてある。乘客は爭うて席をとる。六七枚の蓆に人數の半ばをも滿足に

落付かせることが出來ない。丁度甲板の中央に大きな箱のやうなものが置いてあつて其上に端艇が一つ載せてある。其端艇にはズックが積んである。其隙間へ穢い洋服の男がはひり込んだ。卅五六位な年增の女と十五六の女の子とは其男と一緒であると見えてやがて二人の手を執つて引き揚げる。少女は極めて田舍じみた容子できよろきよろと頻りにあたりへ目を配つて居る。男は其髭のある顏へ手拭でぎつと頰冠をした。さうして年增と顏を見合せて笑つた。そこにはまだ一人位の席が明いてるので余もつゝいて端艇へ乘つてそこのズックを廣げて其上へ坐つた。そこは四人でぎつしりに成つた。汽船は徐ろに進行する。鮎川の港に近く相對して橫はつた大きな島が網地島でぽつぽつと漁人の家が見える。それから稍小さなのが田代の島でそれから又小さな島を左舷の方に見つゝ行く。こゝらの島には蝮蛇が非常に居ると洋服の男がいつた。蝮蛇の居るといつた其小さな島の近くに小舟が二三艘泛べてあつて浮標のやうなものが丸く水に輪を描いて居る。洋服

の男はあれは鮪の寄りへ大網を掛けた所だと說明する。少女は又其方へ目を配る。其網に近く海中へ丸太で櫓のやうなものが建てゝある。さうして其櫓の上部には薦のやうなものがめぐらしてある。そこには漁夫が乘つて鮪のはひつたかはひらぬかの檢査をして居るので漁夫の參謀本部だと彼は又いつた。海は淺いと見える。其淺い海に櫓を建てゝ鮪の群を待つといふ悠長な漁獲の方法に余は驚くと共に此の近海にはどれ程魚族が繁殖するのだらうかと思つた。余等の近くに鐵の赤く塗つた勾欄へ倚りかゝりながら遠くを見て居る印袢纏の一群がある。余はすぐ近くに居た彼等の一人に聞いて見ると彼等は大工職である。金華山に無線電信所が建つといふので其普請に傭はれて卅日も前に廿人程で島へ渡つたのだといつた。給料はよし處は變つて居るし初めのうちはいゝと思つて居たが、其内に不自由だらけで明けても暮れても海ばかり見て居るのだからもうよくよく厭になつてしまつた。それで愈昨日の午後に暇が出たとなつたら一刻も我慢が仕切れなくな

つてすぐ鮎川まで歸つたのである。然し其時は渡船の時間が切れてしまつたから非常の時に打つべき筈の鐘を鳴らして山雉（やまどり）の渡しの船を呼んだのだといつた。さうして彼は又仙臺へ歸つたら少し身體の養生をしなくちやならぬと獨言をいつた。牡鹿半島は一望晴朗としてテーブルへ掛けた絨布の如く平らかで且つ青い海の上に低く長く連つて其先端にとがつた金華山が聳えて見える。其聳えた下のあたりに鮎川の港はあるのであらうがもう遙かに隔つてわからぬ。大工の棟梁らしい男が其牡鹿半島を一々弟子共に指し示して居る。あれが石の卷だといふ所に白帆が二つ三つ見える。そこには日和山の杉であるべき筈の木立が小さく然かも鬱然として居る。余は二日もかゝつて歩いた土地を安坐して一目に見るのであるからそれが非常に嬉しかつた。忽ちあれあれと人々が騷ぐ。汽船の右舷に近く一區域をなして平靜な波に更に小波を立てゝ水の動いて居る所がある。洋服の男はあれは魚の群だといつた。時々尾が出たり頭が出たりする。少女はあれあれと我を

忘れて延びあがるやうにして見入る。年増の女はあぶないといふて制する。汽船の進行するに連れてそつちにもこつちにも此の魚族の群が目につく。甲板には乘客が一杯であるだけ魚族の群に對する騷ぎが大きい。少女は其度毎に我を忘れて見入る。汽船は日覆の布の上から煙を遙か後の波の上に吐き落しながらずんずんと進行する。松島の外側へさしかゝつた。奇巖亂礁の島々に接近して行く。其の時波は稍動いて船體が幾らか搖れて來た。沖遠く吹きおくる涼しい風に日覆の布ががばさばさとふれる。今まできよろきよろと目を睜つて騷いで居た少女は急にうつ伏しに成つてしまつた。見ると此の少女の帶の結び目も漸く拳大さに過ぎないのであつた。代が崎を過ぎて鹽竈の杉の梢が遙かに見えて雞が島が舳にあらはれた時には船體の動搖は止んだ。さうして平らな蒼い水を蹴つて行く汽船の舷に近く白い泡が碎けて消える。年増の女はうつ伏しに成つて居る少女を見てお前はまあどうしたのだといつた。さうして私は船が大好きだ。あのずつと白い泡の立つ

所はラムネのやうで胸がすきるといつた。余は此の奇抜の言に意外な思をした。雛が島のあなたからは鹽竈を出た小舟が白帆を揚げて走つて行く。白帆を揚げた小舟は又それと行き違ひに鹽竈をさして雛が島のあなたへはひる。熟練な舟子共は軟風を其三角の白帆に受けて小舟は己が欲する方向に走らしむるのである。乘客は皆愉快げに甲板に立つた。唯少女は余が眼の前に帶の小さな結び目をあらはした儘汽船のつくまでうつぶしになつて居た。

三

九月四日

仙臺から西すれば山形街道である。余は此の街道を行くのである。時々足もとに深い溪があらはれてそこに廣瀨川の水が白く見える。水は仙臺へ落ちて彼の青葉城のもとを洗つて行くのである。溪から溪へ自然の道筋をたどつて水は大なる

迂廻をせねばならぬので力の限り急いで行く。淙々として遙に且つ明かに聞ゆるものは其水が急ぐ足の響ともいひうるであらう。街道は平らかである。疎らな芒に交つて松蟲草の花がびつしりと連つて居る。或村へはひる少し前で一人の女と道連に成つた。此の女は余が後から追ひ拔かうとした時に足をはやめて余の後へ附いて來たのである。自分は佛參りに行くのだがお蔭で道が捗どるといつて息をはづませながら附いて來る。年增のまづいさうして日に燒けた顏の女である。髮をてかてか光らして白い足袋を穿いて居る。余は好ましい道連でないと思つたからうつちやらうとすると女は汗を垂らしながら附いて來る。村へはひつた時に女は鄕六といふ所だと獨言にいつた。仙臺の市へ行くのであらうと思ふ荷馬車が繭を山のやうに積んで二臺三臺と埃を立てゝ行き過ぎる。薪を負うた女が三人五人と揃つて來る。皆襤褸で厚い板のやうに拵へたチャンチャンを着て居る。薪といふのがみしみしと肩へこたへ相な大きな束であるからそれでこんな襤褸の厚板を

工夫して着て居るのだらうと思つた。道連の女に此は何といふものかと聞いたら此はケラといふものだといつた。それでまだ此から先の山になると随分をかしなことをいふと女がいふからどうをかしいかと聞くと「笊はフゴといふチヤといふ」やうにいつた。訛りの所がはつきり分らないが斯う聞えた。笊のことをフゴと呼ぶのだといふことである。途切れ途切れに人家のある愛子といふ村へかゝる。此村は端から端までゞは二里もあるといひながら女は負けずに附いて來る。もうつちやつたかと思ふと二十間か三十間あとから依然として汗を垂らしながら附いて來る。人家の漸く途切れた所で余はつと草を苅つた趾のある草原へそれた。女はさつさと先へ行き過ぎた。余は其草原で辨當を開いた。さうしてそこへ暫く横にならうとしたがうつかり木陰のないところであつたからすぐ又歩き出した。余は毎日辨當が濟めば屹度そこに横臥する。それは身體がのびのびとしていふべからざる愉快を感ずるからである。徒歩の旅行を苦しんで續けて居るものでなけれ

ば此の味は解らぬであらう。又人家のある處を過ぎるとそこには欝蒼たる松林がつゞいて居るので余はたまらず身を投げ倒すやうにして松の根がたへ横臥した。さうして居ると後から大きな聲で賑かに笑ひながら來るものがある。其中にさつきの女が居る。穢い百姓の老夫と此も百姓の穢い着物で古い藁草履を穿いた年頃の女の子と三人である。女は余が歩き掛けた時に追ひついて復た一緒になつた。女はさつき何處へ引つ掛つたと余に聞いた。「それからそつちへ引つ掛りこつちへ引つ掛り丁度おれとおなじだ。おれは酒を飲んで來たところだ」と女は頗る元氣である。女の顏は赤くなつて居る。百姓の老夫は足もとがふらふらとしながら少し涎の垂れ相なだらしのない口を開いて時々唯はゝアと哄笑するのである。女の子は小麥藁の苞を荒繩で背負つて居る。藁のすいた所からよく見るとそれは鮪のしつぽであつた。其小麥藁の苞の一尺下には珍らしい小さな帶の結び目が揷へてある。それが女の繻子の帶と對照して一層みじめなものに見える。やがて三人は松

林の中のある岐道から入つて行つた。其時「おらあ此所でおめえと分れだ」と女がいつた。さうして百姓の老夫は故もなく余を見てはアと哄笑した。余はそれからは獨でポッポッと街道を運ぶ。作並といふ村へかゝる。左右の山が迫つて廣瀬川はもう見違へる程狹く且つ淺い流になつて近く姿をあらはして居る。作並の長い村も既に盡きるころになると行手を遮つて峻嶺が聳えて見える。此は出羽と天然の境界を形つて居る關山峠である。此峻嶺を擁して作並の溫泉宿があるのである。余は店先から聲をかけた宿引に止められて此溫泉で一日の疲勞を醫することにした。小女が濯ぎを汲んで來る。小女は筒袖である。余は穢い一室へ案内された。やがて別の女が來て浴槽へ案内するからといふので其女の後へ附いて行く。此の女も筒袖である。女は梯子段のやうに拵へた階段をおりる。幾らかうねりうねり下へ下へと行く。板葺屋根が覆うて居てそれがもう古くなつて朽ち掛けたりした所もあるので地底の坑内へでもはひるやうな心持である。女は髮へ白いリボ

ンを挿して居る。こんな僻地でも街道に當つて居るだけにかういふ裝飾品も行はれて居るのであらう。それにしてもどれ程此リボンが女の心を惹いたことであらうかと思ふと其不調和な處に懷しいやうなところもある。それから女は極めて狹い帶を締めて臀には漸く拳位ともいひたいやうな小さな結び目を拵へて居る。余は此滑稽な程小さな結び目と白いリボンとを見ながら段をおりて行く。だんだん行くと遙かな底の方に人の聲が聞える。階段が竭きるとそこに浴槽がある。近所の山のものらしい人物が五六人浴槽の側にぐつたりと茹つたやうになつて唯手拭をしめしては少しづゝ身體へ掛けて居る。浴槽の外は直に溪流で狹い水が僅かに巖にせかれて落ちて行く。廣瀨川がこんなに成つたのかと思ふと驚く程の變化である。斷崖からは綠樹が掩ひかぶさつて藤の大きな蔓が綠樹の枝から垂れて居る。下流は兩岸相迫つて薄闇い。子供等が四五人でがやがやと騷ぎながら此溪流の淀みに泳いで居る。余は此の階段はどの位あるかと女に聞いて見たら何でも百四五

十はあるだらうといつた。女は浴槽に一々手をさし入れて加減を見てあるく。余はすぐに着物をとつて浴槽へ一寸飛び込んだ。さうして子供と一つになつて泳いで見た。少し流の急になつた所へ行くと身體が恐ろしい勢でぐつと突き返される。女は裾をかゝげて浴槽の側の石へ乘つてひたひた水に足を洗つて居る。さうして其水に立ちながら余等が泳ぐのを見て居る。余は溪流にひたつた儘見ると宿は遙かに高い岸の上に建てられてあつて浴槽へ通ずる階段はうねりくねつた長い妙な箱が斜に釣り下げてある樣なものである。つまり箱の内部を人が一つ一つと運んで往復するのである。余は冷たくなつたから復た浴槽へ飛び込んだ。女はかゝげた裾を外して濡れた足の跡を板の上に印しながら階段を昇つて行く。だんだんリボンを挿した髮が隱れて小さな帶の結び目が隱れて最後に足のうらがちらりと見えて姿は全く其洞穴のやうな階段の上方に隱れてしまつた。

九月五日

雨戸ががらがらと開くと共に余は起きた。まだしらしら明である。昨日の女がいひつけておいた辨當を持つて來て、こんな山の中で何も菜がないから生卵などではどうかと聞く。辨當の菜に生卵は少し困つたことだと思つたが、女の濁つたやうな太い訛つた聲で然かも膝をついて丁寧にいふのが氣に入つたから余は即座にそれでもいゝといつた。女はやつぱり狹い帶をしめて居る。卵はつぶれぬやうに紙へ包んでそれを手拭の端へ括つて兵兒帶へくつつけた。

夜は全く明け放れた。時計を見るとまだ五時半にならぬ。空は晴れて淡紅色を含んだ灰色である。行手の峻嶺が頂上僅かに日光をうけてほつかりと赤くなつて居る。路傍の芒の穗はさまざまな草の花と共にしつとりと露を宿して居る。溪流

について行く。卽ち此も廣瀨川の水である。溪流はずんずん狹くなつて街道が高くなるのに氣がつく。峻嶺の綠が身に迫つて來る。余は此の朝の空氣に包まれて秋の冷かさが薄い單衣を透してしみじみと身にしみこむやうに感じた。歩いて居るあたりまではまだ日は射さぬ。峻嶺の頂は段々下の方まで日光が射し掛けて來る。それと共にさつきの赤い光は薄らいだ。山腹をうねつて行くと所々山の狹間を漏れて日光が路傍の草村へきらきらと射してることがある。ふりかへつて見ると其草村に交つて靑い細い莖の先へ白い玉を乘せたやうな星月夜の花から薄く霧が立ち騰る。霧は四五尺のぼつて日光のきらつく中へ消えてしまふ。旣に深くなつた溪流の向うの岸の汀から朴の木が存分に葉を廣げて立つて居るのがある。余は小石をとつて朴の木へ投げて見た。幾つかとつて投げた小石の唯一つが梢に落ちたと見えて葉が五六枚上の枝から下の枝へひらひらと動いた樣であつた。すぐ近くだと思つた朴は余が腕の力では容易に小石が屆かぬのに驚いた。坂路は此の

如くにしていつ登るとも知れぬうちに嶺の頂が非常に短くなつて居た。顧ると谿が深く且つ遠くなつてしまつた。稍伏見に見渡す山々は此の谿の底まで一帶に密樹の梢を以て掩はれてある。さうして谿は藥研の底の樣な形をして或度の傾斜を保ちながら遙かに向うへ走つて居る。朴の木のもとを洗つて作並の浴槽の側を過ぎ行く水はこゝから見える密樹の根からしぼれ出る雫の聚りである。浴槽の側で昨日女が足を洗うた水は今頃は走り走つて青葉城のめぐりをめぐつて居るかも知れぬ。さうして海へ海へと志して居るのであらう、余は足をやすめながら暫く谿を見おろして立つて居た。幽かな水の響が聞えて來るやうで閑寂ないかにも人の心を惹くべき山の趣である。街道はこゝで一切のものを麼めて山を穿つた洞門へ導く。洞門は闇くして且つ恐ろしく長い。洞門を出るとそこには豁然として壯大な出羽の國が展開する。うんと力を入れて踏ん込んだやうな山の脚に從つてこゝも坂路はゆるやかである。遙かなる空を遮つて聳ゆる連山の間に峰の丸い然かも雄

大な山が一つ見える。花崗岩を爆裂させた趾のやうな白い所が幾つも見える。燎原の煙のやうな亂雲が朝の活動を始めたかの如くむらむらと其山から空へ吹き立つて居る。だんだん坂をおりて行くと一人の老婆が二人の若い娘を連れて峠を登つて來るのに逢うた。今朝から此の峠で逢つたものは此の三人連のみである。三人とも連尺で荷物を負うて居る。老婆はまだ峠は遠いかと聞く。余は老婆の身支度を見るに始めて此の峠にかゝつたものではない。然し足の疲れた時には自分の知つて居る道程でも屢人に聞いて見たくなるのが余の經驗から明かなので此の老婆も屹度それだらうと思つた。余は懇に敎へた。さうしてあの丸い形の山は何だと聞いたら老婆の一足先に立ち止つて杖に兩手を掛けて居た一人の娘があれは月山だといつた。さうしてあの白いのは雪だといつた。老婆も娘も決して賤しいものの姿ではない。然し峠といふ天然の一大障礙はこのやうな弱い人々をもかひがひしい草鞋穿の姿にいでたゝしむるのである。余は數日來出會うた少女が孰れも皆

狹い帶を締めて居たので此時ふつと此の娘等の帶の結び目がどんなであらうかと思つたから荷物を橫に搖りながらいたいたしげに登つて行く後姿を一遍見あげた。然し單衣の裾はぐるつとかゝげて帶を掩うて紐で括つてあつたから白いゆもじが目に立つのみで其帶の結び目はそれはかゝげた裾に隱されて見えなかつた。

（明治四十二年一月）

月見の夕

うちからの出が非常に遲かつたものだから、そこそこに用は足したが、知合の店先で「イヤ今夜は冴えましようぜこれでは、けさからの鹽梅ではどうも六かしいと思つてましたが、まあこれぢや麥がとれましよう。十五夜が冴えりやあ麥は大丈夫とれるといふんですからどうかさうしたいもので」などゝいふ主人の話を聞いたりして居たので、水海道を出たのは五時過ぎになつてしまつた。

尻を十分にまくし揚げてせつせと歩るく。落ちかけた日が斜に照しかけるので、自分のかげはひよろひよろとした尖つた頭になつて、野菊の花や蓼の花を突つ越して蕎麥畑へ映る。それから粟畑、それから芋畑とだんだんに移つて行く。

小山戸を通り抜けて中妻へかゝる。速力はずんずん加はつてくる、かうして歩いて居る間に、少くとも三四人、六七人位の連中が男女混合でよたよたとやつてくるのに出つかはせる。大抵は若い同志でいづれも草鞋ごしらへである。それが絶えず出つかはせる。これらのものはみな、大寶がへりなので、往復にしては十三四里もあるのだから、少しはびつこ引くのも仕方がないが、草臥れてしまつたといふ鹽梅は多少の滑稽を交へて居る。

五十恰好のあばた面の婆さんが、これはたんだ一人で左の手でへげ皮の饅頭かなにかの包を持つて頻りに頰張りながらやつて來る。

「八の野郎げ呉れべと思つて買つてきたが、小腹が減つてしやうがねえから一つくひ二つくひ、はあ無くなつちやつた。野郎コンコ奴の假面欲しがつてだからこれやりせえすりや、よさあいゝが、そこらでまた二百がとこも買つてくべえ」

などと思つて居るのらしい。

若い衆のなかへ交つて、殊に疲れたといふやうすの娘がある。お納戸の羽織で尻の大きなのがいくらか隱れて居る。

「おらへのおつかも解らねえでしやうがねえ、自分のことべえ見て居て、自分で行きたがらねえたつて、いつでもいつでもけつかりやがらあなんて怒つて居やがつて、鄰のお稻さんらあ帶までこせえたのに、おらほんとに泣きたくなつちやつたつけや、ゆんべらもいくら粟ぶち忙しいつて、晩くまでやらせてとうとうあたま結はねつちやつた、今朝ら暗えに起きたつてあたま結つたりなにつかしたんで、みんな等に待つてられて、せかせかしてしやうなかつた、それでもおらへのおつかは、われが野呂間だからなんて怒つてばかし居やがつて、ゆんべ碌に寢ねえから今日は眠くつてしやうがねえ」

こんなことを思ひつゝ歩いてるのではないかなどゝ考へるうちに遠くへ行き過

ぎてしまふ。

「けふは降られねえで助かつた。お米さんが單衣物借りてきたんで、汚しちや大變だと思つてなんぼ心配したか知れやしねえ」

といひさうなのや、

「おらゆんべら、あたまおつこはしちや仕やうねえと思つて夜つぴてうつぶになつて寢て居たんで、けさら目ぶちが腫れぼつたかつた」

といふのや、

「足うつちやりたくなつちやつた」

といふのやいろいろが、いづれも澁紙のやうな顏へ思ひ切つて白粉をこてこてとなすり付けて居る、なすり付けたといふよりも、こすり込んだといひたい。さうしてそれが汗をかいて白粉が剝げたといふよりは、すべて落ちたといふ顏つきをして居る。

日の入るのは早いもので、柿の木や樫の木の間からきらきらと光つて見えた光が、中妻を出抜けるとさわさわと西へ向いて靡いてる芒の穂にかゝつて見える。もう月が出さうなものだなと思つて見ると、いままでは異形な雲に隱れてでも居たものか、その雲が崩れかゝつて位置をかへると、まんまるな月は三四間も上つて遙かさきの杉の木のてつぺんに淡い光を放つてるのであつた。やがて雲はどこへ行つたか無くなつて、月の光はやゝ黃色味を含んで、いさゝか靑みを帶びてきた。それと共に芒の穗にかゝつた夕日は穗から葉に、さうして見えなくなつてしまつた。しかしまだ世間はあかるい。その明るい世間が赤く黃色いやうな色に變化して、空の際が一層燒けて、それがだんだんに褪めて、足もとの乾き切つた土が、しらしらと明るいと思ふやうになれば、月の光はうつくしいのである。

草鞋ごしらへの連中も通らなくなる。おしまひに十三四位な小供が二人でよぼよぼやつて來た。

「はやくうちになればいゝなあ」といふ顔をして歩いてる。

遊び仲間で相談が纒まり、うしろの竹さんも大寶へ行くつちふから、俺も行つてよかんべえといつたやうなことをおふくろにねだつた末に、單衣物の腰上げをおろして貰ひ、わるさなんぞして汚すんぢやねえぞと戒められて、そうれおとつつあげ隱してやるんだからと白銅一つあとから蝦蟇口へ入れて貰つて、人込みのなかではぐれちやいかねえぞ、二人でようくつかまつて歩くんだぞといはれたことまで、なんでもうんうんと聞き流して、うれしまぎれに急いで行つて、大蛇の見世物で一錢、ろくろ首の見世物で一錢、輕業で一錢五厘、それから團子を一皿くつてお替りをいふことが出來ずにしまつて、梨子を買つて柿を買つて、芋串を買つて、八幡太郎の繪本を買つて、風船玉も買ひたかつたが無駄なものなんぞ買つて來たら聽かねえからと、うちでいはれて來た爲にそれは諦めてよつぱらさんざ遊んで歸つてきたので、途中からよくよくに草臥れてしまひ、けふの面白かつ

た話も出なくなつて。
「はやくうちになればいゝなあ」
と思ひながら行くのであらう。罪のないことだと思つて振り返つて見ると遙かに隔つた。自分の歩くのがはやいからであらう。
ひろびろとしたこの野路の變化し易い夕の景色の面白いのを見ながら又村へ這入つた。
「駄目だつちことよ、われがにや」
「かつてくんだよう」
「水油はわれがにや解らねえからだめだよ」
「かつてくんだつちばよう」
「そんだら買つてこうな」
といふのは、いましがた油買ひに行かうとするおふくろの手につかまつて、七

八つの小供が好奇心から自分が買つてくるんだといつて聴かない、おふくろが危ぶむ、とうとう小供に負けてしまつたといふ所なのである。こんなことを見ながら村の中を行くと何だか急に暗くなつた。木立のおひかぶさつてゐる爲であらう。がたがたがたがたと唐箕で籾を立てゝ居るのや、とんとんとんとんとふるぢで粟がらを叩いて居るのや、大かたは忙しいことであるが、庭の中でぽたんぽたんと糝粉をついて居るのは、今から團子を丸めようといふのであらう。まつくらな家の中にはまだあかりがつかない。稀についたのもランプの心がひつこましてあつてぽつちりと赤い光が見えるだけである。自分の急ぎ足はこんな忙しいなかをば猶更急ぎ足になつた。せつせと歩くと突然、

「勝よう、かつう」

と大きな胴羅聲で呶鳴つた婆さんがある。耳もとで怒鳴られたので自分は非常に驚いた。その調子が一種のせきこんだ恨みを含んだ調子である。家のうちには

竈の下にちよろちよろと火が燃えて居るのみで人のけはひもないやうである。
「きさのあま奴が、ねんとし大寶へ行く癖に早くでもけえればいゝのに、若い衆とでもくれえそべえて居やがるんだんべ、いめえましえあま奴だ、何にも間にあひやしねえ。それにかつの餓鬼奴がどこへけつかつてるか、豆腐でも買つてくればいゝのに、寄つつきやがらねえ、どうしたらよかんべえな」
といふやうなことで、思ひ切つて大きな聲で呶鳴つたのであらうなどとつまらぬことを考へながら村外れへ出る。五個までくれば石下への半分道でこゝからは野路ばかりになる。常に行き馴れた間道なのである。村のなかでは暗かつたのが野らへ出ると明るくなつた。夕燒はもう殆どあともなくなつて、月の光はいよいよ美しくなつた。用水の岸を辿つて行くと水の流れはしらしらと光つて見える。ころころころころと蛄螻がしづかな鳴きやうをする。野らは至つてひろびろとして隈なき月は更にうつくしさが増すやうである。手近には蕎麥畑が霜の降つたや

うに見えて、遙かの先きには筑波山が仄かに見られる。さうしてさつきから嶺に棚引いた白雲は依然として居るのまでがわかる。田のへりへ出ると掛稲のあたりから、鴫でもあらう、きゝきゝと鳴いてどこへか飛んで去つた。しばらく歩いて居るうちに、そこゝの森から田を隔てゝぽんぽんぽんぽんといふ音が聞え出した。小供らが卷藁を打ち出したのである。自分がまだ幼少の時分によくしたことであるが、手頃に藁を束ねて繩でぎりぎり卷いて、そいつを擔いでは家々の庭へ行つて力一杯に叩きまはるのである。その叩くと共に、

「大麥小麥、三角畑の蕎麥あたれ」

とみんなで聲を揃へて叫ぶのであつた。卷藁のなかへ芋がらの干したのを入れると音がいゝといつて拵へて貰つたことであつた。今叩いて居る子供等もいかに樂しいことであらうと思つた。自分はこの卷藁の音が非常に好きで、殊に眩ゆいやうな蕎麥畑の中へ立つてこの卷藁を聞くのは何とも云へない善い感じがするの

である。こんなことを思ひ浮べながら石下へついた。石下の町ではあかりはまつかについて居る。洋燈の下で夕餉をしたゝめて居る家があつた。さうしてその家の表へ供へた机の上の團子を猫がくはへ出して、机の下のくらがりで嚙つて居るを夕餉の人々は知らぬげであつた。

外は賑かで、月はいよいよ冴えまさつた。

これでは麥がとれるだらうと思つた。

（明治三十六年十二月）

土浦の川口

冬とはいふものゝまだ霜の下りるのも稀な十一月十八日、土浦へついたのはその夕方であつた。狹苦しい間口でワカサギの串を裂いて居る爺はあるが、いつもの如く火を煽つてはワカサギを燒いて居るものは一人も見えないので物足らず寂しい川口を一廻りして、舟を泛べるのに便利のよさゝうな家をと思つて見掛けも見憎くゝない三階作りの宿屋へ腰を卸した。導かれて通つたのは三階ではなくて風呂と便所との脇を行止まりの曲つた中二階のどん底である。なまめいた女が代り代りに出て來る。風呂から上つて窓に吹き込む風に吹かれつゝ居ると、ぢき目の先の青苔の生えた瓦屋根の上からまん丸な月が二三間上つた。案じたやうでは

なくいかにも冴々として障りになる雲も手を擴げない。命じておいた船が來たといふ知らせに急いで下りて見ると宿の前に繋いである。舳の方には容籠が積んであつて予の坐る所には四布蒲團が一枚乘せてある。舟は川口の狹い流をずんずん進んで二丁も出ればもう霞が浦の入江になるのである。

「旦那寒いからその蒲團へくるまつた方がようがすぜ、沖へ出ると寒いから」

と船頭に注意されたので、予はなんといふことはなしに蒲團にくるまつたが、薄つぺらな而かも强張つた四布蒲團は滿足に體を掩ふことはできない。舟は月に向つて漕いで居るので、ばしやりばしやりとぶつかる波によつれ碎かれつゝある月の光は舳にくつついて離れない。月の下には怪しげな雲が立つて居る。

「旦那、あのお月さまの中にあるな何ンだんべえな、兎が餅を搗いて居るなんて云ふが、俺がにやどうも解らねえが」

と船頭は出し拔けに奇問を發した。予はそれは火山の跡であるといふやうなこ

とを平易に話して聞かせたのであるが、彼は解したのか解しないのか默つてしまつた。だんだん進んで、見るから茫々たるあたりへ行つた時、彼は船底の棹を取つて暫く突張つて居たが、眞菰の枯れたのが漂ふやうに浮いて居る淺瀨へその棹を突立てゝ舟の小べりを繫いた。さうして彼は足下に疊んであつたどてらを引つ掛けて坐つて仕舞つた。舟は波のために搖られて舳がそろそろ廻轉するので今まで月に向つて居た船頭は背中を向けるやうになつて仕舞つた。舟はもはや舳艫の位置を變じた儘姿勢を保つてゆらりゆらりと搖れて居る。バッと擦つた燐寸の火で船頭の容貌が見られた。五十ばかりの皺の刻み込んだ丈夫相な親爺である。燐寸の火が吹き消されて水の上に捨てられた時は彼の鼻先に突出した煙管の雁首に一點の紅を認めるのみで相對して默して居た。予は先づ口を開いて彼の常職である所の漁業のことに就いて聞いた。土浦の名物なるワカサギやサクラ蝦は皆土浦から出る船の收穫であるか否かと問ふと、彼は吸殼をふつと掌に拔いてその火に

よつて再び烟草を吸ひ付けながら云つた。

「どうしてどうして九分通り外だ、土浦のものなんざアみんな舟で買つて來るんだ、ワカサギかワカサギはダイトクモツコで捕るんだ、地曳のモツコと同じやうなモツコだ、足駄を穿かせてな、麥藁をくつつけて石を下げるんだ、さうしねえと袋が開かねえからな、石ばかりでもたいした目方だ、岸の方へ船を寄せてな、杭を打つてカグラサンで捲くのだ、五人も六人もして捲くんだぜ、二十尋も三十尋も手繰るんだからな、ヲダなんぞへ引ッ掛つちや酷いぜ、切れッちまふから、ヲダか鯉なんぞ捕るやうに棒杭を打ち込んでおくんだ、そのなかへもぐり込んだのを網を卷いてとるんだ、それへ引つ掛るとひどい話よ、捕れる時にや四斗樽で四五十本宛もとれるんだがことしは捕れねえな、おまけに安いんだ、世間が不景氣だからな」

彼も不景氣のために苦しめられる一人と見える。

「ダイトク網は凪ぎでなくッちや曳かれねえ、風のある日にやまた別な小せえ網だ、艫へつゝけて一里も一里半も流れるんだ、こいつぢやいくらも這入らねえ、けふらも出なくつちやならねえんだがどうして出ねえかよ」

と口不調法なる彼の話は剝き出しである。予はダイトクモッコのことを能く呑み込みたいと思つたのであるが、話下手な彼の口からは到底十分に知ることは難いのである。彼は更に語りついだ。

「向うに明りの見える村な、あすこにもダイトクモッコが一つあるんだ、それからずつと向うの方にも一つあるんだがなかなか土用中盜の二三百兩も呉れなくつちや成らねえんだから手入が屆かねえで、さあると切れるやうなモッコで捕つてるんだ、それにだまされて賣られたりなにつかして駄目よ、網元なんちふ奴等は一晩に三十兩も四十兩も遣つて騷ぐやうなことするからいつでも貧乏だ」

抔といふ話でダイトクモッコのことは明瞭ではなかつたが、どんなものかといふだけは略解かつた。暫くすると彼は問はれもせぬのに饒舌り出した。
「お月さまの下のあたりはひどいぜ雲だ、どこかしぐれてるんだ、それから今夜はこんなに寒いんだが、ことしの冬は寒くねえな、ゆんべらのぬくかつたことは酷かつたぜ、俺らゆんべワカサギ燒くのでよつぴて寢ねえつちまつたけれど……ことしは西風が少ねえが一西吹いたら寒かんべえよ、こなひだナラエが一遍吹いたので霜が降つたつけ、ナラエが筑波山の方から吹いてくるんだ」
彼はかく語つてどてらに包まつた儘ごろつと横になつた。予もずりこけて居た四布蒲團を肩のあたりへ引きあげた。振り返つて見ると筑波の山は月の光によつてうすらに見える。彼は首を擡げて
「旦那、旦那はどこだね、ぶしつけだが」
と問うた、予は鬼怒川の沿岸であるといふと

「俺ア十二三に水海道に居たことがあつたつけ、鬼怒川では鮭が捕れたな、甘かつたな鬼怒川の鮭は、土浦なんぞへも鬼怒川の鮭だなんて賣りに來るがみんな那珂川だ、鬼怒川のがなんぞ持つて來たつて賣り切れやしねえから駄目だ、ヤマベも捕れたな、ヤマベは霞が浦でも捕れるが喰ひ手がねえや不味くつて、それでも櫻川へのぼつたのを釣つたないくらか甘めえさうだ、俺がなあ、一遍宗道へ行つたところがな、皿へヤマベを付けて出したから、ヤマベなんぞ出してひでえ所だと思つたが、折角出したんだからと思つて一箸くつて見たに甘えんで魂消た、百にいくらだつて聞いたら八匹だとか九匹だとかいふから、それぢや俺らが方のヤマベ持つてきて賣つたらよかんべ百に二十匹位するんだなんて云つたら、おめえ等の方のヤマベなんざア喰ふものがあるもんかつて笑らあれたつけ」

と彼れにしては不似合な愛嬌話である。

寒さが身に滲みてきたので予はもう歸らうと思つたから右手に見える蘆の所へ舟をつけさして見た。蘆の間からは遙かに向うの停車場のともし灯が輝いて見える。蘆の内側は停車場まで一帶の水田になつて居る。船頭はまた煙管を取り上げてつまつた脂を吹いては小べりへこつこつと雁首を叩いて語り出した。

「俺らもこゝを作つて居たが取れる時にや十二俵どれの所で四俵の年貢だから七八俵ものこるんだが、ことしのやうに水ばかり冠つちや一粒も取れやしねえ、七八年このかたいつでも不作だ、出來る年にや馬鹿に出來るんだが出來過ぎてぶつ倒れつちまふんだからこれも仕やうがねえんだ、それから俺ら今ぢやこゝらあ作らねえで上の方ばかりだ」

といふ所を見ると彼は百姓もするのである。

丈は一丈もある蘆が寂しくさらさらと靡いて居るが、月の光に照らされて居る枯穗が黑ずんで見えるので怪しんで問うて見ると水が出た時汚れたんだらうとい

ふことであつた。八月末の暴風雨の折には殆んど海嘯のやうに波浪が押し寄せたのでこの沿岸の人家も非常に損害を受けたのであつたが彼の家なども其の時既に危かつたとのことである。

「三味線屋の三階もあぶなく吹つ倒されるんだつけがそんでもいゝ鹽梅に大工が駈けつけてそつちへ棒をかつたりこつちへ棒をかつたりしてやつと助かつたんだ、俺れが知つてる男があの時死んぢまつた、なんでも逃げ出したのを戻つて行つたら舟がひつくる返つて死んだんだ相だ、跡で見たら往來だつけとよ」

ともう横には成らなかつた。予は計らず彼の口から自分の泊つた宿屋が三味線屋といふのであることを知つた。彼はまた思ひ出したかのやうに

「旦那、松が關ッちふ相撲知つてるかね」

と問うたので予は回向院の相撲で嘗て見たことを話すと彼は乘地になつたといふ鹽梅で

「ありやなんだ、石岡の酒藏に米搗をして居たんだがたうとう相撲になつちまつた、それから土浦へ來た時なんざあ石岡の旦那等が大變だつけ、小錦等もそん時三味線屋へ泊つたんだ」

彼の思ひの外なる饒舌を聞いて居るうちに月はずんずん上つて怪しげな雲も漸く手を擴げて來たので予はもうい丶加減に舟を返すべく命じた。船頭は頗る相撲好きと見えて櫓を押すのにも口をやめない。

「土浦にも部屋があつたんだ、なかなかたいしたものよそりや、三段目位な奴等はみんなぶつこまれたんだからな、宮の森なんちふのは體はねえが手どりでな、なかなか能くとれたぜ、俺らが知つたのぢやあんでも鐵嵐ら一しきりとれたな、出羽から强えのがきたつけが鐵嵐のこたあ、なんとしても動かなかつたな、あれでも腹袋はたいしたもんだつけな、荷車で引つ張つてあるかなくつちや唯の車ぢやへえらねえつちんだからな」

予はよき程に挨拶をして居るうちに舟は恙なく三味線屋の店先についた。店先はひつそりして居た。便所に向つた梯子段の下に女が五六人
「お二階の南京さんにからかつてやりましよう」
と云つて居た。

（明治三十七年二月）

利根川の一夜

叔父の案内で利根川の鮭捕を見に行くことになつた。晩飯が濟んで勝手元もひつそりとした頃もうよからうといふので四人で出掛けた。

叔父は小さな包を背負つて提灯をさげる。それから河は寒いと可かないからと叔母が出して呉れた二枚のどてらを、うしろのちやんと呼ばれて居る五十格恰の男が引つ背負つてお供をする。これは提灯と二升樽とをさげる。從弟の十になる兒と自分とは手ぶらで蹤いて行く。

荷物を背負つた二人の樣子が才藏か何かのやうだといふので下婢供が頻りに笑ひこけるのである。うらのとぼ口を出て、落葉した梅の樹の下を木戸口へ出る頃

までそれが聞えた。

木戸を出ると桑畑のよせのやうな小徑をうねりうねり行く。提灯の導く儘に唯足許に心を配りながら二丁ばかりも來たと思ふと、坂垂れになつた大きな往來へ出た。この間の降りつゞきなのでよくよくのぬかるみである。坂を下りて四五軒ばかりならんだ家のところを出抜けると、闇いは闇いがひろびろとして來た。道は一際ひどい泥濘で、はじの方の漸く下駄だけ位に人の踏んだ足跡を探つては行くのである。道の脇はぢき溝になつてあるので、一歩誤れば墜ち相である。提灯二つがたよりで辿つて行つたがたうとう動きのとれないぬかるみへ出つくはした。叔父と自分とは思ひ切つて跣足になつた。從弟はうらのちやんが抱いて越えた。これから先はもつとひどいだらうといひながら行くと案外ぬかるみも少ないので馬鹿な目に逢つて仕舞つたと大笑ひをしながら、それからは急ぎ足に進んだ。四五丁もきたと思ふ頃利根川の渡しのところへついた。汪洋たる水は淀んで

居るかと思ふ程に靜かである。藁葺の船頭小屋は薄明りがさして居るが話聲も聞えない。叔父と自分とは提げて來た下駄を置いて足を洗つて居る内に、うしろのちやんの提灯は遙に川下の方へ行つた。やがて自分等もあとを追つて土手の上を歩いて行く。末枯の蓼の穗や背丈にも延びた唐人草がザラザラと提灯にさはる。この土手のすぐ内側は畑でずつとさきはみんな原野になつて居る。土手といつてもこんなに低いのだから水が出るとすぐに越し相になる。土手を水が越すと耕地はみんな洗はれて仕舞ふのでこんなに土俵を積んで置くのだといふやうなことを叔父から聞きつゝ行くうちに、さきの提灯はぢき間近になつた。そこに止まつて居たのである。サツパ舟が一艘岸へ漕ぎ付けんとしつゝある。うらのちやんと舟とで何か話をして居る。それと同時にボーボーとなまぬるいやうな汽笛を鳴らしながら通運丸が上つて來た。舳の灯の青い光や赤い光が長い影を波の上に引つ張つてさうしてバツサバツサと水を掻き分けながら、牛のやうに遲行しつゝある。岸

へついたサッパ舟は艫のところへぐつと棹を突つ立てた儘とまつて居る。「引き波がえら來るかんな下手にすつと波くふかんな」と舟でいつた。汽船はずんずん上つて行くのであるが、引き波はなかなかこない。岸を十間ばかりも離れたところに黒く船らしいものが見える。あれが鮭捕船だと叔父が自分に話して聞かせた。サッパ舟の中では「追つかけ引つかけよ、四本ちふんだからな」といつてる。うしろのちやんとの問答のつゞきでゞもあらうと思はれる。そのうちに岸を打つ波がバシャリ、バシャリと一仕切り騷ぐと、さあこんだ乘つてもいゝといふのでさきの舟へ漕ぎつけた。舟のなかには三人の男が居たが自分等がついたので、みんな艫の方へ固まつた。「こん夜はお客さま案內してきた」といひながら叔父がさきへ乘り移る。舳の方へ漸く四人が座つた。この舟もやつぱりサッパ舟であるから八人の乘合では隨分窮屈である。それに苫が切つてあるのだから頭から押へ付けられるやうな心持で何だか落付かないで居ると、「どうですサャ立てるの見ません

か」といはれて、何をするのか分らないが見たいといふと、「それぢやこれへお乘んなせえ」といはれてさつきの舟へ乘る、こんどは二人で漕ぎ出した。一人はずんぐりした男で一人はさつきの奴である。さうしてそれはもうよつぽどの爺さんでおつた。舟は再び岸の方へつけられた。一人が陸へ上つて竹棒の束へ繩をくんだやうなものを抱いてきた。舟はすぐに遙かの下手へ漕ぎくだつて行つた。河のおもての白々ひかりで見ると、そこには苫舟の傍から末になる程開くやうに二筋に竹の棒が建てならべてある。丁度八の字髭が生へたやうなものだ。その右の方に舟を止めたと思ふと一人が突つ刺してある竹棒を引つこぬきながら「いめえましい畜生ぢやねえか、粉微塵だ」と呟きながら、舟へ乘せてきた竹束をほどいてそこへ突つ立てる。またその次のを改めては突つ立てる。その竹棒のほどいたところを見ると、幾條かの繩が一つの竹の棒を括つては他の竹の棒を括つて居るので恰かも目の極あらい網のやうなものになつて居る。いめえましいをいく遍か繰り返し

つゝ漸く突つ立てゝ仕舞つた。網にしての飽末極まつたこんなものでも鮭の進路を他にそらさない仕掛なのであるといふことだ。いま立てたのが即ちサヤといふので二百間から引つ張るのだといふ話である。さうしてさつき通つた汽船のためにいま立てた丈の間がぶつ切られたのだといふことであつた。「よにくな奴等だ、わざわざサャのところを通りやがつて、いめえましい畜生だ」といふのは苫舟へ戻るまで止まなかつた。舟へ戻つて見ると涼爐のなかには火がカンカンと起つて居て、串へさして今阪餅がプーッと膨れ出して居たところであつた。叔父の膝元には風呂敷がひろげられて中には煎餅、柿、饅頭などが亂れてある。さうして叔父もうしろのちやんも、艫の二人も煎餅をボリボリ嚙んで居た。自分は燒かれた今阪餅を従弟と二人で味つた。いま乘移つた人も煎餅を嚙りはじめた。艫てうしろのちやんが提げてきた二升樽の口をあけて、古ぼけた土瓶を見付け出して船ばたでばしやばしやと洗つて火の上へかけた。「さつき四本も捕れたあとぢやこん

夜は駄目かも知れねえな、俺はなん遍見に來たが一遍も捕るのを見ねえで仕舞つた、いくでも運が惡くつてな」と叔父がいふと「それでもどんなものだか分らねえが、鬧いは鬧いしなんちつても靜かだから屹度來なくつちやならねえ、なあに來はじまつちや來ますから」と瘦せぎすな一番物の解り相な男がいつた。「こなひだ一晩に十六本さ、尤も河が違ふんですがね、こん夜豆腐屋らが張つてる所がさうさ、いま二晩ばかり過ぎなくつちや替りにならねえ、さつき夕飯頃に追つ掛け引つ掛け四本も來たんだから本當に思ひがけねえことでね」と爺さんが傍から語つた。土瓶の酒がわいたといふので鱸では頻りに飮みはじめた。「河のなかぢや泊りに來るものもなくつて穩かだな、夏の頃は瓜小屋へ泊りにきた者があるなんて、おつかあが怒つて大喧嘩が起つたなんちふ話だけが」と叔父が笑ひながらいつた。「よく知つてんな、どつから聞いたかなあ」といつて笑つた。「さういふ事があつたんでよ」と自分を見返つて更に叔父が云つた。自分も可笑しくなつて笑つた。そ

のうちに各の顔が赤くなつてきた。彼等は尙ほなんだとか無駄口を叩いて居る内にも頻りに水面に目を注いて居る。苫舟からぢき前に舟にならんで一間位宛に五本の竹棒が立つて、それから向へ直角に五本、それからまたこちらの竹棒にならんで五本立つて居る。丁度三方に垣根をゆつたやうになつて一方は明いて居る。その明いて居るところから下の方へ例のサヤといふのが延びて居る。苫のぢき下から吊つてある明りでよくわかるのではあるが、それがどんな鹽梅に獲物を引ッ掛けるか薩張り分らないので、ざつとの說明を求めると瘦せぎすな男が「まあいつて見りや蚊帳を倒に吊つたやうなものさ底に網があつてそれからこの竹の立つたところが網で下の方の明いてるところがやつぱり網だがこいつは寢せてあるのさ、それで畜生へえッたところでこの網を引ッ張ると、網が起きてきて逃げられなくなッちまふのさ」と小べりのところに繫いである麻繩をさし示した。更に彼は「それからこの中のところに極あらッぽい網のやうなのを立てゝ置いて上に鐵

がくつついてるから、畜生めそれを潜りせえすりやからからつと鳴るからね、そん時これを引ッ張るわけなのさ」と先づわかり易いやうにと話して呉れた。しかし自分はもはや一疋位引ッ掛り相なものだと思つて心待ちで堪らない。酒もいつかそつちのけにされてみんな網の方へのみ目を注いできた。靜かな夜は益〻靜かに成つて遙か向うの岸と思はれるあたりがどんよりと黒く見えるのがなんとなく寂しく、そろそろ更けはじまつた。叔父と自分との間に夾まつて居る從弟はもう横になつて仕舞つた。舟や竹棒に塞かれて居るので水は極めて低い響をなして流れ去る。よくよくひつそりして仕舞つた時にからからんと突然に鈴が鳴つた。それッといふので二人の手が小べりの網へかゝつた。爺さん頻りに息をはづませながら「どうも今なあんまり音がえらかつたから下手にすつと返りかも知れねえ、利口な畜生はそろッと行つてさきの網へ突き當ッちや急に引き返へすのがあんですからね、そん時はそれ音が大けえんです、今のがなども返りでねえけりや可い

が」と自分等の方を見ていつた、綱はしつかりと握つた儘である。綱のなかは寂然として音沙汰もない。「そうれどうしても居ねえ」と爺さんは又いつた。苫舟の上手へ繋いたサッパが上手へ、下手へ繋いたサッパが下手の方へ出た。「なあに居なくつても時間だから砂をはたかなくッちやならねえから」といつて竹棒のところをどうしたのか底になつてるといふ綱であらう水面へ浮んで來た。サッパのなかのものはその綱の片はしを持つて、洗濯でもした時のやうに上下にばしやりばしやりとやつた後また元のやうに綱を沈めて戻つた。果して獲物は無かつた。折角待ち疲れのやうになつて居たのに惜しいことをした。こんな鹽梅では今夜は六かしいのではないかと自分は竊に思つた。起き直つた從弟も呆然として居る。なほ暫くは見守つたが見込もないやうではあり、眠くもなつて來たので自分も横になつた。叔父も横になつた。一枚のどてらは三人を掩うた。寒からうと思つたのが意外に寒くないので大助かりである。しかし狹い間へごろ寢であるのと、自分の屈め切

つた足の尖はうらのちやんに屆いて居るのとでひどく心持がよくない。その上に今か今かといふ心持ちのするために眠りながらもうつらうつらして居る。大分時間も經過したらうと思はれる頃に有るか無いかのやうに鈴の鳴るのが聞えた。叔父の手は強く自分の體に觸れた。しかしその時はもう自分が咄嗟に起き上る刹那であつた。從弟をも抱くやうにして起した。再び鈴がからからんと鳴つた。「こんだ大丈夫でさ、見てさッせ、いま大かいのがとれるから」と、兩方に立ち別れた舟は底なる網を揚げた。網が水面に現はれると共に獲物はもう進退の自由を失つたと見えて、自分等の近くのところで網へくるまつて仕舞つた。割合におとなしいものである。サッパをそこへ漕ぎ寄せると、なかの男が獲物の鰓のところへ手をさし込んでぐつと小べりへ引きつけて、ざくりざくりと動いて居るのを、一尺五六寸の丸棒で二つ三つ鼻面を惱ました。あざやかなる獲物は銀の色をして光つて居る。三尺ばかりの長さだ。自分はまのあたりにこの大きなる獲物の潑剌たる

有樣まで見ることが出來たので、もう今夜はこれ限りであつたにしたところで憾みもないと思ひながら少なからぬ滿足を以て心安くまた寢た。艫の連中が何かごとごと饒舌つて居るのも耳に這入らなく成つて、よつ程眠つたらうと思ふ頃にふと目が醒めると酷くしめツぽく感じた。ザアザアといふ雨で顏にしぶきがかゝるのである。苫は雨をとほす憂は無いが、しぶきの五月蠅いのに閉口して居ると、誰かゞ苫を少しさげて呉れたので凌ぎよくなつた。それからはもう眠りもせずに寢て居るとまた鈴が鳴つた。これも確かに手ごたへがあつて、銀色の夜目にも美しい獲物がまた籃にをさめられた。聊眠かつた眼もはつきりしてきた。雨はとうにやんで雲も收つてしまつた。明方に近づいたといふ鹽梅にいづこともなく明るくなつた。だんだんに向の岸までが見えるやうになる。舟中のものは孰れも沈默を破つて水上の生活の手輕さをいつては笑ひ乍ら、各々顏を洗つたり土瓶をすゝいたりしてやがて凉爐には火が起る、湯が煮立つ。爺さんはすゝぎもしない土

瓶へ茶を入れた。傍から「爺さまそれは酒の土瓶だぞ、酒がまだ殘つてたんべえ」といへば「うん道理でをかしかつた。それでも構ふことはねえ」と澄まして湯をさしては飮んで居る。自分が頭にして居たところには薪が蓄へてあつたのであるが、一人がその薪のなかゝら一束の葱を引き出してザブザブと洗つて鍋蓋を倒にした上でブッブッ刻んだ。汁がかけられた。こんなことで舟のなかでは朝餉の仕度をして居ると三度目の鈴がからからんと鳴つた。綱が直ちに引ッ張られた。綱の起き揚るのはいまは明かに見られた。底になつてるといふ綱の浮ぶのも遺憾なくわかつた。さうして獲物の狼狽する樣迄が愉快に見ることが出來た。瘦せぎすが「こんどはあばれるところを叉手ですくつて見せべえ」と叉手をつき出したがそれよりもはやく綱へくるまつて仕舞つたのですくふ所はたうとう見られなかつたが、一日一晩かゝつてもとれないこともあるといふのに、一度、二度、三度までも捕獲のさまを目撃することを得たのは望外の幸といはなければ成らない。七尾のうち

で尤も鱗の美しきもの三尾は籃に入れて叔父と共に家に運ばれることになつた。岸に上るとそこはサヤといふものが立てゝ干してあつた。遙かに川下の出ッ鼻にも苫舟が一艘見えた。豆腐屋といふのゝ連中だ相だ。それから自分等の居たすぐ向うにも一艘見えた。それは今獲物があつたといふのかサッパが漕ぎ出されつゝあるところであつた。

（明治卅七年四月）

才丸行き

起きて見ると思ひの外で空には一片の雲翳も無い。唯吹き颪が昨日の方向と變りがないのみである。

滑川氏の案内で出立した。正面からの吹きつけで體が縮みあがるやうに寒い。突ンのめるやうにしてこごんだ儘走つた。炭坑會社の輕便鐵道を十町ばかり行つて爪先あがりにのぼる。左は崖になつて、崖の下からは竹が疎らに生えて居る。木肌の白い漆がすいすいと立ち交つて居る。漆の皮にはぐるつとつけた刄物の跡が見える。山芋の枯れた蔓が途中から切れた儘絡まつて居る。

小豆畑といふ小村へ來た。槎枒たる柿の大木は青い苔が蒸して幾本となく立つ

て居る。柿の木の下には小區域の麥が僅に伸び出して、栗の花が短くさき掛けて居る。ところどころに梅が眞白である。

小豆畑を出抜けると道は溪流に沿うて山の峽間にはひる。笹はぼつさりと水の上に覆ひかぶさつて、山芋の蔓がびつしりと絆つて居る。頰白が寂しく啼きながら白い翅を表はして飛び出る。十三四位の女の子がついて小束の矢篠を背負つた馬がぼくたりぼくたりとやつて來る。脚から腹まで一杯に泥がついて見すぼらしい姿である。

素性よくしげつた杉のほとりを行く。此あたりの道は規則正しく拵へたやうに横に一文字に低くなつては高くなり、又低くなつては高くなつてる。どこまでも同じやうである。低い所は蹄の趾で馬は必ずそこを踏む。泥水が溜つて居る。予等は飛び飛びに高い所を踏んで行く。

杉の木の部分を過ぎると左に又山の峽間が見えて僅かばかりの田がある。流に

は土橋が架つて岐路がそれへ分れて居る。三辻の枯芝に獵師が三四人休んで居る。炭をつけた馬が五六匹揃つて來た。田の間からも馬が二匹來た。五六匹の仲間は遠慮なしにさつさと行き過ぎる。二匹の方は土橋の際で若い馬士がしつかと馬の口もとを押へた。馬は口もとをとられながら後足をあげて一跳ね跳ねた。背中の材木が荷鞍と共に水の中へ落ちた。

曩きのやうに右手の麓について進む。足へぽくぽくと觸はるものがある。振り回つて見るとあとから犬が來る。犬の鼻の尖が觸はるのであつた。獵師のうちの一人が蹤いて來た。狐色の筒袖の腰きりの布子で、同じ色の股引を穿いて居る。黎黑な肌に光りのある顏の五十格恰の巖疊な親爺である。犬は遙かのさきへ行つた。

對岸の山の中程には炭竈の煙が枯木の梢をめぐつてこちらに靡いて居る。もう程なく燒け切るといふ鹽梅に淺黄の煙である。

「此奥でしたか狸穴といふ所がありましたな。私等が貉を掘りに行つたことがありました。二匹捕つて三匹目の奴が出て來たのを、手で捉へちや喰ひ付かれるといふので木挽の斧でぶんなぐつたら、すつと引つ込んぢまつて夫れつ切り出て來ない。居るも居る三日三晩ばかり燻ぶしたがたうとう出ない。居ねえ筈は無いと思つたが辨當は無くなるし、夫れ切りで歸りましたが、腰越の獵師等がその趾を掘つて五つ捕つた相でした。穴の口から少し下つて一匹死んで居たといふ話です」

滑川氏が獵師に話し掛けた。

「さう仰しやればあすこには幾ら居たか知れねえんです。いつかもそんなことが有つたんですが、貉といふ奴は妙な奴で、直ぐに死んだ振りをします。人がひよつと見るとごろつと轉がつて、少し見ねえ振りをして居るとそろそろ起き出して見て、又ひよつと見るとごろつと轉がつてしめえますが、手拭で喉を括つ

て引つ擔いで來ても騷がねえんですからをかしな奴ぢやあありませんかねどうも」

行く行く話が途切れない。獵師の言葉は思ひの外に丁寧である。たまたま路傍に甲の落ちた炭竈がある。土は眞赤に燒け切つて居てそこら一面に粉炭が散らばつて居る。燒けた土をとつて見た。小石交りの砂目である。かういふ良い土で一つ炭竈を築いて見たいと思つた。

綻び掛けた梅がほの白く見えるのみで、人の氣も無いやうな腰越といふ小村へ出た。上り坂になる。振り返ると小さな山々を見越して眼界は漸く濶々として來たが霞が一面に棚引いて居るので明瞭に分らない。見える筈だといふ海が灰色に空と一つである。あれが磯原の松林であるといふのが、さう思へばさう見えるといふ位に過ぎない。坂を登りつめて休んだ。足もとを見おろすと僅に麥畑が作られて、そのさきには段々の高低を成して田が形つてある。麥畑のめぐりには垣の

やうに拵へた無雜作な驅除がある。放牧の馬が五六匹そこゝに餌をあさつて居る。土中に在つて鳴くかと思ふやうな微かな蛙の聲が聞える。

山と山との間から僅に露はれた頂には雪が眞白である。二三日此方降つたものであらう。田の向うには周圍が皆燒山で唯一つ芝も燒けず常綠木の僅にしげつた小山がある。獵師はそこを指して語り出した。

「あすこで秋から兎を十六七も打つたんですが、夫れでまだ七八つも居るんです。周りがあの通りですから遊び廻つちやあ、あすこへ來ると見えるんです。兎といふ奴は馬鹿な奴で、追ひ廻はされると、しめえにや元の所へ來つちまふんですから、根氣よく追つ掛けりやあ屹度捉へられるやうなもんです。夫れでも又能のあつたもので、犬が追つて行つて今一息といふ所になると、ひらつと脇へ開く所がどうでしよう。それを二度もやられると犬は飽れて追はねえんですがね」

「さういふものですかね。此間は茶圃に兎が眠つて居たといふと、丁度法事の時

なゝのですから若い衆が三四十人で取卷いてとうとう魚扠で突つ殺してしまひました。全體ことしは兎が居るやうですな」

獵師は物をいふ度に揃つた長い眞白な齒を剝き出す。坂を少し下る。十八九の娘が馬を曳いてのぼつて來た。米桃のやうな頰の赤い肉つきのいゝ娘である。襷がけの草鞋拵へで、荷鞍には二升樽位の大さの夫れよりは稍長い古ぼけた樽が兩方に一つ宛つけてあつた。行き違ひに手綱をしごいて、左の手で馬の轡をとつてむつとした顏で過ぎ去つた。

目の下には大北川の流が奔つて居る。對岸に少しの平地があつて、水の流がその平地を蹄の形にめぐつて居る。古い小屋のやうなものがところどころに見える。炭竈の趾である。樹木は大抵伐採されて、櫟であらうか人の立つて居るやうな木の株がぽつりぽつり殘つて居る。凄涼たるさまである。

流のほとりまで下る。鼻を突くやうな向ひの山は悉く落葉木であるから狹いに

してはあたりがからつとして居る。萱のなかに馬が一匹じつとして立つて居る。

「あれは私が放して置くんですが、舊正月の二日からうつちやつてあるんです。子が止まつてから三月四月になりましよう。奇態なことにあの馬は生れながら後足が三寸ばかり短いのでとても役に立たねえのです。腰越あたりの奴等はそこらの馬を捉へちや萱を背負はしたとか、代を掻かしたとかいふんですがあの馬ばかりは手をつけません。自分でまた體が不自由なものですから決して遠くへ行かねえんです。えゝなに、食ひ物さへありやどの馬でもそこに居るもんですがね」

獵師の話は嘗て自らした伯樂のことに移る。路の傍には二抱三抱の檜の樹が聳えて、下には山吹が簇つて青い枝が交叉して居る。

小さな坂を幾つか越したり、駒除のそばを過ぎたりして再び大北川の流に達した橋がある。こつちに石を積んで、向うにも石を積んで、大きな杉の板が二枚な

らべて水面に近く架け渡してある。水には夥しく鋸屑が交つて流れる。橋を渡ると杉の五分板をつけた馬が五六匹揃つて來た。河原礫の上に立つて暫く馬を避けた。岸へ上ると山桑の老木がならんで居て、老木の下の枯芝には火が二坪ばかり燃え廣がつて居る。馬士供のいたづらである。

段々行くとシユウッシユウッといふ音が聞える。水車小屋の中から響くのである。小屋へはひつて見た。機械で木材を挽くのである。外で大きな水車が廻轉すると、小屋の中の齒車がめぐる。他の車がめぐる。車から車へかけた袈裟のやうな象皮は中央の丸い鋸をめぐす。人が鋸をさし挾んで居る。鋸の傍には四角な柱が建てゝある。榾を鋸へあてゝこちから押す。さきで取る。瞬く間に一枚挽ける又挽ける。榾はいつでも、柱へ密接せしめてあるので板は常に柱と鋸との間だけの厚さに出來る。榾一つ挽くのが烟草二三服の暇である。

水車の脇から又のぼる。坂の上から見ると小屋の外には挽きあげた板が又字な

りに組みならべたのが一面に白く見える。ずんずん登る。南京米の袋で縫つた着物に荒繩をぐるぐる巻きにした老爺が椢を背負つて來た。小村が目の前に表はれた。才丸である。

遙かあなたには焦げたやうな一脈の禿山がつゞいて居る。山のこなたは左右の山と山との間がひろびろとして居る。狹い間ばかり見て來た目には殊に心持がよく感ぜられた。一縷の烟も立たない三四十の萱葺の丈夫相に見える家が一つ所に聚つて居る、産土の森のやうなものも見える。周圍の平らみは皆田である。田には高低が無いやうで、馬が十四匹ばかり放してある。どの馬も下を向いて頻りになにかあさつて居るやうである。孰れを見ても閑寂な沈んだ趣である。

禿山の頂近くには一筋の土手のやうなものが仄かに見える。「山は磐城の國境で山の陰には杉の木が一杯に植ゑつけてある。幅一間の堀を穿つて土手を築いて才丸あたりの馬が入り込まない用心をして居る。茲から見えるのが其土手であ

る」と獵師がいつた。

「これ迄は丸であの山へ出たもんです。行きますともあれからぢやあずつと先まで行つたんです。それでまあ才丸ぢや大きに困るやうなわけなんです。一間位の堀なんぞぢやあ馬が飛び越えて行くんです。夫れを山番がふんづかめえて來ちや談じつけられて、才丸の奴等時々飲まれるんです」

獵師はかう笑ひながら言ひ續けたが坂の中途でどつかりと芝へ腰をおろした。脚絆を締め直すのである。脚絆は丁度竹を細く裂いて編んだものへ漆でも塗つたといふやうな鹽梅のものである。紙撚りで拵へて、猪の血を塗つて固めたものだといふのであつた。草鞋の代りに猪の毛皮で作つた沓を穿いて居た。獵師は才丸の入口の桑の木が立ちならんだ小さな流のほとりで別れた。突然けたゝましい聲がした。田の中に草をむしつて居た馬が尻を突き合せて跳ねたのであつた。

（明治卅八年五月）

痍のあと

豆粒位な痍のあとがある。これは予が十八の秋はじめて長途の旅行をした時の形見であるが、今でも深更まで眠れない時などには考へ出して恐ろしい感じのすることもある。予は其頃まで奥州の白河抔といふと唯遠い所と計り思つて居たのであつたが、ふと陸地測量部の地圖を披いて案外に近い所なのに驚いた。それからといふもの旅行がして見たくて堪らないので母に二週間ばかりの旅費を貰つて出掛けた。水戸から久慈郡へ抜けて蒟蒻粉で有名な大子（たいご）の町から折れて下野へ出た。或る山の小村で夜を明して翌日那須野を横斷して其日は一日のうちに鹽原の奥まで行つた。何を見ても愉快であつたが、殊に那須野を横斷する抔といふこと

が手柄のやうに思はれた。蕭殺として寂しい山路は身が引き緊まる樣な氣がして長途の割合には疲勞も無く、鹽原の湯へ着いたのは夕方であつた。

まだ浴客の居る可き季節であらうに、二階も三階も戶を鎖して、極めて寂寥たるさまである。夏の末に暫く逗留して居たのであるから、まだ此間の樣に思はれるのであるが、其變化は三年も經過した樣に感ぜられる。

爐の側にはまあちやんといふ娘が唯一人手仕事をして居る。まあちやんは慌てゝすゝぎを取らうとする。予はすぐに入浴する積りであるから、湯下駄の古いのを引つ提げて坂を驅け降りた。まあちやんはあれ私が持つて行きませうとあとから跟いて來た。鹿股川の水はいつも淸冽であるが、岸の浴場の變つたのには一驚を喫した。僅に一つの湯槽が殘つてあるばかりだ。湯槽といふのは、汀の巖を穿つてそこへ据ゑ付けたものであるが、其穿つた跡まで搔き浚つた樣になつて居る。まあちやんに聞いて見ると初秋の大洪水の時に押し流されたのであるとのこ

どである。それで七十にも成る老人が物心覺えてからこんどの樣な洪水の慘害は見たことがないといふたとの話である。

驟雨が來ると溪間々々の水は一所に集つて、雲のまだ收まるか收まらぬに鹿股川は濁流が漲るのである。あれといふ間に湯槽の中へ水が押し込んで、うつかりした浴客は着物も持たずに逃げ出すといふこともある。かういふ時は水底の石と石とが相搏つてどうどうと凄じい響が聞える。こんな現象は予も夏中屢目擊して寧ろ壯快に感じたのであつた。それも暫時に水は落ちて、其日のうちにも入浴が出來る樣に成つてあとは何の異狀をも留めないのであつた。それであるからこんな慘狀を呈するまでにはどんな勢であつたらうか想像も出來ないのである。「其時は幾日も降り續きて山が崩れたといふ騷ぎ、橋が落ちるといふ騷ぎで、お客さんは出ることもはひることも出來ないでみんなが毎日こぼして居ました」とまあちやんがいつた。

秋の日はずんずん薄くらくなつた。下流は兩岩の峭壁に密樹が掩ひかぶさつて居るため一層凄く見える。浴客が芋をもむ樣にこみ合うた夏の趣きを思ひ合せると情ない樣である。まあちやんの姿も紺飛白の單衣に襷掛けで働いて居た時とは違つて、洗ひ晒しの半纒は何となく寂し相である。然しながら心切な態度と色の白いのとは變りは無かつた。鑛泉の作用であらうかまあちやんの家族の色の白さは格別である。浴客のなかには水が良いからだといふものもあつた。僅二三が月の間であるが、まあちやんの體はめつきり大人振つた樣に思はれた。まあちやんは十七であつた。

カルサンを穿いて籠を背負つて宿の者は山から歸つて來た。予が再び尋ねて來ようとは思はなかつたといつてみんな珍らしがつて喜んだ。内のものが歸つて來てからはまあちやんは一人の時とは違つて、急に勢がついた樣に頻りに笑つたりして居つた。洪水以後客足がばつたり止まつた爲めこんな山仕事をして居る始末

で客の用意は少しもないとのことであつた。其夜は松茸の御馳走になつた。皿も碗も一切が松茸であつた。生來此時程松茸を食つたことはない。

翌朝空が稍曇つて居た。宿の蓙と笠とを借りて出掛けた。旅行の序とはいひながらこんな横道へそれたのもこれからずつとの山奥に山腹が崩壞して湖水が出來たといふことが新聞に見えた爲めである。人は滅多に行かぬに極つて居る。そこを自分が見て來るのだとそんなことが手柄に思はれたのである。凡そ三里ばかり行くと尾頭峠といふ峠の麓へ出る。其間も箒川の蓬萊橋が落ちたのを始めとして洪水の趾は歴々として存してある。峠の麓には二十人ばかりの人足が休んで居つた。土を削つた跡や置いた跡を見ると道普請をして居るのである。峠は頗る急峻で、羊腸たる坂路は丁度襖の模樣の稻妻形に曲折して居る。絶壁には所々に棧橋が架けてあつて孰れも皆新規であるのを見ると麓の人足等が造つたのであらう。溪は深い。こゝから落ちたら命は無いだらうと思ひながら登つて行つた。小荷駄

馬が揃つてとぼとぼと降りて來る。此峠は會津地方からの唯一の通路であつて、一切の貨物がこのやうに僅に馬背に依つて運搬されるのである。馬は足もとばかりに注意して漸く歩いて居るのであるから、如何にも悠長である。それだから山國の馬は眼からさきに死ぬと世俗にはいうて居る。

峠を下ると三依といふ小村へ出る。立派な街道がある。日光方面から會津への本道だ相である。然しながらしんとして寂しい。右折して進んで行く。駒を曳き連れた博勞が一人やつて來た。素晴しい大きな男で、前へ草鞋を一足ぶらさげて居る。茱萸の大きな枝を持つて毟つてはしやぶり、毟つてはしやぶりつゝ行くのである。二三町行くと少し平坦な所があつて一帶に茱萸の樹が簇生して居る。枝が淺ましいまで折られてある。予も小さな枝を探つてはしやぶつた。遙に上の方で女の笑聲が聞えた。山は草深くつて女の姿は見えない。大方は草刈であつたらう。茱萸の木から暫くで道は五十里川の岸へ出る。河の流は道路からでは餘程低

くて一つの大きな瀑布を形つて居る。之が不動瀧である。瀧の上の頂には矮小なひねびた松がかぶりついて居る。根は僅かな間隙を求めて喰ひ入つて居る。どこから水分が吸收されるかと思ふ位だ。不動瀧から山王峠は間もないとのことである。

もとへかへつて三依の村まで來た。此間に逢つたのは曩の博勞唯一人のみである。三依は二三十戸の小村であるが、材木と葺草とに不自由の無い爲めか家の構造は頗る大きく且つ岩疊で、戸袋や欄間には意外な裝飾が施してあるが、之に對して障子が煤けて破れたり座敷が埃だらけの樣子だから可笑しい。河を渡つて芹澤といふ所へ辿つた。更に寂しい小村で田が少しばかりある。田の傍には幾筋かの小さな流が通つて、箱仕掛の小さな水車が縈然として立つて居る。水が箱へ一杯になると水の重みで箱が傾いて中軸が廻轉する。他の箱が素の箱の位置へ來る。此の緩漫な運動が繰り返されて米でも麥でも搗かれるのである。山が崩壞し

て湖水を成したといふのは此の芹澤の山中に在ると傳へられたのである、或家で湖水の出來た所はどこだと聞いたが更に要領を得ない。幾人に聞いても分らない。これは聞き方が惡いのかと思つたから、更に山の崩れた所は無いかと聞いた。すると或者が「あゝあれか」と無造作にいつた。さうしてなんでそんなものを尋ねるのかといふ顏付であとから來た。山は近かつた。如何にもあれかといふだけに過ぎない。山脚の一小部分が崩れて小さな溪流が一時塞がれたまでゝある。水は土砂を潛つて今頻りに流れつゝあるのである。予は新聞紙の虛報にいたく失望せざるを得なかつた。山深く來たことの無意味であつたのが殘念で堪らなかつた。さう思ふと一刻も早く宿へ歸つて仕舞ひたいのである。

峠の麓まで來た時には日はいくらもなかつた。古ぼけた一軒の家へ寄つて婆さんにねだつたら手作りの草鞋を賣つて呉れた。「栗は無いか」と聞いたら、自分の食料に熬つたのがあるといつて一升桝へ山程盛つて來た。「いくらだ」といふと

「一錢も置いてくがいゝ」といふのである。余は其小部分を外套の隱しへ押し込んで、「峠は夜になるだらうが何も出ないだらうな」と自分ながら弱い音を吐いた。「何が出るものかい」と婆さんが笑つた。栗を噬りながらせつせと歩いた。皮の儘で熬つた栗は堅いこと夥しい。あの婆さんがこんな石のやうなものをかぢるのかと驚いた位である。峠の登りを半分も來ると日は全く暮れた。松明一本も用意しなかつたのは考へると實に危險なのである。だんだんに樹木の茂りへかゝると闇さが加はつて來た。足もとに靑く白く光るものがある。薄氣味惡く手に採つて見るとぬらぬらとしたものである。能く見るとそれは茸であつた。樹木は更に深くなる。然し三依に面した坂路は晝間見た所では曲折もなく勾配も緩やかであつたから格別氣にもせずにせつせと歩いた。然しそれが無謀にも全く心あてに歩くに過ぎなかつたのである。樹蔭の一際暗い所であつたが、暗いと思つた瞬間に右の足を踏み外して身體が轉々として數回廻轉した。幸にして途中で留まつた。漸く

のことで心を落ち付けて見ると、小石程の巖の碎けが夥しい中に予の體があつた。雨のために巖が崩れるとその碎けが溪に向つて瀧のやうになだれることがある。予の體の留つたのは其のなだれの中間であるに相違ない。身を動かせばずるずると下へこける。あせればあせる程こけるのである。仕方がないので片々で十分に踏みかためては一足のぼり、踏みかためては一足登り、漸くの思でなだれを攀ぢた。笠が途中に引掛つて居た。道の下まで來ると木の根がある。木の根へ手を掛けたが、片手に笠があるのでまたずるずるとして踏み答へがない。それからしつかと笠を冠つた。兩手で縋つてやつとのことで道路へ上つた。なだれの上は棧橋であつたのだ。安心すると共に驚きと恐れとが一時に襲ひ來つた樣に動悸がはげしくて何とも形容の出來ない一種の厭な心持がした。夜の山道などは以來決してすべきものでないとつくづく感じたのである。此の時人が若しも予を見たならばどんな容貌をして居つたであらうか。

これからは非常の注意を以て然かも急いだ。然し予はどうして此の時半里足らずの三依へ引つ返す心にならないで一圖に宿へ歸らうとしたことであつたか自分にも分らないのである。一つは慌てゝ居つたからでもあるだらうか。

時々溪流の樣な響が梢を傳へて段々近づくと思ふと邊りは白雲が一杯になつて、汗ばんで居た身體はぞつとする程寒くなる。白雲が去つて仕舞ふと素の平靜にかへる。頂上まで來るとこれからが鹽原に面した坂路である。こゝで落ちたらもう助かる見込はないのである。稻妻形の屈折した曲り目になると、四つに偃つて手探りに道を求める。恐ろしいといふよりも厭ふ心持がしてたまらぬのであつた。幸に失策もなくて麓の人足が休んで居たあたりへ辿りついた時には予の嬉しさは譬へやうがなかつた。それからは足のつゞく限りに急いた。宿へついたのは九時過ぎであつた。予は腰を卸した儘峠の話をするとみんなが予の傍に來て無事を喜ぶと共に非常に驚いたのであつた。まあちやんが予の草鞋をといて吳れた。

草鞋掛までが底の拔けて居たには自分ながら驚かざるを得なかつた。

翌日眼を醒すと宿の者は山へ出て仕舞つてまあちやんが一人茶釜の下を焚いて居た。湯槽の中で氣がついて見ると右の腰骨の所に少しく痛みを覺えて小さな傷が出來て居る。なだれへ落ちた時の形見である。今朝から踏むたびに足のうらが痛むと思つて居たら栗の刺が夥しく立つて居る。夜道に栗のいがに乘つたやうにも思つたのであつたが、こんなことゝまでは思つて居らなかつた。予はまあちやんに針を借りて自ら左の足の刺を掘りとつた。まあちやんは右の足の刺をとつて吳れた。

其後心切なまあちやんはどうなつたであらう。聞くの便りもない。予が眼に浮ぶまあちやんは何時でも十七の時の姿である。

(明治卅九年三月)

須磨明石

蕎麥屋

須磨の浦を一の谷へ歩いて行く。乾き切つた街道を埃がぬかる程深い。松の木は枝も葉も埃で煤が溜つたやうに見える。敦盛の墓の木蔭にはおしろいが草村をなしてびつしりと咲いて居る。柔かな葉はやつぱり埃が掛つて居るが、赤や黄の相交つた花には目立つて見えぬ。敦盛とおしろいの花といふ偶然の配合に興味を感じて名物の敦盛蕎麥へはひる。店先にはガラスの駄菓子箱があつてそれも埃である。歪んだ二疊程の座敷へ腰を掛ける。狹い土間には膝と突き合ふ計に松薪がしだらなく積んである。女房が蕎麥を吳れた。不味いこと甚だしい。淺い井一杯だけやつと喰つた。女房の帶は落ち相である。隅の方で蕎麥を打つてる亭主は尻

きり襦袢が粉だらけである。滅多に洗ふこともないと見える。然し段々俗化して行く須磨の浦にこんな野暮臭い名物が昔の儘に存して居るのは却てゆかしい心持がする。おしろいの花も蕎麥屋が植ゑてそれが段々に殖えてこんなに茂つたのだと思ふと一入感じがよくなる。一雨ざつと降りさへすれば松の葉もおしろいの葉も埃がすつかり洗はれて秋の涼しさは頓に催すのであらうが、蕎麥屋は依然として不味い蕎麥打つて名物の稱を恣にして居るのだと思ふと面白くなる。渚へ出ると海は極て隱かである。たまたま大きな波がゆるやかに來たと思つたらどさんと碎けて白い泡がさらさらと自分の足もとまで廣がつた。

網曳き

明石の寂しい檐下を辿つて來ると、「おい泊らないか」と後から呼び掛けるものがある。振かへると緣臺の上に寢て居た親爺が起きあがりつゝいつたのである。

古ぼけた紙看板の吊つてあるみすぼらしい店だ。「いくらで泊めるか」と聞たら胡坐を掻きながら「辨當付で廿七錢にまけてやらう」といつた。「辨當はいらん」といふと「それぢや廿四錢でいゝ」といふことになつた。滅相に安いので遂泊る氣になつて覗いて見ると涼し相な一間がある。草鞋をとる。井戸へ案內して「こゝで足を洗ふがよい」といふ。足を洗ふと店先で茶を一杯汲んでそこへ膳を出す。さうして「二階へ蚊帳が釣つてあるから何時でも行つて寢るがいゝ」といふのである。案に相違したが廿四錢の泊りだと思ふと不平はない。

「濱で網を曳いて居るから行つて見たらどうだ」と亭主がいふので草履を借りて橫町から心あてに濱へ出る。闇い夜であるが海だけはぼんやり白んで淡路島がすぐ目の前に見えてともし灯がほのかに光る。淡路島は夜でも近いのである。海岸では唯わつわつといふ騷ぎである。漁師は今一所懸命に網へたかつて居る所だ。駈け戻つてはつかまりつかまりよつさよつさと勢よく引つ張る。沖では聲を限りに

叫ぶのが聞える。網がだんだん引き寄せられるに隨て沖の聲がだんだんに近づく。だんだんに近づいて網が太くなつて來ると漁師の活動が一層劇しくなる。網に引つからまつた鰯がしらしらと見えて來る。袋の中では今獲物が非常な混雜をして居るだらうと思ふ、あたりには人が一杯に群つて居る。小供等は手に手に小笊を持つて鰯のこぼれを拾つて居る、渚の浪にぬれながら網から盜んで居るのもある。明石の濱の小供が玆へ聚つて仕舞つたかと思ふ程うぢやうぢやして居る。沖からの叫び聲がとまると小船が二艘ついた。袋はもう引きつけられたのと見えて網を引く手も止つた。盥の中の鰡が人の足音に驚いたといふ樣に騷いで居やしないかと考へる。鬧さは鬧いのに人越しだから何も分らないのだけれど騷いで居るやうな氣がするのである。漁師共は鰯を船の中へ掻き込みはじめた。細鱗は見るうちに船一杯になつた。砂濱へ掻きあげる小さな塚のやうに置いてある。此騷擾のうしろには老松が一列に聳えて、梢からは天の川が悠然たる淡路島へ淡く落

ち込んで居る。靜かな宵である。

宿へかへると合宿の荷車引がほろ醉になつて饒舌つて居る。金物商で暫く四國を欺し廻つて居たが、今では此通り發心して荷車引になつたのだといひながら剃りたての頭を叩いた。靜かな樣でも明石の瀨戶は潮時が惡いと千石積でも動きがとれぬ。いつか和船で垂水(たるみ)から渡らうと思つて酷い目に逢つたことがある。「阿波の鳴門か音頭が瀨戶か又は明石のいや水かゝ」といふ位だからなといふ樣なことをいつて青い頭をまたぺたりと叩いた。蚊は明石の名物である。

（明治三十九年十月）

濱の冬

冬の日のことである。鰯の漁が見たかつたので知人の案内狀を持つて九十九里の濱の網主のもとへ行つた。主人はチョン髷の五十幾つかに見える。丁度まくれた栗の落葉が轉つて行くやうだといへば適切で物に少しの滞りもない人である。余の初對面の挨拶が濟むと一寸來て見ないかといふので跟いて行つて見たら、二三軒さきで棟上げの式を行ふ所なので丁度餅や小錢を撒いて居た。主人はいきなりいよつと吶鳴つて大勢の中へ飛び込んで揉まれながら小錢を拾つた。さうして左の掌へ五文六文と勘定をしてちやらちやら鳴しながら逢ふ人に見せびらかしては大口あいてはゝあと笑つて居る。こんな無造作な主人であるから居るのにちつ

とも心おきがなくていゝと思ふと窃にうれしかつた。主人は「あの通り海が惡いので濱はもうかれこれ五六十日も不漁だから麥飯と大根ばかりを嚙つて居なくちやならねえがそれでよけりやあ幾日でも遠慮なんぞすることあねえ」といつた。波の響は松原越しにどうどうと鳴り轟いて此所まで波が打ち揚げて來はせぬかと思ふやうである。

貝殼の碎けが白く散らばつた麥畑を過ぎて短い枯草の小道から小松林を出ると、濱である。小松の中には布子を引つ掛けた漁夫が二三人寒風に吹き曝されながら懷手のまゝぼんやりと際涯もない沖を見つめて居る。波はづどうんと打ちつけては裾から卷きかへし卷きかへし土手のやうに立ちあがつて見渡す濱遠く唯眞白である。乾燥しきつた濱の砂は北へ北へと飛ぶ。飛ぶといふよりは流れるのである。下駄の齒を踏ん込むと流るゝ砂はさらさらと足袋の上を越えて走る。小松林に近く船が二艘曳き揚げられてあつて船大工が破損の板張をして居る。大工の手許か

ら一枚々々にまくれて出る鉋屑は流るゝ砂の上をすうつと走つてはくるくると轉がりながら後から後から出てこれも北へ北へと走る。

濱は不漁がつゞくといふと貧乏な漁師共に懷をむしられるので網主はよくよく疲弊してしまふのだといふのであるが、それでも主人は濱の鉋屑が飛ぶやうな態度で「なあに一網引つ掛けりや譯はねえ」と埃のついたチョン髷を振りまはして一向苦にならん樣子である。主人ががらがらいつては引き留めたるが本當に麥飯と大根とそれから乾鯷(ゴマメ)ばかり噉つて我慢をしなければならぬから、あてもない濱は早速に去つてしまつた。鰯の頭一つも見えなかつたのである。

（明治四十年三月）

菠薐草

余が村の一族の間には近代美人が輩出した。それが余の母まで續いて居る。母を生んだおばあさんといふのは七十四になるがまだ至つて達者な人である。おばあさんの眉は美しかつたらうといふと、唯おまへの母の眉よりはよかつたといつては何時でもおばあさんは微笑する。此おばあさんの又おばあさんに當つたといふのが美人のはじめである。四十の歳から太り出したといふのでゆつたりと大きな體であつた。さうだ八十四までながらへた人なので余の母は知つて居る。此人に就いて噺があるのである。其夫になつた人は獵が好きで、鐵砲の上手な人で、春の麥畑へ鳩のおりたのを見掛けてエヘンと咳をすると鳩が驚いて首を擡げる。

其刹那にドンと火蓋を切るのに嘗て遁したことがないといふのであつたさうだ。元來余の郷土といふのは江戸へ荷物を運ぶにも鬼怒川から船で下せば二日でとゞく。徒歩で行つても日のあるうちに千住へつく。蟲干の時などには今でも背中の所の擦れた道中合羽が出ることがあるが、其擦れたところは風呂敷包の痕で、そんなに荷物を背負つても一日には骨が折れなかつたといふ程江戸には近いのであつた。それでも猪や鹿が出沒して作物を荒すので櫓を掛けて猪を打つたといふ時代もある。此枝へ吊るして鹿の皮を剝いだのだといふ澁柿の大木があつた。余が其柿の木を知つた頃は鹿を吊るしたといふ枝は梯子も屆かぬ程上の方であつた。其位だから其頃は若しも天象の變化があるとかどうとかいふと、喧しい程雉子が鳴いたもので、豌豆畑へ行けば雉子の卵がいくらでも採れたといつてゐる。鐵砲の上手であつたといふのは其時代の人であつた。或時獵に出て娘を見初めて貰つて來たのだといふ。それが後のふとつたおばあさんである。

雉子や兎を追ひまはして喉が乾き切つた時に丁度林の中で一軒の家を見つけた。家といふのは固より傾いた藁葺だ。表の柱と柱との間にはおろし戸が一枚づつ卸してあるのでなかは薄闇い。一杯の茶を乞ふために頭巾をとつてくゞり戸を開けた。此人が稀な美男であつたさうだ。其時に茶釜から茶を汲んで呉れたのが若い娘であつた。茶釜には番茶を詰めた布袋が入れてあるので、ぬるいばかり何時でも眞赤に澁の樣な茶が出て居るのである。其茶を五郎八茶碗(ごろはちぢやわん)といふ大きな茶碗に汲んで、冠つて居た虱絞り(しらみしぼ)りの手拭を外して茶を出したのである。竹の簀の子が踏む度にぎしぎしと鳴る。其娘が思ひも掛けぬ美しさなので、唯恍惚としてしまつて、それからといふものは獵といへば屹度娘の家をおとづれてさうして生涯の語らひが出來たのだとかういふ事であつたのだと想像して見た。お前の母の眉よりはよかつたといつて微笑するおばあさんは當時のことを幾らか聞き知つて居るだらうと思ふが決して語つたことがない。それといふのは律義な人はかういふ成

立ちの事柄をも一家の恥辱のやうに思つて居るからである。それ故當時のことは自分で想像して見なければならぬ。唯美男であつたといふことゝ美しい娘であつたといふことは事實である。

其非常に美しい娘であつたのが太つたおばあさんになつてから何をしたかといふと明けても暮れても釣ばかりして居た。堀端へ薦を敷いて厭になるまでは夜中でも釣つて居る。それで恐怖といふことを知らなかつた人なので、ゆんべは青い火の玉が飛んだなどゝいふことが屢であつたといふ。此人の腹から出たのは皆男でそれが村の中に分れて各一家をなした。それ故一族に美人が出たのである。余の家に會合でもあるといふと人の羨しがる程美しい人々が集つたものだと傳へて居る。

然し過ぎ行く幾月の間に人々は凋落し老衰して同時に一族の者は孰れも窮乏してしまつた。余の家も亦家運が傾きつゝ此一族の中心となつて立つて居る。鹿を

吊るした柿の木はどうしたといふと既になくなつて居る。其柿の木は路傍に立つて枝は粗朶小屋の上を掩うて竹の林に接して居た。或夜のことである。余は不意に掻きおこされた。下女は余を背負つた儘門の外へ駈け出した。眼前には焰が立ち騰つて粗朶小屋が燃えて居るのであつた。余は唯ぶるぶると震へて齒の根が會はなかつた。其うち村中が集つた。みんなの顏が眞赤であつた。後になつて廻りの竹はだんだん枯れた。柿の木も其時に焦げたのでたうとう薪に伐られてしまつた。かういふことで柿の木はなくなつたのである。火事は余が七つか八つの時のことである。

(明治四十年五月)

白甜瓜

石巻を出て大きな街道を行くと暫くして松林へかゝる。海邊であるが松は孰れもすくすくと立つて然かも鬱蒼と掩ひかぶさつて居る。街道は恰も此の松林を穿つて通じてあるやうである。暑い日光をうけた白い砂利が松と相映射して居る。此の日は朝から無理な歩きやうをした爲か足がだんだんに痛み出して居たので松の木蔭の草村へ蓙を敷いて休んだ。雨掛の荷物を卸すと身體が急に輕くなつて何んとなくぼんやりした。脚袢でぴつちりと締めた足がだるくなつた。荷物を枕にして横になる。いゝ心持である。ふと見ると松林の外から一人の女が荷車を曳いて來た。女は荷車の梶棒を高くあげて荷車へ載せた箱から何かごろごろと轉がし出

した。それは白甜瓜であつた。女はすぐに松林の外へ行つて又白甜瓜を曳いて來て、無造作にごろごろと轉がし出す。松林の外には瓜畑があるものと見える。女は散らばつた瓜を一所に聚めて積んで居る。横になつた儘見て居ると周圍の靑草が耳よりも上になるので積んだ白甜瓜が其疎らな草の間から見える。石の卷からの途中は瓜畑の非常に多い所でそこにもここにも藁小屋が立つて居た。其畑がみんな、白甜瓜であつた。其同じ瓜でも、亂れた藁の上を偃うて半ば枯れた葉の間に轉がつてぢりぢりと日光に照りつけられて居るのは見るから暑さうであるが、此の松蔭の草の中に積まれたのは極めて涼しい感じである。一つ剝いて見たいと思つたが、途中で既にしたたか食べたので腹がいくらか苦しくなつて居る。それでも唯見捨てゝ去るのが惜しいやうな氣がしたので、女に二本ばかり無心して手拭の兩端へ括つて此も肩へ投げ掛けた。暫く休息したので足が大變輕くなつた。松林が竭きる所になると渡波の人家が見えて疎らな松の間から赤いフラフの勢よ

く空に飜つて居るのが目につく。渡波は海水浴場である。然し遠くから赤いフラフを見るのとは違つて唯漁村の大きなものに過ぎないのである。高平公使が居るので浴客がめつきり殖えたといふて居る土地である。それは公使の顔が見たさに人々が聚るのだといふ。此が十分に此地方を説明して居る。此渡波から八厘で渡す狹い渡しへかゝる。其時丁度麁朶を滿載した船が白帆を張つて狹い渡し一杯になりさうにして、海からはひつて來た。渡しを越すとそこは牡鹿半島の地である。街道も渡波で竭きてこれからは僅に小徑を辿つて行く。汀について小山の裾を廻つて坂になる。又脚が痛み出したので小さな丘の上で休んだ。入江が一眸のうちに聚る。これが萬石の浦である。入江は硝子の乳器のやうな形に先へ開いて居る。入口に近い所に幾つかの中洲がある。中洲のめぐりには薪が山の如くに積んであつて、煙が幾筋となく立ち昇つて居る。秋の日は其煙の中に傾きつゝ見える。中洲は鹽田である。方言ヂンパであるが、此邊の人は鼻へかけてそれをヅン

パと云つて居る。それでさつきの船は此の鹽田へ薪を運んで來たのだといふことがわかつた。入江は低い山々を以て圍まれて居る。遙かに水を隔てた對岸に青く聳えて居るのが牧山でそれから峰が左右に長く連つて居る。牧山の下にはこんもりとした森があつて其森は幽かな三四の民家と共に水に浸つたやうに見えて居る。そこに白帆が一つぢつとして止まつて居る。近くを見ると自分の居る足もとには汀について茂つた草村に野菊のやうな星月夜の花が一杯に白くさき亂れて居る。汀つゞきには二坪三坪位な青田が形ばかりに作つてある。其青田の畦には星月夜の花の草村が茂つて居る。余は手拭で括つた白甜瓜を解いて及物がないから膝がしらへ打ちつけて割つた。對岸を見ると白帆が一つ殖えて居た。そこに泊つて居た船が何時の間にか帆綱を引いたものと見える。其うちに後の白帆が先になつて汀傳ひに二つ動きはじめたやうである。白帆の影は長く水に引いてこちらの岸近くまで屆かうとして漣漪(さゞなみ)に碎かれて居る。余は瓜の甘い汁を啜りながら白帆

を見る。汁は口のうちで十分に啜つて種を足もとの草村へ吐き出した。種は散亂して田の中に落ちた。瓜の皮は水へ投げた。皮は水に落ちて白く小さく沈んだ。鹽一體に幽邃な平和な此の水は山の姿と相俟つてどうしても山上の湖水である。鹽田のある所を見ると濃厚な鹽分を含有して居るのであらうが、汀に近く星月夜の草村が茂つて居たり、僅ながら青田が作つてあつたりするところは、どうしても淡水の湖としか見えぬ。遥かの白帆は極めてゆるい速度を以ていくらかづゝ入江の口の方へ動きつゝある。然し白帆は帆の力で動くのでなくて入江の一方が僅かに傾きかけたので水が平均を保たうとしてこけて行く。其水に隨つて動いて行くのだと思ふ程ゆるい速度である。こちらの岸のひたひた水には瓜の白い皮がそつちにもこつちにも散らばつた。さうして余が手の白甜瓜は盡きた。余は荷物を肩にして立ちあがる。又對岸を見ると白帆は横を向いたものが二つとも白絲のやうに細くなつて居た。

（明治四十一年三月）

松蟲草

一

泉州の堺から東へ田圃を越えるとそこに三つの山陵がある。中央の山陵は杉の木が一杯に掩うて蔚然と小山のやうである。此が人工で成つたとは思はれぬ程壯大な形である。土地は百舌鳥の耳原であるから百舌鳥の耳原の中の陵というて居るのである。山陵のめぐりは畑で豆や稗や粟が作つてある。豆の葉は黄ばんで稗や粟の穗が傾いて居る。そこらあたりには芒が一簇二簇ところどころに茂つて、出たばかりの薄赤い穗が鮮かである。遠く西方を見渡すと此所からでは低く青田が連つて青田の先はすぐに茅渟の海である。海は日の射し加減で唯しらしらと見える。ゆつたり横はつて居る淡路島が手もとどきさうである。其海から青田を越

えて吹きおくる涼風がさわさわと其芒の穗を吹き靡ける。芒の穗は靡いては起きあがり起きあがり吹かれて居る。余は其のあたりに彽徊して居ると青草の茂つた南の山陵の蔭から白い笠の百姓の女らしいのが七八人連れ立つて余の立つて居る方へ近づく。能く見ると女は皆爪折笠である。白い手拭をだらりと長く冠つて其上から笠の紐を結んで居る。着物は皆紺の筒袖である。さうして孰れも卷いた蓙を左に抱へて居る。女共は山陵の濠のほとりを傳つて行く。濠は非常に長いので其ほとりを行く女共はだんだん小さくなる。余は其風情ある後姿を見おくりながら、かういふ閑寂の境地に豆や稗を作つて居る百姓は幸であると思つた。山陵のある所から少し離れて坂がある。そこに一軒穢なげな藁家の茶店がある。一簇の芒の穗がそこにも靡いて居る。あたりのさまと相俟つて此の茶店も余が心を惹いた。汲んでくれた茶を啜つて女房と話をする。女房は山陵のあるあたりは百舌鳥の耳原ではなくて舳の松といふ村だと打ち消すやうにいつた。女房は現在のことより外

は知らぬのである。店先には小さな薄板に下手なしかも大きな字で「大寺餅あり」と書いてある。皿には三角な黄粉餅を三つ刺した串が一串置いてある。「此が大寺餅といふのか」と聞くと今日はもう一串に成つてしまつたといつて、女房の語る所に依れば、堺の町の大寺といふ寺の境内にある餅屋から此の餅は卸すので、遠く和歌山の方までも卸しをする餅である。いつでも四五人位で米を搗いて居る。此の土用の何の日とかには一日に廿三石何斗とかいふ餅を搗き出した。それで搗く傍からさつさと小商人へ捌けてしまふ。先づ日本一の餅屋だらうといふのであつた。余は此を聞いて是非共其の餅屋が見たいと思つたので其店先の一串をたべて堺の町へもどつた。大阪へ歸る筈のを停車場へは行かずに町をぶらぶらと歩いた。一人の車夫が案内をしながらどうとかいつたのでついうつかり乘せられた。車夫は威勢よく馳せる。やがて大和川のほとりへ出て人家は盡きた。大和川の土手には綠樹が茂つて其蔭に牛が繋いである。余は大寺餅といふのはどこかといつ

たらそれは堺の町でもう遥かに後になつてしまつたと橋の上に車を止めて後を向きながら車夫はいつた。

二

秋雨がしとしとと朝から降りつゞいて居る。「能褒野へ行くのは此でよいか」と道で逢うた百姓に聞いたらあれに見える土手が鈴鹿川で土橋が架つて居る。土手へ出ればすぐに山陵が見えるといつた。土手へのぼると、百姓のいつたやうに、長い橋があつて、其先には一村の民家が見えて、こんもりとした小さな木立が其傍に繁つて居る。木立の後は畑で蕎麥の花が一杯に白くさき滿ちて見える。百姓は此の川に架つて居るのは土橋であるといつたがこんな長い土橋があらう筈がない。百姓もいゝ加減なことをいつたものだと思ひつゝ橋を渡りかけるとそれは實際土が載せてある。それにしても此程の川に土橋でしかもそれが隨分年月を經て

居るやうに見えるのは水が嘗て破壞せしめる程には激したことがないからだらうと思はれる。橋を越して一寸左へ曲つて行けばすぐ小さな木立になる。果してそれは能褒野の山陵であつた。鈴鹿川に臨んで居るのである。それが實際はあたりの民家に隅へおしつけられたやうな形である。畝傍の山陵でさへ以前は百姓が草を刈つたり牛を繋いたりしてそこらは牛の糞だらけであつた抔といふことを思ひ浮べながら木立へ這入る。木立は松の木で後の畑の蕎麥の花も透いては見えぬまでにぎつしり繁茂して居る。松は皆太からぬ幹で其幹の枝の趾を一階二階と數へて見るのに植ゑてからまだ幾年もたゝぬことがわかる。それでも木立の間は薄闇い。白い花崗石の玉垣と、地上に敷いた白砂と、玉垣の前にある一本の樹のはしばみのやうな葉の黃ばんだのとは、あたりを明るくして居る。秋の雨はしくしくと止まず注いで居る。はしばみのやうな黃ばんだ葉が少し白い砂の上に散つて雨に打たれて居る。余は木立を後にして蓼の穗の垂れてる道をもどる。そこから大

和の山々が見える筈だと思つて見ると雨は四方を閉ざして居るのである。民家のある處を過ぎて行くと山陵から餘り遠くなく能褒野の神社がある。神社というてもそれは見るかげもない小さなもので極めて小さな鳥居が建ててある。あたりは低い松が疎らに立つて居て、そこら一杯に生えて居る末枯草は點頭くやうに葉先を微かに動かしながら雨に打たれて居る。鳥居の前には有繋に宮守の家らしい建物がある。わびしげな住居で障子にも破れが見える。しぶきに濕る緣側には芋殼を積んでそれへ筵を掛けてある。余は白鳥が翼を擴げて蒼空を遠く翔るのを悠長な宮人が蹶きながら追ひ歩いたといふ故事を心に浮べながらあたりを見る。土地のさまはどうしても以前の能褒野を其儘現在に見るやうでいたくも秋寂びて居る。余はそれから四日市へ行きたいので宮守の家に就いて聞た。障子の内から女の聲がしてそれは汽車に乘るがいいといつてあらましを敎へてくれた。余は能褒野を立つて高宮の停車場へ出る。其間もさびれた土地であつた。其さびれた村々

には柿の木の葉が赤くなつて梢疎らについて居る。柿の木蔭には赤い表をあらはしたり白いうらをあらはしたりして散り重つて居る落葉が雨に打たれて居る。さうして其梢には何處のを見ても柿は一つもついて居らぬ。余は窃かに柿が欲しくなつた。或る茶店に小さな柿のあつたのを見たから懐へ這入るだけ買つた。それを歩きながらでもたべようと思つたのだ。然し今朝出掛に雨があまり酷いので莚一枚では迚ても凌げないと思つたから更に桐油を一枚求めてそれを後へ掛けて莚は胸へ當てて歩いて居たのであるから手を出すのが億刧である。それから柿を懐にした儘急いだ。草鞋の底が切れかけたけれど穿きかへるのが面倒だから此も構はずにしとしとと急いで行く。停車場は恐ろしいみすぼらしい小さな建物であつた。時間表を見ると四日市行はまだ大分時刻がある。余は笠と莚を取つて腰掛へ立て掛けて桐油はそつと其上に乘せた。笠からも莚からも流れ出る水がタヽキの上に太い線を描いて其先が少し曲り曲り勢よく先へ行く。余はそこでゆつくり柿

をくふ積りで荷物をおろして腰を掛けた。さうしたら臀が非常に冷たいのに氣がついた。能く見ると先刻から草鞋の切れたのを取りかへずに來たので踵から泥を跳ねあげてヅボン下は臀のあたりまでぐつしりと泥水へひたしたやうになつて居たのであつた。桐油を見たら桐油も泥だらけであつた。

三

大垣は清冽な水の湧く處である。穴を穿てばどこからでも沸々として其清冽な水が湧いて出るといふのである。栢植氏のもとを訪ねたのは祭の提灯が飾つてある日であつた。栢植氏は余を案內してあるきながら或角の菓子屋の店へ這入つた。店先には湧いて出る水をタタキで圍つてある。主人は其水へ手を入れて底に沈んで居る團栗の實よりも少し大きな位な茶碗の形の燒物を抄ひあげる。其茶碗を倒にして持つた手を左の手の平へぽんと叩きつけると中から白い葛饅頭が出る

のであつた。主人は茶碗をすくひあげてはぽんぽんと拔てそれを竹の皮へ包んで渡す。竹の皮から水がぽたぽたと垂れる。柘植氏は家へ戻つてそれを更に冷たい水へひたした。それは佳味かつたのみならず非常に涼しい感じのいいものであつた。柘植氏は大垣の水が自慢なのである。それから更に養老の水を見せようといふのだ。草鞋穿で連立つた。田甫を過ぎて遙かに養老の山を望んで行く。到る所の村々に清冽な水が吹き出して居る。山の麓へつくとそこには櫟の林があつて道はだんだん勾配がついて來る。其なだらかな坂がどこまでも箒で掃いたやうな趾がついて居る。どうした趾だらうかと思ひながら行くと篦朶を積んだ荷車が來る。梶棒をあげて荷車の後を地へつけて徐にくだる。篦朶の先がずるずると道を引きずつて車輪を急劇に廻轉するのをゆるめる。箒目のやうな趾はこれだとわかつた。山へかかつてから右手遙かに小さな瀧が見える。「養老はあんなものではない、あれは秣が瀧といふのだ」と柘植氏は語る。養老の地へつくとそこは公園であ

る。あたりには料理屋なども建てられてあるが一帶にさびしく櫻の木だけは葉があかくなつてはらはらと芝生に散るのもある。白い花の芙蓉が其木蔭にさいてる。それから常磐木の木立へ這入るとざあざあと落ち來る水が所狹く湛へて居る。手を入れて見ると大垣の水よりも更に冽々として居る。柘植氏は稍得意である。其水の近くに一つの庵室がある。素心庵とかいふので白い衣の尼さんが居る。柘植氏はそこへ腰を掛ける。尼はもういい年のやうである。それしやの果であるとかでそれが此所に閑寂の生涯を營んで客に一杯の茶を鬻いて居るのだといつた。庵室の傍には小さい窯がある。尼は手すさびに陶器をも作るのだ相だ。それから又小さな長い紙袋へ入れたものを少しばかり商つて居る。それは葛粉で養老の葛は名物だといつた。そこを立つて道は狹い所を過ぎる。左はすぐに溪で既に散りはじめた櫻の薄紅葉が溪に茲んで其狹い道を掩うて連つて居る。其櫻の薄紅葉の行き止りに養老の瀧は白く懸つて居るのである。そこのあたりも右は瀧に

つゞいた峭壁で左は溪で狹い所である。其峭壁のもとにはさつきの尼が出しておくといふ小さな四阿の店があつてそこに一人廿ばかりの女が居る。栢植氏は其四阿へ着物を脫ぐ。余もそこへ着物をぬぐ、女は少し隔たつた小さな板圍の建物から白の短い肌衣のやうなものを二枚持つて來てくれる。瀧に打たれるには此着物を貸してくれるのだといつた。瀧にはさつきから二三人打たれて居る。白い布がふらふらと振れるやうに落ちかゝる瀧の水は其二三人の頭から分れて斜に飛び散つて居る。人々は大聲を出して呶鳴りながら打たれて居る。瀧へかゝるには、ふどうオふどうオと尻を引いて呶鳴りながらかかるのだと栢植氏が敎へる。余も栢植氏のあとから呶鳴りながら打たれはじめた。瀧壺がないから水が淺い。おづおづかゝると突きのめされる。峭壁に後を向けてうんと力を入れる。それでも肩のあたりを攫へて突き倒されるやうな感じのする水の勢である。余は呼吸のつまらぬやうに兩腕を額で組んで後へ倚りかゝるやうにして水勢に抵抗する。更に向き

直つて峭壁の瘤につかまりながら打たれつゝ瀧の端からはしまで過ぎて行く。瀧の幅は幾らもないがそれでも行きぬけるのには隨分骨が折れる。一打ち打たせて出ると體がいくらか疲れたやうである。瀧の側に立つて仰いで見ると峭壁の上部からさし出た槭の枝が疾風に吹き撓められるやうに止まずさわさわと動いて居る。槭の葉はまだ靑いのである。余等は肌衣を搾つて女に渡す。見ると拓植氏の皮膚が赤くなつて居る。更に自分の肩のあたりを見ると冷水摩擦をした時のやうに赤くなつて居る。瀧の冷たい水にかかつたら凍えるやうになることかと思つたのにさうではなくてほかほかと溫かい。此は强い勢で水が打ちつけるので肌に熱を持たしめるに相違ないのである。女は着物を櫻の木へ掛けて干す。櫻の木にはさつきの人々のでもあらうか外にも二三枚掛けてある。女は無造作な帶の締めやうをして足には薙刀のやうにまくれた古い藁草履を穿いて居る。着物を干すために延ばした其手が非常に白い。首筋も凄い程白い。女は着物を干し畢ると落ちさ

うになつた帶を兩手で一搖りゆりあげて暫く遠くを見て居た。其櫻の木のもとからは溪でそれから山の脚の間に美濃の平地が遙かに見渡されるのである。

女は余等がすつかり草鞋まで穿いてしまつた時、釜から湯を汲んで小皿に少しばかりの干菓子を出した。釜のあたりは清潔に拂いてあつて釜はちんちんと沸つて居る。其沸つて居るのは瀧の水である。女は物をいふ事には非常に愛嬌に富んだ少し味噌齒の口を開いて嫣然とする。菓子を一つとつて見ると辻占がはひつて居る。余は其辻占を一つあけて見たら青い字でごぞんじといふまでは讀めたが其さきは寫りが惡くて分らなかつた。

（明治四十一年四月）

菜の花

一

奈良や吉野とめぐつてもどつて見ると、僅か五六日の内に京は目切(めつきり)と寂しく成つて居た。奈良は晴天が持續した。それで此の地方に特有な白く乾燥した土と、一帶に平地を飾る菜の花とが、蒼い天を戴いた地勢と相俟つて見るから朗かで且つ快かつた。京も菜の花で郊外が彩色されて居る。然し周圍の綠が近い爲か陰鬱の氣が身に逼つて感ぜられるのである。余は直ぐに國へ歸らうかと思つた。然し余の好奇心は余を二三日引き留めた。それは太夫の道中といふことを土産噺に見物して行かうとしたからである。其間の二三日、余はそこゝと郊外をぶらついた。何處もさびしかつた。仁和寺の掛茶屋に客を呼ぶ婆さんの白い手拭も侘びし

さを添へた。明日は道中のあるといふ日の夕方である。余は市中で桐油と麻繩とを買つてもどつて來た。さうして障子のもとで獨り荷造をした。外套や其の他の不用に成つたものを小包にして故鄕へ送る爲めである。黃色な包が結び畢つた時一寸心持が晴々した。さうして暫く立てた膝へ兩手を組んだ儘徒然として狹い室內を見渡した。余の部屋は二階の一間で、兩方から汚い唐紙で隔てられてある。飾といつては何もない。鄰室はどちらも商人が泊つて居る。折々は帳合するのも聞えるが、商人は能く用達しに出掛けると見えて大抵はひつそりとして居る。今もひつそりである。火鉢の藥罐が僅に夕方の寂寞の中へ滅入る樣に鳴り出した。ランプが點された。筍と蒲鉾の晚餐も出た。低廉な宿料に當て箝めて料理屋から仕出をとるのだといつて此宿の惣菜はいつもかうと極り切つて居る。軈て夜具も運ばれた。余は例の如くランプを持つて火鉢と一つに窓の障子のもとへ居を移す。夜具は室內を占領して畢つた。疎末な夜具の上には友禪の掛蒲團が一枚載せ

てある。此の一枚の蒲團が宿の余に對する特別の待遇である。余は障子に倚りかかつて、つくづくと侘しさを感じながら其派手な模樣を見詰めて居た。下女が慌しく階子段を昇つて來た。「西陣の河井さんから電話で只今伺ひますからといつて來た」といつた。此の下女といふのは近在からでも傭はれて居ると見えて、田舍臭い一寸聞きとれぬことをいふ女がある。余のいふことも解り憎い所があるとかいうて、自分も解らぬことをいうて能く吹き出した。罪はないが快い女ではなかつた。余は直ぐに夜具を片付けさせた。暫くたつて下女はガラスの皿につまらぬ菓子を持つて來た。さうして此邊には何處にも碌な菓子は無いのだといつて又失笑する。河井さんが來た。河井さんは「自分の宅へ連れて行くから此處は直ぐに立て」といつた。余は突然なのに驚いた。然し再三の勸誘に、余は其好意に從ふことにした。さうして勘定書を命じた。河井さんは今度ふとしたことで知己に成つた人である。階子段を靜かに昇つて來たのは意外にも春さんといふ女であつた。春さん

は直ぐに立つといふのを聞いて、意外な顔をして去つた。さうして暫くして勘定書を持つて來た。春さんは時々帳場に坐つて居るのを見ることがある。宿の緣者であると下女から聞いて居る。十八位な可憐の少女である。余が奈良の地方へ行く前に居たのは下の部屋で、そこは有繫にさつぱりとして居た。さうして給仕番は春さんであつた。春さんは膳を運ぶ前に必ず余の都合を聞きに來た。其時は障子をそつと開けて、一寸首をかしげて物をいふのであつた。春さんは木綿着物で袖口が幾らか擦れて居た。海老茶の疎い絞りの帶を締めて、萌黄メリンスの前垂をして居る。髮はいつもちやんとして居た。春さんが朝枕元の火鉢へ火を持つて來る時に余は屹度眠から醒めた。其時春さんは能く市中の女に見るやうな紺飛白の筒袖を上張りにして居た。余はぼんやりした眼にいつも其つやゝかな髮を見上げるのであつた。宿には盲目の男の子があつて、能く電話口で大きな聲をして居るのを見た。或晩余は帳場へ用があつて行つた時、其子が頻りに主婦さんにせが

んでは春さんの手に縋つて居た。春さんと風呂にはひりたいといつて居る。忙しいからといつても聞かずにせがんで居る。春さんはまだお給仕が濟まぬといつて當惑らしかつた。余が春さんといふ名を知つたのは此の時である。奈良から戻つて見ると余の部屋には何處かの商人がはひつて居た。さうして余は此の二階の汚い一間に案内されたのである。余は變な厭な心持がした。春さんは以前の姿で働いて居た。然しもう余の部屋へは再び出なくなつた。余は更に此の宿が佗びしかつたのである。春さんは今其風情ある首のかしげやうをして勘定書を出した。春さんが去る時河井さんは合乘を一挺とつてくれといつた。又階子段に足音がする。春さんかと思つたらそれは春さんではなくて宿の主婦さんが剩錢を持つて來たのであつた。河井さんと余とは別に噺もなくて幾分かたつた。車が來た。余は河井さんの後から立つた。さうしてわびしかつた部屋を一遍ふりかへつて見た。二人は臺所を拔けて店先へ出る。帳場に居た主人が土間へおりて挨拶をする。下

女も出る。春さんも襷を外して兩手の先に絡みながら時儀をする。河井さんの肥つた體は車に隙間をなくした。余の風呂敷包と蝙蝠傘とを春さんが出してくれる。河井さんが一言島原といつた。車夫は「へえ」と首肯いて梶棒をあげる。車が軋り出した時に後に三四人の挨拶の聲が聞えた。斯くして余は烏丸五條の佗びしかつた商人宿を立つた。然し自分ながら餘りに突然であつたので何だか殘り惜いやうな落付かぬ心持もした。外は闇夜である。車は威勢よく東本願寺の前へ出で、廣い通を停車場の方へと走るやうであつた。

二

車は更にぐるぐると廻り廻り行くやうであつた。暫くするうちに容子の變つた處へ出たやうに思はれた。それでそこもひつそりとして居た。河井さんが一寸車夫に掛聲をすると車は少し威勢が出た。さうして轍ががらがらと敷石を軋つたと

思つたら直ぐに梶棒がおろされた。玄關へ上る。余は車夫が出して呉れた風呂敷包と洋傘とを手にした儘立つた。一人の婆さんが出て河井さんと何かいうた。河井さんは直ぐに左手の大きな間へはひる。余も後からはひる。荷物を入口へ置いて中腰に坐つた。其處はがらんとした大きな部屋である。一帶に煤びて居る。明りがきらきらと光るにも拘らずぼんやりとして居る程煤びた大きな部屋である。向うの隅の方には菰かぶりの酒樽が立てならべてある。中央でさうして一方の壁に近く非常に太い柱がある。余はすぐに其柱の蔭に派手な着物のなまめかしい女が一人坐つて居るのを見た。河井さんは「太夫を見たことは無いか」といつた。余は「ない」といふと河井さんはつと立つて其女の手を執つた。女は片手を執られた儘時儀をするやうにしとやかに前へ屈んだ。幾ら手を曳いても立たうとしない。柱の蔭に成つて居た髮が前へ屈む度にともし灯の光に觸れる。さうしてきらきらと白く光る。一杯に花簪を挿して居たのである。簪はひらひらと搖れながらきらきらきら

と光る。能く見ると女の着物は赤と青との思ひ切つた大きなだんだらの絞りである。さうして臀から包んだ扱帶の端がふさふさと餘してある。河井さんが立つてこちらへ戻つた時、女は扱帶と袂とを膝へ乘せてもとの如く柱の蔭にしやんとして畢つた。余は女が太夫であることを悟つた。それと共に余は遊女といふものゝ女らしいしとやかさを意外に感じた。暫くして二階へ案内された。先刻の婆さんが余の荷物と洋傘とを持つて跟いて來る。大廣間である。表の窓の障子に近く燭臺が二つ置かれて蠟燭がともされてある。手焙が一つ傍にある。燭臺も手焙も古い朱塗である。婆さんは余の荷物を部屋に相應した其大きな違棚へ乘せた。蝙蝠傘も棚へ立て掛けた。汚い風呂敷包の荷物が不調和に感ぜられた。室内はうつすらと煤びて居る。蠟燭の烟が僅に立つて居るのを見ると其烟の爲めに煤けたのに相違ない。それにしても蠟燭がどれ程こゝにともされたことであらうかと驚かれる。河井さんは此所は緞子の間であるといつた。建具には皆緞子が張つてある。

さうして此も皆ほんのりと時代を帶びて居る。地味な支度の卅恰好の女が出て挨拶をした。河井さんは此がおゑんさんというて別嬪の仲居だといつた。女は仄かに嫣然として打ち消すやうに輕く手を擧げた。鼻筋の透つたきりゝとした女である。酒が運ばれた。小さな手提げのやうな器が共に運ばれた。女は其器から小皿を出した。河井さんは「此の人が明日道中を見物に來るから能く注意してくれ」と余を紹介した。女は「さうどつか」というて小皿を出した手を止めもせず、丼のかき餅をさらりと十ばかりづゝ盛つて河井さんと余との前へ置いた。此が肴であるとすると其あつさりしたのに驚かれる。河井さんは一二杯より外は傾けぬ。余も一杯を過す事は出來ない。河井さんは意外に無言の人である。大廣間は唯しんとしすぎて居る。其の上周圍のどこにも爪彈の聲だに聞えぬ。拍子拔のやうな心持で居ると、窓のすぐ下でバタバタと戶板を手の平で叩くやうな音がした。余は耳を峙てた。「今太夫が此の家へ來るのだ」と河井さんがいつた。「さうして太夫の長持を

舁ぎ込む時にあゝいふ音をさせるのだと」いつた。どうしてさういふ音がするのか其說明は余には十分には了解されなかつた。余は後の障子を開けて外を見た。往來を隔てゝ高くアーク燈が立つて居る。其丸いホヤから四方へ投げ出す强い光であたりが煌々として居る。アーク燈の傍に大きな柳が一株すつと立つて枝を垂れて居る。樹は嫩葉を以てふつくりと包まれて居る。ホヤに觸れるばかり近い枝は强い光の爲に少し白つぽく見える。陰翳をなして居る所が却て青い。さうして總てが刺繡の如き光を有して居る。アーク燈の光を翳して見る闇い空は天鵞絨の如く滑かに見える。余は其形容し難い空の色彩に見惚れた。河井さんは此の空の色を葡萄紫だといつた。蛙の聲が錯雜して遠いやうに且つ近いやうに響いて空に浮んで聞えて居る。仲居のおゑんさんが階子段から呼ばれて去つた後に別な仲居が代つた。おゑんさんよりも年は少いが痘痕のある品下つた女である。おせいさんといつた。おせいさんは騷ぐ方の女である。ふと聞くとしんとした往來から下駄

を引き摺るやうな響が輕くからりからりと聞えて來る。快い響である。河井さんは太夫が來たのだといつた。余は表を見下した。格子に遮られて能くは見おろせなかつた。きらきらと光るのは花簪である。アーク燈の光を一杯に下から反射する花簪は柱の蔭に居た太夫のよりも立派に見えた。からりからりといふ輕い響と共に花簪が移り行く。さうしてすぐに廂に隱れてしまつた。其時着物のだんだらであるのがちらりと目に着いた。河井さんは「太夫の下駄はこんなに大きなのだ」と手で形を造つた。「此の位はあります」と仲居のおせいさんも手で形を造つて見せた。「太夫が客の前へ坐つて裲襠をすつと脫ぐ處は風情のあるものだ」と河井さんはいつた。それから先刻の太夫のはあれは略裝だといつた。春の夜はまだふけなかつた。然し其夜はそれで歸つて來た。おせいさんが余の荷物を持つてくれた。車は二臺であつた。下駄が爪先を揃へてある。荷物を蹴込へ入れた時はじめて荷物が自分へ返つたやうな心持がした。車は又闇夜を走つた。余は今夜の家が

揚屋といふものであつたことや夜の淺いにも拘らず土地柄にも似合はずしんとして居たことの不審なことや、ちらりと見た二人の遊女のことや思ひ掛けなかつたことを心に描きながら闇夜の間を運ばれた。二條の城であらうと思はれる白壁が見えて軈て車は何處も同じ樣な町の或軒下へ着いた。

三

翌日河井さんは余の爲めに車をとつて呉れた。自分は河内國から來る商人を待合せる約束なので遺憾ながら行けないといふのであつた。さうして角屋(すみや)といふて尋ねて行けといつた。西陣を出たのは午頃であつた。二條の城の附近をめぐつて場末の汚い溝のほとりを過ぎたりして島原までは長い道程であつた。大門の前にはもう乘り捨てた人力車がごたごたして居る。大門といふのは死葺の古い建物で大きなものではない。其前の空地も隨つて狹いので後から後からと車は込み合う

た。巡査が邪険に車夫を叱る。大門をくゞると兩側の家屋の前には棧敷が作られて道が狹められてある。棧敷は大凡余が腰のあたりまでしか無いといふ程低い。東國に生長して宮角力などに能く造られた二階梯子を挂ける棧敷ばかりを棧敷と思つた目には一寸異樣に感ぜられた。赤い毛布で飾られてもう席に就いて居る人人もある。席に就かうとする人々もある。棧敷の後の店には膳や碗や皿を忙し相に取扱つて居る店がある。それでも何處にも喧囂の響を聞かぬ。棧敷の前には更に道を狹くして低い牡丹櫻が植ゑならべられてある。花はもう過ぎかけて居る。人がぞろぞろと繰り込んで來る。余は大門から突き當つて左へ曲つていつた。角屋の玄關には印半纏の男が二三人で下足を預つて居る。客はぞろぞろと上る。余は仲居のおゑんさんを尋ねた。昨夜の婆さんがごたごたと忙しいなかを低い聲で「おゑんどんおゑんどん」と呼んで行つた。少時立つた儘待つて居ると婆さんは余を一室へ導いた。室の外まで行くとおゑんさんは急ぎ足で出て來た。濃い紅をした

口に帶止を銜へて兩手を後へ廻して居る。一寸會釋をして帶を締め畢つた。それから帶止をぱちんと合せた。おゑんさんは地味な焦茶の着物である。能く見ると胸には仄かに白い紋が二つ浮んで居る。おゑんさんの白粉は極めてよく施されてある。其巧な化粧はおゑんさんを一層美しくした。おゑんさんは一寸其所を外したと思つたら、小さな盆へお茶を持つて來た。十枚ばかりの煎餅が添へられてある。余は茶を一杯啜つて「何處か見物するのに善い處はないか」と聞くとおゑんさんは思ひ立つたやうに余を表の大廣間へ案內した。そこには人がもう大分詰つて居る。おゑんさんは何處でもそこらに居て呉れといつて唯あたふたとして居る。さうして「ほんまに辛氣臭うおまつせ」といひ捨てゝ去つた。見物の人は余の前に四側ばかり席に就いて居る。余は暫時暇取つて居るうちに人に席をとられて畢つたのである。後から後からと席が塞つた。大廣間の後に立てられた金屛風も取拂はれた。表には丁度肘を凭れさせる位の高さに閾があつてそこには勾欄が造られ

である。余の側に居た二人の男が惜いことに此所では太夫の足が見えないといふ樣なことをいつて居る。どこかの商店の手代らしい男である。余は立膝をして覗いて見たが成程往來の土は見えない。往來の向側は板塀で青竹の埒が造られてある。そこにも見物人が立つて居る。塀からすつくり立つたアーク燈の丸いホヤが白く冷た相に見える。昨夜見たのである。其傍に柳は南風を受けてふわりふわりと枝が亂れて居る。南風は漸く柳の枝に吹き募つて來る。埃が立ちはじめた。埒の内には人が殖えて來た。座敷の客も殆んど一杯に成つた。後から強い力を以て壓されるので後を見ると人々が皆立つて居る。室内はだんだん騷々敷なつて來た。余の前には幼兒を抱いた一人の女が居た。幼兒は人々の騷々しさにおびえたと見えて火の付いた樣に泣き出した。女は恐ろしく心配さうな顏をしてやつとのこと後へ出て行つた。余は其空席へ進んだ。漸く往來の土が見えるやうに成つた。後から壓す力が強く成るので前の客も立たねばならなくなつた。立つては復た坐る。

其度に余は段々前へ進んだ。前が立てば勢ひ後ろから罵る不平の聲が少しく出る。余は立つた時に何か頭へ障つたことを感じた。見るとずつと後に居る印半纏の男が竹の短い竿を二本繼いで其先へ白い手拭をつけて人の頭をそつちこつちと撫でるのであつた。一時はそれでも落付いた。さうして又立つた。ぼくぼくと頭へ當るものがある。驚いて見ると鄰に居た男がひよつと頭を引つ込ませて此も不思議相に後を見る所であつた。風呂場の掃除をするタワシでもあらうか、竹の先へ棕櫚の毛を束ねたのを以て以前の印半纏の男が立つてる人々の頭を端から端へと叩くのであつた。拍子木の音が遠くやがて近く往來から響いて來た。室内が靜まつた。余の側へそつと觸れるものがあるので見ると、仲居のおゑんさんが折つた紙を渡さうとするのであつた。おゑんさんは愛嬌作つて會釋しながら人を分け分け出て行つた。何かと思つて開いて見ると薄墨の木版刷で太夫の名が連ねられてある。上下二段である。余の側の手代らしい男が覗き込んで上の段だけが道中に

出るのだといつた。拍子木が復た遠くから近くへ響いて來た。客は更にひつそりと成つた。空は曇つて南風は愈吹き募る。冷然として居るアーク燈の白いホヤを、しどろに亂れかゝる柳の枝が長い手で時々抱かうとして居る。客は皆退屈相に成つた。それでも向うの埒の内の見物人は極めておとなしく立つて居る。其なかに年増の主婦さんらしいのが一人居る。最初から極めてつゝましく立つて居る。室内の騷々しさをすぐ眼前に見て微笑することも無くつゝましくして居たのである。尤も此の主婦さんの身にとつたならば埒の内に立ち盡して居ることが多勢の前に曝されて居るやうな心持であるかも知れぬ。余は其つゝましい主婦さんと、其頭の上に縺れて居る柳の枝とを見守つた。余が坐に就いてから時計を見ると三時間も過ぎ去つた。三度目の拍子木が近く響いた。もうすぐだと手代らしいのが囁いた。表の勾欄の左の端にすつと人物が現れた。此廓の藝子といふのが七八人紅白の綱で、造花の山のやうに盛つた花籠の車を曳いて來たのである。極めて徐

ろに足を運ぶ。花籠は表の勾欄の上を微動しながら過ぎて行く。此が先驅であつた。間が暫く途切れる。勾欄の外れへ小さな禿が二人ならんで現れた。態とらしい化粧と懷手をして左の肘を張つて足もと危く然かも勿體らしく步を運ぶ處とは滑稽で又可憐である。禿が座敷の前へ來ると、勾欄の端に太夫の姿が現れた。前で結んで兩方へ張つた錦襴の大きな帶と、刺繡の裲襠とが目を射る。萌黃の法被を來た老人が後から長柄の傘をさし掛けて居る。傘には太夫の定紋が大きく描かれてある。傘の下には極端に裝飾された太夫の首が造り付けられた樣に前面を正視して居る。思ひ切つて大きく結うた髮には鼈甲の大きな簪が十七本、下へ向け上へ向け左右から刺されてある。丁度熊手のやうであるといへばそれが却て適當した形容であるかも知れぬ。厚化粧は盛り上げの如くである。目は威嚴を保たうとする如く寸毫も他に轉ぜぬ。此も懷手をした左の手が肘を張つて居ると見えて左の袂が突つ張つて居る。右の手は結んだ帶の下へ隱してある。裾はきりつと吊

り上げてある裾からは赤い長襦袢が踵を覆うて垂れて居る。余は立膝をして太夫の足もとを見た。太夫は長襦袢の裾から墨塗の大きな下駄を蹴出す。からりと外から大きく地をすつて立てた足の爪先へ斜に据ゑる。暫く過ぎて眞直に向け直す。又暫く間を置いて別の足を蹴出す。八文字を踏むといふのは此だと余は心に合點した。下駄は二個所斜に鋸を入れてあるので丁度三枚の齒があるやうに見える手絡にするやうな赤い切の緒でそこに小さな白い足が乘せてある。蹴出す度に赤い裾から白い足の爪先が三四寸見える。足には足袋を穿いて居ない。坐つた儘見ると太夫は帶から上だけが勾欄の上に出て居る。八文字を踏む每に、しつかと姿勢を保つた體がゆらりと搖れる。余は勾欄から見るのは丁度山車の人形が車の軋るにつれてゆらぎながら進んで行くやうなものだと思つた。行き過ぎた禿の背には赤地に黑の筐緣をとつた小判形の前垂のやうなものが一杯にさげてある。それには太夫の名が金絲で二重文字に繡つてある。禿が後姿を見せると太夫がゆつ

たりと現れるのである。一人の太夫を見送つて暫く過ぎると又以前の如き禿が出て太夫が山車の人形の如く我が眼前に勾欄の上を過ぎて行く。一定の間隔をとつて人形の如き太夫は過ぎて又過ぎる。姿勢はどれも同一である。唯髮の結ひやうが違つてきらきらと花簪を一杯に飾つたのがある。化粧は皆胡粉　盛り上げのやうである。余は仲居のおゑんさんの化粧を巧と感服したのであつたが太夫に比しては光を失はねばならぬ。あの支度では體が小さいと支度に負けていかぬ。顔が小さいとあの髮に負けて薩張り引立たぬといふやうなことを余の傍の手代らしい二人が囁いて居る。余は之を聞いてさうかと心に思つた。見物人は皆太夫の姿に見惚れる。向うの埒の内に立つて居る主婦さんは一際つゝましげに見える。空はだんだん低くなつて南風は愈吹募つた。白いホヤを抱かうとする柳の枝が寸時も止まず亂れて居る間に前後十三人の太夫が過ぎた。十三人の次に現はれたのが最後の太夫である。刷物には小太夫と書いてある。此は禿が八人で、八人が皆背に小太夫

のしるしをした小判形を垂れて居る。小太夫の髪は獨り異つて後に長く垂れてある。藍色の切で中央を卷いて、赤い裏の厚紙で熨斗形に二個所まで包まれてある。驚く程大きな鼈甲の櫛が唯一つ載せてある。此の髪はすべての太夫を壓倒して十分である。帶も裲襠も眩きばかりの錦襴である。五枚の襲ねた着物の裙が段々に裄を見せて吊り上げられてある。五枚の裄が五色である。五色の裄には更に裲襠の裄が襲ねてある。彼は容貌も態度も他の十三人を壓して見えた。見物人の視線は一齊に小太夫に從つて移つて行く。小太夫が過ぎると後から見物人が船の後を追ふ波の如く道を埋めた。座敷の人々も息をついた。思ひ思ひに立つのも尙どつかと坐して居るのもある。少し茫然としつゝ余も立つた。人々と此の家の一間一間を見て歩いた。余はふと茶盃を持つたおゑんさんを遠くから人越しに見た。おゑんさんは余を見て人の間を掻き分けるやうにして來て余に茶を侑めた。おゑんさんの化粧は矢張り巧で且つ美しいのであつた。漸く人々が歸りかける。

余はおゑんさんを尋ねて再び逢つた。壬生寺へ行く道を聞いた。おゑんさんはまだ狂言は見られるだらうと、此處からから裏門を出て千本通をずつと行けばよいと懇に敎へてくれた。余はおゑんさんのいふ通りに千本通といはれた田甫をずんずんと辿る。廓の外はすぐに田甫である。田甫へ出て外から見ると島原は唯時代を帶びた地味な一廓であるに過ぎぬ。菜の花が田甫に近く續いて强い南風にゆさぶれて居る。泣き出し相に低い空が西の山々とくつついて薄墨をまけたやうに山々を更にぼんやりとさせて居る。山の間へ狹く平地が走つて居る。菜の花は斷續して其平地の限りにぼんやりと見える。白く乾いた田甫の地は吹き立てられて、菜種の葉が一枚々々皆白く其埃を浴びて居る。足もとの溝には水の上にも埃が浮いて居る。前後に人がぞろぞろと歸りつゝある。田甫の遥か先には菜の花の上に甍が聳えて見える。それが壬生寺であらうと思ひつゝ余は急いだ。余は歩きながら太夫のことを心に浮べた。緞子の間で河井さんは此處へ太夫を坐らせればよい

のだといつた。道中の姿を見ると太夫が一人でも徒らに廣い座敷は塞るのだといふことを合點した。太夫は全身人工的に裝飾されて居る。然し唯一點素肌を見せるのは足の爪先三四寸である。太夫が皮膚を誇らうとする處はこの三四寸以外にはない。墨塗の大きな下駄に乘せて赤い裾から蹴出す足はくつきりと白く且つ小さく見えねばならぬ。さうして太夫は恐らく常人の思ひ知らぬ程其足の爪先に苦勞するのではあるまいか抔と思ひつゝ歩いた。余の前に嘶しながら行く二人連がある。能く見ると先刻の手代である。先代の小太夫はよかつたと一人のいふのがちらりと耳にはひつた。余は道中の最後に出た小太夫のきらびやかな姿を思ひ浮べて且つ其先代の小太夫といふのを想像して見た。壬生寺であらうと思ふ甍がだんだん大きく見えて來た。余はふと切な相にゆさぶれて居る菜の花を後にして路傍に一人の乞食が坐して居るのを見た。老年の男の乞食である。蓬々として髮が亂れて居る。彼は人の近づくのを見て埃の中へ額をすりつける。逆立つた前髮に

は埃がついて居る。先へ行く人々は此の乞食に目もくれない。余は何となく哀れつぽくなつて錢入の口を開いて銅貨を一つ投げてやつた。彼は又埃へ汚い額をすりつける。余は少し歩いて顧みた。後からすぐ女が五六人來挂る。彼は之を見て前へ屈んでは又屈んで憐みを乞うて居る。乞食の前に來た時女は各自に錢入の口を開いた。彼は投げ出された錢を右の手に攫んだ儘女の過ぎ去るにも拘らず更に幾度となく埃へ額をすりつけた。余は之れを見て居て理由もなく唯うれしかつた。其瞬間余はなぜだか自分が大きな手柄でもしたやうな心持がした。余は實に此れ程の快感を味ひ得たことは嘗て多く記憶から喚び起されないのである。

(明治四十二年八月)

しらくちの花

明治卅六年の秋のはじめに自分は三島から箱根の山越をしたことがある。箱根村に近づいて來た頃霧が自分の周圍を罩めた。霧は微細なる水球の狀態をなして目前を流れる。冷かさが汗の肌にしみじみと感じた。段々行くと皿程の大さの白いものが其霧の中に浮んで居るやうに見えた。それが非常に近く自分の傍にあるやうに思はれた。軈て霧はからりと晴れた。さうして自分を愕かした。青草の茂つた丘がすぐ鼻の先に立つて居た。白いのは青草に交つた百合の花であつた。近く見えたのも道理で、二三歩にして手が屆くのである。百合の白さは到底霧のために沒却されるものでないといふことを此の時自分は知つたのである。自分は又

明治卅九年の夏のはじめに磐城の平から五月雨の中を番傘さして赤井嶽へ登攀したことがある。霧は番傘のうらまで濕した。行手に當つて時々樹木が霧の間から現はれる。樹木は大分栗の木があつたやうで、ぼんやりと白いものが大きく見えたと思ふと遠い處から大急ぎで自分のすぐ前へ駈けて來たやうに太い幹がひよつこりあらはれる。遥かなる足の底の方に鶚のやうな聲が幽かに然かも鋭く聞えた。やがて聲は更に幽かに別の方向から聞えた。梢から枝へ移つたのであらうと思つて居ると、又さつきのあたりで悲しげな聲を立てた。そこには深い谷があるのと見えて霧は更に白く欝積して居る。自分は見えもせぬ谷を見おろした。ぼんやりと白い大きなものが其所にも見えた。歩を進めるに從つてそれは隱れて又更に其白い大きなものが現はれる。それは花になつた栗の木の梢であつた。栗の木さへ其白い花は他の幹や枝の如く霧のために隱されるものではないのである。霧の中の白い花といふことは自分に深い興味を與へるやうになつた。

其の後、鹽原から尾頭峠を越えた人の話を聞いた。それは霧の中であつたといつた。あたりを閉して居た霧がうすれて樹木がぼんやりと見える時白い點のやうなものを以てびつしりと裝うた樹がありありと見えた。それが唯白い霧の中に注意力を集注せしめただけでどんなものであつたか能くは分らなかつたといふのであつた。此の峠は自分も嘗て越えたことがある。眠に落ちやうとする時遠く幽かに耳に入る人語の響のやうな水の流を有する深い谷が巨口を開いて時々空に向いて水蒸氣を吐く。さうして其薄い霧が烟の如く密樹の梢を傳ひては消散するを見たのであつた。尾頭峠は自分は夜も越えた。さうして松火さへも持たなかつた自分は其時崖から墜落した。幸に大事には至らなかつたが其時の恐ろしかつた記憶が自分をして尾頭峠を忘れしめない。それで其噺がひどく心を惹いた。一つには其白い花を見たことの經驗があるからである。自分は蔦の花だと了解した。鹽原に行つた人は、赤味を帶びてさうして皺のよつたやうな然かも柔靭な洋杖を商つ

て居るのを知つて居る筈である。其大なるものは之を横に切つて土瓶敷が作られてある。欝然たる老樹の幹を傳ひて大蛇の如く攀ぢ登つて居るのがさうだといつた。其蔓の先に開く白い點の聚りのやうな花が其大樹を飾るものゝ如くであつた。其花は明白地でも又霧の中でも同じく自分の心を惹いたのであつたが、花の形がどうであつたかといふ微細な點にまでは及んで居なかつた。然し其花は漠とした記憶の儘に絶えず自分の眼前に彷彿するやうになつた。それは信州澁の鶴爺さんに逢つたからである。

明治四十一年の秋、自分は上州の草津へ越えるために信州澁の溫泉場へ一夜宿つた。澁は其十年前におなじく草津へ越えるために宿つた土地である。自分は夜になるとすぐに鶴爺さんを訪うた。自分はその二年前に此の地に近い越後の山中でふと鶴爺さんのことを耳にして居たのであつた。彼は信州第一の獵夫である。信州北部の人は却て此の地の老畫工兒玉果亭を誇りとする。然し果亭の畫は氣魄

を缺いて且つ今は老衰枯筆見るに堪へない。鶴爺さんに於て此の地の特産物たるを認めるのである。彼の住居はみすぼらしい見るも哀れげなるものであつた。薄闇いともし灯を尋ねて自分は案内を乞うた。彼は不在であつたが暫く待つて居るうちにもどつて來た。裸であつた。彼は襦袢を引つ掛けて挨拶した。裸は其の體格を見るのに便利であつた。身長は普通の人であるが、がつしりとした所謂四角な體である。其腰から脚にかけての構造は如何なる險阻を跋渉しても疲勞を感ぜしめないであらうと想像せられる。七十三といふ老年であるにも拘らず山坂を踏んでは壯者も及ばぬといふ元氣が其容貌と態度とに表はれて居る。火繩銃を執つて分け入る時凡そ如何なる野獸でも適當の距離に於て彼の目に入つて其筒先に斃れないものはなかつた。彼は又木を攀ぢて野獸の徘徊するを求めることがあつた。獲物が近づいて來ればそれまでである。其獲物が一旦方向を轉ずるか物に怖れて疾走する時彼は一躍して之を追うて咄嗟に一丸を放つ。若し一度でもそれが

徒勞であつたならば信州第一の名を博する所以ではない。或時子を連れた女熊が木の實を求めて橡の大樹を攀ぢつゝあるのを發見した。熊は悉く其樹を下る餘裕を與へられなかつた。熊は三個の屍體を其樹下にならべた。又熊が前肢を擧げて搏擊せんとして迫つて來た時、彼は橡の大樹を繞つて遁げながら其狙が敵の咽喉部を貫いたことがあつた。それが一發毎に銃口から火藥を裝塡する火繩銃の操縱である。絕倫の技倆は兄弟共に松代侯の知る處となつて其扶持を受けて居た。自分はこれだけのことを彼に逢ふ前に聞いて居たのである。さうして親しく其事實を質して見た。彼は幾らもそんなことは有つたのだと別段取り合ひもせぬといふやうな態度である。彼は時々ぎろりとした眼を薄闇い灯にきらめかす。然し彼の聲は稚い且優しい聲である。眼を閉ぢて其聲のみを聞いたのでは身體鐵の如き鶴爺さんを想像することは出來ぬ。彼は舊藩主に死なれなければ今日こんな難澁はしないであつたと自身の不遇を語る。それから又稅金が嵩むので、自分は既に銃

を捨てゝ其業を子に讓つたといつた。座敷に吊つてあつた穢い蚊帳の中から一人の壯夫が出て來た。それは彼の子であつた。遠來の客なる自分のため壯夫も亦獵の噺をした。其年の春一つ處で猿十三頭を打つたといつた。それが一日のうち僅小な時間の獲物であつたといふに至つて尠からず自分を驚かした。然し今ではもう野獸の數が減少して畢つて熊でも猪でも鹿でも殆んど其足跡を見なくなつた。猿の如きも犬の至り能はぬ崖を求めて棲息して居るに過ぎないのだといつた。それがどこには幾つと鶴爺さんは數へあげる。彼は又以前は此の野獸がどれ程居つたものであつたか殆んど積りも出來ない。隨つて自分の打つたのもどれ程であつたかを數へて見ることが出來ないと云つた。鶴爺さんは數へ切れぬ野獸を打つて一方には藩主の保護をも受けて居た身でありながら今は此の如き陋屋に燻ぶつて居るのである。老後の爲には彼は無益に其絶倫の技倆を發揮して居たのであると思ふと此の岩疊な老人が寧ろ哀れつぽくなる。然し鶴爺さんの渾身は信州人が有

する勇悍なる氣性の結晶である。谿に此の如き獵夫の有つたことを傳へ得れば彼の爲めには十分である。野獸の絶滅と共に將來復た彼が如き獵夫を見ることは不可能でなければならぬ。彼は彼等の社會に於ける最後の光明である。

彼が語つた少時の功名は自分をして更に長く彼を忘れしめないであらう。それは彼が十三の秋であつた。彼の母が非常に「シラクチ」の實を好んだので時々それを採りに行つた。「シラクチ」の實は熟すと自然に酒の味がして佳味い。或日火繩銃を擔いで山を分けて行つた。彼は父なるものが獵夫であつたので鐵砲持てるやうになつてからは自然山鳥などを打つて遊んで居たのであつた。シラクチの實を採らうと思つて居るとがさがさと近くに響を立てるものがある。凝然としてすかして見ると大きな黑いものがのそりのそりと動いて居る。直ちに鐵砲を取り直して火蓋を切ると唯一發で轉がつた。斃れたのは三十餘貫の熊であつた。野獸を打つたのはそれが始めてであつたといふのである。十三才の少年には長い火繩

銃は立てたら其身に餘つたであらう。其火繩銃を肩にして行く處は其天與の大膽な氣性がなかつたとしたならばそれは餘りにいたいたしいことでなければならぬ。さう思つて見ると散り亂れた黃色な木の葉を踏んで樹蔭に身を寄せながら熊をすかして見て居る少年の姿が見えるやうである。それを聞いた時自分はすぐにシラクチといふのはどんなものかと聞いた。それは樹に絡つて白い花がさくのだといつた。自分は其後ふと嘗て見た白い點の聚りのやうな花を思ひ出した。さうして霧の中に白い柱の如く立つて居た其花と同一ではないかと思つた。然しそれは鶴爺さんのいふシラクチといふものであるかないか、又其地方でいふシラクチといふものが植物學者によつて知られて居る名であるかないか、自分はちつとも知る所がない。假令自分の聯想が誤つて居たとしても自分は霧の中の白い柱のやうな花と其シラクチとを分離せしめたくはない。自分は鶴爺さんの噺から到底其白く打つた點の聚りのやうな花を忘れ去ることが出來ない。自分はそれをシラク

チの花として獨り追憶を恣にして居るのである。

自分は茲に數行の蛇足を添ひたいと思ふ。

明治四十二年の九月の末に此のシラクチを書いて間もなく自分は東北の旅行に出立した。小坂の鑛山へ行つた時はまだ十月のはじめであつたが天候の不順であつたせゐか非常に寒かつた。自分は人夫を一人連れて七里の間道を山越に十和田湖へ行つた。山は雨であつた。人夫は途中で通草の實が採れるといつて居た。自分は内心それを樂みにして居た。然し雨が絶えずしとしとと降つて居たので通草を探すことが出來なかつた。山越は唯つまらなかつた。それでもイタヤやカツラが際立つて黄色になつた山の梢の上からすぐ足もとに十和田の湖水を見おろした時は嬉しかつた。湖水を抱へた向うの低い平な薄紅葉した山に其時丁度カツと日光が射し掛けた。湖水は磨いた銀のやうに見えた。人夫は其低い山を膳棚と呼んで居るといつた。坂をおりて行くうちに自分等は又密樹の間に沒してしまつた。

それから大分道程が進んで來たと思ふ頃一人の壯夫が坂をのぼつて來た。韮山笠の周圍を切り去つたやうな小さな編笠をかぶつて手に何か袋を提げて居る。行き違つてから振り返つて見ると後になつて居た人夫が其男と噺をして居る。自分へ追ひついた時人夫は「コカ」を少し貰つたといつて木の實を五つ六つくれた。西洋種のサクランボのやうな形の心持大きいので灰色がゝつた青い實である。佳味いからといふので口に入れて見るとぐやりと軟かなものである。少したべたせるか酷く佳味かつた。自分はもつと欲しいと思つた。湖畔に添うて行くうちに腕位の木が一本道に伐り倒してあつた。木には指程の蔓が絡まつて居る。「此は今の男が伐り倒したのでコカを採つて行つたのだ」と人夫はいつた。此の蔓がニキヤウといふので其實がコカだといふのである。僅かな木の實を採るために攀ぢのぼることの面倒を厭うて、腰へ挾んだ鉈で遠慮もなく木を伐り倒したのである。自分は山中の人間といふものは恐ろしい無造作なことをするものだと思つた。「コカとい

ふものがこんな所にあるものか」と聞いたら「そこらに幾らでもあるだらう」と人夫はいつた。自分は人夫にもさういつて行く行くあたりを注意した。然し十和田へ着くまで到頭コカは獲られなかつた。次の日自分は湖水に船を泛べて周圍の山の薄紅葉を見た。山葡萄の赤みがゝつて黒ずんだ葉が布の如く山の半ばを掩ひかぶせた間にイタヤとカツラとが黄色に秀でゝ居た。自分はそこらにコカはないかと思つた。其晩は十和田神社の別當の家へ泊つた。湖畔であつたが酷く隱氣であつた。家は近頃燒けて急に新築したといつて壁もない只の板圍ひである。其板も生木を打ちつけたと見えて隙間だらけに成つて居る。冬になつたら此では迚ても凌げまいと思つた。自分は思ひ出してコカがあるかと聞いた。宿の子がすぐに皿へ持つて來てくれた。自分はうまいうまいと思ひながら忽ちに喰べてしまつた。さうして嚙み出した皮まで嚙んで見た。皮には少し酸味を含んで丁度香竄葡萄酒を飲んだやうな味がする。翌朝自分は圍爐裏の焚火にあたりながら又コカを請求し

た。宿の子が此度は木の皮で編んだ袋のやうなものに入れた儘自分に出してくれた。此のうしろの樹立へ行けば幾らでもあると別當はいつた。自分は餘り喰べると口中が荒れるからと注意されたけれど悉くたべて畢つた。或は此が濫の鶴爺さんのいつたシラクチの實ではあるまいかと思つたので、「此の蔓は洋杖にするものではないか」といふと焚火の榾を燻べながら別當が「さうだ」といつた。自分は何だか非常に嬉しかつた。別當の家を立つて湖畔を傳ひて秋茱萸が草のやうに茂つた汀を暫く歩いた。茱萸は漸く成熟しかけた處で薄赤くなつたばかりであつた。樹立の間から明るい湖水を見つゝ小坂への本道だといふ薄荷越へ志した。薄荷の坂へついた時二三人連の女に逢つた。皆筒袖で空の叺を背負つて居る。四角な布を三角に折つて頰冠のやうにして頭を包んで居る。女に聞くと其布は風呂敷といふのである。「山で何をするのか」といふと「橡の實を拾ふのだ」といつた。自分はふと又「コカはニキヤウへ成るのだな」と念をついたら此の女も「さうだ」といつた。自分

は小坂へ歸つてからすぐに十和田でコカを喰べたことを書いて二三の人へ葉書を出した。此の人々へは嘗て鶴爺さんの噺をして居たのである。香竄葡萄酒のやうな味がしたと葉書へ書くことが手柄でもしたやうに自分には愉快であつた。

（明治四十三年二月）

白瓜と青瓜

庄次は小作人の子でありました。彼の家は土着の百姓であります。勿論百姓といふものが一旦落ちついた自分の土地を離れて彷徨ふといふことはよくよくの事情が起らない限りは決してないことであります。自分に土地を所有する力の無いものは人の土地を借りて作物を仕付ます。そして相應に定められた金錢や又は米や麥の收獲の一部を地主へ納めるのであります。此が小作料であつて、私の間に授受されて居る租税であります。それで小作人の懐にする處は其の收獲のうちから自分の食料までも減じて見ると、立派な體格を有つた一人の働きが實際何程にも當らないのであります。然し彼等は四季を通じて殆んど田畑の仕事にばかり屈

託して居るのですから衣類の節約が極端に行はれて居ります。それから食料というても、第一には鹽を買ふ外には自分の手で作つた物で十分に滿足することが出來ます。それからどんな姿にでも雨戸が有れば住むに事を缺くことはないのであります。

こんな狀態でありますから消極的な身の持方をして居れば案外に苦勞のない生活がして行けるのであります。彼等には幸にも非望を懷くものはありません。彼等の身體が鍛錬された鐵のやうである如く、彼等の心にも頑強な或物があつて彼等を抑制して居て吳れるのであります。

庄次もかういふ小作人の仲間で殊に心掛の慥な人間でありました。彼の老つた父は每年夏の仕事には屹度一枚の瓜畑を作りました。其の畑からの收益で一年間の家內の小遣錢に充てるのが例でありました。固より面倒な丹精が要る代りには蔬菜の栽培程百姓の仕事として利益なものはないのであります。其內でも瓜類の

栽培は又格別なものであります。前の年の秋からの心掛で麥の間には瓜の種を蒔きつける場所をぽつぽつとあけて置きます。爽かな凉しい風が麥の軟い穗先を吹いて、空氣にも土にも潤ひを帶びて來ると、庄次の家の瓜の種も麥の明間へ二葉を開いて來ます。段々眞直に射し掛ける日光が十分の熱度を與へてくれますし麥はまた周圍から大切に保護してくれます。それでも非常に敏い赤蠅がそつと來ては軟かな子葉を舐め滅すので、爺さんの苦心は容易ではありません。蟲を除ける爲に瓜の葉へ灰を掛けて遣つたり、幾度か失敗しつつ敏捷な蠅を殺したりしてやるのであります。

麥が刈られると周圍はからりとして如何にも晴々とした心持で、瓜の蔓が威勢よくずんずんと伸びて行きます。蔓の先は軟かでそしてすつと頭を擡げて居る處が、見るから心持のいゝものであります。然しそれでも十分監督がないと赤蠅は依然舐めて畢はうとするのであります。瓜の蔓に處々へ開いて行く葉の間から小

さな花がぽつぽつと見える頃になれば、瓜畑はもうだんだん心配がありません。
麥藁が一杯に敷かれて蔓は其褥を這うて居ます。殊に威勢のいゝのは西瓜の蔓で唐草模様の樣な葉を一杯に開きます。小粒の實が初めは然程にもないのに、少し大きく成つたかと思ふと一夜の中にも滅切と太つて幾日も經たないのに抱へて重い程になるので有ます。丁度靜かな沼の水に荇菜の花が泛いて居るやうに黄色な小さな花は甜瓜であります。一番に捌けのいゝ西瓜と甜瓜とが餘計に作られてある畑の隅の方に二畝三畝白い花が此れも靜かな沼の水に泡が泛いたとでもいふやうに、ぽつちりと開きました。其處には白い瓜が成りました。白い瓜と鄰合うた畝には此も地味な花が見えました。そこには深い青みをもつた瓜が成りました。それで孰も大きな形を横へましたが、其うちでも青い瓜は一層大きく丈夫相でありました、白い瓜の白い皮の下には白い快い肉が包まれて居ますし、青い瓜の青い皮の下にはほんのりと青い爽かな潤ひを持つて居ます。孰も他の西瓜や甜

瓜のやうに甘い味を持つて生の儘稱美されるのではありません。

然し二つに割つて鹽で壓す時には其齒切のいゝことが涼しさを添へるやうで西瓜や甜瓜のやうにどうかすると飽きられるといふやうなことは嘗てないのであります。それから更に酒粕へ上手に蓄へられゝば迚も西瓜や甜瓜の遠く及ばない價を保つて珍重されるのであります。白いのは白瓜で青いのは青瓜であります。鄰合つた青瓜と白瓜とはずんずん手を伸ばして其細いくるくると卷いた髭のやうなもので、互に握り合ふばかりに成りました。

さて隅から隅まで注意を怠らない爺さんは伸ばさうとする蔓の先をみんな穢い爪の先で摘んで棄てゝ畢ひました。青い瓜も白い瓜も伸び出した葉の間に椎の實のやうな瓜の形を見せて、其の側に立てた尻に花が開くと其處から、爺さんは蔓の先を摘んで畢ふのであります。さうすると其の小さな瓜が必ず滿足に生長して行きます。さうでなくて氣儘に任せて置くと小さな瓜はどうがするといゝ加減の

大きさに成つてほろほろと落ちて畢ふのであります。

瓜はかうして始終窘められて居ますが、一方には又一番必要な肥料といふものが爺さんの周到な用意で幾ら吸うても吸ひ切れない程十分に與へられてあります。それで生氣の衰へない瓜は何處からでも蔓を吹き出します。爺さんは又根よくそれを摘んで止めます。かうして白瓜はどこまでも白く青瓜は油ぎつたつやゝかさを保つて、共につゝましく麥藁の上に横はります。兩の瓜は唯相鄰して互に見合うて居るばかりでありました。爺さんは瓜がいゝ加減の大きさに成れば其瓜を蔓から切り放して粗末な籠へごろごろと投げ込みます。成熟した兩の瓜はかうして爺さんの無雜作な手によつて毎日數多の結婚が成立して居ました。

暑い日が麥藁の上に横はつて居る瓜の腹までも熱しては、夜の涼しさが冷たく潤しました。瓜畑の周圍に蒔かれた玉蜀黍はすつくりと立つて美しい瓜を守つて居ます。玉蜀黍の莖には横に竹を結んで自然に垣根が造られました。穗先のざら

けた玉蜀黍は何事にもざわざわと騒ぐのであります。瓜畑の隅には疾から小舎が建てられて、小舎には不相應な大きな蚊帳が吊られました。爺さんは毎晩そこへ起臥(おきふし)をするのであります。瓜の番は爺さんの役目で瓜を市場に運ぶのは庄次の日毎の役目であります。闇の夜が續いてそれから月の夜が續きました。或晩爺さんに何かの故障が有つたと見えて庄次が小舎の番をすることに成りました。

　瓜小舎に泊るのは何といつても夜は眠い庄次に、適した役目ではありません。然し庄次は、眠いからといつて眠ることはしません。彼は瓜が盗まれるのを惜むよりも、若し盗人が踏み込んだとしたならそれを捉へなければなるまいといふのが懸念なのでありました。彼のこゝろは盗人を逐ひ出すのさへ厭なのであります。彼はそれ程穏かな生れた儘の眞直な性質の人間であります。

　庄次は血を吸ひに集つて來る蚊を避けて古びた蚊帳の中にぽつねんとして居ました。だぶだぶにたるんだ蚊帳の天井は坐つた彼の頭に觸りました。そして又暑

くなると蚊帳から半身を出してぼんやりとして居ます。月は番小屋の短い廂から覗いて居ます。瓜畑は凡てが薄霧で掩はれたやうにほんのりと明るく、且つ白く見えました。其中で殊に白く美しいのが白瓜でありました。庄次は恍惚として白瓜を見て居ました。

するとﾞ恰も上手な鍼醫が銀の鍼を打つやうに耳の底に浸み透る馬追蟲の聲が、庄次の這入つてゐる蚊帳に止まつて鳴きました。月の位置が移るに從つて夜は涼しく沈んで、一體に身にしみじみとして來ました。庄次は到頭蚊帳の中へ身を横へました。何の爲に吠えるのか犬の聲が鋭く聞えます。遠くの方、又近くの方の村落で唄の聲が聞えたり止んだりします。若い村の男等はどうかすると夜はうろうろと其處らを彷徨うて女を探しに歩くのであります。彼等はそれ相應に女に好かれようとして服裝に心を苦しめるのであります。何處の村落にも兵隊歸りが彼等の間に異色を帶びて居ます。それが彼等の風俗を變化させるのであります。

併しながら庄次はさういふ仲間と表面は甚だしい疎遠はなくともそれに感染れるやうなことは苟且にもありませんでした。彼は八釜敷い爺さんの躾を受けて幼少の時分から農作に我が趣味の全部を奪はれて居たのであります。

この夜彼れは自分の職業の趣味といふ事を理窟なしに感じて居ました。庄次は番人といふ責任を考へて居たので平生とは違つて眠くはならなかつた、で毎日行く市場のことなどを考へて居ました。夜が深けるに隨つて空氣の涼しさが一しほ沈んで身に迫つて來るかと思ふと、周圍の蜀黍の葉は猶更にこの番人を眠らせまいとするやうに、酷くざわざわと騷ぐのであります。其度毎にだぶだぶの蚊帳の裾が吹きまくられて、時々彼れの頬をさすりました。そして耳がだんだん冴えて來ますと彼はすぐ自分の小舍に近い木戸口のあたりに何かは知らぬが、こそこそと音がしては又止むのを聞きました。彼れは心の所爲かとも思ひましたが、さうでもありません。併しその物音は別段に近づいて來るのでもなく、又去らうとも

るのでもない樣でした。庄次は少し恐ろしく成つて蒲團を被りました。さうして又そつと耳を澄ましました。すると何となくかさかさといふやうな音が聞えるのであります。暫くたつてそれが止んだと思ふ頃庄次は目を開いて見ました。少し月の光が疎く成つたと思ふやうでも、まだ瓜畑には一杯の明るさであります。蚊帳越しではありますが彼の目には白い瓜がやつぱり目に映るのでありました。木戸の外は垣根のやうな蜀黍が遮つて何物も見えないのであります。で間もなく夜が明けました。

翌る朝になつて庄次は畑を隈なく見ましたが瓜は一つも盜まれてはありません。次の夜も又番をしましたが、さういふことがありました。庄次には合點が行きません。彼れは人から能くいひ觸らされてるやうに貉か狸の惡戲ではないかとまで思ひました。然し誰にもいひはしませんでした。

然るところ其次の夜は元のやうに爺さんが泊りました。木戸口のこそこそとい

ふ音は爺さんの耳にも響きました。耳敏い爺さんは凝然と枕を欹てました。これまで數次かうして惡戯好な村落の若者の爲にぢらされた例がありましたからか、爺さんはもう非常な怒氣を含みました。竊と蚊帳を捲りながら飛び出しました。棍棒を手にすることは咄嗟の間にも忘れませんでした。然しながら爺さんの驚駭はどんなでしたらう。其處には慥に人が立つて居ましたけれども其人は遁げたり隱れたりしようとは致しません。唯獨黍の傍に身をよせて居たまでゞあります。固より盜人ではありません。では何人であつたらう。それは爺さんが思ひもよらぬ地主の娘のお杉さんでありました。彼れが絶體の服從を甘んじてゐる地主の娘でありました。

朴訥で罪のないそして自分の權利を守る爲に恐ろしい頑強な力を有つて居る爺さんは蚊帳から飛び出すと共に、非常に劇しい惡罵の聲を曲者に浴せ掛けたのであります。そして盜賊としてお杉さんを手荒く捉へたのであります。更に爺さん

の恐怖がどれ程であつたでせう。其地主に向つては殆んど絶對の服從をすら甘んずるばかりに物堅い爺さんの頭は馴致されて居るのであります。彼は只管お杉さんに詫びるの外はありませんでした。さうして彼は夜の中にお杉さんを其門に送りました。

彼の正直な狹い一徹の心は昏んでしまひました。彼は夜の明けるのが待遠でたまりません。「飛んだ申譯のないことをして呉れたなア」といふのが思案に餘る爺さんの口から庄次へ浴びせた強く銳い小言でありました。

庄次にはそれが何の事であるのかサッパリ解りませんでした。庄次は常にない爺さんの顏色を見てこれは容易なことではないと合點しました。がしかし彼は何にも言はずに默つて居ました。さうして自分の務に赴きました。

爺さんは轉げ込むやうに地主の戶口を跨ぎました。「私もこんな年齡に成りながら、遂そんな心配もあるまいと、迂濶に油斷をした許に取り返しのつかないあ

なたの娘さんへ傷をつけまして、懲せと申されゝば野郎は手でも足でも打ち折りますが、どうか此から娘さんの方もお氣をつけなすつて」と彼は呼吸も喘喘(せかせか)として冷たい汗を流しました。此だけいふのに幾度堅唾を嚥んだか知れません。彼は庄次がお杉さんを誘惑したとばかり思ひ込んで畢つたのでした。お杉さんは昨夜も庄次が居ると思つて瓜畑へ忍んだのだと一も二もなくさう極めて畢つたのであります。

爺さんは唯一筋にさうおもひ詰めたのだから、その心には庄次の口から一度どんな姿にも事實を吐かせようとする餘裕さへ起らなかつたのであります。彼は唯地主から非常な譴責を受けたいのでありました。「怪しからぬ事だ、不都合千萬な倅だ、貴樣の仕つけがよろしくないからかういふ事を仕出かしたのだ」と散々に叱られてさうして自分自身の喋ぐ心を落付けさせたいのでありました。これが爺さんの心の願ひでした。

爺さんの譫言を聞いた地主は有繫にそんなことがあつたかと一度は駭いたのでありましたが、どうか世間に襤褸を出したくないといふ考が第一に其心に湧きました。そこで地主はそつとお杉を呼んで聞いて見ましたが、お杉は俯向いた儘萎れて何にもいひませんでした。爺さんからきつぱりとした、噺を聞かされた地主の心にはもう直ぐに「判斷」がつきました。さうしていつそのこと、そんな事に成つたならお杉は庄次へ嫁に遣らうといふことに極めたのであります。

庄次は見處の有る人間であるといふのが地主の心を動かしたのであります。併しながら今の儘では行つた娘も可哀想だから、どうにか食つて通れる丈の田畑も其身に附けてやらうといふのであります。尤も其の事は其日の内に極つたのではありませんが、段々と家内相談があつて自然とさう成りました。

さてさうなると、まづ第一に爺の意志を確めねばならぬから、招んでその趣を腹藏なく打あけて相談に及びました。けれども爺さんには今地主から言はれたこ

とがどうしても眞實として請取ることが出來ませんでした。律義な爺さんにはどうしても身分が違ふからといふ恐怖が先ちました。併しながら、地主の言ふ事がすつかりと解つた時に爺さんは地主の前に熱い涙を溢して泣きました。

さうして家へ歸るまでは何だか足がふらふらして心はまるで雲の中にでも住んでゐる樣でした。歸つて庄次にこの話をして「飛んでもない、此を忘れるやうでは人間ではないから」と叱るやうにいつて聞かせて聽てそこでも嬉しいといつて泣きました。

庄次は突然な出來事を聞かされて無垢な青年に通有な一種の慄ひを禁じ得ませんでした。庄次はこれ迄お杉さんと何の關係も無かつた許でなく、彼の心には平常少しの疚しい心をも抱いて居るのではありませんでした。兩人の仲は芽出度取結ばれました。お杉さんは田舍で生れて田舍で成長した女であります。貧しい家の嫁として勞働するのに心から何の不足も訴へません。事件は恁うして互に僞なき

心から無雜作に決定して、あとは再び沼の水のやうな平靜の狀態が長く續きました。夫婦の間には子が幾人か生れました。爺さんの死後二人は依然として瓜を作ることを止めませんでした。瓜畑には毎年沼の水に浮んだやうな地味な小さな花が開きました。荷車を曳いて行く庄次は强健な皮膚が暑い日に光りました。それから荷車の後を押して行くお杉さんも白かつた頰が日に燒けて春には何時でも小さな子が首をくつたりと俛れて眠つて居ました。唯夫婦が市場へ曳いて行く籠の中には靑瓜が油ぎつたつやゝかさを保つて、白瓜が依然として美しい白さを保ちながら微笑んで居ました。

（明治四十五年一月）

卷末記

一、本卷には、短篇小說、紀行文、寫生文の大部分を收めた。その制作年代、制作時の作者の年齡、發表された雜誌の名等は、全集第三卷（歌集）の卷頭に載せた、「長塚節略年譜」に據つて檢出することが出來る。それゆゑ、この卷末記には、その一つ一つを記すことをやめた。

一、長塚氏の、既に發表した短篇小說、紀行文、寫生文の主なものは、大正四年五月、春陽堂發行の「炭燒の娘」といふ單行本に收められてある。本卷も大體その單行本に據つた。ただ「商機」といふ短篇小說はその單行本に無いものであるが、本年の夏、靜岡縣の松浦賢雄氏が長塚氏の實家から發見され、菅沼貞三氏と相計つて、私のもとに送られたものである。この小說は作者自身が生前に發表することを欲しなかつたものらしいが、やはり遺稿の一つとしてこれを本卷に收めた。なほ松浦氏は、長塚氏の雜記帳から「帶」といふ題の文章を淨書されて送られたが、それは既に發表された文章と全く同じものであつたから、重複しないやうに、棄てた。

一、しかし、例へば「商機」のやうな文章は、何處のいづこに無いとも限らぬ。私にはそれの否定は出來ない。ただ私の知る限りでは、この全集以外に殘つてゐるものとせば、多くは雜記帳に鉛筆で書いた原

稿類がその主なものではなからうか。さてその原稿といふものは實に讀みにくいものである。又それが發表になつた文章と比較すると、だいぶ違つてゐるところが多い。さうすれば發表されたものを採つてその本の草稿を棄てるのが作者の意志でもあるだらうとおもふ。そのへんの事は誠にむづかしい。私は「長塚節全集」の發行には幾分骨折つたが、若し私のやり方に足りない處があつたら、願はくば未來に篤志の人があらはれて、それを補つて戴きたいとおもふ。

一、口繪の第一は、明治三十六年に、旅から歸京された時、岡麓氏の撮影された故人の旅姿で、實に珍しいものである。寫眞はすでに色褪せてただ一葉殘つてゐたのを長塚順次郎氏が送り下されたのである。明治三十六年は故人が廿五歳の時で、雜誌「馬醉木」の創刊された年であつた。その寫眞の裏に次の如き故人自筆の文章がある。

『明治三十六年八月、伊勢より熊野の山中を周遊し、返りて尾張の師崎を經つつ、三河の伊良胡崎に至り、更に豐橋に出でて、汽車に乘ず。途次箱根の古道を度り、月の十九日遂に東京に入る。越えて二十一日岡麓君の邸に到り、旅裝の撮影を乞ひて得たるもの即ち是れなり。檜木笠一階は、七月下旬大阪を出で山城大和の間に遊び、八月四日畝傍山の北、今井町の店頭に求めたるものなり。古洋傘一本、右手その手を握る。笠と洋傘との間に表はれたるは兩掛の荷物なり。洋傘の柄より隱れる白條はその紐なり。背面の草村は所謂濱荻と稱するものなり。長塚節。』

一、口繪の第二は、明治三十九年（故人二十八歳）に佐渡の旅から歸つた時の旅姿である。佐渡の旅といつても、その時は八月から九月に亘り、松島、金華山から羽前國最上に出で、大沼の浮島を見、米澤より檜原峠を越えて會津に入り、新潟から佐渡へ渡り、返りて彌彦山にのぼり、中津川の上流までを極めた旅である。嘗て故橋詰孝一郎氏がこの寫眞に就いて私に次の如き解説を送られた。『右の手に持てる藁包は母君への土産として三國峠よりシシタケの生なるものを求めて持ちかへりしなり。前にさげし白き包は君の考案になれる鐵葉製の辨當箱にしてこの時の旅費は一日平均五十錢の豫定なりき』云々。このたび、集にこの寫眞を載せるにつき、藤倉浩吉氏からいろいろ骨折つて戴いた。

一、口繪の第三は、短篇小説「鄰室の客」（本文二五二頁）の第一原稿である。これは實物大の寫眞であるが、作者は先づ雜記帳に鉛筆を以て斯くの如く細かい字で原稿を作り、それを第二に筆で書き、第三に原稿紙に書いてゐるのである。この三段の手數をかけたのははじめの間で、「土」になると、二度目に直ぐ原稿紙に書くやうになつた。雜誌「ホトトギス」に載つたこの小説の原稿は、今の某氏によつて丁寧に保存されてゐる。私は實物大の草稿の文字を示さうと思つて、口繪の一つにこれを選んだのである。

一、口繪の第四は、鉛筆日鈔中、「黄瓜」（八月廿八日）と題された紀行文（本文四五四頁）の一節で、その第二草稿を示したものである。作者は、先づ鉛筆で第一草稿を作り、第二にかくの如き草稿をつくり、それをまた直して第三の原稿を作つてゐるのであるから、本文とは字句が少しづつ違つてゐる、その點

も興味があるのでここに載せた、この草稿も作者が晩年に僕に呉れた草稿類の中に交つてゐたもので、周圍が火のために燒けてゐる。

一、口繪の第五も矢張り、それらの草稿類のもののなかにあつた草稿であるが、瀬戸内海を通る船中のことが書いてある。それを辻村・山口兩氏に頼んで本文と引較べて貰つたが、本文中には見つからなかつた。さて思ふに、故人が瀬戸内海を旅したのは、大正元年であつて、もう病氣になつてからである。この文章は恐らく推敲せずにしまひ、又發表せずにしまつたものではあるまいか。草稿は半紙五枚ぐらゐなものであるが、惜しいことには、紙の周圍が、かくの如く燒けてゐる。

一、本卷の校正は、初校より校了に至るまで全く辻村直氏の手を煩はした。辻村氏はいろいろ實生活上の爲事をさし措いて、本卷の校正に從事して呉れたのであつた。なほ、橋本甲矢雄、生田幸彥、酒井克巳、堀内通孝の諸氏は辻村氏を助け、校正を完うして呉れた。

一、なほ先輩・友人、それからこの全集に加入して下さつた方々からいろいろ注意し下されたことを心より感謝する。大正十五年十一月吉日。齋藤茂吉識。

大正十五年十二月一日印刷
大正十五年十二月四日發行

長塚節全集第二卷

非賣品

著作者檢印

著作者　長塚節

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市牛込區榎町七番地
印刷者　竹内喜太郎

東京市牛込區榎町七番地
印刷所　日清印刷株式會社

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂
電話大手五一・四二一〇
振替口座東京一六一七